日本開國起原史

渡邊修二郎著

阿部正弘事蹟

下

東京 著者藏版

日本開國起原史

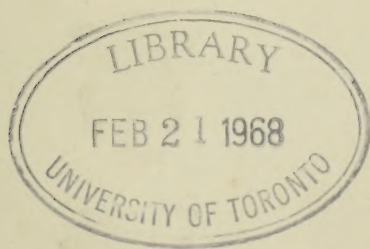
阿部正弘事蹟

下

渡邊修二郎著

東京

著者藏版

Magna est veritas, et prævalet.

第二十八章。 雄藩ニ對スル政策。 其一上。

水戸家ト京都トノ關係。 徳川齊昭ノ譴責及ビ宥免。
嫡子結婚事件。

封建制度ノ弊タル勝ゲテ言フベカラズト雖ドモ、然レドモ日本近古ノ百事進歩ハ亦封建制度ニ負フ所尠シトセザルナリ。初幕府ノ政策トシテ務メテ諸藩ノ勢力ヲ弱クセンヿヲ謀リタレドモ、後世幕府ノ衰フルニ及ビテハ諸藩ヲ制御スルコト甚タ難ク、恰モ唐末藩鎭ノ如ク、又第十九世紀上半ニ於ケル獨逸聯邦ノ末路ノ如ク、尾大不掉ノ狀態ニ陷リ、國政上一層ノ困難ヲ加ヘ、如何ナル政治家ト雖モ雄藩ノ勢力ヲ度外ニ置キテ政治ヲ爲スコト能ハザルニ至レリ。

正弘ノ閣老時代政治上最モ勢力ヲ有シタルハ、親藩ニ於テ水戸ハ

鍋島肥前守、後直正、閑叟ト稱ス。山内土佐守、後容堂ト稱ス。

徳川齊昭、外藩ニ於テ薩摩ノ島津齊彬ニシテ、之ニ次グ者ハ親藩ニ於テ越前ノ松平慶永、外藩ニ於テ肥前ノ鍋島齊正、宇和島ノ伊達宗城、土佐ノ山内豐信等ナリ。此等藩主ノ中徳川家若クハ京都トノ間ニ於ケル姻戚ノ關係ニ於テ輕々看過スベカラザルモノアリ（幕府ハ諸藩ノ妄ニ京都公家ト通信往來スルヲ禁ジテ而シテ兩者ノ互婚ヲ不問ニ置ケリ）、今正弘ノ雄藩ニ對スル政策ヲ觀察スルニ當リ旁ラ此等ノ關係ヲ明ニシ、先ヅ徳川齊昭ノ事ヨリシテ叙述セントス。

徳川齊昭ノ事ヲ叙述スルニ當リテハ、先ヅ水戸徳川家ノ家系中齊昭ト直接ノ關係アルモノヲ觀察セザルベカラズ、即チ之ヲ表示スルコト左ノ如シ。

徳川治紀（ハルトシ）――　水戸藩主第八世（武公ト諡ス）。

◎俗ニ御守殿ト稱ス。

◎俗ニ小石川御守殿ト稱ス。

*『文政十二年』以下〔續泰平〕及ビ

—齊脩（ナリノブ） 第九世（哀公）。子ナシ。
妻峰子（峰壽院）德川家齊（十一代將軍）女（家慶（十三代將軍）妹）。◎

—女 內大臣二條齊信妻。 齊信女廣子有栖川幟（タカ）仁親王妃。

—清子 從三位。 關白右大臣鷹司政通妻。

—齊昭（ナリアキ） 第十世（烈公）。 景山又潜龍閣ト號ス。 中納言（贈大納言正一位）。
寛政十二年生。 萬延元年歿、年六十一。 子多シ、男子ハ因幡藩池田、川越藩松平、
備前藩池田、濱田藩松平等ニ養嗣トナリ、女子ハ宇和島藩伊達、盛岡藩南部、仙臺藩伊達等ニ嫁ス。
妻吉子（登美宮、貞芳院）、有栖川織仁親王末女（家慶妻喬子ノ妹）天保二年嫁ス。

—慶篤（ヨシアツ） 第十一世、 天保三年生。 母吉子。 妻線子（イト）有栖川幟（タカ）仁親王長女。
（家慶養女）◎ 安政二年十一月俄ニ歿ス。 後妻大納言廣幡忠禮姉。

—慶喜（ヨシノブ） 德川十五代將軍。 天保八年生。 母吉子。 妻美賀子正二位權中納言菊亭公久長女、
天保六年生、明治卅七年歿。

水戶家ノ歷代多ク京都ノ人ト嫁娶ノ緣故アリ、齊昭ノ時ニ於テ兩者ノ關係殊ニ深キコト右ニ示スガ如シ、其政治ノ交通ニ便ヲ得タルコト知ルベシ、是レ當時ノ歷史上最モ注目スベキノ緊要事ナリ。

齊昭文政十二年家ヲ續キテヨリ*藩政ヲ執ルコト十五年、鋭意シテ

〔續實紀〕文政十二年十月。〔十五代史〕卷十七、九五頁。

*「天保十四年」以下〔續泰平〕及ビ〔續實紀〕天保十四年五月十八日〔十五代史〕卷十九、一一頁。

此年齊昭四十三歲、慶篤十三歲。

*『弘化元年』以下〔續泰平〕弘化元年五月、〔前記〕二三頁、〔十五代史〕卷十九、三五頁。

*〔新伊勢〕卷一齊昭書翰、〔安政〕五頁。

*「齊昭罪ヲ幕府ニ獲テ」以下〔前記〕五頁。〔安政〕五頁。

文ヲ修メ、武ヲ奮フ。天保十四年大將軍家慶渥ク其政績ヲ賞ス。然ルニ翌弘化元年五月、齊昭驕慢擅恣ニシテ藩政宜キヲ失ヒ、公ノ制度ニ觸ル、コトアリトテ退隱ヲ命ジ、嗣子慶篤ヲシテ家ヲ續ガシメ、三末家ヲシテ藩政ヲ攝行セシメ、家老戸田銀次郎、側用人藤田誠之進ヲ禁錮ス*。齊昭及ビ藩士ノ一部ハ幕府有司中齊昭ノ正論ヲ忌憚シ、叛心アリトテ之ヲ大將軍ニ讒スルモノアリ、因テ此禍ニ罹リタルナリト言フト雖モ、其實必ズシモ然ラズ、一ハ齊昭ノ擧動自ラ招キテ逆境ニ陷リタル事情アルガ如シ、但シ齊昭固ヨリ叛ヲ謀ルノ人物ニ非ザルハ言ヲ待タズシテ明ナリ。齊昭罪ヲ幕府ニ獲テ、府下駒込邸ニ謹愼ヲ命ゼラレシヨリ、幽居スルヿ半年餘、十一月ニ至リ謹愼ヲ解カレタレド、更ニ藩政ニ干與スベカラザルノ命アリ、仍ホ別邸ニ閑居ス*。齊昭政事ヲ好ミ、殊ニ海防ノ事ニ注意ヲ怠ラズ、其謹愼解クルノ

◎齊昭ノ編輯セル『新伊勢物語』ニ載セ、本書附錄正弘及ビ齊昭ノ書ノ最要ナルモノヲ採錄ス。

＊〔新伊勢〕卷二下。

◎本名千種イコ、水戶家上臈年寄花ノ井ノ妹。第六章ニモ記スル所アリ。

後頻々書ヲ正弘ニ致シテ公私ノ事ヲ論ジ、又關係文書ノ閲覽ヲ求ム。深ク天主教ノ害ヲ慮リ、建議中多ク之ニ論及ス。齊昭ノ好ミテ政論ヲ爲スハ其性癖ノ然ラシムル所ナリト謂フト雖モ、其憂國ノ念深クシテ精力拔群ナルニ非ズンバ焉ゾ能ク此ノ如クナルヲ得ベケンヤ。又自家ノ內事ヲ告グルノ書ニ於テモ、縷々細述シテ煩瑣ニ涉ルヲ厭ハズ、常ニ家臣中己ニ服セズシテ嫡子ニ屬スルモノヲ目シテ奸物ト罵詈シテ憚ル所ナシ、人ヲシテ居常細事ニ屑々タルヲ想見セシムルモノアリ、正弘公事繁忙中一々長文ノ書ニ答フルノ暇ナク、僅ニ數書ニ對シテ一書ヲ酬キルニ過ギズ。◎

齊昭屢〻海防ノ事ヲ建言シタレモ、未ダ行ハレザルヲ以テ技癢ニ堪ヘズ、更ニ裏面ヨリ大將軍ニ進言スルノ手段ヲ取リタリ。弘化三年八月、齊昭手書＊ヲ大奧上臈姉小路（アネガコウヂ）◎ニ贈リ『外國ノ事伊勢守ハ如才ナク

評議ヲ盡スト言フト雖モ、評議長キ間ニハ琉球モ蝦夷モ奪ハレ、次ニ日本モ奪ハルベシ、貴姐(オマヘ)ナドハ日本ハ大國ト思ハレンガ、夷狄ノ目ヨリ見レバ唯一小島ノミ、今ヤ形勢ノ危キコト此ノ如クナレバ、大將軍ヨリ命アリテ相當ノ處置アランコトヲ希望ス』トノ意ヲ述ベシニ、數日ノ後姉小路ヨリ答書アリ『書信ノ趣上聽ニ達シタルニ、尤ノ事ナリトテ速ニ異船打拂ノ用意取調ノ命下レリ』トノ事ヲ報ズ、齊昭乃チ更ニ一書ヲ姉小路ニ送リテ之ヲ大將軍ニ呈センヿヲ求メタリ、書中『擊攘ノ令ヲ下スニ先チテ軍艦ヲ製造シ、海岸防備ヲ嚴ニシ、然ル後ニ夷人近海ニ來ラバ一疋モ洩サズ打殺シ、以テ日本國固有ノ勇武ヲ振起シ、德川ノ天下ヲ萬世ニ維持スベシ』トアリ、姉小路之ヲ受ケテ直ニ大將軍ニ呈ス。

十月、齊昭又書ヲ姉小路ニ贈リ『風說ニテハ、去ル六月島津ガ歸藩ノ時、伊勢守ヨリ諭命アリシト云フ、萬一琉球貿易ヲ

許スコトモアランニハ、後日ノ大患トナルベキヲ以テ、大將軍ヨリ豫メ將來ノ策ヲ伊勢守以下ニ推問アランコトヲ希望ス』トノ意ヲ述ベシニ、數日ノ後答書アリ、近日時機ヲ得テ之ヲ大將軍ニ申言セントノ旨ヲ告ゲ、且ツ曰ク『私共異船ノ事承リテ實ニ々々怖キ事ニ思ヒ、何ノ量見モ出デズ』ト。*

初齊昭ノ嫡子慶篤ハ有栖川親王ノ女精子ヲ迎フルノ約アリシニ、俄ニ大將軍ノ命ヲ以テ其養女トナシテ之ヲ久留米藩主有馬慶頼ニ嫁スルノ內意ヲ傳ヘタレバ、齊昭之ヲ悅バズシテ奉命ノ旨ヲ答ヘズ、久シク之ヲ措キテ顧ミザリシヨリ、大將軍以下ヲシテ頗ル憂慮セシムルニ至レリ。*

弘化二年八月、齊昭ヨリ正弘ヘノ書*中ニ云フ『有栖川宮息女精宮儀忰ヘ取合セ申度ト有栖川ヨリモ度々申込之アリ候故、水越ヘ內談致シ候ヘバ願差出シ候樣ニトノ事故、

*〔新伊勢〕卷二下。

有馬中務大輔。

*齊昭ノ手記弘化三年十一月十二月ノ條ニ據ル、附錄第三乙參看。

*〔新伊勢〕卷一。水越ハ水野越前守忠邦。

＊附錄第三乙六號。
＊「新伊勢」卷二下。
本丹ハ側衆用取次本郷丹後守泰固。

双方ヨリ願差出候所、此度御養女ニ遊バサレ候段御觸ニ相成リ云々」

是ニ於テ弘化三年十二月、正弘以下閣老連名ノ書＊ヲ以テ大將軍ノ命ヲ水戸家ニ致シ、尋デ正弘ヨリ公書＊ヲ贈リ、更ニ有栖川幟仁（タカヒト）親王ノ女線子（イト）ヲ京都ヨリ迎ヘ、大將軍ノ養女トシテ之ヲ慶篤ニ娶スノ命ヲ傳フ。然ルニ嘉永三年七月、線子江戸ニ着スルノ後、姉小路ヨリ密書ヲ齊昭ニ贈リ、線子ヲ以テ大將軍ノ嗣子家定ノ夫人トナスノ同意ヲ得ンコトヲ乞ヒ、且ツ之ヲ正弘ニモ告ゲンコトヲ求メシニ、齊昭之ニ答ヘテ『此ノ如キ大事貴姐（オマヘ）一人ノ意ニテ予ニ告グルノ理ナシ、或ハ大將軍父子ノ意ニ出ヅルナラン、果シテ然ラバ老中ヨリ公然順序ヲ經テ通牒アルベキナリ』。ト姉小路ハ齊昭ノ容易ニ同意セザルヲ見テ、憤然トシテ遂ニ其發議ヲ取消シタリ。

齊昭ノ手記ニ云フ、『是レ本丹ガ意ヲ承ケ、其策ニテ姉小路ヲシテ余ガ意中ヲ探ラシ

メタルナラン、而シテ余ノ同意ヲ得難キヲ知リ、大將軍ニ白シタル後、其發議ヲ取消シタルコトト察セラル。」*

齊昭謹愼ヲ解カレタレドモ、仍ホ藩政ニ干與スルヲ禁ゼラレタルヲ以テ稍憂悶ノ狀ナキニアラズ、*藩士ノ一部其情ヲ察シテ頻ニ奔走シ、或ハ正弘ノ家臣石川和介⊙ニ就キテ寃ヲ訴ヘ、正弘ヲシテ其救解ニ盡力セシメンコヲ求ム、然レドモ事遷延シ其効果ヲ見ズ、因テ藩士或ハ正弘ガ藩中一派ノ所謂奸黨ニ與ミスルヲ疑フ者アリ。*

旣ニシテ齊昭ノ嫌疑漸ク解ケ、弘化四年八月、其子慶喜ヲシテ一橋家ヲ相續⊙セシムルノ事內決ス。此時城外大下馬ノ背後ニ二枚ノ貼紙ヲ爲ス者アリ『水戶中納言∴ヲ切害セントスルモノアリ、眼ヲ開キテ見ヨ』ト記シ、一枚ハ『阿部伊勢守大罪人』ト記ス、是レ齊昭ニ反對スル水戶一派ノ所爲ナラントノ說アリ、*該藩人ノ爭鬪是ニ至リテ愈〻烈シ。

*「嘉永三年」以下〔新伊勢〕卷五。

*〔安政〕五頁。

⊙儒員。

*〔遠近橋〕卷一—十三。

⊙第廿一章參看。

∴齊昭。

*「弘化四年」〔遠近橋〕卷五。

*八頁

〻〔遠近橋〕卷三・老公－齊昭・兩田－戸田銀次郎、藤田誠之進・

*〔遠近橋〕卷八・高橋多一郎ハ齊昭藩主タリシ時奥右筆タリ、後勅旨傳達事件ニ關シテ奔走シ、又井伊直弼要撃事件ニ與シ大阪ニ於テ自殺ス・

〔安政紀事〕* 弘化四年九月、其第七子七郎麿ヲ以テ一橋家ノ相續トナス、蓋老中等ノ謀之ヲ以テ前納言ノ意ヲ慰メント欲スルナリ。

高橋多一郎筆記〻 弘化四年正月ノ條ニ云フ、『豫テ内報ヲ託セル幕府監察ヨリノ密告ニ據レバ、去冬以來阿部閣老ハ老公及ビ兩田赦免ノ事ヲ大將軍ヘ直ニ稟請スルコト再度ニ及ビタリ。』 又嘉永元年三月ノ條ニ云フ、『石川和介ノ說話ニ老公ノ如キ天下無双方ノ英雄忠誠ノ人ヲ幽閉スルハ幕府ノ不明ヲ免レザルヲ以テ、竊ニ寡君ニ謁シテ赦免ノ事ヲ說キ、假ニ老公ヲシテ狂人タラシムルモ其家臣タル者主人ノ非ヲ政府ニ訴フル柳派ト云フ者ハ人臣ノ道ニ背ケリ、却テ天狗派ノ者主人ガ謀叛人ノ待遇ヲ受クルヲ憤慨シテ屢〻哀訴スルノ臣道ニ適ヘリ。曩ニ弘化元年ヲ以テ老公譴責ノ議ニ連印セラレシ閣老ニシテ今職ニ在ルハ君公一人ノミ、之ヲ措キテ顧ミザルトキハ天下後世ノ誹ヲ免レ難シト言ヒシニ、寡君モ既ニ老公ヨリ屢〻書ヲ賜フヲ榮トシ、老公ノ眞情ヲ察シ居レバ、及フ限リ赦免ノ事ニ盡力アルベキハ必然ナリ、然ルニ惜ムラクハ寡君ノ性質タル萬事愼密ニ愼密ヲ加フ、是レ余等心中頗ル遺憾トスル所ナリト云ヘリ。』

嘉永元年四月、慶篤亦三末家ノ後見ヲ解カンコトヲ閣老ニ言フ。

六月ニ至リ、正弘閣僚牧野忠雅ト共ニ諭命ヲ傳ヘ、今後慶篤政事ヲ親

*〔新伊勢〕卷四。
*〔遠近橋〕卷十、十一。
*〔遠近橋〕卷九。
阿閣＝阿部閣老。
*〔遠近橋〕卷十。本丹＝本郷丹後守。
*〔遠近橋〕卷十二。
*同上。

ラシ、大事ハ齊昭ニ告グベキ旨ヲ述ブ。*此頃齊贈屢〻書ヲ正弘ニ贈リ三末家等ノ奸惡ヲ訴フ、*而シテ正弘ニ對シテハ仍ホ未ダ或ハ奸人ニ與ミスルニハ非ルカノ疑念ヲ全ク除クニ至ラザリキ。*

嘉永元年五月、德川齊昭ヨリ高橋多一郎、板橋源介ヘノ手書中ニ云フ『奸臣ノ書ニ予ヨリ阿部ニ申込ミ、當藩主ノ後見タラント欲ストアレドモ、決シテ然ル事ナシ、又阿部ヨリモ此事ニツキテ何等申シ來リタルコトナシ、又奸臣ハ老中ヘ內願ノ爲ニ百金ヲ贈賄シタリナド言ヘドモ、是レ有志ヲシテ阿閣ヲ誹謗セシメ、其虛ニ乘ジテ我等ヲ離間セントノ策ナルベシ、彼モ近來ハ西洋ノ事マデ研究シ、當今閣老中ニテハ第一官ノ爲ニナル人ナレバ、奸人ノ爲ニ阿部ヲ傷ツクルハ惜ムベキナリ。』 又六月ノ手書*中ニ云フ『阿閣、本丹ハ傷ツカザル樣希フト雖モ、若シ永ク奸ヲ信ズルコトアラバ、我家ノ爲ニハ代ヘラレザルヲ以テ已ムナク一工夫致スベケレドモ、心長ク今後ノ所爲ヲ檢セントス。阿閣ハ琉國交易ヲ薩ニ內諭シタルノ罪アレバ、若シ奸ニ與ミスレバ、彼ヲ除クノ道アレドモ、彼ハ目下武事奬勵等ニ從事シ居レバ、姑ク今後ノ所爲ヲ視ルベキナリ。』

高橋ハ此手書ニ對シ、妄ニ幕府ノ官人ヲ可非スルノ不可ナルヲ諫言セリ。*

同年九月、藤田誠之進ヨリ高橋多一郎ヘノ書*中ニ曰ク『六月朔日ノ內諭ニテ藩吏

凹＝土浦藩用人大久保要。石＝石川和介。

*自筆川路氏所藏。

(ロ)高松藩主松平頼胤（水戸末家）。

(ハ)川路氏所藏。

*〔新伊勢〕卷四下。〔前記〕二頁、三〇頁、四七頁。『嘉永二年』以下〔安政〕八頁。

恐怖シ、有志ノ追捕一層嚴密トナリ、少シニテモ忠ナル者ハ皆遠ケラレ、老公孤立トナレリ、右內諭ノ出タルハ畢竟福侯周旋ノ厚キ故ト感佩ノ處、却テ藩中不和ヲ增スハ歎ズベキ事ナリ、凹石二子ノ高誼謝スルニ餘アリ、此後モ二子ニ縋リ、福侯囘天ノ心算ヲ仰グノ外ナシ。』

嘉永四年六月六日、齊昭ヨリ川路聖謨ヘノ書*中ニ云フ『此方奸人共ハ勢州ヲ惡ミ居リ候ヘバ、如何樣高松(ロ)ヘ奸說ヲ入レ候モ計リ難ク候』。ト川路ノ答(ハ)書中ニ云フ『御內密奸人ノ惡事云々敬承奉リ候、兼テモ申上候通リ、阿閣ハ御屋形ヘ對シ一通ナラズ心ヲ盡シ、御爲ヲ存ジ奉リ候儀承知罷在候間、御書拜見仕ラセ候。』

嘉永二年三月、幕府水戸三末家ノ水戸藩政ヲ攝行スルヲ止メ、齊昭ヲシテ藩政ニ預ルヲ得シム。此年九月、大將軍自ラ水戸藩邸ニ臨ミ、齊昭ヲ見テ溫言慰藉スル所アリ。同五年十一月ニ至テ、齊昭ヲ城中ニ招キテ之ヲ饗ス、齊昭深ク感激シ、嘗テ製スル所ノ地球小儀ヲ呈ス。*

加藤木畯叟筆記ニ云フ『烈公天保甲辰五月幕府ヨリ嚴重ノ譴責ヲ受ク、是內外猜疑ノ徒ヨリ醸シ負ハスル所ナリ、因テ容易ニ此冤ヲ解クコト能ハズ、然レドモ君臣官民ノ

※三五八頁。〔〇〕前ノ家系中ニ見ユ。
栗本鋤雲筆記（懷舊二九〇頁）ニモ同樣ノ説ヲ載ス。
※一五頁。伊勢守＝正弘、老公＝齊昭。

情實傍觀默止スルニ忍ビズ、有志者力ヲ竭クシ之ヲ解カントシテ却テ奸臣惡吏ノ爲メニ往々災害ニ罹ルモノ尠カラズ、于時他國ノ有志者之ヲ憂ヒ之ヲ愍ム者往々之レアリ、就中兩三輩尤モ力ヲ爰ニ用ヒ、阿部家ノ臣石川和介ニ入説ス、同氏之ヲ承諾シ、其君侯ニ申ス、侯能ク之ヲ容レテ爾後解寃ノ策ヲ廻ラスト雖モ、衰世ノ廟堂庸吏俗司衆クシテ力ヲ協スモノ鮮シ、因テ大樹ノ疑惑氷解セザルコト數年、然レドモ阿部勢州堅忍措カス、遂ニ烈公ノ寃罪ヲ解キ、水藩ノ國恥ヲ洗雪シテ再度弊政ヲ改革シ、晴天白日ニ遭フコトヲ得タルハ蓋阿部閣老ノ力ナリ。』

（幕末外交談）※　愼德公ハ峯壽院〇訪問ヲ名トシテ其邸ニ臨ミ、此便ヲ以テ烈公ヲ其座ニ引見シ、尋テ其一子ヲ以テ一橋邸ニ入レラレタルハ、幾分カ烈公ノ倚重スベキヲ知リテ之ガ心ヲ攬ラレタルモノナルベク、而シテ又阿部閣老ノ路ニ當ルアリテ只管ニ翼賛セシ所アルガ如シ。

（幕末政治家）※　伊勢守ハ老公ヲシテ幽鬱憤懣ノ境界ニ居ラシムルハ幕府ノ爲ニ利アラザルヲ洞見シタルガ故ニ、將軍家ヲシテ老公ノ親シムベクシテ憎ム可カラザルノ人タルヲ覺知セシメ、宗室中ニテ依賴スベキ人才タル事ヲ信ゼシムルニ盡力シタリ、而シテ此間後宮ニアリテ伊勢守ニ同意シテ將軍家ヲ動シタルハ蓋シ姉小路ナルガ如シ。

當時ノ政局及ビ後房ニ齊昭ヲ猜忌スル者多キニ拘ラズ、正弘ガ深ク此人ノ境遇ヲ憫ミ、爲ニ寃ヲ解カントテ、中外困難ノ事情ヲ排シテ百方斡旋ノ勞ヲ取リタルノ効空シカラズ、齊昭ノ嫌疑稍々解ケタルコトヲ以テ見ルベシ、是ニ於テカ齊昭モ亦自ラ從來ノ疑心ヲ捨テ、大ニ正弘ヲ德トセザルヲ得ザルニ至リタルヤ疑ナキナリ。

第二十九章。　雄藩ニ對スル政策。　其一下。

齊昭ノ政務參與。　其政事的上奏。　其造船監督。　其失意及ヒ退罷。

『七月』以下〔前記〕五一頁、六〇頁。
*〔安政〕四—五頁、三二頁。〔續實紀〕嘉永六年十二月廿九日。
齊昭ガ外交ニ關シ『面非腹從』ノ態度ヲ執リシ事ハ第十三章ニ詳ナリ。
⊗第十二章參看。
兩御所＝大將軍及ビ其嗣子。

米國艦隊ノ侵來ハ偶、齊昭ヲシテ大ニ政治ニ參與セシムルノ機會ヲ與ヘタリ。嘉永六年七月、正弘大將軍ノ命ヲ以テ齊昭ヲシテ隔日登城シ、海防事務ノ議ニ與ヲシメ、尋テ毎年手當トシテ米五千俵ヲ賜フノ命アリ。*是ヨリシテ齊昭政事ニ參與スルコトトナリ、聲名一時ニ加ハリ、世或ハ當時ノ政府ヲ評シテ正弘齊昭ノ兩立內閣ナリト云フ者アルニ至レリ。

齊昭六月七日正弘來訪⊗ノ書ヲ得、之ニ面シタルコトヲ手記シテ曰ク、『右ノ書七ツ半時過ニ屆キ、勢州ハ六ツ半時頃參ル、表ニテ一寸逢ヒ、兩御所樣御機嫌伺ヒ、直ニ大奥

〔新伊勢〕卷五。

右大將＝家定。

公＝正弘

住居ヘ通シ、公邊御役々海防懸リヨリノ申出書（御用箱持參、右ヘ入レテ持來ル）一々一覽、其上ニテ我等了簡ヲモ聞キ候故、色々申談、終テ有合ノ品ニテ菓子、茶、吸物等遣シ、又茶漬ヲ遣シ、扨又虫干ニ居間ニ出シ置候拙考ノ鎧胴具足遣申候、歸リハ九ツ時頃也（給仕ハ本文沙汰有之故、小石川ヨリ小姓來ル、家老ハ興津能登守來ル、御城付同册モ來ル、尤是等ハ側ヘハ出サズ）。』

又次回ノ會見ノ始末ヲ手記シテ曰ク、『六月晦日、御城退散ヨリ伊勢守來ル（八ツ過頃カ）、色々對談、終候後サトウ水二三盃呑セテ歸ス。　對談ノ大意ハ內實將軍家薨去、御新政ニモ相成候折柄、異國船ノ一事實ニ天下ノ安危ニカヽワリ候一大事ノ御時ニテ、右大將樣ニモ深ク御心配、老中始モ日夜心配致候處、外ニ御相談相手ニ相成候人モ之ナク候ヘバ、是非トモ相勤候樣ニトノ事故、再三御免ニ仕度ヨシ申述候ヘドモ、右大將樣ニハ深ク御心配モ遊バサレ、同列共ニオキテモ願候由ニテ承知致サス候故、右樣候ハヽ畏リ奉リ候ヨシ申上候』。

『仰高芳蹟』ニ云フ『老公色々御問答ノ內、奥ヘ御入、暫ク御出座之ナキ故、公次ノ間ヘ御出、老公ノ御側向ヲ召サレ、深更ニ及ビ、空腹ノ旨ニテ、御湯漬ヲ御所望アリ』ト。此說少シク事實ニ違フ所アリ。又一書ニ二人會見ノ事ヲ記シ『伊勢守駒込邸ニ至ルヤ、齊昭中坐起チテ室ニ入リ出デズ、正弘留坐シテ動カズ、夜更テ腹空シ、食ヲ乞ヒ數

徳川齊昭ヨリ正弘ニ贈ル所ノ甲冑　嘉永六年六月七日

兜ノ前面金象眼ニテ左ノ歌アリ。

さき出て散てふ者はものゝふの
道に匂へる花にそ有ける

阿部家所藏

（四二四頁）

公-正弘。

*一四七-八頁、一八七-八頁。

梳ヲ嘆シ、泰然自若タリ、水戸家臣亦其度量ニ服ス』トアリ。亦事實ヲ誤ルコト右齊昭ノ自記ニ照セハ自ラ明ナリ。

『内藤景堅日記』ニ云フ『齊昭ヲシテ登城シ政務ニ參與セシムルコトニツキテハ閣僚異議アリ、公因テ大將軍ノ病床ニ至リテ稟請シ、允可ヲ受ケタリ。』（幕末史）* 蓋シ伊勢守ハ聰明穎達、八面玲瓏ノ人ナリシナラン、故ニ幕閣ニ首座タルニ及ビテハ天下ノ形勢殊ニ對外ノ關係ハ水戸齊昭ノ勢力ヲ無視スルヲ得ザラシムルヲ識認セリ。思フニ齊昭ハ當時ニ於テ一世ニ卓絶シタル偉人タリシニ相違ナシ、故ニ其聲名海内ニ轟キタリ、伊勢守固ヨリ斯ル形勢ニ盲ナルモノニアラズ、是ニ於テカ其身保守派ノ勢力ノ代表タリナガラ、齊昭ヲ引イテ己ノ助トナシ、兩派ノ調和ヲ謀リテ國家ノ平和ヲ全フセント欲セシガ如シ、是レ彼ノ一方ニハ穩和中正ノ譽アルト共ニ他方ニ優柔不斷ノ議ヲ受ケシ所以ナリ、然レトモ老中トシテハ此策ニ出ヅルニアラズンバ彼ノ如ク永ク其地位ヲ保ツ能ハザリシノミナラズ、政界ノ紛亂ハ一層甚カリシナラン。 嚮ニ幕府ノ水戸齊昭ヲ蟄居謹愼セシムルヤ、伊勢守ハ當時幕閣ニ列シタルニ拘ラズ、任職日尚淺クシテ齊昭ノ罪狀ヲ詳ニセズ、故ニ寃罪ナルヲ知ルニ及ビテ專ラ其救解ニ力メシガ如シ。 伊勢守ノ齊昭ニ諮詢セシハ今後ノ政局ニ重大ナル關係ヲ有ス、政治家トシテ伊勢守ノ能力ニ就テハ云々スルノ要ナシ、只當時彼ノ自ラ決斷スルヲ欲セザリシハ事

實ナレ𪜈、之ヲ以テ强チ彼ノ識見膽力ノ不足ニ歸スベカラズ、假令如何ナル處分ヲ行フトスルモ、其結果ノ豫想シ難カリシハ諒トスベキ所ナレ𪜈、現代ノ政界ニ勢力ヲ有シ、殊ニ其外交意見ハ天下ノ傾聽スル所ナリシ水戸齊昭ノ所見ヲ聞キ、略同意ヲ求メ置クハ、今後ノ內政外交何レニ處スルノ策トシテモ妙ナラザルニアラズ、彼ヨリシテ決ヲ齊昭ニ仰ギシカ、若クハ成竹アリテ同意ヲ求メシカ、此ノ間ノ曲折ハ容易ニ明ニシ難キモ、彼ニシテ極メテ進步シタル開國意見ヲ有シ、又之ヲ斷行セント欲セシニ非ル以上ハ攘夷論ヲ有スルコト明ナル齊昭ノ勢力ヲ無視スル能ハザリシハ彼ノ地位ニ於テ已ヲ得ザル事ナリ。（摘要）

（幕府衰亡論）※　水戸殿ハ德川御一門中ノ豪傑ナリ、其代リニハ隨分ウルサキ御方ナリト云ヘルガ當時幕府ノ通評ニテ、阿部閣老モ旣ニヨク水戸殿ノ手並ヲ知ツタル人ナレバ、決シテ此隱居ヲ引出スベキ筈ハ無カリキ、然ルニ嘉永六年當分隔日御登城成サルベキ旨仰進ゼラレタリ、是レ果シテ誰ガ意ニ出テタル乎、余ガ傳聞セル所ニテハ、將軍家慶公ハ今度亞國軍艦渡來和戰ノ大事ニ臨ミ、我ヲ補翊シテ此難局ニ當ランモノハ水戸ノ外ニハアラジト思召シ、之ヲ阿部ニ諮ラセタマヒシニ、阿部モ心ハ左マデトモ思ハザル迄モ、抗拒スベキ譯モナケレバ、然ルベシト答ヘテ、扨ハ水戸殿御登城トハ定リシナリト云ヘリ。　阿部閣老ハ前將軍ノ寵遇信用ヲ得タル人ニシテ、引續キ家定公ノ

※二四―五頁、五八―九頁。同著者ノ手ニ成レル（幕末政治家）（一五八頁）ニハ「烈公ヲシテ幕政ノ顧問ニ備ハラシメタルハ疑モナク阿部ノ發意ナルベシ」トアリ、茲ニ記スル所ト齟齬セリ。

閣老トナラレタルガ、將軍ハ凡庸ノ器ナレバ、迚モ將軍ノ獨裁ヲ待ツベキニ非ズ、水戸老公ハ夙ニ阿部ノ與ニ謀ルベキヲ識リ、深ク交ヲ通ジタレバ、阿部ハ老公ヲ勸メテ御政事御相談ニ參與セシメ、阿部ガ在世ノ間ハ老公ハ太シキ不滿ヲ幕府ニ懷カレザリキ。

木村芥舟ノ記*ニ云フ、『米國ノ請求ニ對シテハ前中納言殿ノ御意見伊勢守始廷臣ノ議ト折合ハズ、諸藩志士ノ議論モ從テ沸騰シ、或ハ往々過激ノ擧動ヲ見ントシテ底止スルナ所ナキニ拘ハラズ、伊勢守ハ百方其間ニ苦心齷齪シ、折ニ觸レ川路左衛門尉、岩瀬肥後守或ハ江川太郎左衛門等ヲ御邸ニ伺候セシメテ前中納言殿ノ御意中ヲ窺ヒ、御助言ヲ求メタリシカバ、伊勢守在職中ハ前中納言殿ニモ猶時々御登城アリテ廟議ニ參セラレ、サシテ御不滿ノ御氣色モナカリシト、是レ嚮キニ伊勢守ニ御遺命◎アリシガ爲ナリトイフ。』

齊昭其言フ所多ク行ハレザルヲ以テ、安政元年四月ニ至リ、防務ニ參スルコトヲ辭シテ允サル*。閑居ノ間自ラ琵琶ヲ造リ、關白鷹司政通◎ニ因リテ之ヲ宮中ニ獻シ、之ニ一篇ノ奏文*ヲ添附ス、文中醜虜猖獗屢〻鄙見ヲ征夷府ニ陳シタレドモ、未ダ其採否如何ヲ審ニセザルコト

*〔舊幕府〕三卷五號四五頁。木村喜毅初圖書、後攝津守、安政以來目付軍艦奉行等ニ歷任ス。

◎第廿一章ニ見ユ。

*〔十五代史〕卷廿上一二五—六頁。

◎齊昭姉婿。

*〔嘉永明治〕卷三、三六葉表。

ヲ述ブ、是レ琵琶獻納ニ託シテ之ニ關係ナキ政治上ノ意見ヲ宮中ニ聞シタルモノナリ。武家ガ政事ニ關スル事ヲ朝廷ニ直奏スルハ幕府ノ法制ニ於テ嚴禁スル所ナルニ、齊昭ガ始テ此禁ヲ破リタルハ、當時ノ政體上、殊ニ齊昭自身ノ立脚地トシテ決シテ穩當ナル所爲ト謂フベカラズ、此等ノ所爲亦齊昭ガ復タ自ラ幕府ノ嫌疑ヲ招キタル所以ニアラズヤ。

〔德川十五代史〕*　安政元年四月晦日、水戸齊昭卿ニ隔日登城ニ及ハザル旨ヲ命ズ、世人其復出ンコトヲ望ム者多シ、老中諸役人之ヲ憂ヒ、松平河內守、川路左衛門尉ヲ水戸邸ニ遣シテ懇請スル所アリ、河內守涕泣切ニ請フテ止マズ、卿聽カズ。

安政元年六月、島津齊彬ヨリ松平慶永ヘノ書*中ニ云フ『水老公御登城モ全ク世上ノ人口ヲ恐レ候譯ト存ジ申候。』

齊昭ハ安政元年七月ヲ以テ更ニ軍制改正顧問ノ命ヲ受ク、爾來時々登城シタリシガ、安政二年八月、正弘大將軍ニ稟申シテ松平乘全

*卷廿上一二七一八頁。

*〔昨夢〕上一七一頁。

及ビ松平忠固ヲ免黜シ、是ヨリ大ニ政務ヲ改新セント欲シ、更ニ以後隔日登城スベキノ公命ヲ齊昭ニ傳ヘ、別ニ年々米五千俵ヲ加給ス、齊昭加給ヲ固辭シテ受ケズ*。

安政二年八月廿日、藤田誠之進ヨリ川路聖謨ヘノ書中ニ云フ『今般老寡君ノ大任實以深心痛致サレ、昨日マデハ一向寢食ヲ安セラレザル程ニ御座候。是迄サヘ衆口嘖然ニ御座候處、此上マス、、浮說等行ハレ候ハン、晚節ノ心配ヲ設ケ、臣子ノ心痛御深察成下サルベク候。去十四日大任ヲ蒙ラレ候日、中山備後守福山侯ヘ御呼出ニテ、此後諸侯始ヨリ種々內願等モ之アルベク候間、家老ハジメ別テ心懸ケ、容易ノ取次等仕間敷仰含メラレ候。』

同年九月、齊昭ヨリ松平慶永ヘノ書*中ニ云フ『先般愚老隔日登營ノ命ヲ蒙リ候、是迄モ案山子同樣ノ身分、何ノ御用ニモ相立タズ。』同十月ノ書*中ニ云フ『拙老事防禦御用向伺申候ヘトモ、大方ハ表發致シ候跡ニテノミ承リ、云々相成候故心得ノ爲ニトテ見セ申候義多ク、假令愚慮ニ相違ノ事之アリ候トテモ、表發ニ相成候ヲ彼是ハ申兼、又申候トテモ御取上ニ相成ラズ候ヘバ、每度夫切ニイタシ候。』

同年十一月、橫井平四郎ヨリ立花壹岐ニ與フル書*中ニ云フ『老公只今ノ御心術ニ

○第廿二章ニ見ユ。

*〔新伊勢拾遺〕安政二年八月十四日。〔近事鈔〕卷三。〔前記〕八三頁。〔十五代史〕卷廿上一四六頁。及ビ藤田誠之進ヨリ川路聖謨ヘノ書翰安政二年八月廿日附。

○自筆川路氏所藏。

○水戸藩家老中山信守。

*〔昨夢〕上二三六頁。

案山子同樣ノ身分。

橫井ノ對外論ハ第十三章ニ見ユ、此時熊本ニ在リ、安政五年越前藩ニ聘セラレテ顧問タリ。

○柳川藩家老。

*〔小楠遺稿〕一三六―七頁。

＊二五頁、六八一九頁。

◎第廿四章ニ見頁。

正弘ノ齊昭評。

テハ、譬諸侯ニ御手ヲ付ケラレ候トモ、極々ノ隱密ニテ、或ハ御内狀御遣シ成サレ候歟、又ハ殿中ナドニテ隱語等ノ御咄之アル歟ノ御智術ニ出申候、既ニ此筋ノ事ハ二三ケ條ノ其證據之アリ、却テ人心ヲ御失ヒ成サレ候、智術ノ益ナキノミナラズ、恐ルベキ事此ノ如ク明白ニ之アリ候。天下ノ事ハ幕府ニ之アリ、幕府ノ事ハ老公ニ之アリ、今日ノ天下大根本ノ御身ニシテ此ノ如キノ御心術ノ曲ハ誠ニ賴ミ之ナキ事ニ存シ奉リ候。』

（安政紀事）＊　阿部勢州ノ意前納言ヲ以テ登營防務ニ參セシムル者ハ、之ヲ以テ海内ノ人望ヲ繫キ、重キヲ内外ニ取ルニアリテ、其實ハ悉ク納言ノ言ヲ用ヒタルニモアラズ、又大ニ猜防スルノ情ナシトセズ。　安政元年七月五日、兵制改革ノ事ヲ水戶前納言ニ命ズ、コレ前納言ノ德望益隆ナルヲ以テ之ヲ退クルコト能ハズ、之ヲ以テ其心ヲ慰藉セント欲スルナリ、然レドモ唯之ヲ羈縻スルニ過ギザルノミ、實ニ其言ヲ用ルニ非ズ。　（摘要）

齊昭從來建言スル所少ナカラズト雖モ、其意見多クハ用ユベカラザルヲ以テ、幕府ハ後ニ軍艦製造ノ一事ヲ以テ其專務タラシム。既ニシテ其費用殆ド貲ラレズ、勘定所ニ於テハ頗ル之ニ困ミ、稟申シテ製艦中止ヲ請フ、閣老皆其中止ヲ可ナリトス、正弘獨リ肯ゼズシテ曰

一獅子弄球

ク、『諸君ハ老侯ヲ以テ如何ナル人ト爲スヤ、將軍至親ノ家ニ出デ、豪邁ノ氣象、有爲ノ才力、當今第一ト稱セラレ、天下ノ畏服スル所ナリ、而シテ其性質閑散無事ニ堪ヘザルノ人ナレバ、之ニ何事ヲカ擔任セシムレバ、終了ニ至ルマデ刻苦勉勵シテ餘念ナク、能ク尋常紈袴子ノ耐ヘ得ザル所ニ耐フ、余聞ク獸中ニ獅子ナルモノアリ、獰猛ニシテ制スルコト難ク、之ヲ怒ラシムルトキハ咆哮奮進シテ多ク人ヲ傷ク、唯之ヲ制スルニ一術アリ、即チ之ニ投スルニ一球ヲ以テスレバ、滑然旋轉シテ極リナキヲ以テ、彼怒リテ之ヲ蹴リ、又之ヲ咬ミ之ヲ爬スト雖モ、其如何トモスベカラザルヲ見テ、終ニ怒ヲ止メ、日夜之ヲ玩弄シ、其間害ヲ他ニ及ボスニ暇アラズ、老侯ニ對シテハ稍恐懼ニ堪ヘスト雖モ、今之ヲ託スルニ造艦ノ任ヲ以テスルハ、其好ム所ノ物ヲ授ケテ其怒氣ヲ殺グニ在リ、其レ然リ、老侯ノ歡心ヲ失ハザラン爲ニハ數

十萬ノ金亦惜ムニ足ラザルノミ』ト。一座之ヲ聞キテ啞然タリ。正弘ガ何人モ與ミシ易カラザル齊昭ヲ遇スルニ多ク這般ノ術ヲ以テス、是レ正弘ガ在職中、齊昭ヲシテ終ニ不平ヲ懷カシメザリシ所以ナリ。※

艦成リテ旭日丸ト名ヅク、製造十分ナラザル所アリテ運轉意ノ如クナラズ、世人綽號シテ『厄介丸』ト云ヒ、又嘲リテ『動カザル御世ハ動キテ動クベキ船ハ動カヌミトモナキカナ』ト云ヘリ。※

時ニ正弘德川齊昭ノ勸說ヲ容レ、寺鐘ヲ毀銷シテ銃砲ヲ鑄造スルノ令ヲ發ス、因テ物議大ニ起ル。安政二年十一月、齊昭密ニ正弘ニ報シテ曰ク『水戸ノ法華僧日華トイフ者梵鐘毀銷令發布ヲ以テ奇貨居クベシト爲シ、諸宗寺院ヲ煽動シ、足下ト拙老トヲ排擠センコトヲ企ツ』ト。正弘之ニ答書ヲ贈リテ曰ク『陰謀ノ密報實ニ恐ルベキ事ナリ。下官ハ公ト親懇ナルヲ以テ、貴藩中下官ヲ憎ム者アルハ下官ノ察知スル所ナリト雖モ、從來下官ハ何事モ公ノ爲ニ不正ノ斡旋ヲ爲シ

※〔鈍庵〕二五三頁岩瀬忠震親話、幕末名士小傳（木村芥舟撰、〔舊幕府〕三號四八頁）。

厄介丸。

ミトモナキカナ＝水戸モ無キカナ。

※〔鈍庵〕二五四頁。

○第二十六章ニ見ユ。

○附錄第一章六ア號參看。

※同壬一イ號

久世大和守廣周、時ニ閣老ノ一員タリ。

二五一―二頁。

タルコト毫モナキヲ以テ別ニ意ヲ煩ハサズ、尙ホ注意ヲ怠ルコトナカルベシ。目下下官及ビ久世モ公トノ關係ニツキ世上ノ嫌疑ヲ蒙ルヲ以テ、單獨ニテノ會見ハ已ムヲ得ズ辭スルノ外ナシ』ト。是ニ至リテ正弘ト齊昭ノ間稍隔絶シ、信書ノ往復亦從前ノ如クナラズ。

（匏庵遺稿）*　老侯ノ主意ハ防戰ノ一路ニ在リテ、決シテ開國貿易ニハアラザリシナルベシ、故ニ終ニハ曾テ封內ニ行ハントシタル諸寺ノ梵鐘ヲ收メテ砲熕鑄造ノ事ヲ再興シテ天下ニ令セラル、ニ至リシニ付テモ其一證ヲ見ラル、果シテ其令出ヅルニ及ビ、一時嘵々トシテ謗誹ヲ來タシ、老侯已レ曾テ之ヲ以テ罪譴ヲ獲ラレ、今猶ホ懲リズ、移シテ將軍ニ及ボサントスト抔罵リアヘリ。老侯ノ見解少シク時勢ニ後レ、何トナク事々物々議論ノ合ハザリシト見ヘ、後ニハ隨意閑放、故ラニ命アルニアラサレバ以來出ルニ及バザル旨優遇アラセラレタリ。（摘要）

正弘ハ齊昭ノ說多ク用ユルニ足ラザルヲ知リテヨリ、漸ク齊昭ノ爲ニ困ムノ情ナキニアラズ、「ハリス」來着シテ入府問題起ルノ時

ニ至リテ殊ニ然リ、是ニ於テ轉之ヲ疎外スルノ狀アリ、齊昭亦怏々トシテ樂マザルノ狀アリキ。安政四年五月、松平慶永藩地ヨリ江戸ニ至ル、正弘其意ヲ慶永ニ傳ヘテ曰ク、『從來公及ビ小子ハ共ニ老侯ト親交アリト雖モ、近來老侯ノ身上ニ關シテハ種々ノ惡説行ハレ、小子ハ私カニ憂慮スル所アリ、因テ公ハ今後老侯ト通信等ヲ絶タル、ヲ可ナリトス』ト。*

正弘ガ齊昭ニ對シ、從前ニ異リテ此ノ如キ態度ヲ以テシ、敬遠手段ヲ取ルニ至リタルハ實ニ已ムヲ得ザルノ内情アリシナリ。本文ニ云ヘル惡説トハ安政四年四月、在江戸島津齊彬ヨリ在福井松平慶永ヘノ書*中ニ載スル如ク内事ニ關シテ齊昭ト慶篤トノ間圓滑ヲ缺キ齊昭ノ失錯暴露シタル事ノ如キモノヲ指セルナラン。其他水戸家ノ内亂ニ關シ、正弘ノ憂苦シタル事等ハ本書附錄ニ載スルモノ、外、昨夢紀事卷上三三四―五頁、三四二頁、三五二頁ニ散見スレドモ、事私行上ニ渉リ、茲ニ叙述スルノ要ナキヲ以テ略シテ記セズ。

安政三年五月、伊達宗城ヨリ松平慶永ヘノ書*中ニ云フ『鱗兄對話ノ内、阿閣モ内實

*『安政四年』以下〔昨夢〕上五〇〇―一頁。

*〔舊幕府〕四卷四號四―五頁。

*〔昨夢〕上三六八頁。

麟兄＝島津齊彬。
阿閣＝阿部閣老。
歸職＝堀田閣老再任。
當公＝水戸藩主德川慶篤。
◎弘化元年甲辰。
＊「昨夢」上三七四頁。

ハ老公最早御登營之ナキ方ヲ望ミ申サレ候樣考ヘ候。元來堀田トハ御不手合ノ處、歸職後モ御逢ノ時、堀田ヲバ嚴シク御キメ付ナサレ、或ハ同人ヘ御挨拶之ナキ儀モ折々アル故、堀田モ甚不快ニ存居、色々心痛致シ候ヘドモ面倒絶エズ、止ムヲ得ズ申上候迄ハ御控ナサレ候樣申上置候。阿口氣モ据リナキ説話ニ存申候、先ツウルサク存ゼラレ候意ニ察セラレ候。當公モ中々油斷出來ザル御方ニテ、自分ナド申上ザル事ヲ御取繕ニテ老公ヘ仰上ラレ候故、老公モ御疑惑ナサレ候、何ニシテモ辰年◎又此度ト度々水藩中不靜謐ハ御家事不取締ト申モノニテ候ヘバ、大政ノ御相談抔モ如何ニ存候旨。此一言ニテ御登營ヲ欲セザルハ明白致シ候。　奧御右筆ノ口氣ニテハ、老公御夫婦ヲ極能キ御機嫌ニテ水府ヘ御移シ申上度トノ注文出居申候由、右ノ都合ニ候ヘバ、最早迚モ御登營アルマジク存候旨。此説甚以容易ナラザル一大事ニ御座候』。

慶永ノ答＊書中ニ云ク『阿閣當今平時ノ處置ニ於テコソ老公ヲ忌憚候ヘドモ、實ニ天下ノ一大事ト相成候時ハ、積德重望、萬人ノ具瞻老公ノ右ニ出ツル者之ナク候ヘバ、阿閣初ノ依賴モ亦老公ノ外ニハ之ナキ儀、已ニ先年墨船初テ渡來、夷情測リ難ク、人心必戰ヲ期シ候節、阿閣初老公ヘ依附致候ニテモ炳然タルコトニテ候。又薩ノ薩タル、外藩ノ豪勇、富强無比、加之謀慮深遠、天下ノ疑懼スル所ニテ、阿閣初ノ畏憚モ此人ニ決シ申候。此時ニ當ツテ老公ニハ都ヲ御離レ、薩ハ幕ノ外戚トシテ威望ヲ逞フセンニハ、

薩ガ閣ト謀ヲ合セ、老公ヲ移スノ嫌疑薩ニ於テ遁ル、所之ナク候。』

又伊達宗城ヨリノ書＊中ニ云フ『老公水府ヘ云々ハ尙探リ候ヘバ、御用部屋ヨリ出デ候儀ニハ之ナク、讃ガ工ミテ當公ヘ申進メ、當公ヨリ一橋君ヘ密話御漏泄ラシク、此儀ハ聊カ降心仕候。尙當公ノ心術實ハ御動搖ヨリ起候事ニテ、是ニハ辰閣モ憂患ノ趣ニテ、辰閣ヨリ當公ヘ内々訓戒之アルヤニ御聞ナサレ候由。當公ハ當朔端午ノ御逢ニモ阿閣ガグラ〳〵スルニハ困ルト御話之アル故、阿閣如何樣グラ付テモ兩公御間柄一毛一厘モ御間隙アラセラレズ、御親睦アラセラレ候ヘバ、山ガ川ニ變候ヘトモ奸謀ハ行ハレザル譯故、此處憚リナガラ御緊要ニ奉存候ト申上候。』

安政三年十一月、在福井松平慶永ヨリ在江戸島津齊彬ニ贈レル書◎中ニ云フ『水老公ノ光景ハ如何、相伺ヒタク、近頃ハ波靜カニ相成候ヤ、例ノ御登營御六ケシキ儀ト存ジ奉リ候。』 翌年四月、島津ノ答書ニ云フ『中々御登營所ニ之ナク、當公愛妾下宿ノ大失錯之アリ、姫君樣御逝去、旁又々大不評判、頓ト致カタ之ナク候。 姫君御病發、當公手ツヨキ事仰セラレ候テノ事カト申事ニ御座候。 老公ノ御所置誠ニ大失策、兩田居ラズ候テハ閣ト存ジ奉リ候、又々姦物再發仕ルベクト存ジ奉リ候。』

同四年七月、在鹿島島津齊彬ヨリ在江戸松平慶永ヘノ書＊中ニ云フ『一橋ノ事貴君御忠志ニテ仰上ラレ候ヘ共、辰始左樣ニハ存ゼザル樣子、小子ヘ申聞ケ候ハ、越前自分

閣＝阿部閣老。
＊〔昨夢〕上三七六頁。
御用部屋＝幕府内閣。
讃＝高松藩主松平讃岐守頼胤。
辰閣＝阿部閣老。
御逢＝慶篤ト宗城ノ會見。
◎此書翰井ニ答書自筆石黒務所藏（「舊幕」四卷四號四一五頁所載）。
當公＝德川慶篤。
姫君＝慶篤妻線子。
兩田＝戸田忠太夫、藤田誠之進。
＊自筆石黒務所藏（「舊幕府」四卷七號一八頁所載）。

長ー正弘。

京都所司代脇坂安宅(淡路守、後中務大輔)。

◎安政二年十月。

*第一巻五七八頁。

ノ心ヨリ出候事ニモ之ナク、老公ヨリ御言ハセナサレ候事ニテ、誠ニ困リ候儀ト申事モ御座候間、老公ト御遠々シク相成候方却テ御双方ノ御爲ト存候。其外閣老ヨリ傳奏マデ内意ニ以後水老公ヨリ内々申上候儀何事モ御取揚之ナキ様ニト脇坂ヨリ申出候ヨシ、極内々近衛殿、三條殿ヨリ御直ニ伺申候。」

(逸事史補) 水府老公ノ失策多クナリテ萬事不都合ヲ生ジ、幕府ヨリ遠ザケラレタルハ、藤田東湖、戸田忠太夫兩人卯年◎大地震ニ壓死セシ以來ナリ、此二人ノ補翼ハ別段ノ事ナリトイフ。 藤田等震死ノ後老公モ恣ニナリ、正奸兩黨相互ニ爭ヒ、薩國モ水府ノ有志ト交リヲ深ク結ビタリ、天下ノ亂ハ此兩國ヲ權輿トスルト思ハレタリ。(摘要)

(諸家説話) 大久保一翁曰ク、勢州ハ最モ水戸老公ノ事ヲ心配セリ、一日余ヨリ老侯ノ事ニ關シ言フ所アリシニ、何分親藩ノ人ニモアリ、成ルベク程能ク待遇シタシトノ話ナリキ。

(西郷隆盛傳)* 安政元年米國ト和親條約ヲ結ビ、次第ニ諸外國ニ及ベリ、當時幕閣ノ首席ニアリテ此等外交ノ要衝ニ膺リシハ阿部正弘ナリシガ、此和親條約ヨリシテ水戸齊昭ハ阿部ト稍其趣ヲ異ニスルニ至レリ、齊昭ト雖ドモ彼ノ豪邁ノ資ヲ以テ遂ニ開港ノ止ムベカラザルヲ知ラザルニアラズ、唯其主義トスル所ハ我ニ戰フノ實力ナケレバ

其後井伊直弼大老トナルニ及ビテ、齊昭ト幕府トノ軋轢愈〻甚シ、萬延元年井伊ガ齊昭ニ死ヲ賜フノ議ヲ起シタル時、其身害ニ遭ヒタリトノ說アリ（史談會筆記第二百號）。
＊〔起原〕下二二六六—七三頁。〔十五代史〕卷二十上、一七二一—三頁。

假令和スルモ尙降ルニ等シト云フニアリ、故ニ阿部ノ和親開港ハ外國ヲ恐ルヽニ出デタルモノトナシ、從ヒテ其意見ノ合同ヲ得ザリシナリ、而シテ戶田藤田等ノ死後ハ齊昭モ大ニ前日ト異リ、舊說ヲ守リ、活識ヲ缺クノ形勢トナリシヲ以テ、阿部閣老及ビ其一派ノ外國掛等ノ人々ハ遂ニ齊昭等ノ說ヲ以テ極端論者、一個ノ書生論ト見做シ、且其執拗ナルヲ見テ、復昔日ノ如ク深ク之ニ屬望セザリシガ如シ。

齊昭惡評ヲ受ケ信望ヲ失墜シタル頃ヨリ多ク登城セズ。正弘歿スルノ翌月即チ安政四年七月、齊昭海防及ビ軍制改正ノ議ニ參與スルヲ辭シテ罷ム、外國ノ事ニ關シ其意見閣老堀田正睦ト協和セザルヲ以テナリ。尋テ米國官吏入府ノ事ニツキ密ニ反對ノ議ヲ京都ニ奏シ、朝廷ニ於テ此ノ如キ大事ヲ傍觀セラルヽハ遺憾ニ堪ヘズト言ヘリ＊。世或ハ齊昭ノ攘夷論ハ表面ノ假裝ニシテ內實ハ然ラズトノ說アレドモ甚ダ疑ハシ、其晩年ノ作詩ニ徵スルモ、依然攘夷論ノ意氣ヲ帶ブルヲ見ルニ足レリ。

⊗安政六年。
*〔振起篇〕上二葉表。
*石黒務筆記（〔舊幕〕府四巻三號九頁上欄）。
*〔三十年史〕二七四頁ニモ收錄セリ。
*七二頁。

己未*九月發江戸。

白髪蒼顏萬死餘、平生豪氣未全除、寶刀難染洋夷血、却懷南陽舊草廬*。

此詩諸書ニ記スル所文字ニ異同アリ、又或ハ藤田東湖ノ作詩ナリト言フ者アリ。

松平慶永説話*ニ云フ、水老公ハ最初其言行モ衆人ノ意表ニ出デ、天下ノ名君ノ稱ヲ博セラレタリ、然ルニ藤田戸田ノ亡後ハ語ルニ忍ビザル事多シ。老公ハ最初ヨリ所詮攘夷抔ハ出來得ベカラサルト云フ事ヲ十分知リナガラ、口ニハ攘夷〳〵ト稱シテ天下ノ人心ヲ瞞着シ、爲ニ一時其聲望ヲ博シタルモノニシテ、人ヲ欺キ己ヲ欺キタルト云フモ誣言ニ非ザルベシ。（摘要）

（まかきの茨）* 老公ノ御説悉ク斥夷、獨立、鎖國ニ出ツトイヘドモ、公豈ニ今日勢ノ然ラザルヲ知シ召シタマハザル者ナランヤ、其意ヲ當時ニ得タマハザルヨリ、衆人ヲ玩弄シ、邦人ヲ鼓舞シタマフニ急ナリ、故ニ御説益〻出テ、マス〳〵激、惜哉正大高明ノ御誠實ニ乏シ、此故ニ終ニ一時ノ紛擾ヲ來セリ、嗚呼英雄人ヲ欺クト云フモノ歟。

（幕府衰亡論）* 水戸老公ノ如キ阿部閣老ノ在職中ハ勉メテ此人ヲ慰諭シタルニツキ、甚シキ不平モ顯ハレズシテオハセシガ、阿部ノ逝去ト同時ニ「ハルリス」出府ノ議起リタレバ、老公海岸防禦等ノ御用ヲ辭シタリ。亞國官吏出府登城ノ件ニ付第一ニ異

議ヲ唱ヘタルハ蓋シ此人ナリシガ如シ、尤モ世間ニ傳播セル亞國官吏ノ出府登城ヲ許シ夷情切迫ニ付存寄申上候ト題シタル水戸齊昭卿カ京都ヘ差出サレタル建白書ハ一讀シテ其僞作タルコト分明ナレバ、當時老公ガ如何ニ憤懣シタリトテ、幕府ノ規則ヲ犯シテ京都ニ建白ヲ差出サレタル事ハ有リ得ベカラザル事實ナリ。（摘要）

右幕府衰亡論ニ於テ齊昭ガ建白書*ヲ以テ僞作ナリト言ヘルハ臆測ノ誤ニシテ、其建白書ヲ呈出シタルハ事實ナリ。當時齊昭ガ京都ニ密奏シタルハ此一事ニ止マラザルナリ、幕府ノ規則云々ト言フト雖モ、此時ニ至リテハ幕府ノ規則或ハ頽弛シテ行ハレザルモノアリ、齊昭亦之ヲ無視シタルコトアルヲ遺ルベカラズ。

〔神戸開港三十年史〕*　幕府遂ニ「ハルリス」ノ國書ヲ老中ノ手ニ受ケテ將軍ニ謁見セシムルノ議ヲ決セリ。此際正弘ノ死ハ幕府ノ運命ニ對スル一大打擊ニシテ、齊昭ハ正弘在世中假令主戰論ノ容レラレザルモ、幕府ニ反對スルコト未ダ劇甚ナラザリシガ、八月幕府外使謁見ヲ諸侯ニ達スルヤ、齊昭正面攻擊ノ體度ヲ取リ、反對意見書ヲ幕府ニ呈シ、又京都ヘ建言シ、以テ古來幕府ガ京師ノ公卿ト諸侯士大夫ト直接ニ往來スルヲ禁セシ制ヲ破リタレバ、是ヨリ幕府ニ不平ナル各藩脫走ノ士ハ京師ニ麕集シ、公卿ノ間ニ出入馳驅シ、幕府反對ノ說ヲ進ムルニ至リタリ。（摘要）

〔幕末史〕*　堀田備中守入閣シテ首班タルニ及ビ、齊昭心甚ダ平カナラズ、僅ニ

*〔把原〕卷下二六―七三頁。〔三十年史〕二六六―七三頁ニ見ユ。

*上八五頁。

*三〇九頁。

伊勢守ノ調和ニヨリテ事ナカリシガ、安政四年伊勢守卒去シテ幕閣ト齊昭トノ一脉ノ連絡全ク斷絶シ、加之九月齊昭ト相惡メル松平伊賀守再ビ老中トナリシ爲メ、彼ハ益〻憤恨ノ情ヲ以テ幕閣ニ對スル事トナリ、漸ク將來ノ禍亂ヲ馴致セントス。（摘要）

（吉田松陰）* 阿部ハ烈公ノ實ニ政治的大要素ナルヲ看取シタリ、而シテ實ニ幕政ノ前途ニ横ハル厄介物ナルヲ看取シタリ、故ニ彼ハ慰撫馴養、恰モ驕兒ヲ遇スル如ク其厄介ヲ爲サシメザラント欲セリ、彼ガ世ヲ沒ルマデ、烈公ハ不平ナガラモ遂ニ幕閣ニ對シテ大ナル違言ナカリシ也。直弼ニ至リテハ彼ヲ全ク敵トシテ遇セリ、彼ノ力ハ能ク其敵ヲ挫キタルニ相違ナキモ、彼ヲ激セシメ、彼ノ同類ヲ激セシメ、其末流ヲ激セシメ、遂ニ天下ノ禍機ヲ潰決セシメ、復タ收拾スル能ハザラシメタリキ。

（幕末政治家）* 伊勢守ガ外交ヲ開クヲ以テ不得止トスルノ議ト、老公ガ外交開ク可カラザルノ議トハ全ク正反對トナリシ（安政元年）後ニ至リ、伊賀守ハ猶モ老公ヲシテ閑散ノ地位ニ身ヲ置カシムルノ不策ナリト知リタレバ、海防ノ事ヲ老公ノ專務トナシ、或ハ軍艦製造ニ、或ハ大砲鑄造ニ老公ノ行ハント欲スル所ヲバ幾分カ行ハシメテ、以テ其不平ヲ慰藉スルコトニ勉メタリ、是故ニ伊勢守ガ安政四年ヲ以テ卒去シタル迄ノ間ハ、老公ノ攘夷論モ未ダ其極端ニ至ラズ、一橋卿儲君論モ甚シク囂々セラル、ニ至ラザリキ、是全ク阿部伊勢守ガ老公ヲ籠絡シタルノ巧妙手段ナリト云ハザル可カラ

*三〇〇頁。

*二二一―三頁、一八二頁。

ズ。烈公ハ政事家ノ識見アリテ政治家ノ智略ニ乏シク、爲ニ其方法ノ宜ヲ得ズシテ一世ヲ轗軻ノ間ニ送リ、幕府ノ爲ニハ功罪相半スルノ譏ヲ受クルニ至レリ。噫烈公ハ明治維新ノ先驅タルノ大功臣ナリト今ニ稱セラル、ヿ余ハ其志ニ非ザルヲ信スルナリ。

正弘ト齊昭トハ其性質全ク相反ス、外患起リテ偶然共ニ政局ニ當リタレトモ、久カラズシテ復タ袂ヲ分ツニ至リタルハ自然ノ勢ニシテ亦已ムヲ得サル所ナリ。初正弘ガ世ニ虛名ヲ博シタル齊昭ヲ薦メテ政務ニ參與セシメタルハ、其說ヲ採ランガ爲ノ積極的希望ノ故ニ非ズシテ、寧ロ政治ニ妨害ヲ爲サシメザル消極的希望ニ出デタルヿ言ヲ待タズ。若シ其ヲシテ不平ヲ懷カシメタランニハ、如何ナル妨害ヲ政治上ニ加ヘタルカ、之ヲ其後年ノ擧動ニ照シテ想像スルニ難カラザルナリ。夫ノ齊昭ノ策論ナルモノハ概ネ時勢ニ後レタル迂論ニシテ取ルニ足ラザルコト此書各章ニ記スルガ如シ。幕府ガ齊昭ノ勢力ヲ假リタルコト多キカ、將タ之ガ爲ニ困難シタルコト多キカ、未

ダ俄ニ判シ易カラサルモノアリ、後ニハ正弘モ其待遇ニ困ミタレトモ敢テ其鋒ヲ露ハサズ、巧ニ之ヲ籠絡シ、只敬シテ而シテ遠ケ、遠ケテ而シテ遂ニ能ク幕府ニ反抗シ騷擾ヲ惹起スルコトナカラシメタルハ、亦正弘ノ政治的技倆ト謂フベキナリ。

（弘化年間ノ事ナルベシ。

第三十章。　雄藩ニ對スル政策。　其二。

正弘ト島津齊彬。　島津家ノ内訌。　幕薩協和。
兩家ノ『政婚。』　西郷隆盛ノ斡旋。

薩藩主島津齊彬（ナリアキラ）ハ大藩藩主中正弘ガ最モ親善ナリシ者ノ一人ニシテ、之ヲ紹介シタルハ松平慶永ナリ。正弘嘗テ密ニ松平慶永ニ謂フテ曰ク、『曩ニ水野忠邦ノ職ニアルヤ、余ニ告グルニ薩州ハ油斷ナラズ、宜ク戒心スル所アルベキヲ以テス、貴意以テ如何トナス』ト。慶永答ヘテ曰ク、『鄙意全ク之ニ反ス、島津ハ決シテ幕府ノ爲ニ不忠ナル者ニアラズ、余一夕彼ヲ敝舍ニ招カン、貴君亦來リテ會見アレ』ト。數日ノ後、正弘越前藩邸ニ於テ齊彬ト會シ、互ニ胸襟ヲ披キテ懇談スル所アリキ。他日慶永正弘ニ問フテ曰ク、『貴君島津ヲ以テ如何ナ

ル人物ト爲スヤ』ト。答ヘテ曰ク、『果シテ貴言ノ如ク、彼ハ政府ノ輔翼トナルベキ人物ナリ、若シ單ニ水野ノ言ノミヲ信シナバ甚シキ誤解ヲ生スベキニ、公ノ忠告謝スルニ餘アリ』ト。其後慶永齊彬ニ告グルニ水野ノ言ヲ以テシタルニ、齊彬曰ク『島津家家訓アリ、戒メテ德川氏ノ爲ニ不忠ナルコトアルベカラザラシム、決シテ貳心ヲ懷クガ如キコトナシ』ト。當時薩藩ハ實ニ幕府ノ爲ニ忠勤怠タラズ。米國艦隊渡來ノ後、新造西洋形船昇平丸ヲ幕府ニ獻シ、又正弘ノ依託ヲ受ケテ小銃五十挺ヲ製造シタルガ如キ、一ハ奉公ノ意ニ出デ、一ハ正弘ニ厚意ヲ表シタルモノナリ。*

十二。島津齊彬ハ薩藩主齊興ノ嫡男ナリ、嘉永四年家ヲ續ク、時ニ年四十二。茲ニ先ツ齊彬ト直接ノ關係アル島津家系統ヲ示スコト左ノ如シ。

〔島津氏家訓〕

⊖第廿四章ニ見ユ。

*〔諸家〕市來四郎說話。

薩摩藩七十七萬石、居城鹿兒島。徳川大將軍ヨリ松平氏ヲ授ケラル。(正弘五世ノ祖正福ノ後妻ハ重豪ノ高祖父吉貴ノ女ナリ、第一章家系參看。

◎「齊彬記」一二四頁、「西郷隆盛傳」第一卷六〇頁、「國史眼」明治三十四年改版附錄武家一覽八頁ニ據ル。「十五代史」一六三頁「三十年史」二四八頁ニハ南部信順女トアリ、「先賢遺實」(三三頁)等ニハ一門島津山城(重富家)ノ女千百子(久光妻)ノ妹敬子即チ篤姬ナリト

島津重豪(シゲヒデ)　廿五代。薩摩守。(退隱後)榮翁。從三位。本表ノ外重豪子女多シ、各藩主ノ養嗣トナリ、又之ニ嫁ス。

- 寔子　篤姬、後茂姬、(落飾後)廣大院。贈從一位。徳川家齊(十一代將軍)妻。
- 齊宣(ナリノブ)　廿六代。薩摩守。正四位上。
  - 齊溥(ナリヒロ)　(維新後)長溥。筑前藩主黑田氏養嗣。松平美濃守。
  - 信順(ノブユキ)　盛岡藩南部分家八戶藩主南部氏養嗣。遠江守。
  - 齊興(ナリオキ)　廿七代。大隅守。從三位。本表ノ外子女數人アリ。
    - 齊彬(ナリアキラ)　廿八代。豐後守。修理大夫。薩摩守。號麟洲。法諡順聖院。贈中納言、正一位。安政五年七月歿、年四十九。母彌(イヨ)子因幡藩主池田治道女。妻恒子(英子)、一橋民部卿齊敦女。男女數人アリ、男子皆夭ス。
    - 久光　周防。和泉。三郎。大隅守。文化十四年生。母「ユラ」(齊興妾)。
    - 女子　土佐藩主山內豐熙(トヨヒロ)(豐信(トヨシゲ)(容堂)養祖父)妻。
    - 養女　右大臣近衛忠煕妻。

アリ、其他一二ノ異說アレドモ今之ヲ略ス。

—養女 敬子。篤姬、(落飾後)天璋院。 實ハ齊彬叔父島津忠剛(安藝又山城)女、近衞忠熙養女。 德川家定(十三代將軍)妻(安政三年十一月嫁)。
—茂久 廿九代。(維新後)忠義。 修理大夫。 實ハ久光男。

島津家內訌。

◎齊彬ノ大叔父。

*〔齊彬尙ホ嗣子タリシ時〕以下〔島津家文書〕(附錄第一癸號)。〔齊彬記〕二〇一二頁。〔先賢

齊彬尙ホ嗣子タリシ時、島津家ニ內訌起リ、正弘殊ニ齊彬ノ爲ニ力ヲ致シタリ。當時藩士中齊彬ヲ廢セントスル者アリ、嘉永二三年ノ交、齊彬ノ其父ニ對スル陰謀ニ與ミシタリト云フヲ以テ、藩命ニ依リ切腹或ハ禁錮ヲ命セラレタル者數十人ニ及ベリ。是ニ於テ藩士數人筑前ニ赴キ、藩主黑田齊溥ニ就キテ齊彬ノ寃ヲ訴ヘ、重臣ノ非曲ヲ陳ス、薩藩聽捕卒ヲ遣シテ其引渡ヲ强求ス、黑田之ヲ肯ンゼス、阿部閣老ノ指揮ヲ得テ然ル後ニ應答セント答フ、因テ齊彬ノ爲ニ事情ヲ幕府ニ申告ス。齊彬ノ親友宇和島藩主伊達宗城亦爲ニ斡旋スル所アリ、事ヲ正弘ニ告ゲテ齊彬ノ救護ヲ請ヘリ。*

嘉永三年六月、伊達ヨリ薩藩ニ關スル陳情書ヲ正弘ニ呈シ、十二日、其官邸ヲ訪ヒ、尙ホ陳述

遺實」五・六頁、同附錄四頁。「諸家」市來四郎說話。

大隅守齊興。

※附錄第一癸二號。

スル所アリ、正弘之ヲ聞キ、毅然トシテ曰ク『此事ハ大隅ノ失錯ヨリ起リタルコトナレバ、官府ヨリ審糺セラレ、嚴命ヲ受クルモ、辯疏ノ道ナカラン、然ルニ今之ヲ下官ニ內議セラル、モ無用ナリト思惟ス』ト。伊達曰ク、『貴諭ヲ聞キ、恐懼ニ堪ヘズ、官府ノ見聞セラル、所ニ由リ嚴命ヲ受クルモ實ニ辯疏ノ道ナシ、是レ黑田等モ憂苦シ、事公ニナラザランコトヲ懇願スル所以ナリ』ト。正弘曰ク『目下直ニ嚴命ヲ下スニ至ラント言フニアラズ、唯宜ク速ニ大隅ヲ退隱セシメ、一藩ノ靜謐ヲ圖ルベシ』ト。伊達唯々トシテ退ク。*

此年八月、齊彬ヨリ伊達ニ贈ルノ書ニ曰ク『琉球ノ事ニ關シ幕府ヘノ屆書ハ事實ト相違アリ、之ヲ阿部閣老ニ密告セバ、父(齊興)ノ過誤ヲ顯シ、虛言ノ罪ヲ公ニスルコト、ナリ、不孝ノ名遁レ難ク、甚ダ困却ス、小子特ニ大將軍ノ厚恩ヲ蒙ル身分ナレバ、忠志ヲ專トシ密告

スベキヤ、願クハ事情ヲ憐察セラレテ教示アランコトヲ』ト。伊達ハ此書ヲ得テ直ニ之ヲ正弘ニ送リテ會談ヲ求メ、尚ホ事情ヲ述ベシニ、正弘曰ク『大隅等ノ處置驚クニ堪ヘタリ、事體容易ナラズ、速ニ修理ヨリ事實ヲ具狀スベキナリ、事是ニ至リテハ大隅ヲシテ退隱セシムルノ外ナカラン』ト。* 其後島津家ノ内訌依然トシテ治ラザルヲ以テ、幕府ハ之ヲ不問ニ附スルコトヲ得ズ、齊興ヲシテ退隱セシメ、齊彬ヲシテ家ヲ繼ガシメ以テ一藩ノ靜謐ヲ圖ラント欲シ、命ヲ傳ヘテ齊興ヲ召シ、大將軍手ツカラ茶壺ヲ賜フ。幕府ノ故例茶器ヲ藩主ニ賜フハ其退隱ヲ諷示スルナリ、然レドモ齊興ハ左右ノ言ヲ聽キテ頑トシテ退隱セズ、是ニ於テ更ニ十德*ヲ賜ハラントスルノ議アリ、是レ舊例ニナキ所ナリ、齊興乃チ始メテ退隱ス（嘉永四年二月）。*是ニ於テ島津一家無事ナルヲ得タリ、薩藩深ク正弘ヲ德トスト云フ。*

修理大夫齊彬。

＊『前項嘉永三年』以下〔齊彬記〕三三—七頁。

◎〔十五代史〕卷十九、七三頁嘉永三年十二月三日ノ條ニ此事見ユ。

＊十德ハ羽織ノ如キモノニシテ、儒者醫師及ビ退隱者等ノ着用スル衣ナリ。

＊〔先賢遺寶〕附錄四—五頁。

〃〔諸家〕市來四郎說話。

［松平慶永ノ島津齊彬評］

＊二三頁、同附錄四一五頁。八戸藩主南部遠江守信順、齊彬ノ大叔父。

由來薩藩ハ內情ハ最モ外間ヨリシテ窺ヒ難シト稱ス、東韃探檢ヲ以テ名アル間宮林藏曾テ變裝シテ鹿兒島ニ在ルコト數年ニ及ベリ、然レドモ今其手製地圖ヲ見ルニ頗ル粗漏ヲ極ム、地理猶且然リ、此藩家ノ內情ノ容易ニ窺知スベカラズ、內訌ノ當時、幕府ト雖モ最初ハ輙ク手ヲ下スニ由ナカリシコト亦察スルニ難カラザルナリ。

（逸事史補）　島津大混亂アリシコトヲ知ル者ハ余ト伊達宗城二人ナリ、天下ノ亂ノ根元モコレニ兆セリト思ハル、齊彬ハ性質温恭忠順賢明大度ニシテ斷アリ、水府老公土佐容堂ノ如キトハ同日ニ論シ難シ、尊王ハ勿論、幕府ニモ恭順ヲ盡シタレトモ、一家ノ事ニ困却シ居レリ、其弟久光ノ實母ハ「ユラ」ト申シテ高輪船宿ノ娘ナリト云フ、「ユラ」常ニ齊彬ヲ殺害シ久光ヲ以テ家督トセントセリ、故ニ國亂止マズ。（摘要）

（先賢遺寶）＊　此時ニ當リ百方救護ノ道ヲ講シ公（齊彬）ノ爲メ安泰ノ地ヲ造ラレシハ、偏ニ黑田長溥、伊達宗城、南部信順諸侯ノ懇情ニ基ケリ、特ニ公ノ地位ヲ保全シ、幾ナク家ヲ襲キ、內外國家ノ樞務ヲ參畫シ、永ク其聲譽ヲ傳ヘ、其功業ヲ今日ニ傳フルニ至ラシメタルハ、當時ノ老中阿部正弘侯ノ援護ニアリ。　齊興ニ十德下賜ノ議

※(昨夢ノ上二九四頁。

アルニ至リシハ、黒田侯及ビ阿部侯等斡旋盡力ノ結果ナリト傳フ。(摘要)

(諸家說話) 市來四郎曰ク、島津家ニテ最モ勢州ヲ煩シタルハ齊彬相續ノ事ニ關シテ黨爭起リシ時ナリ、此時黒田、南部、越前ノ諸家ヨリ勢州ニ謀リ、將軍家ヨリ藩主齊興ニ退隱ヲ促シ、齊彬ニ家督ヲ命ゼラレ、因テ全藩無事安全ナルヲ得タリ、是レ實ニ勢州ノ英斷與リテ力アリトス。

齊彬ハ衷心ヨリシテ幕府ヲ崇敬シ、安政元年十一月、大將軍ヨリ親シク佩刀ヲ授ケラレタル時ノ如キ、直ニ書※ヲ松平慶永ニ贈リ『廿五日ニ登城仕候處、御座ノ間ニ於テ御大小拜領仰付ケラレ、重疊有リ難ク存シ奉リ候、御吹聽旁申上ケ奉リ候』ト言ヘリ。**正**弘亦深ク齊彬ニ信頼シ、共ニ國事ヲ談シ、或ハ事アル時、其ヲシテ他ノ藩主等ヲ說カシメタルコトアリ。此年八月十三日、正弘其官邸ニ齊彬ヲ招キ、米露英三國ノ條約ヲ頒布シ、同席大廣間ノ諸侯ニ之ヲ傳ヘシメタル時、特ニ懇談アリ、『治ニ居テ亂ヲ忘レザルハ政治上第一ノ事ナレバ、

＊、此年八月十三日』以下齊彬ヨリ米澤藩主上杉齊憲ヘノ書（「齊彬記」一一六―七頁）。

幕府政婚。

◎本壽院ト稱ス、跡部茂左衛門女。

警備ヲ怠ルベカラズ、若シ今後等閑ニ附スル者アラバ政府ヨリ命ヲ下スコトアルベシ』トノ旨趣ヲモ述ベ、齊彬ヲシテ同席ノ人々ニ諭示＊セシメタルガ如キ其一例ナリ。

嘉永六年米艦渡來以後、國家多事ナルヲ以テ、幕府ハ雄藩ノ力ニ賴リテ重キヲ爲サント欲シ、薩藩主亦幕府ノ勢力ヲ假リテ便宜ヲ得ント欲ス、是ニ於テ幕府ハ島津氏ノ女ヲ納レテ大將軍家定ニ配セントノ議アリ、正弘密ニ之ヲ齊彬ニ諭ス（同年九月ノ事ナリト云フ）、齊彬ノ妻ハ一橋ノ出ナルヲ以テ、屢〻大奥ニ出入シ、勸誘スル所アリ、家定ノ生母美津◎亦之ヲ言フ。初正弘ハ家定ノ妾トナスノ内意ヲ洩シ、ニ（其再婚タルヲ以テナリ）、齊彬之ヲ辭シタルヲ以テ、安政三年ニ至リ遂ニ正妻トナスコトニ決シ、齊彬ノ養女篤子（又敬子）ヲ以テ更ニ近衞氏ノ養女トシテ婚儀ヲ行フ、此事ニ賛成シタルハ松平慶永、黑田

＊『幕府ハ島津氏ノ女』以下〔島津文書〕。
＊〔西郷〕第一巻六〇一一頁。
◎原文書翰體、今其要ヲ摘ミ、之ヲ時文ニ改ム。
＊『昨夢』上四〇三頁

齊溥、伊達宗城等ニシテ、＊內ニ在リテ齊彬ノ旨ヲ承ケ、專ラ斡旋シタルハ西鄕吉之助(隆盛)ナリ＊。

島津家文書ニ云フ『幕府ニテハ齊彬ノ養女ヲ以テ大將軍ノ側室トナサントシタルニ齊彬喜ビズ、事殆ド破レントシタルガ、正弘ノ斡旋ニ由リ、其女ヲ更ニ近衞家ノ養女トシテ大將軍ノ夫人トナスコトトシ、齊彬ノ同意ヲ得タリ。』

〔諸家說話〕　市來四郎曰ク、天璋院ハ實ハ齊彬ノ叔父島津安藝ノ女ナリ、既ニ一門中ヘ婚嫁ノ內約アリシヲ取消シ、御臺所トナシタルナリ。天璋院ハ薩家ニテ人物善キ故、齊彬ガ兼テ越前侯等ト協議セル一橋卿養嗣ノ事ヲ將軍家ニ勸メシメン計畫ナリ、因テ天璋院入輿前、齊彬ヨリ之ニ告グルニ、當將軍家ハ病弱ノ人ナレバ、汝御臺所トナリテモ甚ダ心配ナルベク、極メテ憫然ナリト雖モ、邦家ノ爲ニトテ望マレタルガ故之ニ應ジタルナリ、能ク此心得ニテ心力ヲ盡サレヨトノ旨ヲ以テセリ。

德川齊昭ハ此『政婚』ヲ聞キテ大ニ異論ヲ唱ヘタリ。安政三年九月慶永ニ贈ルノ書中ニ曰ク＊『大將軍ハ今ニ至ルモ癇氣尙ホ止マズ、因テ侍臣ハ何事モ務メテ稟申スルコトナカラントス、然ルニ今其親旨

ニ由ラスシテ第三ノ夫人ヲ迎ヘントス、且ツ東照公ノ敵タル薩ノ臣下ノ女ヲ夫人トシテ、大將軍ノ實母其他ヲシテ之ニ低頭セシムルハ國家ノ大變ナリ、德川ノ天下モ此ノ如クナリテハ、萬一將軍職ヲ他家ニ命ゼラルヽモ最早德川家ヨリシテ異議ヲ挾ムコト能ハザルベシ、實ニ憂慮ニ堪ヘス』ト。慶永之ニ對シテ答フル所ナシ。

此政婚ニ關シテハ世ニ種々ノ評說アリ、今齊彬ニ關スル評說ト共ニ之ヲ左ニ抄錄ス。

〈逸事史補〉　齊彬ノ女ヲ將軍家ノ御臺所トナスハ阿部正弘ト齊彬トノ密談ヨリ起レリ。天璋院ハ齊彬ノ嫡子ノトキ、次ノ者ニ手ヲカケ一女ヲ生シタルナリト、又妹ヲ內實養女トシテ出セリトモ云フ、之ヲ我子トシテ御臺所トシタルハ幕府ノ威權ヲ借リテ、齊興ノ妾「ユラ」並ニ久光ヲ壓倒シ、其黨ヲ鎭定センタメ、一ニハ我一身ノ藩屛護衞トナサントスル故ナリ。慶永モ此天璋院一條ニツキ、島津ノ爲ニ十分盡力セリ。幕府ヲ慕ヒ、之ヲ保護スルコト齊彬ヲ以テ第一トス、幕府ヲ怨嗟スルコト薩摩ヲ以テ第一トスルト思ハレタリ。（摘要）

第一度鷹司氏、第二度一條氏。

*〔舊幕府〕四卷三號八頁下段。

*上三一九頁、敍言一三―四頁。

一二六頁。

〔水戸人一派ノ說。〕

*卷一、六九頁。島津三郎久光。

松平慶永說話*ニ云フ、齊彬ハ其女ヲ後宮ニ容ルヽ等ノ事ニツキテハ水老公ヲ味方ニ引入レザルヲ得ズ、依テ老公トハ表面的交ヲ結バレシモ、其裏面ニ至リテハ老公ニ服從セザルノミナラズ、齊彬ノ眼中常ニ老公ノ如キハ共ニ謀ルニ足ラザルモノト睥睨セラレテアリシハ掩フベカラザルモノアリ、但シ之ヲ他人ニ語ラザルノミナラズ、遂ニ色ニモ出サヾリシ。（摘要）

〔昨夢紀事〕* **薩**侯父子ノ間隔ヲ生スル勢アリ、齊彬侯深ク之ヲ憂ヒ、威ヲ幕府ニ借リテ士庶ヲ鎭定シ、窃ニ外戚ノ權ヲ占メテ隨意ニ政令ヲ施行セントノ遠謀ニテ、深ク福山侯ニ結ンデ、親戚ニ等シキ約ヲナシ、其事成ル。 **薩**摩守齊彬ハ御大身トイヒ、謀慮深遠英邁ニシテ、奸雄ノ才逞シキ御方ナリケレバ、列侯ヲ初メ閣老衆トテモ畏憚セズトイフコトナシ。（摘要）

〔安政紀事〕* **薩**州ノ女ヲ以テ將軍ニ嫁セントス、水戸前中納言深ク其宗家ニ利アラザランコトヲ慮リ、之ヲ止メント欲ス、然レトモ諸有司多クハ薩州ノ貨賂ヲ利シ、前中納言ノ言ヲ容レズ、蓋シ薩州ノ意因テ以テ幕府ノ政ヲ動カサンコトヲ圖ルナリ。（摘要）

〔幕末小史〕* **阿**部閣老ハ齊彬ト親シクシテ、政事的婚嫁トモ稱セラレタル十三代將軍ノ御臺所ニ其娘篤姬ノ入輿アリシヨリ、幕薩ハ兎モ角モ相和シ、爲ニ島津三郎モ

公武論ヲ主張シタリ。

（川路聖謨之生涯）＊　國家多事ノ時ニ當リ、雄藩ト幕府トノ間イト親密ナルコソ長計ナラメトノ意見ヲモテ、阿部勢州ハ家定將軍ノ政略結婚モアラバヤト希望シ、薩州篤姫ノ徳川家ニ入輿アリシナリ。（摘要）

（幕末外交談）＊　吾人ハ當時侯伯ノ裡ニ於テ薩侯ヲ推シテ惟一ノ活眼者ト稱スルナリ、而シテ西南ノ雄藩タリ、宜ナリ阿部閣老ガ夙ニコレニ結托シテ其妹ヲ納レテ温恭公ノ配トナシ、以テ徳川氏ノ外援トセンコトヲ計リシコト、阿部閣老ノ幕府ノ爲ニ計ル實ニ深且遠キモノアリ、思フテコヽニ到レバ益其智ノ餘アルヲ知ル、而シテ又ソノ斷ノ乏シキニ三歎セザル能ハザルナリ。（摘要）

（幕府衰亡論）＊　從來幕府ガ諸藩ニ對スルヤ、殊ニ外樣ノ強藩ニ對スルヤ、常ニ嚴正ノ方略ヲ執リ、畏服セシムルヲ旨トシタルナレバ、其交際ハ固ヨリ疎遠ナリ、就中薩摩ノ如キハ關ケ原ノ恨ハ薩摩ガ忘レサル所ナリト推量シテ幕府ハ最モ之ヲ外樣視シ、既ニ水野越前守ハ幕府ヲ滅スモノハ必ズ薩摩ナラント豫言セシ程ナレバ、薩摩ハ幕府ガ近ツケザル所タリシニ、阿部閣老ハ此ノ舊慣ノ疎遠ヲ打破リ、薩摩宰相ヲ引入レテ幕府ヲ補佐セシメント望ミ、薩摩宰相モ亦日本ノ爲ニ今日ノ長計ハ幕府ヲ佐クルニアリト信シ、薩摩ト阿部トノ交際ハ遂ニ親密ニナリ、其結果ハ御臺所御入輿ノ事トナリタリ、若シ薩摩宰

＊五一〇頁。

＊一〇六―七頁。

＊五九―六〇頁。同一著者ノ手ニ成レル「久光公記」（校正、明治廿一年版）二・三頁ニモ同様ノ論ヲ載ス。

＊二二葉。

＊第一卷六〇－三頁。

西郷隆盛ノ幕薩調和斡旋。

相ト阿部閣老トヲシテ其壽ヲ永カラシメバ、水戸ヲモ乖離セシメズ、安政五年ノ變モ無カリシナランニ、薩阿兩侯倶ニ世ヲ早クセラレタルハ幕府衰亡ノ運ナリト謂フベキ歟。（摘要）

（追讃一話）＊　阿部正弘侯一意外交政略ニ注目シ、要路人材ヲ登用シ、殊ニ薩侯齊彬ト篤ク交リ、其他ノ諸侯ヲシテ不平ナカラシメ、公武ノ合體ヲ破ラザルカ如キ、薩侯冥々ノ力亦大ナリト謂フベシ。（摘要）

（諸家說話）　勝安芳曰ク、勢州ハ親藩ニテ名望高キ水戸老侯ト親交アリ、外藩ニテハ薩侯ト意氣相投ジ、其他尾、越、肥、土等皆朝幕ヲ崇輔シテ國事ニ盡力ス、若シ勢州ニ假スニ數年ノ壽ヲ以セバ、老公モ漸次持重ノ方針ニ轉シ、薩長モ幕ノ抗敵トナラズ、志士慘戮ノ禍ヲ見ズ、國備モ年々整フニ至リシナラン。

（西鄕隆盛傳）＊　阿部閣老ハ其識見時流ノ上ニアリ、夙ニ齊彬ノ偉人タルヲ察シ、深ク之ニ結託シテ以テ幕政ヲ整理セント欲シタリ、齊彬モ亦阿部ニ計リテ齊彬ノ女ヲ以テ將軍ノ御臺所ト爲シ、以テ幕府ノ薩摩ニ對スル嫌疑ヲ除カンコトヲ計畫シ、隆盛ニ命ジテ斡旋盡力セシメタリ、隆盛專ラ任ニ當リ、器具裝飾ノ如キ凡テ自ラ調整シタリ。斯ノ如ク薩藩ハ公武ノ一和ヲ謀リ、幕薩ノ調和ヲ保ツノ道ヲ得テ、幕府ノ薩摩ニ對スル猜忌ノ念ハ全ク排除スルヲ得タリ。　安政二年二月、齊彬歸國ノ後、隆盛江戸ニ留リ

テ專ラ國事ニ奔走シ、大ニ盡ス所アリシガ、偶此壯圖雄策ヲ一頓挫セシムルノ事件ヲ顯出セリ、即チ阿部正弘ノ卒セシ事是ナリ、阿部ノ卒スルニ及ビ、齊彬ハ幕閣トノ親交ヲ失フニ至レリ、若シ阿部ニシテ長ク生存シ、齊彬及隆盛等ヲシテ其目的ヲ達セシメナバ、我國ノ開國、國權ノ伸張ハ維新前十年ノ日ニアリタルモ知ルベカラズ、然ルニ天其年ヲ假サズ、亦國家ノ大不幸ト云フベキナリ。（摘要）

當時大藩藩主中最モ聰明ヲ以テ稱セラレ、最モ諸侯ノ間ニ有力ナリシ島津齊彬ハ夙ニ開國ノ已ムベカラサルヲ察シ、正弘ト結託シ、攘夷論ヲ鎭靜セントテ共ニ苦心セリ。齊彬一日大久保忠寛*ヲ招キ、告ゲテ曰ク『今日ノ世、攘夷ナド到底行ハルベキニアラズ、今九州ニ於テ戰爭ヲ爲シ得ル藩ハ筑後ノ柳河藩*ノミナルベシ、然レトモ貧窮ナレバ軍費ヲ他ニ仰カザルベカラズ、今ヤ攘夷ノ到底爲スベカラサル事ハ勢州ノ能ク知ル所ナリ、余ハ一人ニテ大廣間諸侯說諭ノ任ニ當ルベケレバ、勢州ハ今一層奮勵シテ三家親藩ヲ諭サンコトヲ足下ヨリ勢

* 大久保右近將監、後一翁。

* 立花飛騨守鑑寛、十一萬石。

＊『齊彬大久保忠寛ヲ招キ』以下〔諸家〕大久保一翁説話。

州ニ勸言スベシ』ト。＊

正弘齊彬相約シテ共ニ國事ニ盡力ス、然ルニ未ダ幾ハクナラズ二人僅ニ一年ヲ隔テヽ前後ニ逝ク、殊ニ惜ムベキナリ。

第三十一章、雄藩ニ對スル政策。其三。

正弘ト松平慶永。　慶永ノ激論。　正弘ト伊達宗城。　宗城ノ攘夷論。

島津齊彬ト同ク正弘ガ最モ親ク互ニ往來シタルハ越前藩主松平慶永ニシテ、是レ一ハ其重縁ノ間ナリシヲ以テノ故ナリ。越前ハ三家ニ次グル親藩ニシテ家格甚ダ高シ、慶永ノ曾祖父以來ノ略系及ビ正弘トノ嫁娶ノ關係ハ左ノ如シ。

松平治好(ハルヨシ)　越前守。　八代將軍吉宗孫。
- 齊承(ナリツグ)　越前守。　妻淺子、(落飾後)松榮院、德川家齊(十一代將軍)第十一女。
  - 女子　謹子(キン)。　阿部正弘先妻。
  - 齊善　越前守。　實ハ德川家齊第廿一男。
  - 慶永(ヨシナガ)　越前守。(退隱後)春嶽。　實ハ田安中納言齊匡男。文政十一年生。母レイ木村政辰(閑院宮家司)女。天保五年相續、安政五年退隱。明治廿三年歿。

越前藩三十二萬石、居城福井。淺子俗ニ神田橋御住居ト稱ス。第一章家系參看。

┃
├養女　妻熊本藩主細川越中守齊護(ナリモリ)女。
│　　　諡子(シヅ)。實ハ末家糸魚川藩主松平日向守直春女。阿部正弘後妻。
└茂昭(モチアキ)　越前守。　實ハ松平直春嫡男。　安政五年本家相續。

慶永ハ正弘ヨリ少キコト九歳、嘉永六年米艦渡來ノ時ハ僅ニ二十六歳ナリ、人トナリ單純戇直ニシテ言論ヲ好ミ、政事ニ關シテ屢〻正弘ニ言フ所アリ、又屢〻意見書ヲ呈ス、深ク攘夷ノ行ハザルベカラザルヲ信シ、熱心之ヲ主張ス◎、正弘其志ヲ賞シテ其論ヲ採ラズ。安政二年八月二十八日、慶永豫メ約シテ正弘ヲ訪ヒ、外人ノ處置及ビ政務改新ノ計畫ヲ聽キテ歸ル。時ニ德川齊昭書ヲ慶永ニ贈リテ曰ク、『君近日阿閣ヲ訪ヒ、外事ヲ問ヒタリト聞ク、未タ彼ノ答如何ヲ知ラズト雖モ、其答フル所ハ即チ當時ノ眞面目ナラン』ト。*

〔昨夢紀事〕※　**此**頃閣老ノ全權福山侯阿部正弘ハ幸ニ御近親◎ニモ坐(オハ)セシ故、幕

◎第十二章ニ見ユ。

*『安政二年』以下〔昨夢〕二三二―七頁。

※叙言五頁。

◎正弘松平慶永ノ女ヲ娶ル、故ニ斯ク云フ。

府ノ御事ハ何ニ付テモ御心隈ナク仰合サレシカバ、侯モ公ノ御誠忠ノ程ハ殆御感心アリテ、頼モシキ人ニオボシタマフ御事ナリキ。

慶永朝廷ヲ崇敬スルノ念深ク、此頃正弘ニ内議シ、自ラ京都警衛ノ任ニ當ラントス、然ルニ同地警衛ハ既ニ彦根藩等數家ニ於テ其任ニ當レルヲ以テ、其請フ所許サレズ*。

正弘既ニ粗〻開國ノ已ムベカザルヲ認メタル後、密書ヲ以テ尚ホ戰備ヲ整フベキコヲ慶永等ニ告ゲタルコトアリ(安政元年)、是レ正弘徳川齊昭ト議シテ人心鼓舞ノ爲ニシタルモノニシテ、外間多ク之ヲ知ラザリシト云フ。　安政二年十月慶永ヨリ幕府ニ建議ヲ呈セント欲シ、先ツ之ヲ齊昭ニ示セリ、其附書中ニ曰ク、『往日阿部閣老ノ密話ニモ當今ノ時態必戰ヲ期スルノ外ナシトアリ、又尊翰中ニモ必戰ノ志望ヲ抱懷セラルヽ旨ヲ拜承ス、方今天下ノ具瞻萬人ノ依頼ス

公ハ慶永。

＊（昨夢）二一二—七頁。

＊＊『密書ヲ以テ』以下（昨夢）上一四七—八頁。

ル所ハ、第一尊公ニシテ、次ニ阿部閣老ナリ、而シテ共ニ必戰ノ志望ヲ抱懷セラル、天下人心必ズ之ニ歸向セン、然ルニ今ヤ都下其他各地ニ於テ因循偸安ノ風未ダ已マズ、弊藩モ亦然リ、是レ或ハ必戰ノ誠意ナキガ致ス所ナランカ、宜シク必戰ノ決心ノミニ止マラズシテ必戰ノ實ヲ示スベキナリ』ト。齊昭之ニ答ヘ、建議ノ採否ニ拘ハラズ、之ヲ正弘ニ送ランコトヲ勸ム。慶永因テ再ビ書ヲ齊昭ニ贈リテ先ヅ其意見ヲ求メタレトモ、齊昭之ニ應セズ、『余モ亦時々建白シタレトモ皆用ヰラレズ、貴君ノ建議ニ對シテ拙評ヲ試ムルモ何ノ用ヲ爲サヾルベシ』ト言ヘリ。慶永大ニ失望シ、直ニ建議ヲ正弘ニ致シ、ニ、正弘之ニ答書ヲ與ヘ、堀田正睦今閣老首席タレバ別ニ之ヲ同人ニ送ルベシト言ヘリ。＊

尋テ正弘書ヲ島津齊彬ニ贈リテ曰ク『越前守ノ說或ハ理ナキニ

＊「安政二年十月」以下〔昨夢〕上二四二―四頁、二五六―六一頁、二七五頁。〔島津家文書〕〔附錄第三、丁二號〕・附錄第三、丁一號〕

辰―正弘。
*「齊彬此密書」以下「昨夢」上二八九―九〇頁、二九二―三頁。

アラズト雖モ、中ニハ理論ニ馳セ、俗ニ所謂出來ナイ相談ナルモノモ多シ、是レ實ハ家臣中説ヲ進ムル者アルガ故ナラン、貴下モ知ラル、如ク、越前守ハ單純ノ人物ナレバ、熱心切論ニ過ギテ失錯ヲ起スノ虞アリ、請フ彼ヲ教諭アランヿヲ、總テ學者ノ理論ノミニテハ何ノ効ナシ、必戰論亦可ナリト雖モ、廣ク世界ノ形勢ヲ顧ルトキハ現ニ財況其他ニ於テ人心ヲ安ンゼシメタル後ニアラズンバ何事モ成スヿ能ハズ是レ小子等ガ苦心スル所ナリ』ト。　**齊彬此密書**ヲ携ヘテ慶永ヲ訪ヒ、之ヲ示シテ說ク所アリ。其後慶永又建議ノ文ヲ齊彬ニ致シテ之ニ詢リシニ、齊彬之ニ評ヲ加ヘ、復書シテ曰ク、『公ハ官府ニ對シ少シク切言ニ過ギザルカ、辰ノ苦慮スル所ハ此處ニアラン、希クハ再考アランコトヲ』ト。*　**是**ニ於テ慶永謂ヘラク、余ハ阿部ト近親ノ關係アリ、且ツ年來親懇ナルヲ以テ、何事モ藏スヿナク談ズルニ反シ、阿

福山ノ正弘

部ヨリハ一片ノ返書ヲ與ヘタルノミニテ、却テ局外ナル薩州ヲ以テ諭示スル所アリ、蓋シ薩州ハ窃ニ交易ノ說ヲ可トシテ福山ニ左袒セルナリ、然ラバ則チ直ニ薩邸ニ至リテ面ノアタリ之ヲ質サント、十一月、先ヅ書ヲ齊彬ニ贈リテ面話ヲ要スル趣旨ヲ述ベ、數日ノ後薩邸ニ赴キ、齊彬ニ面シ、語次問フテ曰ク『當今廟堂ノ狀態如何、阿閣ノ心事果シテ如何』ト。齊彬答ヘテ曰ク『余ハ頃日府城ニ於テ阿閣ニ會セシニ、阿閣ハ理論ニ類スル事ヲ厭フノ狀アリ、顧フニ言論ヲ以テ迫ラル丶ヲ好マザルコトト察セラル、阿閣ノ說ニ國家ヲ一身ニ譬フレバ、骨ト肉トノ差アルガ如ク、肉ハ深疵ニテモ全癒スルコトアレトモ、骨ヲ碎キテハ回復ノ道ナシ、越前守ノ建議ニ言ヘル大名ノ參勤年限ノ如キハ骨ノ大ナルモノニ當レバ、改革スベキ事ニアラズ』ト。余直ニ問フテ曰ク『外國條約ハ骨ニハアラズヤ』ト。正弘曰ク『否ナ、是レ肉ニ當レリ、

東照公＝德川家康。

德川初代ノ外交。

三代將軍＝德川家光。

*〔昨夢〕上三〇六—七頁、三一二—三頁。〔感舊錄〕七二—三頁。

*〔昨夢〕上三二六九頁。

*〔昨夢〕上三三一頁。

骨ニアラズ、外國通交ノ事ハ東照公時代ニハ頗ル頻繁ニシテ、武德編年集成ニモ『南蠻船八十餘長崎ニ來ル、神君御喜悅斜ナラズ』トアルガ如キ是ナリ、三代將軍ニ至リテ通交禁絶トナリタルハ葡萄牙人ノ妖敎ヲ日本ニ傳ヘタルニ由ルモノナレバ、通信通商ハ敢テ祖法ニ背クコトナカラン』ト。余(齊彬)ハ是ニ至リテ行ハレ難キ事ヲ當局者ニ强ヰルモ何ノ益ナキコトナレバ、退キテ藩内ノ防備ヲ整ヘント欲ス』ト*。

其後慶永復タ書ヲ德川齊昭ニ贈リテ近日ノ事ヲ告ゲ、其意見ヲ叩キシニ、齊昭ハ之ニ復書シテ『案山子ノ拙老申ス事サヘ用ヰラレザル位故、案山子マデニモナキ人々ノ建白ハ尙々用ヰラルベキニアラズ』ト言ヘリ*。既ニシテ(安政三年正月)慶永府城ニ於テ齊彬ニ會ス、齊彬密ニ告ケテ曰ク『當今松平河內阿閤ニ附隨シテ其言多ク用ヰラル、河內斯クテアランニハ何事モ英斷ヲ望ミ難カラン』ト*。

安政四年三月、齊彬ヨリ慶永ヘノ書＊中ニモ『何分勘定奉行ノ勢甚シク、中々外ヨリノ申立ハ行ハレザル樣子ニ候、河内伊勢守ト內々申シ候ヨシ』トアリ、是レ亦勘定奉行首席タル松平河內守近直ヲ嘲リテ云ヘルモノナリ。松平近直ガ正弘ニ信任セラレタルハ事實ナレドモ、人ト爲リ摯直＊ニシテ權勢ヲ弄スルガ如キ人ニアラズト云ヘバ、其永ク會計ノ職ニアリテ出納ヲ嚴ニシタルヨリ或ハ此ノ如キ世評ヲ得タルモノナラン歟。

＊　＊　＊　＊　＊

島津齊彬及ビ松平慶永ト親交アリテ、正弘トモ時ニ往來シタルハ宇和島藩主伊達宗城(ムネナリ)ナリ、宗城ハ幕府ノ士山口直勝ノ次男ニシテ、弘化元年伊達氏ヲ繼グ、時ニ年二十七。齊彬、慶永等ト共ニ國事ヲ論ジ、其才名漸ク知ラル。其先妻ハ德川齊昭ノ◎女ナリト雖モ、齊昭トハ其間甚ダ親密ナラザリシガ如シ。

〔昨夢紀事〕＊　公ハ宇和島侯（伊達遠江守宗城）トモ蚤クヨリ御念比ニテ、薩州侯ト同シ樣ニ何事モ申カハサセ給フ、此侯ハ宇和島老侯＊ノ目鑑ニテ小身ヨリ出テ御養子

＊〔舊幕府〕四卷五號八頁下段。

＊〔舊幕府〕二號五〇頁上段。

宇和島藩、伊豫十萬石。

伊達宗城初山口龜太郎、藍山ト號ス。山口相摸守祿二千石、嫡男丹波守直光ハ嘉永安政年間伊勢山田奉行タリ。

◎第廿八章水戸家系參看。

＊敍言一四頁。

公＝慶永。

＊伊達伊豫守宗

紀、春山ト號ス。

福閣＝正弘。

辰閣＝正弘。
＊『安政元年』以下［昨夢］上一七四頁。一八二－三頁。
＊［昨夢］下二八三頁。

トナリ給ヘル故、能々下情ニモ通ジ、文學ノ筋モ心得給ヒ、特ニ辯才アル御方ニテ、忠良英敏、幕府ノ御爲ヲ思召入リタルコトハ薩州侯ト等シク、御年頃モ公ニ十足ラズノ御年増ナレバ、御兄弟トモイハン樣ニ別テ御入魂ナリキ。

伊達ハ初攘夷ヲ主張シ、正弘ノ反對ニ立テリ。安政元年七月、江戸ヨリシテ在福井慶永ニ贈レル書中ニ幕府ノ處置總テ緩漫ナルヲ痛論シ、且ツ曰ク『尾紀二家ハ政事ニ參與セズ、水戸ハ有名無實ノミ、政務ハ福閣以下ニ決シテ、大將軍ハ垂拱スルニ過ギズ、生等切齒憤悶ニ堪ヘズ。頃日水老公ニ謁シタルニ、老公亦通商不可ヲ唱ヘ、生ト共ニ流涕ス、時事慨歎ノ至ナリ』ト。又八月ノ書ニ曰ク『魯夷墨奴前後ニ渡來、英佛亦將ニ來ラントス、實ニ憂憤痛悶ニ堪ヘズ、此際辰閣出仕稍〻意ヲ安ンズ』ト。＊ **當時**伊達ガ熱心ナル攘夷家タリシコトハ疑ナシ、其攘夷論ヲ放棄シタルハ正弘歿後尚ホ數年ノ後ニアリテ嚮ニ頑論ヲ唱ヘタルヲ大ニ悔ヰタリ、＊ 蓋シ多クノ人ハ時勢ニ反スルヲ得ザレバナ

リ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

幕府ノ衰滅ハ固ヨリ氣運ノ然ラシムル所ニシテ、其實ハ自ラ倒レタルニ過ギズト雖モ、然レドモ亦雄藩士人ノ奮起之ガ動機タリシコト無シト謂フベカラズ。而シテ其倒滅ヲ促シタルハ實ニ階級鬪爭(門閥ト浪士トノ鬪爭)ニ外ナラザルナリ。嘉永安政ノ際ハ幕府ノ權力既ニ已ニ衰ヘタレ圧、仍ホ全國諸藩悉ク幕府ノ節度ヲ受ケザルハナク、薩、長、土三藩ノ如キ未タ嘗テ幕府ニ抗抵ヲ試ミザルノミナラズ、唯々トシテ之ニ服從シ、敢テ其命ニ違フコトナシ、是レ其積威即チ二百數十年來ノ餘勢ニ由ルト謂フト雖モ、抑モ亦幾分カ爲政者ノ手腕ト德望トニ由ラズンバアラザルナリ。

第三十二章　人材登用

筒井政憲。松平近直。川路聖謨（トシアキラ）。岩瀬忠震（タヾナリ）。
江川英龍（ヒデタツ）。高島四郎太夫。勝麟太郎。等。

弘化、嘉永、安政年間ハ幕府殊ニ人材ニ富メリ、是レ概ネ正弘ガ登用シタル者ナリ。正弘ガ閣老トシテノ功績中最モ著大ナルモノハ、一ハ多ク人材ヲ登用シタルニ在リ、而カモ其登用シタル人物ハ大抵開國家ナラザルハナシ。正弘ガ推薦シテ任用シ及ビ信任シタル者ノ中重要人物ハ筒井政憲、松平近直、川路聖謨、岩瀬忠震、永井尚志、堀利熙、江川英龍、水野忠德、大久保忠寛、勝麟太郎等ナリ。今此等ノ人人ノ事歴ヲ詳叙スルハ固ヨリ本書ノ主旨ニアラザレバ、中ニ就キテ唯其正弘トノ關係ニ於テ世ニ傳フベキモノヲ茲ニ略記スルヲ以テ足

*三三葉。

⊗甚左衛門長鋭ノ誤ナラン。

*一三四—五頁。

⊕川路ノ實弟。

レリトセザルベカラズ。

（追讃一話）* 幕吏ノ最モ有名有力ナル者ヲ登庸シタルハ亦以テ正弘ノ人ト爲リヲトスルニ足ル、其登用セラレタルハ遠藤但馬守胤統、川路左衛門尉聖謨、岩瀬修理忠震、平岡丹波守道弘、水野筑後守忠德、大久保右近將監忠寛、筒井肥前守政憲、戸田伊豆守氏榮、岡部駿河守長常、遠山左衛門尉景元、戸川中務少輔安鎭、鵜殿十郎左衛門長德⊗、跡部甲斐守良弼、永井玄蕃頭尚志、江川太郎左衛門英龍、土岐丹波守朝旨、堀織部正利熙、松平河内守近直、竹内下野守保德ナリ、是等ノ諸員皆要樞ノ地ニ在リ、協力同心、國事多端ノ際ニ處シ、應酬宜キヲ得タリ、後此諸員ヨリ若干名ヲ擇ミ、附スルニ海防掛ノ名ヲ以テシ、專ラ外交事務ヲ掌ラシム。（摘要）

（幕末三俊）* 阿部ハ水野忠邦ノ後ヲ繼ギ、能ク水野ノ任用シタル人物ヲ容レ、之ヲシテ其才ヲ盡サシメ、更ニ學識アリ才幹アル人物ヲ識拔シテ外交國防其他内外ノ事務ニ與カラシメ、以テ一方ニハ門閥ノ弊ヲ矯メ、一方ニハ改革ノ實ヲ擧ゲントセリ。其登用セラレタルモノハ遠藤等十數人ノ外、下曾根金三郎、勝安房守義邦、井上信濃守清直⊕、岩瀬肥後守忠震ナリ。雅量弘致、賢ヲ愛シ、士ニ下ルニ至テハ實ニ河部ノ美德ナリトシテ之ヲ稱セザルベカラズ。

筒井政憲ハ初町奉行タルコト多年、公正明決ヲ以テ稱セラル、近藤重藏ノ獄ヲ斷シテ名アリ、水野忠邦ノ閣老タリシ時西丸留守居ノ職ニアリシガ、事ニ坐シテ罷免セラル。正弘閣老トナルニ及ビテ復任シ、尋テ大目付ヲ命ゼラレ、海防掛トナリ、夙ニ外國事務ニ參與ス。* 嘉永六年及ビ安政元年露國使節ノ來リテ通交ヲ請ヒシトキ、川路聖謨ト共ニ應接ノ任ニ當リ、功勞アリ。人ト爲リ温雅寬宏、漢籍ニ通ズ、曾テ大將軍ニ進講シ、又島津齊彬ノ師タリ、其人當時ニ推重セラル。*

高橋多一郎手記*ニ云フ『筒井紀伊守ハ聖堂掛モ仰付ラレ居リ、阿閣トハ殆ド日々對話アリ、阿モ顧問ニ備ヘ、事多ク此人ノ方寸ヨリ出ヅルカ如シ。　文政八年、異船打拂ノ令ヲ發セラレタルハ大久保加賀守ノ發議ニ由レドモ、實ハ筒井ノ主張スル所ナリト石川和介ノ話ナリ。』

右高橋多一郎手記ニ日々正弘ト對話シ、事多ク筒井ノ方寸ヨリ出ヅトアルハ、稍〻實ニ過ギタリ、外事等ニ關シテ時々單ニ諮問ヲ受ケタルコトアルノミ。

*〔舊幕府〕二號四五頁上段。〔想原〕下附錄一二頁。

*第十四章ニ見ユ。

*〔香亭手稿〕但シ島津齊彬ノ師タリト云フ一事ハ〔齊彬記〕三八頁。

*〔遠近橋〕卷三、卷八。

松平近直ハ久シク勘定奉行ノ職ニアリ。弘化以來海防ノ議漸ク起リ、砲術ノ練習、砲臺ノ築造益〻急要ナリ、近直奮フテ此事ニ任シ、江川英龍ノ門ニ入ル、砲術ノ進歩近直與リテ力アリ。性摯實ニシテ事務ニ練達ス、財政主任ノ要職ニアリテ功勞少ナカラズ*、深ク正弘ノ信任ヲ得、權勢隨テ大ナルヨリ、或ハ之ヲ目シテ『河内伊勢守』ト呼ブ者アリ。*島津齊彬曾テ松平慶永ニ語リテ『松平河内守ガ勢州ニ附隨シ居ル間ハ何事モ行ハレ難シ』ト言ヘリ*、是レ事實ニ適スルノ言ニアラズ、近直ノ人ト爲リ老實ニシテ、爾ク權威ヲ弄スルモノニ非ルナリ。

川路聖謨ハ正弘ノ任用シタル吏人中殊ニ名アリ、初水野忠邦ノ信任ヲ受ケタルヲ以テ、水野ノ退クヤ、目付職ハ之ヲ水野ノ黨ト目シ、因テ彈劾シタリシガ、正弘ハ其然ラザルヲ看破シ、悉ク彈劾ヲ却下シ、暫ク攻撃ノ鋒ヲ避ケシメン爲ニ普請奉行ヨリシテ奈良奉行ニ

*〔幕府名士小傳〕（〔舊幕府〕二號四九頁下段、五〇頁上段）。
*島津齊彬ヨリ松平慶永ヘノ書、前章ニ見ユ。
*前章ニ見ユ。

轉任セシメタリ*蓋シ川路ノ人ト爲リ磊落ニシテ學識アリ、氣節アリ、讜議侃々、動モスレバ俗輩ノ忌ム所トナリタルナリ。*

（川路聖謨之生涯）*　聖謨ハ監察局ヨリ大ナル嫌ヲ受ケシコトニテ、彼等（水野）ノ獄ニ連ルノ理ナキハ勿論ナリシカバ、當年首座ノ閣老ニシテ夙ニ賢明ノ名アリシ阿部伊勢守ハ其炯眼聖謨ノ性行ヲ洞見シ、數多ノ彈劾ヲ却下セラレタリ。（摘要）

是ヨリ先、川路ハ其自ラ註記スル所ノ宋名臣言行錄餘錄ヲ正弘ニ呈ス（文末弘化二年六月記之トアリ）、*其漢學ハ造詣深キコト當時ハ有司中稀ニ見ル所ナリ。

其後川路ハ勘定奉行トナリ、露使ト談判ノ事アリテヨリ、益〻其名聲ヲ揚ゲ、愈〻正弘ノ信任ヲ深ウシ、又徳川齊昭ノ待遇モ厚ク、且ツ藤田誠之進トモ舊交アルヲ以テ、正弘ト齊昭トノ間ニ於ケル政治上ノ交渉ハ川路多ク其任ニ當レリ。川路ヨリ齊昭ニ贈レル政治關係ノ書ノ如キ、先ツ之ヲ正弘ノ閲覽ニ供シ、時トシテハ正弘親ラ筆ヲ執

*「初水野忠邦」以下「川路」八六—七頁。
*「幕末名士」（「舊幕府」二號五〇頁上段）。
*八六頁。
*「舊幕府」二卷九號、三卷六號。

*〔川路〕三二七—三二一頁。

◎安政五年西丸留守居ニ轉ズ。

*〔川路〕六一〇—六一一頁。

※同上六六一頁、六七二頁。

リテ文字ヲ加除改訂シタルヿアリ。*

川路夙ニ洋書ヲ學バントスルノ志アリ、曾テ正弘ニ語ルニ外國人ト應接スルニ通辭ヲ用ヰルノ不便ナルヲ以テス、正弘曰ク『足下ハ精力强キ人ナリ、今ヨリ試ニ外國語ヲ學ビテハ如何』ト。川路笑ウテ答ヘテ曰ク『小子五十有餘歳ニシテ彼ノ言語ヲ學ビ之ニ熟達センコト企テ及ブベカラズト雖モ、唯彼ノ書翰ト書籍トヲ讀ミテ、彼ノ事情ヲ知ルノ便ヲ得ント欲ス、他日若シ閑ヲ得バ必ズ之ヲ試ムベシ』ト。正弘歿後、川路閑職◎ニ貶セラレタルヨリ、始メテ洋學者ニ就キテ蘭書ヲ學ビ、其初歩ヲ窺ヒ得ルニ至レリ*。

井伊直弼ガ大老トナリテ權勢ヲ專ニスルニ及ビテ川路ハ貶黜セラレシガ、文久三年ニ至リ、更ニ外國奉行ニ任用セラレタリ、然レドモ、未ダ何等ノ成績ヲ見ズ、暫時ニシテ退任セリ※。蓋シ川路ハ才能從

前ヨリ減退シタルニアラズト雖モ、之ヲ用キルノ人ナケレバナリ。

當時川路ノ手記中ニ云フ*『阿部勢州死去後、日本ノ人氣居合ヒ申サズ、京都ニテハ一向ニ西洋ノ事ヲ御承知之ナク、日本當時ノ武備ヲ御承知アラセラレ候哉如何ハ恐察致シ難ク候ヘ共、只一概ニ攘夷ノ御沙汰ヲノミ御急ギ遊バサレ、甚當惑ノ次第ニ候。』

川路ノ次ニハ最初其部下ニ屬シタル中村時萬(トキツム)ノ事ヲ附記セザルベカラズ。中村初爲彌ト稱ス、嘉永六年勘定組頭トシテ川路ニ隨行シテ長崎ニ赴キシトキ、屢、川路ニ代リテ露使ニ應接シ、大ニ其有爲ノ材タルヲ示シタリ。◎正弘之ヲ聞キ、此年陞シテ勘定吟味役トナス。後又拔擢セラレテ下田奉行トナリ、出羽守ト稱ス。*

幕府時代唯一ノ外交家ト謂フベキ岩瀨忠震モ亦正弘ノ推擧シ信任セシ所ニシテ、而カモ始テ幕府ノ定例ニ拘ラズ、父ノ官等ニ超エテ、拔擢セラレテ目付トナリタルハ當時殊ニ異數トセシ所ナリ。同時堀織部、永井岩之丞ト共ニ三人皆名アリ。*米艦渡來以後、砲臺ヲ築キ、

---

* 同上六五三頁。

◎ 第十四章ニ見ユ。

* 〔舊幕府〕二號五三頁。

* 『幕府時代』以下〔外交談〕三二七頁。〔舊幕府〕二號五六頁下段。

軍艦ヲ造リ、講武所及ビ蕃書調所ヲ設ケ、海軍傳習ヲ創ムル等、岩瀨多ク其事ニ與ル*。**人**ト爲リ明敏果決、才能超越、書畫文藝一トシテ妙所ニ至ラザルハナシ*。胸中磊々人ニ對シテ城壁ヲ設ケズ、人ノ之ニ歸嚮スル者アリ、又之ヲ疾視スル者アリ。初聖堂ニ學ブ、其學識アリテ外國ノ事情ニ通ズルハ當時第一ト稱セラル。外國ノ事起ルヤ、建議シテ寛永以來幕府ガ鎖國政策ヲ取リタルノ非ヲ論ズ。此頃洋語ヲ解シ、洋書ヲ讀ム者ハ僅ニ和蘭ノ一國語ニ限リシニ、岩瀨百方書生ニ勸誘シテ英語英書ノ講習ヲ始メシメタリ*。

安政五年ノ日英條約ハ岩瀨主トシテ之ニ與リ、最モ其苦心ノ結果ヲ見ルニ足レリ*。岩瀨ノ聰明敏才ハ之ト親接シタル英人モ亦敬服スル所ニシテ其名嘖々タリ、當時既ニ羅馬字ヲ知リ、彼ノ求ニ應ジテ羅馬字ヲ以テ扇面ニ我應接委員六名ノ氏名ヲ書シタリ*。**既**ニシテ

* 墓碑文(永井尚志撰、〔舊幕府〕八號七七頁)。
* 『米艦渡來』以下〔舊幕府〕二號五六頁下段。
* 〔匏庵〕八五—六頁。
* 〔匏庵〕八六頁。
* 『岩瀨ノ聰明敏才』以下 Oliphant, *Lord Elgin's Mission to China and Japan* 四〇六頁。岩瀨ノ事ハ *Townsend Harris* 中ニモ散見ス。

所謂儲君論ノ事ニ關シテ大老井伊直弼ノ意ニ忤フヲ以テ職ヲ奪ハル。後數年文久元年歿ス、年僅ニ四十四、識者皆惋惜セサルナシ*。

安政五年七月、岩瀨ヨリ越前藩橋本左内ニ贈レル書翰*ニ署名宛名トモ羅馬字ヲ以テ Sanai 樣、Higo ト記セリ。

（幕末外交談）* 正弘嚮ニ開國ノ大策ヲ抱クト雖モ、敢テ斷ズル能ハズ、遲疑踏躇スル所アリシハ、未ダ知ルノ盡サザルニ坐セシニハアラザルカ、其時ニ方リテ岩瀨輩ノ如キ改進一派ノ人々ソノ謀猷ヲ賛スルモノアリテ、ソノ知ヲ啓キ、其斷ヲ果サシメザリシハ豈千歲ノ遺憾ナラズヤ。（摘要）

（幕末三俊）* 岩瀨亦阿部ノ爲ニ識拔セラレタル人物ニシテ、岩瀨ハ阿部ニ對シテハ深ク之ニ服シ、終始尊敬ノ意ヲ失スルコト無カリキ。（摘要）

（匏庵遺稿）* 岩瀨ガ時ノ老中阿部ト共ニ最初ニ決シタル和親交易ハ大老モ改ムル能ハズ、其後ヲ受ケタル老中モ皆奉シテ德川ノ世ヲ畢リタリ。大老嘗テ曰フ、岩瀨輩恣ニ將軍儲副ノ議ヲ圖ル、其罪ノ惡ムベキ大逆無道ヲ以テ論ズルニ足レリ、然ルニ彼其日本國ノ平安ヲ謀ル、籌書圖ニ中リ、鞠躬盡瘁ノ勞沒スベカラザルアルヲ以テ、非常ノ寬典ヲ與ヘタルナリト。（摘要）

---

* 〔橋本〕五六六頁。
* 三八頁。
* 一三五頁、一六七頁。
* 九二―三頁。

江川英龍亦當時ニ名アリ、其家世々豆州韮山ノ代官タリ、性沈毅、精力人ニ過グ、夙ニ(天保十二年)高島四郎太夫ノ門ニ入リテ砲術ヲ修メ、尋テ反射爐ヲ韮山ヲ距ルコト十數町ノ地ニ築キ、自ラ銃砲ヲ鑄造ス。一時幕府ノ鐵砲方ヲ兼子、又品川沖砲臺ノ設計ニ參與ス*。米國艦隊來ルヤ和戰ノ議囂然タリ、正弘諸侯ノ意見ヲ徵シタルトキ⊙、江川ヲ招キ亦其意見ヲ求ム、江川答ヘテ曰ク、『目下幕府及ビ諸藩ノ兵全部ヲ擧ゲテ防戰スルモ、萬一ノ勝戰ナク、一戰シテ敗北スルハ火ヲ見ルヨリモ明ナリ、然レドモ政府若シ開戰ト決定セラル、ニ於テハ勝敗ハ固ヨリ問フヲ要セズ、太郎左衞門最先ニ進ミ、一死以テ君恩ニ報センノミ、唯憾ムラクハ十餘年前屢〻海防ノ事ヲ建議シタレドモ、一モ採用セラレズ、荏苒今日ニ至リシコトヲ』ト、言終リテ流涕ス、正弘之ヲ聞キテ默然沈思スルコト良久シカリシト云フ*。安政

*〔江川文書〕。〔陸軍〕卷三、四九頁。
⊙第十三章ニ見ユ。
*〔江川坦庵〕二七一八頁。

元年正月、米艦若シ內海ニ進入セバ之ヲ諭シテ退カシムベキノ命ヲ受ケ、(一)劍客齋藤彌九郎(二)ヲ從ヘ行カントス、然ルニ故アリテ事中止ス。其後齋藤江川ニ謂ヒテ曰ク『余ハ尊公「ペリ」ヲ諭シ、彼若シ聽カズンバ僕ハ彼ヲ刺殺セントノ決心ナリ』ト。江川莞爾トシテ曰ク『僕彼ヲ說クモ彼ノ服セザルベキハ必然ナレバ、彼ノ語氣ヲ察シテ一刀兩斷ノ處置ニ出デ、君ヲシテ先ゼザラシメン決心ナリキ』ト*。

時ニ正弘江川ヲ優遇シ、之ヲ任官（諸大夫ニ班シテ官名ヲ授クルヲ謂フ）セシメント欲シ、松平近直ニ詢リシニ、松平之ヲ不可トス、因テ其議止ミ、江川ヲ以テ勘定吟味役格トス。其後松平屢〻江川ノ說ヲ聞キ、漸ク其識見ト忠誠トニ服ス、幾ハクモナク（安政二年）江川歿ス、松平深ク己ノ不明ヲ慙悔シタリト云フ。　**其**病ニ罹ルニ及ビテ、正弘屢〻醫師ヲシテ往診セシム、其遂ニ起ツベカラザルヲ聞ク

(一)第五章ニ見ユ。
(二)後齋藤左馬介、篤信齋。當時江川ノ手代タリ。
*「劍客齋藤彌九郎」以下「昨夢」上八一頁齋藤親話。

江川英龍ニ與フル書　安政元年正月廿三日

（四八二頁）

（四八〇頁）

江川英龍ニ與フル書　安政元年十一月七日
阿部正弘自筆

伊豆韮山江川氏所蔵

江川英龍ノ歿去ヲ悼ムノ歌　安政二年正月

同上所蔵

ヤ、嘆シテ曰ク『嗚呼惜イカナ、江川ヲシテ一日登城スルヲ得シメナバ勘定奉行ニ任スルノ命下ルベキニ、生前ニ榮任ヲ聞カシムルニ及バサリシハ甚ダ遺憾ニ堪ヘズ』ト。*其歿スルニ及ビテ一首ノ弔歌ヲ詠ジ、松平近直ヲ使トシテ之ヲ江川家ニ致サシメタリ。※

空蟬は限こそあれ眞心にたてし勳は世々に朽せし

德川齊昭亦其危篤ヲ聞キ『當時ニ在リテハ一方ノ長城ナリシニ、惜ムベシ』ト言ヘリ。*

〔昨夢紀事〕※　太郎左衛門ハ外國ノ事情ニ精シク、蘭學ヲモ心得、近時外寇ノ事ニツキテハ日夜心肝ヲ碎キ、必戰ヲ期シ、忠誠膽勇、幕府諸有司中ノ隨一タリ、之ニ依リ幕廷ノ信任ヲ受ケタリ。（摘要）

江川ノ事ヲ叙スルニ當リ遺ルベカラザルハ其砲術ノ師高島四郎太夫ノ事ニシテ、高島ノ幽囚ヲ解キシハ正弘ノ力ナリ。*高島ハ天保十三年鳥居忠耀ノ讒ニヨリテ幽閉セラルヽコト十二年ニ及ビタリシガ、

*〔陸軍〕卷三、四七八頁。

※〔江川文書〕。附錄第三戊號。

*〔陸軍〕卷三、四六―七頁。

※八〇一―一頁。

高島流砲術ノ祖高島秋帆、名茂敦。

*〔陸軍〕卷二、四四頁、卷十九、八一頁。〔懷舊〕四一八頁。

＊〔陸軍〕卷一、四四頁。〔高島先生墓表〕。〔高島秋帆先生傳〕二一—七頁。

＊〔陸軍〕卷三、四二一四頁。〔舊幕府〕二卷七號三九頁上段。

＊卷一。武州岡部藩主安部虎之助、後攝津守信賓。

中濱萬次郎。

嘉永六年特ニ之ヲ赦免シ、門人江川英龍ノ請願ヲ容レ、之ヲ江川ニ屬セシム。＊高島常ニ開國通商論ヲ唱ヘ、軍事ニ關シテ建議スル所多シ、正弘其功ヲ稱シ『火技中興洋兵開祖』ノ八字ヲ書シテ之ニ授ク、高島深ク之ヲ榮トシ刻シテ書畫ノ印章ニ用ヰタリ。明治十八年、其墓碑ヲ上野公園内ニ建立セシトキ、熾仁親王ノ筆ニ成ル此八字ヲ篆額トナセリ。＊

〔家記近事鈔〕＊　元長崎會所調役頭取高島四郎太夫去ル弘化三年七月安部虎之助ヘ引渡シナリシニ、近年西洋流火術ノ開ケタルハ四郎太夫ニ始リ、下曾根金三郎、江川太郎左衞門等皆同人ノ門人ナリ、此ノ如キ國家ノ用ヲ爲シ、世ニ功アルコト淺少ナラズ、而シテ禁錮ノ身トナル以來、恐懼謹愼セル狀ヲ太郎左衞門等ヨリ正弘聞キテ、大ニ憐察シ、功ヲ以テ罪ヲ償フ塲合モアリト同列ニ謀リ、有司ニ議セシメ、將軍家ニ達シ、嘉永六年八月五日赦免申渡ス。

江川ノ請ヲ許シテ萬次郎ヲシテ一時其部下ニ屬セシメタルハ此時ニアリ。萬次郎ハ土州中ノ濱ノ漁夫ナリ、天保十二年米國ニ漂流

牧志摩守。

＊主トシテ〔近事鈔〕〔卷一〕ニ據リ、薩摩寄泊及ヒ文書翻譯ノ事ハ萬次郎傳〔舊幕府〕七號四九頁段、五一頁下段〕ヲ參取ス。

＊山岡衛士、渡邊三太平。

＊『同六年十月』以下〔內藤景堅日記〕。

＊〔阿部家文書〕。

勝後ニ安房守ト稱シ、維新ノ後安芳ト改ム。

シ、嘉永四年歸國ス。薩摩ニ寄泊シタルトキ、藩主島津齊彬之ヲ召シ、海外ノ事情ヲ問ヒタリト云フ。長崎奉行牧義制幕府ニ報シテ曰ク『萬次郎ハ頗ル怜悧ニシテ國家ノ用トナルベキ者ナリ』ト。其江戸ニ至ルニ及ビテ、正弘家士ニ命シ、之ヲ召ビテ對話セシムルニ、果シテ其人物普通漂民ノ比ニアラズ、江川乃チ請フテ其家ニ養フ。嘉永六年米使來リテ開交ヲ求ムルヤ、萬次郎命ヲ受ケテ其文書ヲ翻譯シ、以後モ常ニ外國語通譯ノ事ヲ掌リタリ。＊是年十月十四日、正弘退城ノ後、萬次郎ヲ辰ノ口邸ニ召見ス、萬次郎地圖ヲ披キテ米國ノ事情ヲ說述ス、公用人等種々問フ所アリ、酒食ヲ饗シ、夜ニ至リテ退出ス。＊此後モ屢萬次郎ヲ召ビテ西洋ノ事情ヲ問ヘリ。＊

勝麟太郎モ亦初正弘ニ識拔セラレタル者ナリ。後年人ニ語リテ曰ク『余ハ島津家ト阿部家トニハ深キ緣故アリ、余ハ素ト小給（三十

俵二人扶持）ノ幕士ニテ極貧者ナリシニ、少年ノ時ヨリ洋學ヲ好ミ、蘭文ノ筆耕ヲ以テ學資トセリ。當時薩藩主島津齊彬侯洋學者ヲ招キテ翻譯ヲ爲サシムルノ事アリ、余ハ寫字生トシテ同藩邸ニ出入シタルヨリ、遂ニ齊彬侯ヨリ直命ヲ受クルニ至レリ。時ニ杉純道(ジユンダウ)(三)余ガ家ニ食客タリシガ、米艦渡來以後、蘭學者ノ聲價一時ニ騰リ、幕府諸藩共ニ競フテ之ヲ招聘シタルヨリ、其人ヲ得ルコト難シ、阿部閣老モ一人聘用セントテ余ガ支配頭大久保右近將監ニ命アリ、大久保ヨリ余ニ詢リシヲ以テ、余ハ杉ヲ推薦セシニ、直ニ二十人扶持ニテ雇入トナリタリ、(二)之ニ因リテ余ノ名モ亦勢州ニ知ラレタルナリ。　其後齊彬侯ハ余ニ向ヒテ『勢州ニ話シ置キタリ』ト言ハル、最初余ハ其何事ナルカヲ解セザリシニ、圖ラズモ余ハ三十俵ノ小給ヨリ俄ニ百俵ノ旗下トナリ、長崎ニ遣ハサレ、蘭人ニ就キテ航海術ヲ傳習スルコトナレリ、

(二)後事二ト改ム。

(三)第卅二章ニ見ユ。

是レ齊彬侯ノ推薦ニ由リ、勢州ノ拔擢ヲ受ケタルナリ。余ハ長崎ニ至リテ、奉行ト蘭人トノ間ニ於ケル秘密交渉事件ニモ特ニ干與シ、蘭人ノ密話中或ハ政府ニ對シテ忌憚スベキモノアリシモ、豫テ勢州ノ大度量ヲ知ルガ故ニ、忌諱ヲ憚カラズ、岩瀬修理ヲ經テ勢州ニ密報セシガ、勢州逝去ノ後ハ嫌疑ヲ避ケテ之ヲ止メタリ』ト。*

當時苟モ一技アリ一能アル者ハ之ヲ擧ゲテ遺スコトナク、蕃書調所ヲ設ケテ杉田成卿、箕作阮甫等洋學者ヲ招致シ、儒者ノ名アルモノ水戸ノ會澤恒藏、會津ノ黑河内十太夫、津ノ齋藤德藏ノ如キ、亦皆特別ノ待遇ヲ與ヘテ、大將軍ニ謁見セシム。正弘曾テ德川齊昭ニ示セル方案中諸藩士中學識アル者ヲ選集シテ一ノ評議所ヲ開設スルノ條アリタレドモ、其事成ルニ及バザリキ。※

〔安政紀事〕* 阿部勢州ノ老中タル、内外ノ艱難門閥家ノ能ク匡濟スル所ニ非ル

〔諸家〕勝安芳説話。

杉田信、梅里ト號ス。

箕作虔儒、紫川ト號ス。

黑河内高定、會津藩軍事奉行。

會澤安、正志齋ト號ス。

齋藤正謙、拙堂ト號ス。

※〔諸家〕勝安芳等ノ説。評議所ノ事ハ第廿三章ニモ見ユ。

*一九九頁。

ヲ以テ、俊才ノ士ヲ擧ゲテ諸有司トナス、小人不平ヲ懷ク者甚多シ。

＊　＊　＊　＊　＊

以上ハ正弘ガ人材ヲ登用シ、信任シ、適材ヲ適所ニ置キタル事例ノ幾分ヲ擧グルニ過ギズト雖モ、亦以テ其概要ヲ觀ルニ足ラン。斯ク舊來ノ慣例ヲ破リ、始メテ非常ノ拔擢ヲ行ヒタルモノハ、一ハ時勢ノ要求ノ然ラシムル所ナリト謂フト雖モ、抑モ亦時ノ爲政者ガ英斷ニ出ヅルコトナクンバ、焉ゾ能ク門閥跋扈ノ當時ニ在リテ斯ル舊慣ヲ斯ク速ニ打破スルヲ得ベケンヤ。

第三十三章。　福山藩政績。

藩政統督。　財政整理。　學士招聘。　洋學開始。
文武敎育。　人材養成。

正弘年少ニシテ中央政府ニ出デ、夙ニ宰相トナリテヨリ、國務多端ニシテ殆ト藩政ヲ見ルノ餘力ナキガ如クナリシト雖モ、尙ホ常ニ鋭意シテ之ガ改進ヲ圖リ、其成績頗ル著シキモノアリ、請フ茲ニ之ヲ叙述セン。

正弘藩政ヲ執リテヨリ、諸事之ヲ各職司ニ委任シ、自ラ唯其大綱ヲ統督スルノミ。多ク重臣ノ言ヲ用非、獨斷ニテ事ヲ行フハ極メテ稀ナリ、各職司各〻適材ヲ選用シ、其言議ヲ盡サシム。各職司ヨリ民政ニ關スル事ヲ禀議スルニ當リテハ、第一ニ民ノ疾苦トナルヿナキヤ否

ヤヲ問フヲ常トス。　藩士ノ賞罰ニ關シテ主職ヨリ禀申スルコトアルトキハ、賞ハ直ニ許可シ、罰ハ直ニ許可セズ、曰ク、『熟考ノ後許否セン、主職モ亦再査スベシ』ト。近臣等ノ小過失ニツキ主職ヨリ責罰ヲ擬シテ禀申スルコトアルモ、笑フテ答ヘズ、多クハ之ヲ不問ニ附ス、曰ク、『予要職ニアリテ萬一ノ過失ナキヲ期スト雖モ、大將軍ヨリ見ナバ、過失必ズ多カラン、予豈ニ獨リ家臣ノ過失ヲ嚴責スルニ忍ビンヤ』ト。

正弘重臣ヲ遇スルコト厚ク、登城ノ日ハ歸邸ノ後之ニ面接シ、家政ヲ聽クヲ例トス、歸邸ノ時平日ヨリ遲キカ、若クハ一タビ歸邸ノ後更ニ外出スルコトアラバ、當日急務ノ有無ヲ問ヒ、重臣ノ請ヲ待チテ之ニ面接セリ。*

天保十年連年ノ凶作且ツ西城燒失ニヨリ、諸藩ノ例ニ依リ金二

萬兩ヲ幕府ニ呈ス、因テ藩ノ財政頗ル困難トナリシヲ以テ、家臣ノ給米ノ幾分ヲ借リ、藩主衣食ノ費ハ先代正精以來二割ヲ減シタル後更ニ又二割ヲ減ズ、近臣其減省ノ甚シキヲ以テ從前ノ如クセンヿヲ勸言セシニ、正弘聽カズシテ曰ク、『汝等予ニ對スル厚志ハ之ヲ諒トス、然ルニ大學ニモ見ユル如ク、一家仁ナレバ一國仁ニ興リ、一人貪戾ナレバ一國亂ヲ作ス、其機此ノ如シトアリ、在上者ヨリ行ハズンバ在下者能ク行フコトナシ、聖賢ノ語ノ如クスルハ余ノ及ブ能ハサル所ナリト雖モ、今家臣一般ニ借米ヲ命ジタル場合ナルヨリ、之ヲ忘レザル爲ナレバ、余ガ躬自ラ節儉ヲ行フハ亦已ムヲ得ザル所ナリ』ト。翌年ニ至リ家臣ノ借米ヲ廢シタレドモ、自己ノ食料ハ依然トシテ改メズ、閣老タリシ時ニテモ、暫ク舊ニ仍リタリ。蓋シ正弘ノ意、自己衣食ノ料減省ノ如キ瑣々タル減省ニ過ギザルヲ知ルト雖モ、猶ホ之ヲ躬行シ

※（正弘藩政ヲ執リ）以下（考蹟）。

タルモノハ一般ノ經費節減ノ趣旨ニ對シテ其効アランコトヲ期シタレバナリ。

正弘封ヲ襲クノ初ヨリ天災屢〻臻リ、加フルニ臨時幕府ニ納金ノ事起リ、藩費逐年增加シ、動モスレバ收支相償ハザルヿアリ。弘化元年ノ如キモ、財政頗ル困難タリシヨリ、會計吏相議シテ家臣ヨリ一時借米セントテ之ヲ正弘ニ禀請セシニ、正弘熟考ノ後、答ヘテ曰ク『予ハ當今老中役勝手掛ヲ勤メ居リ、家臣ヨリ借米ト云フ事ハ好マシカラズ、因テ手元金ヲ悉ク會計職ニ下付ス、宜ク之ヲ以テ不足ノ一部ヲ補フベシ、是レ予カ寸志ナリ、此際藩地ノ用達等ニ實情ヲ告ゲテ協議セバ、調金成リテ家臣ニ借米セザルモ可ナルベシト雖モ、調金ノ爲ニ後ノ困難ヲ惹キ起スコトアルベカラズ』ト。重臣其意ヲ體シ、用達ト協議シテ調金ノ事成リ、遂ニ家臣ヨリ借米ヲ要セザルニ至レリ。*

頼山陽●

外國ノ事起リショリ、藩費ノ增加從前ニ幾倍シタレトモ、正弘常ニ無用ノ費ヲ省キテ文武必要ノ費ニ充テ竟ニ甚シク缺乏ヲ告グルコトナク、能ク之ヲ整理スルコトヲ得タリ。

其閣老タリシトキ、海警頻ニ至リ、幕府海防等ノ爲ニ費途多端ナルヲ以テ、節儉ノ令ヲ發ス、重臣等謂フ、此事ハ君公至誠躬行ヲ以テシテ始メテ行ハルベシト。正弘時計ヲ好ミ、先代以來集メタルモノ品數多シ、重臣ノ說ヲ聞キテ之ヲ然リトシ、悉ク之ヲ庫中ニ藏メ、又庭前ノ木石ヲモ撤シ、百事質素ヲ旨トス。後房ノ侍女ノ如キモ曾テ大ニ減シタルヲ以テ、老女ヨリ更ニ減少セラレザランコトヲ哀願シタレトモ、正弘斷乎トシテ之ヲ許サズ、遂ニ又減少ヲ行ヘリ。

正弘ハ最モ學藝ヲ奬勵シ、其學風ハ專ラ朱子學（初ハ古學、徂徠學）ヲ採リ、天保十二年處士江木繁太郎（初メ健齋後鰐水ト號ス、羅井

古賀侗庵。

野々口隆正、後氏ヲ大國ト改ム、天桂山人又佐紀之屋ト號ス。

阿部正精ガ蘭書ヲ講究シタル事ハ第一章ニ見ユ。

坪井ハ濃州池田ノ人、誠軒ト號ス、江戸ニ於テ宇田川玄眞ニ學ブ、洋方醫大家ノ名アリ、嘉永元年歿ス、年五十。

久太郎及ビ古賀小太郎ニ學ブ）ヲ徴用シテ儒者トス、近隣諸藩ノ士民來學スル者多シ。江木ハ後ニ吏トナリ、藩内兵事、水利等ノ事ヲ掌リテ功アリ。同十四年、備中吉濱ノ人石川和介（初メ淵藏後ニ關藤文兵衞ト稱シ、藤陰ト號ス、羅井久太郎ノ門人）ヲ徴シテ儒者トス。此他從前ヨリ江戸藩邸及ビ福山ニ於テ教授ヲ掌ル儒士數人アリキ。

和學ハ石州津和野藩士野々口仲藏ヲ招聘シ、有志者ヲシテ其教授ヲ受ケシム。此頃ヨリ藩中和學者數名ヲ出セリ。

洋學ハ夙ニ福山ニ行ハレ、蘭方醫家坂上卜安及ビ寺地强平各其家塾ニ於テ蘭學ヲ教授ス、坂上ハ長崎ニ於テ學ビタル人、寺地ハ藩士寺地幸助ノ子ニシテ、文政末年長崎ニ苦學シ、其後江戸ニ至リテ坪井信道ノ門ニ入リ、緒方洪庵、川本幸民等ト學友タリ、天保八年鄕ニ歸ル、備後及ビ近傍地方ノ人蘭書ヲ講習スル者皆之ヲ祖トス。種痘術ノ

本邦ニ傳フルヤ早ク其種ヲ求メ、群疑ヲ排シテ之ヲ施ス、近隣地方其澤ヲ蒙ル。又理、化、本草等ノ學ニ通ズ。正弘閣老トナルノ後之ヲ江戸邸ニ召シテ蘭書ヲ講ゼシム。安政三年正弘ノ命ヲ奉シテ蝦夷地ヲ巡視シ、歸リテ開拓策ヲ建議ス。福山誠之館創立ノ後、館中洋學所ヲ設ケ、寺地ヲ以テ教授トシ、藩士ニ授業セシム、譯スル所ノ書數部アリ、其中刊行セルハ大砲使用軌範ナリ。　**江戸藩邸**ニ於テハ安政二年ノ頃、長崎ノ人杉純道(ジユンダウ)⊗ヲ徴シ、蘭學ヲ講セシム。　**此**頃正弘益〻洋學ヲ盛ニスルノ意アリ、藩士ノ子弟四人ヲ長崎ニ遣シテ修學セシメ、後又士民ノ子弟ヲ撰拔シテ蕃書調所（開成所）ニ入學セシメタリ*。

水戸藩士高橋多一郎弘化四年ノ覺書※中ニ云フ『阿部牧野兩閣老防禦ノ事ハ精々力ヲ用ラレ、**家中ノ者ヘモ西洋銃陣ノ法ヲ學バセ、蘭學ヲモ修行致サスヨシニテ**當時左ノ新渡蘭本和解出來ノ分、過半兩閣老手ヲ廻シ買上申ス由。

「セイアルチルレイ」船砲新篇三十冊。「エルンスーヒウルエルケル」八冊。三兵台法十

杉純道後亨二。
⊗第卅二章勝麟太郎ノ條及ビ第卅五章『蘭書ノ講義』參看。
*其閣老タリシトキ〔以下〔敎育〕卷十、二六四—六頁ニ據リ、〔舊幕府〕四卷十號及ビ〔芳躅〕ヲ參考シ、寺地ノ事ハ主トシテ『寺地先生碑文』ヲ取ル。
※〔遠近橋〕卷三。
蘭語音譯總テ原文ノ儘ヲ錄ス。

四冊。兵法全書百冊 内十冊和解出來ル

（仰高芳蹟）　正弘公夙ニ西洋ノ事情ヲ知ラント欲シ、江木繁太郎等ニ命シテ西洋學ヲ兼修シ、兵制ヲ考究セシム、然ルニ種々障碍アリ事中止セシガ、幾バクモナク米艦渡來ノ事起レリ。

正弘閣老トナリシ頃ニハ太平年久シク、諸藩多ク武事ヲ怠リシガ、正弘殊ニ藩士ノ柔弱ニ流ルヽヲ憂ヘ、弘化元年三月、幕府ノ許可ヲ經テ福山城南水呑村ニ於テ家士青年ノ山野跋渉ヲ試行セシム（寛政中祖父正倫ノ時此事アリ）、是レ名ヲ山野跋渉ニ假リテ鹿狩ヲ行ヒ、旗鼓ノ操法並ニ隊列進退ノ法ヲ練習セシメンガ爲ナリ。以後毎年一回之ヲ行フコトトナレリ。　**同**三年又幕府ニ稟請シ、福山城内ニ於テ甲冑調練ヲ行ヒ、且ツ城外ニ於テ人馬調練ヲ行フノ許可ヲ得、屢、手書*ヲ以テ藩士ニ令シ、武事ヲ講シ、以テ萬一外寇ノ變ニ備ヘシム。此時城外道三口ノ別邸（茶屋ト稱ス）ノ屋宇ヲ除キ、遊園ヲ毀チテ平野

*附錄第三甲一イ號、ロ號。

藩中文武奬勵諭示　嘉永五年

阿部正弘自筆

（四九四頁）

備後福山阿部神社所藏

（四九四頁）

トナシ、以テ練兵場ニ充ツ。又藩中士卒全般ニ武器修繕料トシテ家格ニ應シテ毎戸ニ金(最多十九兩)ヲ給シ、又武器購入料トシテ祿高ニ應シテ金ヲ貸スコトトシ、且ツ一層節儉ヲ行ハシム、其後安政年間ニ至リ、江戸ノ藩邸ニ於テモ甲冑調練ヲ行ヒタルコトアリ。*

弘化四年十月、土浦藩士大久保要ヨリ高橋多一郎ヘノ書※中ニ云フ『當時福山侯専ラ外夷事情御探索格別ニ御手廻リ申候、且御在所抔ニテモ絶エス調練、爰元迄下屋敷ニ於テ調練致サレ、出格ノ御手當ニ御座候。』

藩士ノ文武教育并ニ人材養成ニハ殊ニ意ヲ用ヰ、嘉永五年六月手書*ヲ以テ重臣ニ訓諭シ、實祖父正倫ガ學校ヲ福山ニ建設シ、⊙實父正精ガ學問所ヲ江戸邸ニ建設シ、儒員ヲ增加シ、書籍ヲ購入シ、貧賤ノ者ニ至ルマテ學業ニ從事スルヲ得シメ、又武術モ其所用器具ヲ與ヘテ之ヲ獎勵シタル遺志ヲ繼ギ、自己身邊ノ費用ヲ節減シテ餘シ得タル金千兩ヲ交付シテ一層擴張ヲ圖ラシム、因テ江戸駒込丸山邸⊗内及ビ

---

*『弘化元年』以下〔芳蹟〕。別邸毀却ノ事ハ〔近事錄〕嘉永六年六月十二日ノ次條ヲ參取シ、武器修繕料ノ事ハ〔遠近橋〕卷七ヲ參取ス。

大久保ハ土浦藩士屋家用人ナリ、正弘ノ父正精ノ妻ハ土屋篤直ノ女ナリ、故ヲ以テ兩藩士中互ニ往來スル者アリシナリ。

※〔遠近橋〕卷六。

*〔芳蹟〕。

⊙天明六年弘道館ヲ創設ス、誠之館設立ノ後之ヲ廢ス(〔教育〕)。

⊗今ノ本鄕駒込西片町阿部邸。

○道三口練兵場ニ接スル地。

誠之館設立。

○福山ニ於テハ軍法講習所ヲ『先勝堂』ト稱シ（維新後兵學校ト稱ス）、長沼澹齋ノ兵要錄等ノ講習ス。此『先勝堂』三字ノ自筆扁額今尚ホ阿部家ニ藏ス。

○高島流。

福山城南西町ニ於テ各一箇ノ文武學校ヲ設立ス、丸山邸ニ於ケル學校ノ建築ハ嘉永六年ヲ以テ、福山ニ於ケルハ其翌安政元年ヲ以テ竣工ス、兩校共ニ誠之館ト名ヅク（中庸ニ『誠之者人之道也』トアルニ取ル、玄關ノ正面ニ掲ゲタル誠之館三字ノ扁額ハ德川齊昭ノ筆蹟ニ係ル）。誠之館ノ構造ハ中央ヲ漢學ノ講習所トシ、孔子ヲ祭ル、別ニ和學、兵學、算學、書學ノ講習所アリ（福山ニ於テハ洋學及ビ醫學ヲモ加フ）、槍劍弓馬及ビ柔術砲術ノ練習所其周圍ニ羅列ス（水泳術ハ府下本所石原別邸前面ノ河流ニ於テ練習セシム）。正弘多年ノ功勞ヲ以テ幕府ヨリ一萬石ノ加增ヲ受クルヤ擧ゲテ之ヲ藩中文武教育ノ資ニ投ズ、因テ其規模ハ比較的大ナルヿ十萬石內外ノ藩ニハ稀ニ見ル所ナリ。

兩誠之館ノ開校式ヲ擧行シタル時、藩士ノ父兄子弟盡ク集リ、重臣以下諸有司之ニ臨ミ、先ヅ正弘ノ親書ヲ朗讀ス、其趣旨士分

*『藩士ノ文武教育』以下〔芳蹟〕。〔近事鈔〕卷一。〔教育〕卷十、二六二頁二七六七頁、二八八頁。

◎附錄第三甲二號。

*〔教育〕卷十、二六七―八頁。

一教育要領。

〔家傳拾遺〕。〔教育〕卷十、二七六―七頁。

以上ノ子弟ハ必ズ文武ノ業ヲ兼修セシムルニ在リ。*

正弘ハ閣老ノ職ニ在リ、常ニ江戸ニ居ルヲ以テ、其後時々誠之館ニ臨ミテ藩士子弟ノ講學及ビ武技ヲ覽閲シ、福山ヘモ時々手書ヲ致シテ督勵ス。*

文武學校を設け、家中の子弟を教育する趣旨は乍不及聖賢の教に本つき、御先代樣の思召を推擴め奉らんと欲しての事なり、都て人と生れたる身は人たる道を盡すへきは當然の儀なれば、文學經義に根據して平生の心志を定め、武術を講究して不慮に備へ、文武一致に勉勵致すべし、朝夕風俗ヲ正しくし、言行を謹む等は申迄もなく、大節に臨み取違ひの事なく、臣となりては忠を致し、子となりては孝を盡すを文武修行の正的と存し、銘々士たるの名に恥さる樣心掛べし。

(嘉永六年十一月)

仕進ノ舊例ヲ改メ、藝能アル者ヲ拔擢ス。

（家記近事鈔）* 嘉永六年亞船退帆ノ後、正弘一夜老臣ヲ召シ謂テ曰ク、今般浦賀ノ顛末此ノ如シ、國家今日ノ衰態恐慄ノ至リナリ、就テハ幕府ニ於テモ追々改革新政發スベク、先ヅ吾藩ヨリ先鞭ヲ着ケ、文武ヲ引立テ士氣ヲ振ハシムル手段第一急務ト思フ、因テ先ツ學制ヲ改革スベシ、汝等宜シク余ガ此意ヲ體察シ、國家ニ忠勤スルノ基本ヲ立ツベシト、老臣等一同感泣シ、旨ヲ了ス、是ニ於テ學校創營ノ議起リ、尋テ江戸、福山ニ於テ執政中ヨリ各一人ヲ選ビ、文武總裁ヲ命ス。

誠之館教育ノ方法ハ、漢學ハ子第一般ニ講習セシメ、武術ハ少時數技ヲ兼習セシムト雖モ、成年以後ハ槍、劍、弓三術（後弓術ヲ除ク）ノ中各自志ス所ノ一術ヲ專修シ、他ノ藝術ハ餘力ヲ以テ兼習セシム。文學武術共ニ考試ノ法アリ、其等位ニ依リ仕進ノ法ヲ定ム、合格セザル者ハ戸主ト雖モ職任ニ就クコトヲ得ズ、從前中士以上嫡男十七歳ニ至ルトキハ、藝術ノ有無ヲ問ハズシテ仕進シタルノ例ヲ廢シ、次三男タリトモ藝能アル者ハ祿ヲ給シ、別ニ家門ヲ開クコトヲ得シム。又

會計吏ノ家筋ハ必ズ算術ヲ兼習セシムル丁他ノ諸士ノ文學ニ於ケルガ如クシ、且ツ槍劍ノ二術ニ換フルニ砲術ヲ以テスルヲ許ス、就中藩士全體ノ砲術及ビ水泳ハ最モ奬勵ニ務メタリ*是ニ於テ一藩ノ教育翕然トシテ其面目ヲ改メ、西洋兵術採用及ビ人材拔擢ノ基茲ニ開ケタリ。

此ノ如ク舊來ノ慣例ヲ廢シ、人ヲ用井ルノ法俄ニ嚴正トナリシヨリ、之ヲ便トセサル者或ハ新法ヲ解シ得ザル者アリ、在江戸藩士中改革ノ旨趣ニ反シテ譴責ヲ受ケ、或ハ藩地ニ送ラレタル者アリ、此等ノ輩ハ重臣ヲ怨望シ、流言ヲ放チ、俗歌ヲ作リ又他人ノ名義ニ託シテ張札等ヲ爲シテ誹謗スル者アリ、正弘之ヲ顧ミズ、是レ因循ノ狀態ノ然ラシムル所、未ダ予ガ眞意ヲ察セザルカ故ニシテ、改革ノ始ニ於テ免レザルモノナリトテ、主職ニ諭シテ益文武ヲ奬勵セシメタリ。*

*〔教育〕卷十、二六六頁。

〔福山文書〕。

*『此ノ如ク舊來』以下〔芳蹟〕。附錄第三甲三號。

〔芳讀〕

曾テ藝術拔群ノ者ヲ駒込下邸ヨリ龍ノ口上邸ニ召ビテ其技ヲ閲シ、畢リテ物ヲ與フ、偶雷雨大ニ起ル、正弘兒童ノ爲ニ輿ヲ命シ、之ヲ下邸ニ送リ歸ラシメタリ。米艦渡來以後、公事繁劇ナルニ拘ハラズ、歸邸ノ後、寸暇アルトキハ、當直近臣ヲシテ庭内ニ於テ槍劍ノ技ヲ演セシメ、又池中ニ於テ水泳ヲ爲サシメ、又自ラ西洋軍鼓ヲ取リテ之ヲ打チ、或ハ近臣ヲシテ之ヲ打タシム、病中ト雖モ軍鼓ヲ打タシメテ自ラ慰メタルコトアリ。其敎育ニ意ヲ用ヰルコト此ノ如シ、文武ノ術業練習ノ盛ナルヿ福山藩アリテ以來未ダ曾テ其比ヲ見ザル所ナリ。

砲術ハ最初舊式ニ依リタレトモ、其西洋流ニ及バサルコトヲ知リテヨリ、家士ヲシテ江川英龍ノ門ニ入リテ砲術ヲ學バシメ、米艦渡來ノ事アリテヨリ、駒込邸内及ビ福山ニ於テ砲銃ヲ製造セシメ、其後小銃ノ鍛工ヲ雇ヒ入レ、多ク銃器ヲ製造セシメタリ。又西洋形船

*『砲術ハ最初』以下〔芳蹟〕。

◎造船木屋番小川辨助及ビ順風丸乘組員西井德覺書。

◎當時金相場一兩ニ村六十乃至七十匁ナルベシト云フ。

*〔教育〕二六七頁。

ヲ製造セント欲シ、中濱萬次郎ニ託シテ其雛形ヲ造ラシメシガ、未ダ造船ニ着手スルニ及バズシテ正弘歿ス、其後藩地備後鞆津ニ於テ製造シタル『ブリグ』型順風丸ハ實ニ其遺志ニ成リタルモノナリ。*

福山藩製造西洋形帆船『順風丸』記要。◎

積載噸數	二〇七噸
起工	文久元年六月一日
船下	同　二年六月十八日
竣工	同　年九月二十八日
試運轉	同　年九月二十九日

文武教育諸費（練兵費ヲ包含ス）ハ安政三年福山誠之館ノ分藩札九十三貫六百匁餘◎、江戸邸誠之館ノ分約金三百九十兩ニシテ、其後年々增加セリ*。**正**弘教育ニ供セン爲ニ一身ノ費用ヲ節シテ年々貯蓄シタル金アリ、逝去ノ年ニハ積ミテ四千五百兩ニ至ル、嗣子其遺志

*〔芳蹟〕。貯蓄金付與ノ事ハ〔教育〕卷十、三〇一—二頁ヲモ參取ス。
*卷十、二六三頁。
林煒〔大學頭〕。
東條一堂。

ニ從ヒ之ヲ兩校ニ分付セリ。*

〔日本教育史資料〕*　正弘夙ニ父祖ノ意ヲ繼ギ教育ヲ振興スルノ志アリ、其誠之館ヲ造築シ、大ニ獎勵督責ノ法ヲ定ムルヤ、力メテ自奉ノ費ヲ節シ、學資ノ永續ヲ圖リ、自劇職〔幕府閣老〕ニ居ルト雖モ、常ニ侍讀ヲ置キ、又宿儒林式部、東條文藏等ヲ招聘、經史ヲ講セシメ、又侍臣ト槍砲銃劍等ノ技ヲ演習ス、既ニ長沼流兵法ヲ以テ軍制ヲ改定スト雖モ、又時勢ヲ察シ、西洋銃陣ヲ講究シ、時ニ近臣ヲ編伍シ、自ラ司令官トナリテ其操法ヲ試ミ、一藩ヲ獎勵ス、凡ソ教育ノ事終始一誠、間斷アルコトナシ、是ニ於テ一藩子弟必ス文武ヲ兼習シ、士風面目ヲ一新セリ。

正弘幕府ノ要路ニ在リ、米艦渡來以後一層ノ繁劇ヲ加ヘ、復タ封地ニ至ルノ暇ナシト雖モ、藩政ノ改革殊ニ教育ノ獎勵、人材ノ養成ニ於テ著大ノ成績ヲ擧ゲタルコト前述ノ如シ、然ルニ其事蹟未ダ多ク世ニ顯レザルモノアリ、吾人豈ニ其概要ヲ記シテ之ヲ世ニ傳ヘザルベケンヤ。

第三十四章。病歿。言行。

病狀及ヒ病因。逝去。風采。德行。文才。歌詩。

正弘安政四年三四月ノ交ヨリ身體稍〻常ニ異ル所アリ、五月ヨリ、胸痛ヲ發シテ疲勞ヲ覺へ、屢〻登城ヲ闕ク＊。閏五月朔日、松平慶永府城ニ於テ正弘ヲ見、自邸ニ歸リテ近臣ニ謂フテ曰ク『予今日勢州ヲ見タルニ、往日ノ顏色ニアラズ、其病頗ル重キガ如シ、此暑氣ニ堪フルコト或ハ難カラン、今若シ勢州ヲシテ世ヲ去ラシメハ、天下ノ形勢如何ニ變ズルヤモ亦知ルベカラズ、甚ダ憂フベキコナリ』ト、言畢リテ歎息ス※。九日ヨリ遂ニ出仕セズ、大將軍深ク憂へ、屢〻使ヲシテ物ヲ賜ヒ慰問セシム、諸侯及ビ士人ノ訪問スル者甚ダ多シ。逐日容

＊〔近事鈔〕卷三。

※〔昨夢〕上五〇〇—一頁。

貌瘁セテ顏色蒼白トナリ、腹中右方ニ凝塊ヲ生ジタルモノ、如シ、衆醫診察スレトモ、皆病症ヲ斷定スルノ識ナク(或ハ肝臟焮炎症ト診斷シタリト云フ)、種々ノ臆說ヲ述ブルニ止マルノミ、或ハ重症ニアラズト云フ者スラアリキ＊

『昨夢紀事』＊ニ云フ、閏五月二十四日、慶永其醫員半井(ナカラ井)仲庵ヲ遣シテ診察セシメタルニ、頗ル重症ナルヲ以テ、歸リテ之ヲ報告シタレバ、慶永大ニ驚キ、漢方醫藥ニ代フルニ蘭方醫藥ヲ以テセンコトヲ勸メタリ、然ルニ正弘ハ事ノ可否ニ拘ラズ、現ニ法令モ◎アルコトナレバ、蘭方ハ用キ難シトテ之ヲ拒ミタリト。

德川齊昭亦其病ヲ憂ヒ、マンボウ魚◎ノ適藥ナルヲ聞キ、領地ノ漁夫ニ命シ之ヲ捕ヘシメテ贈リ＊又六月七日、川路聖謨ニ書ヲ與ヘ、自家ノ調藥法ヲ添附シタリ＊。十六日、病愈篤ク、十七日午時半、遂ニ瞑ス、享年僅ニ三十九。二十七日、喪ヲ發シ、七月三日、府下淺草新堀端西福寺(淨土宗)ニ葬ル。此日早天龍ノ口官邸ヲ發シ、途上ノ行

＊附錄第三戊五號「懷舊」八三九頁。

＊上五〇七—八頁、其要ヲ摘ミ、語文ヲ改竄ス。

◎嘉永二年三月十五日ノ布令ヲ以テ、官醫中内科ニ限リ、蘭方ヲ用キルヲ禁ズ、第十二章橫濱開港五十年史抄錄ノ條參看。

◎學名 Mola mola 漢名翻車魚。

＊「懷舊」八三九頁。

＊「川路」五一七—八頁。

裝總テ家格ニ應スル盛儀ヲ用非、在世中授與セラレタル物具ヲ備フ、城門ニ於ケル呼聲等閣老現任ノ日ニ異ナラス、寺門ニ入ルノ後始メテ葬儀ニ改ム※。

『元治夢物語』※ニハ安政二年十月二日江戸地震ノ條ニ正弘ノ逝去ヲ記シ、『嘉永明治年間錄』※ニハ安政四年六月十七日ノ條ニ『惹說阿部正弘遺體西福寺門内ニ入ル、此時暴ニ大雷雨、雷震ノ爲ニ西福寺燒失セリ』ト記ス、一ハ時日ヲ誤リ、一ハ雷火ノ謬說ヲ掲グ(但シ其日雷雨起リシハ事實ナリ)、且ツ後者ハ『此人亞船航海ノ時ニ當リテ、死ヲ極メ、北條氏ガ元使ヲ斬ルノ志ヲ繼カバ、執政ノ功且ツ主家征夷ノ職ト共ニ中興ノ大行立ツベシ、今疾病ニ死ス、是レ天後人懲惡ノタメ正弘ガ命ヲ斷ス云々』ト附論ス、以テ當時ノ俗論ノ一斑ヲ察スベシ。

嗚呼天此人ニ年ヲ假サス、世ヲ早クセシメタルハ大痛恨事タリ。

正弘閣老トナリテヨリ以來、年中一日ノ休暇ナク、自邸ニ在アリテモ、早朝ヨリ藩政ヲ裁決シ、定日儒員ノ講義ヲ聽キ、毎月三日ノ接客日ニハ拂曉ヨリ亦數多ノ訪客ニ會見ス、殊ニ外艦渡來以後ハ其繁劇、

※附錄第三戊五號。
※一一頁。
※卷六、一五葉。

其憂慮一層ノ甚シキヲ加ヘ、殆ド寢食ヲ安ンセス、是レ其遂ニ病ヲ釀シ、短命ニシテ終リタル原由ナリ*。

本文記スル所ノ事實ヲ詳ニセザル者或ハ正弘酒色ニ沈溺シテ生命ヲ短縮シタリトノ説ヲ爲ス、茲ニ其一二ヲ擧ゲン。

（追讃一話）* 阿部正弘侯外交ノ事漸ク焦眉ノ急トナリシヨリ、一意外交政略ニ注目ス、幾ホトナク薩侯（齊彬）歿シ、時事日々ニ危シ、是ニ於テ正弘外强援ヲ失ヒ、遂ニ其志ヲ伸スルヲ得ズ、晝夜醇酒ヲ飲ミテ其生命ヲ促シタリ、其生前ノ苦心想フベキナリ。（摘要）

（續愛國偉績）* 正弘漸ク國事ノ爲スベカラザルヲ視テ、辭セント欲スルニ責任方ニ重シ、乃チ酒色ヲ恣ニシ、羸疾ヲ速キテ卒ス。

其他尊攘紀事*、大日本人名辭書*、日本肖像大觀◎等ノ如キモ亦俗書ニ據リテ同様ノ事ヲ傳フ、是レ實ニ甚シキ謬説ナリ、正弘毎日公廳ヨリ歸邸ノ後、晩餐ノ時ニハ殆ド常ニ酒ヲ取リタレドモ、大抵前室（オモテザシキ）ニ於テシ、侍臣ヲ對手トシテ雜談笑語ヲ以テ慰樂トシタルノミ、其席ニハ婦女等ノ侍スルコト曾テナカリキ*。正弘多ク飲ムコトナシト雖モ、大久保忠寛ハ尙ホ其攝生ニ害アランコトヲ虞レ、全ク酒ヲ廢センコトヲ勸メシニ、正弘ハ

---

* 「正弘閣老」以下〔芳蹟〕。
* 三二葉。齊彬ノ死去ハ正弘ノ歿セシヨリ一年ノ後即チ安政五年七月ニアリ、追讃一話ノ記スル所誤レリ。
* 巻上二九葉。原書漢文、今之ヲ時文ニ改ム。
◎ 巻一、九一一〇葉。
* 第六版七四葉下段。
◎ 第一篇一一頁。
* 「正弘毎日」以下〔芳蹟〕。

『繁忙此ノ如ク、疲勞シテ歸ル、飲酒ノ如キ予ニ免シテ可ナリ』ト言ヘリ。大久保後ニ人ニ語リテ曰ク『勢州ノ不可ナル事一アリ、即チ過飲ナリ、其短命豈ニ幾分カ飲酒ニ因ルコトナシトセンヤ』ト＊。蓋シ此等ノ說話ヨリシテ遂ニ甚シキ誤謬ヲ世ニ傳フルニ至リシナラン。

正弘男子四人アリ、皆夭ス、是ヨリ先、未ダ喪ヲ發セス、正弘ノ名ヲ以テ實兄ノ庶子賢之助正敎（マサノリ）ヲ以テ養嗣トナサンコトヲ請ヒ、許可セラル。八月、正敎封ヲ襲ギ、尋テ伊豫守ト稱ス＊。

此年九月十九日、德川齊昭ヨリ松平慶永ヘノ密書＊中ニ云フ『今日聞ク所ニ據レバ、阿部ヲ淀ヘ、稻葉ヲ福山ヘ移封シ、田安家附松平河内守ヲ寄合⊘ニ轉ズルノ說アリ、虛實ヲ詳ニセザレドモ、在職中阿部ト相容レザル伊賀守ガ今回老中トナリタレバ此ノ如キ說ヲ生ジタルナランガ、私事ヲ以テ然ルコトアルベカラズ、從來阿部ハ何等ノ非曲モナク、非常ノ難場ヲ骨折リシニ、風說ノ如クンバ驚クベキ事ナリ、目下大政府中大軋轢アリト云フ、豫テ拙老ノ申シ、如ク、夷狄サヘ近ケズハ何等ノ事モナキニ、夷狄ヲ近ヅケタルハ水野越前守ナリ云々。

同年十月十日越前藩長谷部甚平ヨリ同藩橋本左內ヘノ書＊中ニ云フ『幕中近況、伊州

＊〔諸家〕大久保一翁說話。

＊〔家傳〕。〔近事鈔〕卷三。〔續實紀〕安政四年六月廿二日。

＊〔昨夢〕上五五二—三頁。

山城淀ヘ轉封ノ說。

⊘無職ヲ謂フ。松平近直安政四年七月田安家家老トナリ、十一月罷ム。

⊘松平伊賀守忠固安政四年九月十三日閣老ニ再任シ、翌年六月廿三日罷ム。

長谷部恕連、越前藩勘定奉行。

＊〔橋本〕二一二五頁。

伊州＝松平伊賀守忠固。
泉州＝松平和泉守乘全。
老公＝德川齊昭。

再現、泉州殊遇、剰ヘ福山所替ノ企之アル由風説起リ、老公ニモ深御痛慮ノ御様子云云。』

右二書翰ニ云フ所、轉封ノ事ハ實ニ閣議ニ上リシカ、或ハ單ニ風説ニ止マリシカ、今之ヲ詳ニセズ。

* * * * *

正弘ハ言行中、世ノ儀表トナリ教訓トナルベキモノ少ナカラス、今之ヲ茲ニ載錄ス。

風采。

當時親シク正弘ニ接シタル家臣其風采ヲ記スル者アリ、曰ク『公身長ハ中脊ニシテ肥滿シ、色白ク、眼涼ヤカニ、髮黑ク潤ハシク、面相常ニ春ノ如ク賑ハシク、如何ナル塵泥ニ染リテモ王公貴人ト見ラルベキ容貌品格備リ、殊ニ仁愛温和ノ德ハ天稟ニテ、誰ヲ見テモ莞爾トシテ笑ヒ、言葉ノ温厚ナル、如何ナル鬼神モ降伏スベキ容貌ナリ

キ、而シテ常ニ事物ニ頓着ナキ大勇アリ、異變ニ逢ヒテ衆人驚駭スレトモ、公ノ容貌ハ平日ノ如ク泰然タリ、夫ノ亞墨利加使艦浦賀ニ渡來ノ時増上寺ニ出張ノ命アリシ故、近臣ナド大ニ騷キタレドモ、公ニハ平日ニ異ナラス、因テ一同靜リヌ、永ク顯要ノ地ヲ占メ、能ク人ヲ服セシメタルハ其德貌亦與リテ力アリシナラン。』

『開國始末』※安政三年ノ條、中根淑ノ評ニ正弘白面温容、年四十ヲ過ギテ少年ノ如シ、正睦黧顏豐肥、年紀五十餘トアリ。此年正弘三十八歲ニシテ、堀田正睦ハ四十六歲ナリキ。

勤勉。

正弘常ニ國事ニ勉勵シ、夙夜懈ラザリシハ近代ノ諸閣老中ニ在リテ其比極メテ稀ナリ、一例ヲ擧グレバ、毎朝登城ノ時、諸有司ノ謁ヲ乞ヒ事ヲ陳スル者數十人ニ下ラズト雖モ、毎ニ温顏ヲ以テ之ニ接シ、從容トシテ其言ヲ聞キ、毫モ倦色ナシ。正弘體軀豐肥、其謁畢ルニ

*〔芳蹟〕。

*一一七頁上欄。

及ビテ坐ヲ起ツノ後、其跡ヲ見レバ流汗席ヲ濡セリト云フ。舊來諸方ヨリ政府ノ指令ヲ仰ク者ハ其評議ヲ目付、勘定奉行等ニ命ジ、閣老多クハ其評決ヲ以テ指令スルノ例タリシモ、正弘ハ退城ノ後自邸ニ於テ必ズ之ヲ熟閲シ、間〻己ノ意見ヲ附シ、再三評議ヲ盡スヲ常トス。*

誠心。

外國ノ事ニ關シテハ當時議論甚ダ多ク、接見ノ日ニ於テ諸大藩主等正弘ヲ訪ヒテ詰問ヲ試ミ、往々激論ニ渉リ、時ニ或ハ過言ノ嫌ナキニアラザルモノアリ、然レトモ正弘毫モ動カズ、諄々トシテ利害ヲ說ク、其誠心自ラ人ヲ感ゼシメ、復タ激論ヲ續クルコト能ハザラシメタリト云フ。*

恭謙。

*〔星原〕下二一七三頁。

*〔芳蹟〕

※〔芳蹟〕

正弘閣老タルコト多年、威權年ニ加ハルト雖モ、恭謙ニシテ毫モ驕慢ノ態ナク、獨智ヲ弄セズシテ能ク衆言ヲ容ル、然レトモ下司ヨリ禀申スル事ニシテ錯誤アルトキハ、一々之ヲ指摘シテ採用セズ、只小事ハ概ネ之ヲ不問ニ置キ、敢テ追究セズ、人皆其度量ニ感ズ。毎日諸藩主等ノ面接ヲ求ムル者多シト雖モ、務メテ速ニ之ヲ引見シ、能ク其所言ヲ傾聽ス、日常重臣ヲ戒ムルニ、官威ヲ假リテ諸藩等ノ使臣ニ臨ムコトナク、又徒ニ長時間待タシムルコトナク、務メテ速ニ之ニ接見シ、温和丁寧ヲ旨トシ、其ヲシテ言ヲ盡サシムベキヲ以テス※

正弘首相ノ顯職ニ在リテ　幕府ヨリ特遇ヲ受ケ、虎ノ皮ノ鞍覆等ヲ用ヰルコトヲ許サレシニ、再三辭退ノ後之ヲ受ケシモ、一二回之ヲ用キタルノミニテ、其後ハ之ヲ用キス、川路聖謨其謙德ノ美ヲ稱揚シテ之ヲ嘉永元年ノ日記ニ載セタリ。

川路ノ日記*ニ云フ『阿部伊勢殿ガ特旨ノ供廻リヲ段々ニ減ゼラレ候テ御役中ハ用キラレジトノ由、コノ義ナドハ近來キカヌ美談ナリ。』

愼重。

凡ソ閣老ノ一顰一笑ハ動モスレバ人ヲシテ喜憂セシムルモノアルヲ以テ、正弘常ニ自重シ、言語ヲ愼ミ、然諾ヲ重ンジ、人ノ何事カヲ建言スルトキハ容易ニ可否ヲ答ヘズ、熟考ノ後採用スベキ事ハ直ニ施行ス。*

宏量。

正弘ニ親接シタル者皆其宏量大度ヲ稱ス。大久保忠寛曰ク『勢州ガ喜怒ヲ色ニ顯サヾルハ實ニ大臣ノ度量ナリ、一日、閣老、若年寄退出セントシテ既ニ玄關ニ至リシトキ、余ハ急事ヲ以テ呼ビ返シタルニ閣老等皆怒氣面ニ顯ハレタレド、勢州獨リ之ニ異リ、直ニ引返シ、毫

*〔川路〕一四五頁。
*〔諸家〕松平慶永說話。

モ迫ルコトナク、悠然トシテ余カ陳述スル所ヲ聽取シタリ。斯ク言ハバ或ハ諂諛ノ誹ヲ受ケンガ、實ニ近世ノ閣老ニテ度量ト云ヒ、識見ト云ヒ、勢州ノ如キ人ヲ見ス。安藤對馬守ハ誠ニ拔ケ目ナキ人ナリシモ、喜怒ノ烈シキ性質ナリキ、之ガ爲メニ自殺シタル人◎アリ。又某閣老ノ如キハ「オールコック」◇ト應接シテ辭屈シ、列席ノ大小目付手ニ汗ヲ握リタルコトアリ、勢州ナランニハ堂々トシテ應接ヲ爲シ得ベキナリ』。*

沈毅。

正弘急變ニ處シ未ダ曾テ驚駭セズ、*國家ノ大事ニハ聲色ヲ動カスコトナカリシガ、其憂色ヲ顏ニ顯シタルハ死刑執行ノ日ノミナリシト云フ。

寛大。

安藤信正萬延文久年間閣老タリ。

◎堀織部正利熙。

◇英國公使、安政六年以後三年間本邦ニ駐劄ス。

*〔諸家〕。

*〔芳躅〕。

*史談會記事（〔舊幕府〕五卷一號三二頁）。

正弘性寛大ニシテ人ノ過失ヲ責メズ、曾テ他家ニ贈ラントテ調理セル食品ヲ重詰トシ一室ニ置キタルニ、近臣誤リテ之ニ觸レ、悉ク床上ニ散亂シ、復タ贈品トシテ用非難キニ至リタレバ、其事狀ヲ告白シタルニ、正弘莞爾トシテ曰ク『然ラバ其儘ニハナシ難カラン、宜ク一同集リテ一盃傾ケヨ』ト、近臣且ツ恥ヂ且ツ感ズ、其家臣ヲ遇スルニ寛大ナルコト此ノ如シ*

近臣ノ中毎朝正弘ノ髮ヲ櫛ケヅル者三人アリ、其一人ハ極メテ細心ニシテ結髮ニ時間ヲ要スルヲ以テ、其人當番ノ日ハ正弘必ズ時ヲ早クシテ髮ヲ結バシム、他人之ヲ知ラズ、一夜正弘公務多端ニシテ深更將ニ寢ニ就カントス、近臣明日晨起ノ時ヲ問ヒシニ、例刻ヨリ早カリシヲ以テ、睡眠時間ノ短キニ過グルヲ言フ、正弘曰ク、明朝結髮ノ當番ハ某ナレバ、時間ヲ要スルヲ以テ、予ハ早起スベキナリト。正弘

*〔芳績〕

自ラ忍ビテ人ヲ恕スルコト概ネ此類ナリ。*

*〔懐舊〕行略七

仁愛。

正弘性仁愛ニシテ人ニ難事ヲ與ヘズ、自ラ奉ズルコト甚ダ薄クシテ能ク人ノ窮ヲ救フ、又能ク己ヲ虚ウシテ人ノ言ヲ用井、少者ノ言ト雖モ之ヲ棄テズ、若シ採リ難キトキハ諄々トシテ諭示ス、而シテ一旦決シタル事ハ決シテ之ヲ變セズ。

*『正弘性仁愛』以下〔芳蹟〕。

曾テ幕府ノ一卒公事ヲ以テ蝦夷ニ赴キ、狼ニ嚙ミ殺サレタル者アリ、其官長ヨリ之ヲ正弘ニ屆出デタリ、正弘ソハ誤ナルベシトテ再査ヲ命シタルニ、其言フ所初ノ如シ。然ルニ正弘又更ニ調査ヲ命ズ、是ニ於テ言者悟ル所アリ、改メテ病死トシ、因テ事ヲ了スルヲ得タリ。蓋シ士卒タル者狼ニ嚙ミ殺サレタリトノ屆ニテハ其家斷絶トナルガ故ナリ。此類ノ事少ナカラズ。*

安政三年、長崎ニ於テ外國ノ事ニ關シ困難ノ事起ル。目付淺野一學命ヲ受ケテ其地ニ赴キ（時ニ川村修就長崎奉行タリ）、使命ヲ終ヘテ歸ル、偶〻途ニ病ニ罹リ、江戸ニ着スルノ後危篤トナレリ、正弘乃チ淺野ノ同僚大久保忠寛ヲ使トシテ之ニ謂ハシメテ曰ク『能ク療養ニ勉ムベシ、公務中重病ニ罹リタルコトナレバ、子孫ノ事毫モ憂フルコトナカレ』ト。一家深ク正弘ノ厚誼ニ感ズ。*

廉潔。

賄賂ノ行ハル、ハ古今官界ノ通弊タリ。大久保忠寛曰ク『幕府ノ時賄賂頗ル權門ニ行ハレタリ、余一日勢州ニ面シ、談賄賂ノ事ニ及ブ、余ハ諸家賄賂ヲ取ラズト言フト雖モ、內實ハ皆行ハレ、假令ヒ主人取ラザルモ、家臣之ヲ取レリ、獨リ些少ニテモ賄賂ヲ取ラザルハ阿部家ト遠藤家ノミト言ヒシニ、勢州頷キ、余ガ家ニテハ決シテ賄賂ノ事ア

◎原書年月ヲ記セザレドモ、川村修就（對馬守）ガ長崎奉行タリシハ安政二年五月ヨリ三年十二月マデノ間ニシテ淺野ガ病歿シタルハ安政三年十二月ニアレバ、同年中ノ事ト認ム。

*〔緊要〕八ノ一、鈴木勝右衛門重胤說話。

若年寄遠藤但馬守胤統。

ルベカラズト思ヘドモ、今足下ノ言ヲ聽キテ愈〻意ヲ安ンジタリト言ヘリ、是レ事實ニシテ人ノ能ク知ル所ナリ。』*

*〔諸家〕。

孝心。

正弘ノ實母高野具美子剃髪ノ後持名院ト號ス、本所石原町別邸ニ住ス、正弘毎月二三回其居ヲ訪ヒ、物ヲ贈リテ之ヲ慰ス、他ノ藩主等ガ庶母ニ對スルト異ナリ、言語頗ル鄭重ナリ、重臣其孝心ニ感ジ、具美子ヲ禮遇スルコト君家ノ族人ニ準センコトヲ禀請セシニ、正弘ハ『予ガ實母ナルガ故ニ自己ノ孝養ハ當然ナリト雖モ、庶母ヲ我ガ家族ト同ク禮遇スルハ例ナキコトナリ』トテ聽カズ、因テ其事已ム。蓋シ公私ノ別ヲ重ンズルト謙讓ノ意トニ出ヅルナリ。*

*〔芳蹟〕。

* * * * * *

文才。

第四章參看。

*〔芳蹟〕。

謁者＝奏者番。

林大學頭述。

棕軒＝正精。

正弘文才ニ富ミ、書畫幷ニ歌詩ニ通ズ、其板倉勝明ニ答ヘタル書翰ノ如キ、儒臣ノ删訂ヲ經タリト言フト雖モ、亦其漢文ニモ通ズルヲ見ルニ足レリ、天保十年板倉ヨリ正弘ニ一*書ヲ贈リテ勇退アランコトヲ忠告セリ、曰ク。

去年十二月廿七日、僕獨坐寒窓、讀文丞相集、以爲、魏鄭公所謂俾臣爲良臣、毋俾臣爲忠臣、眞格言也、嗚呼所以令丞相不得爲良臣者、豈不千載之遺恨哉、廢書而嘆矣、乍承手書惠問、得聞起居吉祥、深慰鄙懷、且賜封內之名酒二陶、見其銘、則一日養氣、一日保命、皆足以戒僕之平生、敢忘德意、僕性惰慢、欲奉書通問、未及、反辱垂念、無罪可謝也、伏以我兄弱冠、任謁者、人皆美之、僕獨以爲、恐有廢學之患也、呂涇野以少年登高科、爲美官之故、其學問不及薛敬軒吳康齊、古人惜之、然我兄公事鞅掌之間、猶眷々于道、欲請林子以講學、令僕紹介、僕嘗聞、我兄好漢儒訓詁之學、不意請林子以從事程朱之學也、僕始受學物茂卿之徒、一旦聞程朱之說、悅而歸之、夫欲窺聖人之門墻者、不可不由洛閩之道也、我兄春秋尙富、苟志于此、豈特封民之幸而已哉、先君棕軒公、在大位若干年、公平臨下、未聞一毫有私欲、楊子所謂有是父必有是子者、非虛語也、蓋自古國

當時板倉勝明大阪城加番トシテ同地ニ在リ、篠崎小竹、後藤松陰等ト布衣ノ交ヲ爲ス。

*〔芳蹟〕。

家之廢亡、多因宰相不勝其任、雖人君所宜察、人臣尤不可不愼也、如王安石行新法、宋轍已南、賈似道爲相、宋室遂亡、當是時、雖偶有文丞相者、孤忠報主耳、所謂大木之仆、非一繩之所能繫、故曰、小人之使爲國家、菑害並至、雖有善者、亦無如之何、我兄有公輔之望、必能主敬窮理、舍利己之心、養利物之心、他日登巖廊據其所有、施之於政必將不愧先君之守正奉公也、若彼徒馳名利、先己而後君者、安石似道之流、而程朱之徒所深戒也、後之視今猶今之視古、我兄其察之、然僕來阪之後、半年于此、碌々莫所進歩、不勉己而勉人、不自揣之甚、我兄英敏、不以人廢言爲幸、謹呈三魚堂全集一部、以酬前日之厚惠、淸献自少年不爲科擧奪志、嶄然以聖賢實踐之學爲任、懲王學杳冥放蕩之弊、使後學滋知尊程朱、其有功于聖道也大矣、林子來會、淸談可羨、林子有近作詩文否、爲僕錄示之、輭風吹春、野梅破蕾、伏乞、爲國善加調護。

福山阿部侯執事　　板倉勝明再拜謹復

正月幾望。

正弘答書ニ云フ。*

正月十四日、所辱復書、以二月三日至、因審春寒履况佳裕、殊慰瞻企、目不腆封産、聊

先子＝正精●

典謁＝奏者番●

標問安之敬、乃辱三魚堂全集之貺以爲報、瓊瑤不啻、領之貪慙曷堪、陸先生初儒宗、痛矯陽儒陰釋之弊、居敬窮理、粹然一出乎正、其有功於世敎、人孰不尊崇之、僕雖不得窺其萬一、永置諸座右以爲學文、又承鎭撫之暇、讀文丞相集、深恨其孤忠報國不得爲良臣、是不獨恨丞相、亦慷慨乎世之爲相者不得其人耳、齒牙之餘、及先子與聞大政之時、而勗僕以續先緒效微衷、愛顧之厚至於此、敢不感佩、雖然先子多病、動輙不克待漏、以故無彰々報効、唯狷介自守、以沒世已、噫先子猶若是、況僕弱冠後未數年、一朝以蔭承乏典謁、樸樕之材、夙夜役々、唯不免罪戾是懼、又奚暇議乎論道經邦之大者哉、臨紙不覺顙泚而背沾也、若夫廢學之誡、則誠如所諭、反覆數四、未嘗不西鄕再拜感激乎切偲之至也、僕雖駑靡盬餘力、敢不痛加鞭策、林祭酒某日儼臨、來敎之辱、吾兄從臾之由、多荷々々、厥後再迎未果、豈敢曠吾兄厚意、實公私之不遑、是誠不能也、異日得閑、欲以屈駕請益、吾兄恕之、懇致此意、僕固不文、吾兄所請也、雖然一々高誨之隆、不可默而止、乃竭沒手筆、亦唯嬰兒學語、殆不可讀也、於是謀於一二儒臣、經幾雌黃、而纔飾其醜陋、猶且侏離鴂舌、惑吾兄聰明是懼、而愧怍失措、都祈諒察、春雪增寒、伏乞爲國爲家自嗇保重●

阿部正弘頓首拜復

安中板倉侯執事

*本書小島成齋筆寫板倉家所藏、年ヲ記セズ。

□ハ印ナリ。

以下三首正弘自筆短册阿部家所藏。

又板倉勝明ニ與フルノ書*アリ、玆ニ之ヲ錄ス。

辱惠手敎及新刻墨帖、々係先人所書李泰伯春夜宴桃李園序、其刻則吾兄厚意之所致、貴跋盡之矣、又加以剞劂之佳裝飾之美、先人亦當感愧於地下也、而況僕乎、且僕家所藏遺跡未有如此帖者、則永爲珍襲、豈啻拱璧哉、如手敎中所云、藏之名山、期不朽於千載、則僕將何辭答之爲乎、吾兄有取於先人至於如此、使僕知自振厲者固己存焉、其爲賜亦大矣、感佩之至不知所謝、謹呈舶來避暑錄話一部、非曰爲報也、秋炎未退、以此自適、是爲幸耳。

劣弟阿部□正弘□再拜

八月二十二日

安中侯足下

* * * * * *

垣夕顏

山かつのあれしかきねに咲初ていとゝはかなき夕顏の花

無　題

雁かねのおのかとこよを住捨てゝ山はるかに今朝や行らん

無題

ゆたかなる春の光にたゝえはやきみかみかけをしたふ鶯

竹*

すくなるをこゝろまなひにうつし植て友とそ結ふ窓の呉竹

元日*

千代かけてをさまる道に君とおみ身をあはせつゝ春をむかへむ

新春*（嘉永元年）

長閑なる君かあたりを春とてや鶯までもしたひ來ぬらん

新竹

見るたひによ長くなりていさましさおひ先見ゆる庭の若竹

籬菊*

花の親けふこきそめて行秋を庭にしめゆふませの白菊

待子規

さてもまたつひにはもらす聲なるをまてはつれなき子規かな

此度遠く馬乘わさを、こゝろみよとの御ゆるしを蒙りければ

人々とゝもにけふ鎌倉のやはたの御社にて馬をとゞめて

---

*此自畫賛一幅明治三十三年ノ頃、著者之ヲ東京日本橋某家ニ發見シテ讓リ受ケ、阿部家ニ贈ル、現ニ同家ノ所藏タリ。

*自筆勝家所藏。

*〔新伊勢〕卷四上。

*〔遠近橋〕卷十三。

つらなれる駒のゆきゝにことなさは道ある御代のためしなりけり

日光にて　（嘉永三年四月）

かしこくも仰かるゝかな天つちの光たふとき山の宮居を

裏見の瀧にて

雨のうちに見るはうらみの瀧なれやわきてもまさる今日のけしきは

華嚴の瀧を

幾千尋かきりも知らす岩根より落くる瀧の音もすさまし

霧降の瀧を

岩間より千すしもゝすし霧ふりの瀧の白糸けにたくひなき

杜鵑をきかせ給ひて

旅人の心うごかすほとゝ藝須何かゝへるにしかすとは啼

日光山を立せ給ふとき

二荒山宮居つくろふ司とてのほるも君の惠なりけり

以下六首（芳蹟）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

竹裏梅

綠竹深處數枝梅、相並梢頭雪蕚開、客到春園曾不識、驚看竹際暗香來。

以下四詩（芳蹟）

春江待渡

千絲楊柳不勝春、陣陣東風水色新、些立待舟心己倦、江頭却羨坐漁人。

雪後春晴

春風吹起忽忘寒、簷牙鑼邊雪猶殘、最愛南園野梅發、自携瓢酒上樓看。

三月朔於石原別館

朝散匆々不至家、直來別館看櫻花、傍人勿怪我心急、正恐春風損玉葩。

阿部正弘書畫 其二

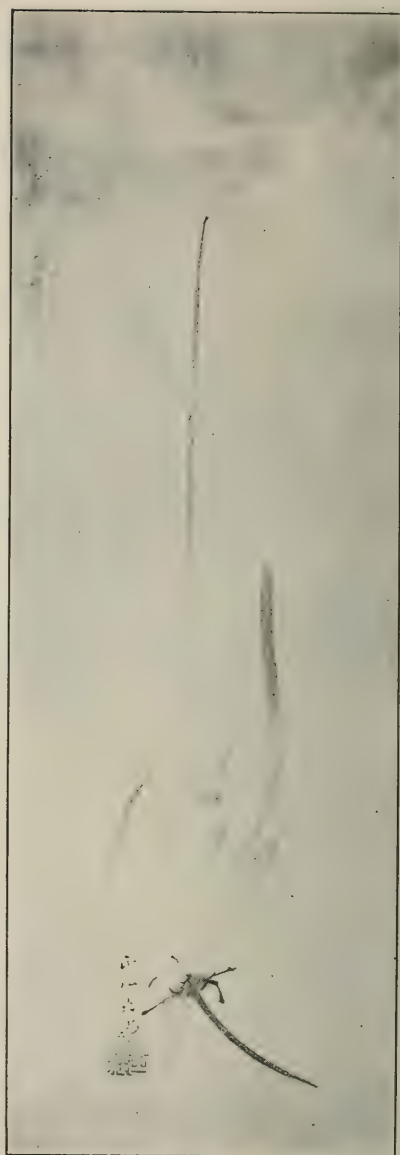
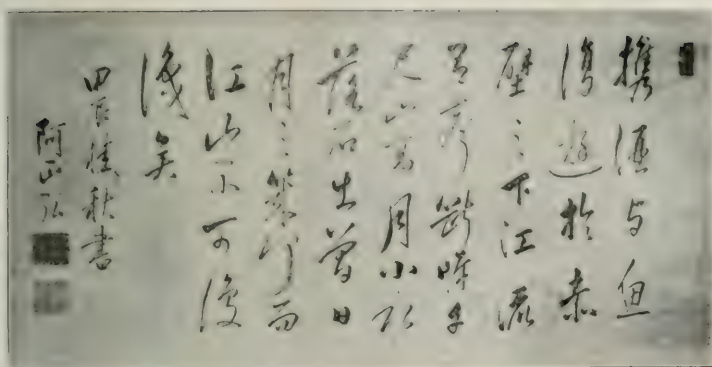
東京岡田氏所藏

東京武田氏所藏

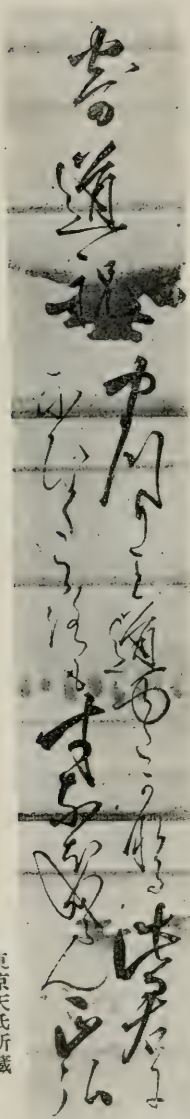
阿部家所藏

阿部正弘書畫　其一

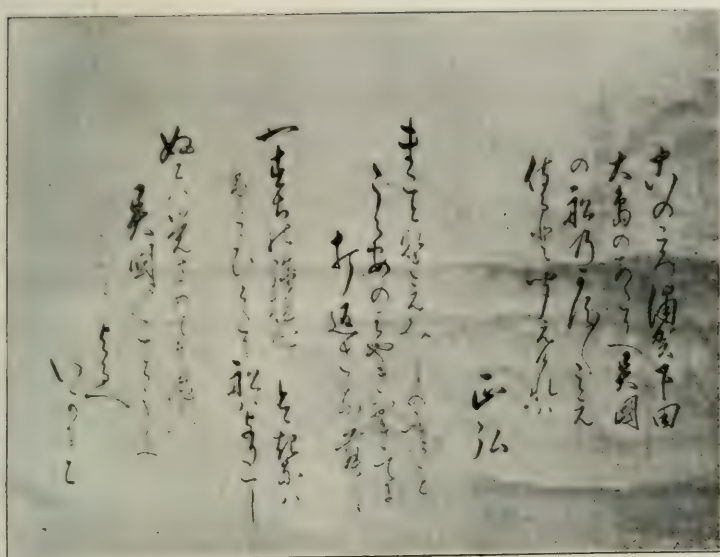
東京關氏所藏

東京篠田氏所藏

阿部家所藏

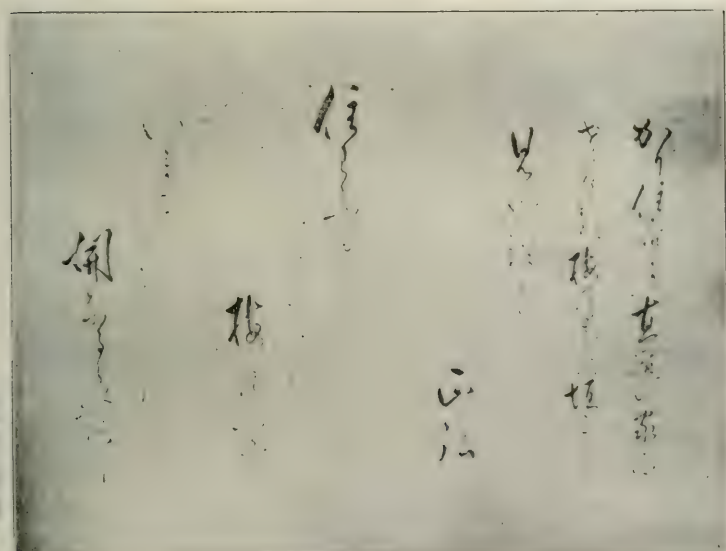
阿部正弘和詠歌　其一

東京武田氏所藏

東京天氏所藏

阿部正弘詠歌　其二

弘化嘉永年間、家士山岡衛士ニ與ヘタルモノ。

東京山岡氏所藏

安政三年春、丸山邸ノ假居ニ在リ、其隣地ニ住セル家士武田小藤太直道ノ爲ニ書シテ與ヘタルモノ。

東京武田氏所藏

⊗第十一章乃至二十章ヲ見ヨ。
◇弘化嘉永年間。

第三十五章。逸事。結論。

最初攘夷説。　家臣中ノ攘夷家。　攘夷家ノ諫死。　蘭書ノ講義。　開國説。　最初ノ條約ニ對スル非難。　人物拔擢。　速智。　容諫。　大地震。　奇僧。　獄舍巡見。　蝦夷地視察。　諷刺的落書。　諸家論評。　結論。

正弘ノ言行中世ノ儀表トナリ教訓トナルベキモノハ前章ニ採記シタリ、今又其私生涯幷ニ公生涯ニ關シテ世ニ傳フル所ノ逸事ヲ左ニ收錄ス。

最初ハ攘夷説ヲ主持ス。

正弘最初ハ實ニ攘夷説ヲ主持タリシガ、其後大ニ悟ル所アリ、安政初年ヨリシテ全ク開國説ニ變ジタリ。⊗其攘夷説ヲ主持シタルトキ、◇書シテ家臣ニ與ヘタル詠歌アリ、左ノ如シ。

このころ浦賀下田大島のあたりへ異國の
船のかす〳〵みえ待ると聞えければ

まことなきえみしのふねをうら安のはやきおきてに打返さなむ
一すちの彌猛心しさふきなはふたゝひさたに船はよりこし
ぬとは覺めさめてそ思ふ異國のことうき舟のよるへいかにと

嘉永六年、米艦一タビ退去ノ後、正弘日夜憂慮ノ狀アリ、一夜重臣某事アリテ寢室ニ至リシニ、正弘端坐シテ默然タリ、某恐懼シテ其故ヲ問フ、正弘曰ク『外艦一タビ退クト雖モ、將來ノ事亦測ルベカラズ、眞ニ憂フベキ事ナリ』ト、其詠歌（前ニ記ス）ヲ書シテ之ニ與ヘタリト云フ＊。

家臣中ノ攘夷家。

家臣石川和介ハ原來儒生ナルヲ以テ、其說或ハ頑固ヲ免レザルモノアリ、正弘曾テ大久保忠寛ニ謂フテ曰ク『目下攘夷論ノ熾ナルニ

『まことなき』一ニ『よるべいかに』、『うら安』一ニ『日本』トアリ。『ことうき』一ニ『たゆとふ』トアリ。

○語句些少ノ變更アリ、右上欄ニ註記スルガ如シ。

＊『嘉永六年』以下〔芳蹟〕。

○安政元年、目付海防掛トナリ、右近將監ト稱シタル頃ノ事ナリ。

ハ頗ル困却ス、他家ハ姑ク措キ、内部ニモ攘夷論アリ、現ニ余ガ愛臣石川和介ト云フ者アリ、動モスレバ攘夷論ヲ主張ス、足下請フ彼ヲ說諭シテ其頑論ヲ棄テシメンコトヲ』ト。大久保因テ石川ヲ招キ、諄々トシテ說ク所アリシモ、仍ホ頑トシテ聽カズ。大久保後年人ニ語リテ曰ク『余ハ石川ノ人ト爲リ頗ル篤實ナルヲ認メシガ、當時攘夷ノ行ヒ難キコトハ了解シ得ザリシガ如シ』ト。*

*〔諸家〕大久保一翁說話。

山岡八十郎ノ諫死。

山岡八十郎ハ阿部家ノ世臣ナリ、元締役トシテ福山ニ在リ、人ニ語ルニ近年外夷頻々侵來ノ事ヲ以テシ、切齒扼腕ス。安政元年江戶移住ヲ命ゼラレ、三月藩邸ニ至ル。時ニ米國使節ト條約締結ノ事アリ、應接官吏ノ多ク彼ニ讓步ストノ風說ヲ聞キテ憤激甚シク、脫走シテ米艦ニ入リ使節ヲ刺サント欲ス、其友切ニ之ヲ止ム。四月、山岡書

ヲ正弘ニ呈シテ攘夷ノ議ヲ決センコトヲ請フ。

黑船渡來ノ儀ニ付昨年御直書ヲ以テ仰出サレ候御趣意ノ趣、毫髮モ御國體ヲ汚サズ、身命ヲ抛チ汚名ヲ末代ニ殘サヾル樣ニトノ御事、有リ難ク存シ上ゲ奉リ候。扨異船御取扱ノ御模樣伺ヒ奉リ候處、殊ノ外御念入ラセラレ候御事ノ由、御屋敷ヘモ鐵砲、船◎幷火爐等指上候趣、且又彼神奈川滯船中段々日本ヲ輕蔑イタシ候箇條モ之アルヤニ相聞申候、畢竟平穩ノ御取計ト申ス塲合ヨリ、只事ノ生ゼザル樣ニト計御取計御座候御樣子、誠以案外至極ニ存シ奉リ候、禽獸ニ齊シキ蠻夷ノ贈物ヲ御居間書院抔ヘ差置カレ候儀誠以如何敷御事ニ存シ上ゲ奉リ候。アメリカ計ニモ之ナク、諸蠻夷渡來イタシ候時ハ其度毎ニ御固メ御人數指出サレ候時ハ、公儀ヲ初メ奉リ、諸藩ノ費一方ナラズ、上下共困窮ニ落入申スベク候、因テ只今交易等ノ儀ハ御斷リ成サセラレ候テ、彼ヨリ兵端ヲ開キ候ヘバ、直樣決戰ト御覺悟成シ置カレ候ヘバ、其方御勝チト存シ奉リ候、萬々一ニモ一敗取リ返シ難シト申事之アリ候時ハ、將軍樣ヲ初メ奉リ、御家門樣及ビ御上御家臣殘ラズ戰死ヲ遂ケ候迄ニテ、德川樣及御當家ノ御申分ハ相立申スベク候。*

正弘此書ヲ見テ其志ヲ嘉ミスレドモ、固ヨリ上書ノ採否ヲ告グルヲ要トセズ、山岡益〻悲憤ニ堪ヘズ、更ニ謁見シテ陳述センコヲ請

◎『バッテーラ』即チ端艇ナリ。

*福山町住山岡富之助(八十郎孫)所藏上書控ヲ摘錄ス。

明治二十四年山岡八十郎靖國神社ニ合祀セラル。

※明治三年福山藩知事ヨリ太政官ヘノ報申書。大森操兵衛撰山岡八十郎傳。

(第二十三章蕃書調所ノ條參看。

フ。藩法重臣ノ外平日謁見ヲ許サズ、然レトモ破格ヲ以テ特ニ其請ヲ許ス。山岡偶、頭瘡ヲ患ヒ、謁見スルコトヲ得ズ、而シテ血氣益、昂進シテ瘡益、甚シキヲ加フ、遂ニ最後ノ上書(其趣旨前日ノ上書ニ同シ)ヲ遺シ、屠腹シテ死ス、時ニ年三十九、實ニ八月二十四日ナリ。有司其君命ニ由ラズシテ擅ニ自殺シタルヲ以テ狂亂ノ所業トナシ、藩法ニ依リ家祿(百二十石)ヲ半減センコトヲ稟議ス、正弘其事情憫察スベキモノアリ、尋常狂亂ノ例ニ依リテ處置スベカラズトテ、家祿ヲ減ズルコトナク、其嗣子ニ給與セシム※。正弘攘夷論ヲ却ケテ而シテ攘夷論ヲ唱フル士ヲ惡マズ、其局量亦大ナリト謂フベシ。

蘭書ノ講義。

杉亨二ハ安政二年蘭學ヲ以テ正弘ニ徵サレタル人ナリ、後ニ當時ノ事ヲ語リテ曰ク『余ガ阿部家ニ聘セラレタル後、一日龍ノ口邸ニ

地圖。文法書。聯邦

於テ勢州ニ謁ス、勢州袴ヲ着シテ一室ニ在リ、余ノ進ムヲ見テ、今日幸ニ寸暇アリ、汝ニ面スト言フ。勢州人ト爲リ温厚ニシテ和氣掬スベク、一見大人君子ノ風アリ、余ノ壯年氣鋭ナルモ勢州ヲ見テ敬意ヲ生ジ、頭自ラ下レリ。時ニ勢州ハ獨逸「ゴツタ」版『ハンド・アトラス』ヲ取リテ机上ニ置キ、余ニ講義ヲ命ズ、余乃チ圖ヲ指シテ説明ス、勢州大ニ感喜シテ微笑シ『日本ハ如何ニモ小ナリ、予ハ世界ノ形勢ニツキテ稍發明スル所アリ』ト言ヒ、次ニ『グラムマチカ』ヲ出シテ講義ヲ命ズ、因テ和蘭ノ文法ヲ説明シタルニ、其文理ノ巧妙ナルヲ感稱シ、侍坐ノ公用人ニ向ヒテ『斯ク外國ノ文字ヲ讀ミ得ルハ全ク勉強ノ故ナラン、汝モ亦之ヲ學ビテハ如何、原書ハ何ニテモ入用ノ者ヲ註文シテ取寄スベシ』ト言ヒキ。

勢州ハ徳川政府ノ衰フルヲ見テ、何カ良策ハナキヤト人ニ命ジテ考究セシメ、蘭文地理書ニ獨逸ノ『コンフェデルル』

ノ制度ヲ載スルヲ聞キ、ソハ妙案ナラント言ヒタリト聞ケリ』*

開國說可認。

大久保忠寬曰ク『余ガ長崎出張ヲ命ゼラレタル時、勢州ノ邸ニ至リテ會見ヲ乞ヒ、攘夷ノ天理ニ背ケルコトヲ披陳シ、一首ノ歌（あるをあたへなきをみつかせあめの下の民をめぐみの春はきにけり）ヲ口述セシニ、其心得ニテ宜シケレバ、長崎ニ赴キ精勤セヨトテ、拙詠ヲ望マレタルニヨリ、其席ニテ筆シテ呈シタリ。其後余ハ病ノ爲ニ遂ニ長崎ニ赴カザリキ』*。

最初ノ條約ニ對スル非難。

最初開交通商條約ヲ締結セシメタルハ實ニ、正弘ナルヲ以テ、其非難ハ正弘一身ニ集リ、啻ニ當年ノミナラズ、延イテ後年ニモ及ベリ。文久二年閏八月廿八日、横井平四郎外國奉行大久保忠寬ニ向ヒ政

*史談會記事（〔舊幕府〕五卷一號三一頁〔三四―五頁〕。杉先生講話集一四―五頁。

*〔諸家〕大久保一翁說話。

熊本藩儒士横井時存小楠ト號ス、當時越前藩ニ聘セラレテ慶永ノ顧問タ

り、本文ニ記スル所併セテ此人ノ外交論一斑ヲ窺ノベシ。

大久保ハ此時越中守ト稱ス、外國奉行兼大目付タリ。慶永此時春嶽又大藏大輔ト稱ス。

前後矛盾ノ外交論。

事總裁松平慶永ノ意見トシテ條約破棄及ビ諸侯會議ノ事ヲ當路ニ提議センコトヲ求ム、大久保直ニ之ヲ後見職一橋慶喜及ビ諸閣老ニ陳述セシニ、閣老ハ之ヲ可トシテ異論ヲ唱ヘズ、慶喜獨リ之ヲ不可トシテ曰ク『今ヤ萬國天地ノ公理ニ基キ互ニ好ヲ通ズ、獨リ日本ノミ鎖國ノ舊套ヲ固守スベキニ非ズ、故ニ我ヨリ進ミテ海外各國ト通交セザルヲ得ズ、余ハ此趣旨ヲ以テ闕下ニ上奏セント欲ス、畢竟今日ノ條約タル、最初阿部伊勢守ガ鎖國ノ舊見ヲ脱セズシテ姑息ノ處置ヲ施シヽヨリ、次ニ堀田備中、井伊掃部ノ輩其姑息ヲ襲ヒ、遂ニ外夷ノ虚喝ニ怖レテ、勅許ヲモ俟タズシテ調印スルニ至リシモノナレバ、不正ト言ハヾ不正ナルベケレトモ、今之ヲ奈何トモスルヲ得ズ』ト。＊茲ニ參考スベク又注意スベキハ、慶喜ガ米使「ペリ」渡來ノ時、鎖國ノ舊見ヲ脱セズシテ極端ノ拒絶論ヲ唱ヘタルコトニシテ、其事ハ當時ノ

＊「文久二年」以下「續再夢」卷一、七十五葉表。

答議書ヲ以テ之ヲ證スルニ足レリ。

慶永其意見ノ行ハレザルヲ以テ辭職ノ意ヲ決シ、同年十月十三日、重臣及ビ横井ヲ召ビテ之ニ諮リ、病ト稱シテ辭表ヲ幕府ニ呈ス、其文中『刑部公ノ説ニ云フ、外國條約ニ關シテ困難ノ狀勢トナリタルハ井伊掃部頭幷ニ久世大和守、安藤對馬守ノミノ罪ニモアラズ、其源ニ遡ルトキハ、嘉永六年米國使節渡來ノ時、其兵威ニ畏縮シテ和交ヲ許容シタル阿部伊勢守以來ノ事ナリト思惟ス、故ニ伊勢守以下其責ニ任スベキ事ニシテ、必スシモ井伊、久世、安藤ノミノ罪ニアラズ』トアリ。

開國幷ニ鎖國ノ問題ニ關シテハ既ニ第十一章乃至第二十章ニ詳説セル所茲ニ覆論スルノ要ナシ、唯現在ノ政治問題ヲ議スルニ當リ、只管責ヲ過去ノ當局者ニ嫁スルハ、爲政者トシテ自家ノ責任ヲ逃レ

⊙第十三章ニ見ユ。

刑部卿一橋慶喜。

*『同年十月』以下〔續再夢〕卷二、二二葉表。

本章結論併看。

難ヲ避ケントスルノ嫌ナキニアラザルカ、吾人ハ却テ其人ノ德義ノ爲ニ取ラザルナリ。

先見。

堀織部正。

堀利熙ハ少壯氣鋭ノ人ナリ、其箱館奉行タリシ時、一日城中ニ於テ正弘ニ謁シ、公事ヲ談ス、其所見相合ハズシテ激論ニ涉リ、正弘憤然トシテ起チ席ヲ去ル、堀其室ニ退キ、同僚ト議シ、明日ヨリ病ト稱シテ登城ヲ罷メントス、時ニ小吏來リテ曰ク、伊勢殿ノ言ナリ、堀ハ明日モ登城スルナラント、是ニ於テ堀始テ心ヲ安ンジ、正弘ノ寛大ヲ稱ス。　**此**頃正弘堀ノ同僚ニ謂フテ曰ク、『堀ハ才能アリト雖モ、性質短慮ナレバ、或ハ終ヲ全ウセザルニ至ラン、同僚タル者宜ク注意スベキナリ』ト。後年堀果シテ事ヲ以テ自殺ス、正弘ノ言ヲ聞ケル者其先見ノ明ニ服ス。*

*〔諸家〕松平近直說話。

人ヲ見ルノ明。

磯村勝兵衛ハ持筒組與力（銃手）タリシ人ナリ、正弘閣老タリシトキ之ヲ拔擢シテ箱館調役出役ト爲ス。此人文事ニ暗ク、唯柔術ト長沼流兵學ニ志シ、膽力アリ、其俄ニ拔擢セラレタルヲ悅ビテ箱館ニ赴任ス。時ニ外船該港ニ入ル、諸吏愕然トシテ爲ス所ヲ知ラズ、磯村獨リ毫モ怖レズシテ船中ニ至リ、其來意ヲ問ヒ、直ニ退去センコトヲ諭ス、外人之ヲ諾シ、磯村ノ佩刀ヲ一見センコトヲ乞フ、磯村乃チ其刀（加藤綱俊作）ヲ拔キ、傍ニアリシ鉄製ノ燭臺ヲ寸斷シタル後之ヲ示セシニ、彼稍〻恐怖ノ色アリ、刀ヲ一見シテ返シタリ。斯クテ外人薪水ヲ得、數日ニシテ去ル、人皆磯村ノ威嚴ヲ以テ外人ニ接シ、其處置ノ當ヲ得タルヲ稱シ、且ツ正弘ノ人撰ノ誤ラザリシヲ感ズト云フ。＊

火災ノ時ノ速智。

＊〔繁豐〕八ノ二。

嘉永元年十二月二十三日和田倉門外龍ノ口官邸隣地備前藩邸ヨリ出火シ、官邸延燒ス、正弘急ニ非常服ヲ着シ、直ニ登城シタレトモ、自邸火災ニ罹リタルヲ以テ、直ニ歸邸ヲ許サル、此時邸舍既ニ過半灰燼トナリタレトモ敢テ驚カズ、從容トシテ來訪者ニ應對シ、又近臣ヲシテ園丁ニ命ジ泉池假山ヲ造ルノ設計ヲ爲サシム、近臣等之ヲ怪ミ、此ノ如キ事變中ニ遊樂ノ計ヲ爲スハ何事ゾト窃ニ顰蹙スル者アリシガ、火熄ミテ後右設計ニヨリ燒土瓦片ヲ一處ニ堆積シ、之ヲ蔽フニ池ヲ堀リタル土壤ヲ以テシタレバ、燒跡速ニ片付キ、且ツ庭園ノ風景ヲ添ヘタレバ、人々其遠智ニ感ジタリ。官邸燒失ニヨリ、一時大名小路酒井邸ニ移住シ、官金一萬兩借用ヲ許サル、此際日々諸侯伯ヨリ木材等ヲ贈リタル數實ニ夥多ナリシト云フ。正弘從來江戸ニ火災ノ多キヲ憂ヘ、職司ニ命シ、各戸ニ諭シテ火災豫防ノ設備ヲ爲サ

シム、因テ其在職中ハ大火ニ及ブコト極メテ稀ナリキ。

大地震。

安政二年十月二日夜、地大ニ震フ、正弘官邸ニ在リテ未タ寢ネズ、徐ニ戸ヲ開キ庭前ニ出ヅ、出ヅルノ後忽チ家屋傾倒ス、近臣馳セ來リテ正弘ヲ索ム、正弘樹下ニ立チ、呼ハリテ曰ク、予ハ此處ニ在リト、近臣意始メテ安シ、正弘直ニ衣服ヲ改メ（重臣某曾テ正弘ヨリ授ケラレタル所ノ繼裃（ツギカミシモ）ヲ取リテ之ヲ捧グ）、家士數人ヲ從ヘ、騎シテ急ニ登城シ、大將軍ノ安否ヲ問ヒ（府城ハ震災甚ダ輕シ）、歸邸ス。此時夫人謐（シヅ）子始メテ倒家ノ下ヨリ出ヅ、侍女死スル者七人、正弘邸中ヲ巡視シテ火災ヲ防ガシメ、又途次臣下ヲ見テ慰問ノ語アリ、衆其人ヲ視ルノ厚キニ感ズ。　**官**邸震災ニ罹リテヨリ、正弘駒込邸内ノ誠之館中ニ假居シ、府城ニ至ルマデ一里許ノ距離ヲ日々乘馬ニテ往來セリ。*夫人

*『嘉永元年』以下〔芳蹟〕。

モ亦假居ニ在リ、其狹隘ナル、客ヲ延クノ室モナキ程ナリキ。*

此大地震ノ時、第一ニ登城シタルハ正弘ナリ。其後每夜紋付ノ寢衣ヲ着シテ就眠セリ、是レ急速登城ノ準備ナリ。*

能ク諫ヲ容ル。

正弘常ニ能ク臣下ノ諫ヲ容ル。天保十年ノ事ナリキ、愛妾孕娠シ、出產近キニアラントス、其居室狹隘ナルヲ以テ、之ヲ增築セントテ命ジテ其費用ヲ豫算セシメタルニ、金三百兩ヲ要スベシト云フ、重臣關平治右衞門無益ノ費用ナルヲ以テ增築ヲ中止センコトヲ請フ、然レトモ既ニ木材ヲ搬入セシメタル後ナレバトテ正弘輙ク聽カズ再考ヲ命ズ、關諫メテ曰ク『費額ハ必シモ多シトセサレトモ、頃日節儉ノ令出デ、主職ノ者モ其趣旨ヲ奉戴シテ心力ヲ竭セル際ナレバ、宜シク中止シタマフベシ』ト。正弘忽チ悟リテ曰ク『實ニ然リ、予過テリ、

*〔昨夢〕上三三一—二頁。

*〔諸家〕松平慶永說話。

予過デリ、斷然中止セヨ』ト。既ニシテ長女淑子生ル、ニ及ビテ之ヲ長屋ニ住居セシメタリ。

其愛妾ノ性質不良ナルヲ以テ、近臣齋藤貞兵衞諫メテ之ヲ去ラシメントス、正弘常ニ反シテ其諫ヲ聽カズ、齋藤切ニ諫メテ曰ク『公年尙ホ少、加フニル夫ノ婦人ニ子アリ、之ヲ去ルハ人情トシテ忍ビタマハサル所ナラン、然レトモ君家ニ不利ナル者ナレバ、請フ速ニ之ヲ去リタマヘ』ト。正弘曰ク『汝ノ言フ所切ナレバ、汝ニ對シテ之ヲ去ランノミ、只予ガ出仕不在中ニ之ヲ處置セヨ』ト。近臣因テ其言ノ如クス、蓋シ是レ尋常ノ人ニアリテハ能ク爲スヲ難ンズル所ナリ。*

*〔芳蹟〕

正弘ト奇僧。

正弘一日同僚堀田正睦ト共ニ騎行シテ城西高田ノ馬場ヲ過ギ、馬ヨリ下リテ路傍ニ憩フ、偶〻一僧アリ其前ヲ行カントス、從士之ヲ

止メテ其帽ヲ脫セシム、僧問フニ貴人ノ何人ナルカヲ以テス、從士老中阿部殿ナリト答フ、僧曰ク、請フ其阿部殿ニ見エントト、直ニ其面前ニ進ミテ一揖シ、尊公ハ阿部殿ナリヤト問ヒシニ、正弘然リト答フ、僧曰ク『僧侶ノ帽ヲ冠スルハ尊公等ガ衣冠ヲ着スルトキ冠ヲ用キルニ同ジ、縱令貴人ノ前ナリトテ脫スベキモノニアラズ』ト。正弘曰ク『ソハ從者ノ無禮ナリ、其儘通行シテ可ナリ』ト。僧乃チ復タ一揖シテ去レリ。聞ク者正弘ノ人ヲ遇スルコト寬ニシテ忤ハザルヲ稱ス。*

*〔太平記〕十一編一二八―九頁。

獄舍巡見。

幕府ノ制、閣老獄舍巡見ノ事アリ、此時ハ囚人閣老ニ向ヒテ隨意ニ苦情ヲ訴フルヲ許セリ、故ヲ以テ獄吏ハ巡見ヲ厭ヒテ其事ナカラシメンコトヲ務ム。正弘曾テ巡見シタルトキ、囚人種々ノ事ヲ白シ、食物ノ事ニモ及ビタレバ、正弘ハ獄吏ニ命ジテ食物ヲ取リ、其少許ヲ

＊〔諸家〕松平近直說話。

〇第十八章ニ見ユ。

◇〔近事鈔〕ニ三月ニ繫グルハ誤。

＊『同僚ト謀リ』以下〔近事鈔〕卷三。〔內藤景堅日記〕安政三年五月。

口ニシテ味ヲ試ミタリ、是レ從來曾テ無キ所ナリトテ、之ヲ見聞スル者其注意ノ深キニ感ジタリト云フ。＊

蝦夷地視察。

露國ト北地境界ノ問題起リテヨリ、正弘大ニ蝦夷ノ事ニ注意シ、先ヅ官吏ヲ遣シテ其地ヲ巡視セシメ、〇開拓及ビ警備ニツキテ施設スル所アリシガ、又同僚ト謀リ、各藩士數人ヲ派遣シテ地理民情ヲ視察セシムルニ決シ、安政三年五月、◇正弘其家臣石川和介、寺地強平、山本橘次郎等ヲシテ該地ニ赴カシム、石川等東蝦夷概略ノ踏査ヲ終リ、此年十一月歸府ス。翌年三月、吉澤五郎右衞門及ビ石川、山本ノ三人又西北蝦夷巡視ノ命ヲ奉シテ發途ス、＊吉澤等箱館ヲ經テ西蝦夷ヲ過ギ、北蝦夷(樺太)ニ航シ、其東西海岸ヲ巡視シ、歸途東蝦夷ノ白生(シラオイ)ニ達セシトキ、偶正弘ノ訃至リシヨリ日々急行シ、九月歸府ス、

〃吉澤五郎右衞門筆記。

＊第一ニ載スルハ著者ノ近ゴロ記憶スル所ヲ錄ス。

じやうきせん—蒸氣船—上喜撰（茶銘）。

山本ハ途ニ死ス。※

諷刺的落書。

米艦渡來以後、諷刺的落書ノ類、世ニ行ハレタルモノ殊ニ多ク、其中時勢ノ觀察上參考トナルベキモノナシトセズ、因テ今其嘉永安政年間ノ作ニ係ル數種ヲ茲ニ錄ス。

あべ川をペロリとなめてじやうきせん※。

阿部川はきなこをやめてじやうきせん。

阿部川は名物ほどの風味なし、じやうきせんには下びたお茶ぐわし。

日本を茶にして來たか蒸氣船、たつた四はいで夜もねられず。

暑中にもひや汗流す奉行衆、辰の口へといそぐ早舟。

いにしへの蒙古の時とあべこべで、波かせたてぬ伊勢の神風。

いにしへの伊勢を恐るゝ唐人も、今はあべこべ伊勢がおそるゝ。

かけ落をしても行たくお伊勢さん、
なぶられに來る丸山の客。

備福。
魯西。

ないしよではかうゐきなぞときめておき。　老中。
五千俵のんだはおれも不覺なり。　水老。
安政二年阿部邸表門貼紙。　（以下三首）
斯くまでにかゝるへきとは思ひきや、弓矢とる手にゲベルもてとは。
こたびやごとなき仰のいなみかたくて。
心にもあらで異なる國人の、いさをし學ぶ身こそつらけれ。
蘭學てふことの世に行はるゝとて。
すなほなる道をばよそにかに文字の、横ざまにかく世にもなるかな。
其他當時ノ作ニ係ル種々ノ諷刺的文篇ニモ多クハ阿部或ハ伊勢或ハ福山等ノ名字見ユ（其間水戸ノ名ヲ交ユルモノアリ）、概シテ誹謗ノ意ヲ寓セザルハナク、往々造言虚説ヲ混入シテ甚シク罵詈惡言ヲ極ムルモノアリ、亦以テ當時正弘獨リ政權ヲ握リ責任ヲ有シタルヨリ、自ラ攻撃ノ衝ニ立チタルヲ觀ルベキナリ。

* * * * * *

ゲベール（蘭語Geweer）＝小銃。
⊗多ク『側面觀幕末史』ニ載ス。

以上記スル所ノ逸事皆多少ノ趣味アラザルハナシ、以テ正弘ノ人ト爲リヲ察スルノ資料タラン。茲ニ本書ノ局ヲ結ブニ當リ、當時親シク正弘ニ接見シタル人々ノ論評及ビ當年幷ニ後年ニ成レル諸書ノ論評ヲ觀察スベシ、之ヲ一閱セバ其中亦或ハ參考トスベキモノナキニアラザルヘシ、因テ毀譽褒貶ヲ問ハズ、共ニ左ニ收錄ス。

諸家論評。

正弘ノ歿スルヤ、知ルト知ラザルトヲ問ハズ、之ヲ聞キテ惋惜セザルハナシ。島津齊彬曰ク『阿部ヲ失ヒタルハ天下ノ爲ニ惜ムベキ人物ナリ』又曰ク＊『阿部ガ世ヲ去ルノ後、阿部ホドノ力量ノ閣老ナク、皆弱キ人々ナリ。』

井伊直弼ガ正弘ヲ評シタルノ語亦注目スベシ。正弘病歿ノ時、井伊偶〻彥根ニ在リ、其知友石谷穆清ヨリ其報ヲ得テ之ニ答フルノ書ニ

＊安政四年七月松平慶永ヘノ書（舊幕府一四卷七號一九葉上段、二二頁下段）。

井伊掃部頭、彥根藩主。石谷因幡守、初鐵之丞。當時勘定奉行タリ。

曰ク。

『阿部病氣ノ處遂ニ遠行ノ由、サシモノ英雄モ是非ナキ次第ニ候、右ニ付御高見ノ通リ、天下ノ御大事此時ト存シ候、早々堀田ヘ群集ヲ成シ候趣、夫ニ付小子モ何カ名ヲ付、早ク參府イタシ、同所ヘ助力致候ハヾ、忠節ニモ相成ルベキ段御心添ニハ候ヘ共、阿部遠行ト承リ候ヤ否ヤ早參府ト申モ少ミ落着申サズ候、其上來月ハ是非參府致スヘキ筈云々。』※（摘要）

或ハ云フ、正弘嘗テ井伊直弼ヲ評シテ一種ノ人物ナリト言ヘリト。*又云フ、安政元年ノ頃、或人井伊ヲ薦メテ入閣セシメントシタルニ、正弘ハ井伊ノ人ト爲リ苛酷ニシテ宰相ノ器ニ非スト爲シ、其言ヲ採ラザリシト。※

安政四年六月江戸越前藩邸中根靱負⊗ヨリ在福井橋本左内ヘノ書*中ニ云フ『福山侯ノ捐館、天下ノ大勢モ如何變換致スヘクヤ量リ難キ時機到來ト相成候。是迄ノ處ニテハ天下ノ勢モ大抵愚見ノ內ヲ出テス、又福山侯ノ援助之アル故、氣張居候ヘトモ、別條ノ次第故、違算失望此上ナキ事ト相成申候。』

※〔井伊〕二六八―九頁。

*史談會記事（〔舊幕府〕五卷一號三一頁）。

※〔諸家〕杉亨二ガ公用人渡邊總兵衛ヨリ聞ク所ナリト云フ。

⊗後雪江ト改ム、名ハ師質、越前藩側用人。

*〔橋本〕一三七頁。

（昨夢紀事）＊　此比閣老ノ全權福山侯ハ幸ニ御近親ニモ坐（オハ）セシ故、幕府ノ御事ハ何ニ付テモ御心隈ナク仰合サレシカバ、侯モ公㊀ノ御誠忠ノ御程ハ殆ト御甘心（マヽ）アリテ頼モシキ人ニオボシ、変リ給フ御事ナリ。此侯ハ温厚良善ニシテ、シカモ才識宏遠ニ坐セシカバ、御年廿五ニシテ濱松侯革弊ノ新政顚覆ノ後ニ丁リ閣老ノ執權ニ庸ラレ、衆ヲ容レテ能ク人才ヲ擧ケ用ヒ給ヒシ故、人ノ思ヒヨリ奉ル事雙ブ方ナキ御勢ナリキ。總テ寛優和平ヲ專ラトシ給ヘル故ニ、外國ノ事件ナトニ就テハ無斷（マヽ）ノ失策モ御座スル樣ニ申ナセシ條々モアリシカド、此侯ノ御座セシ程ハ幕府ノ御威光モ重リカニテ、諸侯モ服従シ、天下靜謐ナリシニ、此侯失セ給ヒシ後ハ、幕府ノ御事モ、外國ノ事共モ、歳月ヲ經ズシテ穩カナラズノミ成行ケレバ、此侯ノ宰執ノ才德雙ビナク坐セシ事ハ、失セ給ヒテノ後ノ有樣ニテ世人モ初テ思ヒアタレル事ナリケリ。

（諸家說話）　市來四郎曰ク、西郷隆盛常ニ余ニ語リテ云フ、幕府近來ノ名閣老ハ水野越前守ト阿部伊勢守ノ二侯ナリ、水野侯ハ過嚴ナリシヲ以テ失敗シタレドモ、阿部侯ハ能ク永遠ノ目的ヲ立テ、之ヲ徐々ニ行ヒタルヲ以テ成功シタリト。

勝安芳曰ク、勢州逝去ノ後、幕府ノ厄運極難ニ陷リタルハ外患ニアラスシテ内患ニアリ、外患ハ勢州獨力ノ支フベキニ非スト雖モ、内患ヲ未萠ニ防クノ定算ニ於テハ頗ル完全ナリト云フヘシ、況ヤ外患ハ未ダ遽ニ患フベキノ實ナキニ於テヲヤ、故ニ外患ハ勢

＊敍言五一六頁、中根雪江ノ記スル所。
㊀松平慶永。
濱松侯＝水野忠邦。
西郷隆盛、初吉兵衛又吉之助ト稱ス、薩藩士。

州ナシト雖モ、或ハ其無事ヲ保チシナルベシ、內訌ノ破裂ハ其死後幾何ナラズシテ內閣ノ交迭ニ始リ、水戶老公ハ忽チ登營ヲ止メラレ、滿胸ノ憂憤激發シテ京都ノ內奏トナレリ、此內奏ヨリ大ニ鎖攘ノ勢力ヲ助ケ、議論沸騰、堂上八十八人ノ上書トナリ、一旦允可ヲ蒙リタル條約ノ分疏モ牢乎トシテ入ルベカラズ、堀田ハ使命ヲ畢ラズシテ歸リ、續テ間部ノ上京トナリ、捕戮手段ヲ以テ物議ヲ鎭壓セント欲シ、人心去テ幕府ノ威權消滅セリ。勢州存亡ノ國家ニ關スル輕重果シテ何如ゾヤ、而シテ又上下鎖攘ノ煽說ニ動カズ、外患ノ無事ヲ保テル開國首唱ノ功モ亦之ヲ此人ニ歸セザルヲ得ザルナリ。

（開國起原）* 阿部正弘濱松閣老改革ノ後ヲウケ、前日下民ノ怨苦ヲ察シ、其苛政ヲ除キ、務メテ寬大ノ政略ヲ取リ、外ハ當時有爲ノ大藩ニ結ビテ其歡心ヲ得、內ハ賢材ヲ拔擢シテ其職ニ任ジ、文武ヲ勵マシ、長崎ニ於テ蘭人ヲ聘シ、海軍ヲ講習セシメ、又講武所、蕃書調所ヲ設ケテ旗下子弟ヲ敎育スル等、一時民望此人ニ歸シ、人々其ノ堵ニ安ンジ、世モマタ小康ヲ得テ、白川少將以後ノ名宰相ト稱スルニ至レリ。 幕府ノ有司ニ在テハ阿部、堀田二閣老稍時勢ヲ知ル、惜哉皆大ニ其志ヲ伸ル能ハズシテ止ムトイヘドモ、其辛苦經營ノ力ニ由テ冥々ノ中已ニ開國ノ基礎ヲ成ス、其功豈ニ掩フベケンム哉。

（追讃一話）* 正弘閣老ノ首坐ニ在リテ勵精治ヲ圖ル、會〻米將「ペルリ」軍艦ヲ率ヒ浦賀ニ來リ、人心洶々、天下騷然、國是ノ方向漠トシテ決ス可ラズ、此難衝ニ當リテ

*下二一七九頁、二二六三―四頁。

*三二葉。

操縱宜キニ適ヒ、大過無キヲ致セシハ職トシテ其度量濶大、識見精透ナルニ由ラスンバアラズ、特ニ幕吏ノ最モ有名有力ナル者ヲ登庸シタルカ如キハ亦以テ正弘ノ人ト爲リヲトスルニ足ル●（摘要）

〔三十年史〕＊　阿部正弘首相ノ位ニ在テ從前苛弊ノ後ヲ承ケ、務テ寬大ヲ旨トシ、大ニ人心ヲ收メシニ、海宇寧靜ニシテ人民堵ニ安ンジ、上下翕然トシテ一時ノ人望皆此人ニ歸セリ、豈ニ料ランヤ、一朝米艦ノ突如內海ニ入リシヨリ、其騷動大方ナラズ、正弘一身ヲ以テ內外ノ事ヲ負擔シ、廣ク言路ヲ開キ、不次人才ヲ拔擢シ、賢材續々登庸セラレ、專ラ海防ノ事ヲ經畫セラレタルハ其苦心ノ程モ亦思ヒヤラレタリ●

〔幕府名士小傳〕＊　阿部正弘苛政ヲ除キ、大ニ民心ヲ得タリ、又大船製造ノ禁ヲ解キテ海軍操練ノ事ヲ創シ、講武所蕃書調所ヲ設ケテ武技ヲ奬メ、海外ノ學藝ヲ講ズルカ如キハ其事業中最モ見ル可キモノナリ。此人秀雋温雅、極メテ德望アリ、人ニ接スル每ニ顏色ヲ和ラゲテ其云フ所ヲ盡クサシメ、外ニハ强藩ノ歡心ヲ結ビテ其助ケヲ藉リ、拮据經營、邦家ノ爲メニ盡ス所少カラズ、然レトモ外國ノ事起リテヨリ物議紛然、時勢漸ク急ニシテ、事ヲ共ニスル同列ヲハジメ滿朝ノ有司大抵外國ノ事情ニ通ゼズ、概ネ攘夷鎖港ヲ唱ヘ、祖宗ノ舊法ヲ株守セントスル者多ク、常ニ孤掌難鳴ノ歎アリテ、沈吟躊躇大ニ決スルコト能ハザリシト云フ●

＊七三—四頁●

＊〔舊幕府〕二號四七頁下段●

（明治前記）* 侯善良、能ク言ヲ容レ、有志ノ士ヲ登用ス、當時力ヲ公事ニ盡ス者大抵侯ノ撰擧スル所ナリ。又能ク諸侯ノ心ヲ得、癸丑以來國ヲ維持スル、侯ノ力多シトス。侯卒後、大藩諸侯老中ヲ侮リ、天下ノ事爲ス可カラザルニ至ル。

（幕末政治家）* 文久二年、政事總裁職春嶽ト板倉閣老ノ幕府ノ大改革ハ幕府ノ制度ヲ破壞シ、幕吏中ニモ政治家タルノ人材ハ太ダ乏シク、阿部堀田ノ內閣時代トハ都テ其趣ヲ殊ニシテ、復秩序ノ觀ルベキモノナキニ至レリ。（摘要）

（德川十五代史）* 正弘職ニ居ルコト多年、聲望アリ、ヨク時勢ヲハカリ、人言ヲ容レ、人才ヲ用ユ、實ニ太平ノ宰相ナリ、然レドモ外夷ノ來ルニ及ンデハ之ヲ制スルコトアタハズ、僅ニ時事ヲ彌縫スルノミ、務メテ人望ヲ收メ、時勢ニ順フノミ、毫モ振作奮勵スル所ナシ、由テ以テ太平ヲ粉飾スルハ可ナリ、與ニ更張釐革ノ政ヲ談スベカラズ。（摘要）

（安政紀事）* 勢州職ニ居ルコト頗ル久シク、人材ヲ擧用シ、政事ヲ更張ス、寛猛宜シキヲ得、措置人心ヲ失ハズ、又後庭婦女ノ驩ヲ結ビ、本鄉丹後等ト相善シ、コレヲ以テ名望威權一時ニ隆赫ス。（摘要）

右德川十五代史、安政紀事二書ノ著者ハ同一人ナリ、然ルニ其自語ノ相違アルコト斯ノ如シ。

---

*九七頁。

*二一三頁、二二九頁。

*卷二十上、一七〇頁、卷十九、九九―一〇〇頁。

*一三四―五頁。

〔幕末外交談〕＊　阿部正弘弱冠ニシテ老中トナリ、水野越前守ガ求治ノ急ト革弊ノ劇トノ爲ニ、施政往々刻薄ニ過ギ、人心ヲ失ヒシ後ヲ承ケ、寛大ノ治、民望ヲ博得セシノミナラズ、水戸老侯、島津侯ミナ交ヲ結ンデ驩心ヲ得シガ如キ、官吏登用ノ舊格ヲ破リ有爲ノ材ヲ擧ゲタルガ如キ、其他當務ノ急ヲ急ニシテ、ヨク適時ノ政ヲ布キシモノト云フベク、且其勵精勉力、怠曠ノ譏ナク、操守嚴正、幃簿簠簋ノ誚ナシ、幕府有數ノ良相ト稱スルモ過譽ナラザルヲ知ル。（摘要）

〔幕府衰亡論〕＊　阿部閣老ハ自ラ難局ニ當リ、内外ノ時勢ニ應ジテ事ヲ處理セント欲シ、徐々ニ計畫セラレント思ハレシニ、惜イカナ安政四年ヲ以テ逝去セラレタリ。抑モ阿部閣老ノ可否ニ對シテハ當時ヨリシテ頗ル其説ヲ成スモノアリテ毀譽交〻其身ニ集リ、甚シキハ和議ヲ主唱シテ國ヲ誤ルノ大罪人ナリト迄ニ罵シラレタル人ナリト雖モ、余ガ見ル所ヲ以テスレバ、兎モ角モ水野越前守以後ノ閣老ナリ、若シ此人ニシテ存セバ、幕府ノ御養君モ年長賢明ノ人ニ定マリ、攘夷論モ烈シクハ起ラズ、京都ノ内勅モ降ラズ、戊午ノ大獄モ起ラザリシナラント思ハルヽナリ、然ラバ則チ阿部閣老ノ逝去ハ幕府ヲシテ其衰亡ヲ促サシメタルノ一因ナリト論定シテ不可ナカルベキカ。

〔西鄕隆盛傳〕＊　阿部ハ人ト爲リ寛宏聰明ニシテ能ク人言ヲ容レ、有爲ノ材ヲ登用ス、惜イ哉英斷雄偉ノ資ニ乏シク、果決ノ處置ヲ實行スル能ハズシテ往々姑息ノ策ニ陷

＊一四―五頁。

＊六八頁。

＊第一卷六二頁、三八頁。

リ、自ラ幕政ノ困難ヲ招キタルノ形蹟ヲ免レザリキ。（摘要）

（吉田松陰）＊　吾人ハ阿部伊勢守ヲ以テ庸相ト云フ能ハズ、彼ハ夏日畏ルベキ水野ノ後ヲ承ケ、冬日親ムベキ政略ヲ取レリ、如何ニ彼ガ大奥ノ援引ニヨリテ其位ヲ固フシタルニセヨ、如何ニ彼ガ苟安ヲ偸取シタルノ譏リハ免ルベカラザルニセヨ、彼ハ少クトモ大臣タルノ器ヲ具ヘタルヲ許サヾルヲ得ズ、彼ハ一身ヲ以テ朝廷幕府諸侯ヲ連串スルノ鐵鎖トナリ、以テ政權ヲ三者ニ分割シツヽモ、尙ホ幕府ヲ以テ中心點トナシ、上ハ朝廷ニ接シ、下ハ諸侯ニ連リ、以テ調和一致ノ働ヲナサント欲セリ、彼ガ世ヲ沒ル迄ハ諸侯ニ違言ナク、水戶烈公ノ如キモ尙ホ幕府ノ純臣タルヲ失ハザリシ也。彼ニシテ死セズンバ、或ハ公武合體ノ變則制ヲ霎時ノ間建立シタルモ未ダ知ルベカラズ、惜ムベシ彼ハ安政四年ヲ以テ死セリ、彼一タヒ死ス、水戶老公ハ其幕閣ヨリ遠サカルニ比例シテ朝廷ト密着シ、遂ニ容易ナラザル禍機ヲ惹起セリ。（摘要）

（德川太平記）＊　阿部正弘ノ最モ稱スベキハ、水野越前守ノ後ヲ承ケテ、コレヲ治ムルニ寬嚴ノ中ヲ得シコトナリ。外交ノ事ニ於テハ其處置ヲ謬レルヨシ咎ムルモノ寡カラサレドモ、松平定信、水野忠邦ヲ外ニシテ正弘ニ及ブヘキモノアリトモ覺エザレバ、未タ悉ク失ヘリト云フベカラズ。（摘要）

（幕末三俊）＊　勢州ハ水野忠邦ニ亞テノ首相ニシテ、水野ニ比スレバ政治家タル

＊二八八—九頁。

＊十一編一二五頁。

＊一三三—四頁。

ノ量アリキ。水野ハ政治家トシテ名ヲ好ミ、功ヲ衒フノ癖アリ、事ヲ成スニ急ナリシカドモ、阿部ハ之ニ反シ、其爲ス所一トシテ國ヲ憂ヒ君ヲ愛スルノ誠ニ出デザルハナク、而カモ寛嚴其中ヲ得タリ。嘉永癸丑、米艦ノ來航スルヤ、內ニ於テハ、將軍家慶薨シ、世子家定新タニ立チ、外ニ在テハ、米露諸國通商ヲ乞ヒ、邊警日ニ急ヲ告ゲ、而カモ海內ノ人心洶々トシテ鼎ノ沸クガ如シ、列藩ノ士人往々攘夷ヲ唱フル有リ、阿部ハ此危局ニ處シ、身ヲ以テ國家ノ重キニ任ジ、一方ニハ親藩ノ盟主タル水戶烈公ト結ビ、一方ニハ強藩中ノ英主タル島津齊彬ト相結ビ、公武ノ協同ヲ謀リ、國力統一ノ實ヲ擧ケテ以テ對外ノ策ヲ決セントセリ。阿部ガ後來首トシテ國防經綸ニ注意シ、內政改革ト同時ニ武備充實ノ實ヲ擧ゲンコトヲ期シタル所以決シテ偶然ナラザル也。

結論。

世ノ正弘ヲ論評スルモノハ毀譽褒貶一ナラザルハ即チ其人物ノ尋常ナラザルヲ證スルモノニ非ズヤ。之ヲ要スルニ、德川幕府二百六十餘年間ヲ通ジテ拔群ノ政治家タルコトハ何人モ異議ナキ所、其私德ト公德トニ於テ殆ド缺點ナク、至公至誠一貫シテ渝ラズ、一點ノ覇氣、

一點ノ野心ヲ見ズ、世人或ハ之ヲ毀ルニ優柔不斷ヲ以テスト雖モ、全體ヨリ觀テ公平ニ之ヲ論ズレバ、其才能ト精力ノ絶倫ニシテ、其經綸ト功業ノ偉大ナル、誰カ敢テ之ヲ否ムコトヲ得ンヤ、其人格ノ高尚ナル、其人望ノ隆盛ナル、之ヲ歐米近世ノ政治家中ニ求ムルモ多ク比類ヲ見ズ、或ハ之ヲ英國ノ「グラッドストン」、普國ノ「ハインリヒ・フヲン・スタイン」ニ比スベキ歟。

正弘首相ノ任ニアルコト十五年、國政ニ於テ殊ニ顯著ナル功績ハ、本邦未曾有ノ難局ニ當リテ開國進取ノ政策ヲ決定シ、洋學ノ講究ヲ奬勵シ、海陸軍制ノ基礎ヲ建設シタルノ三事ニ在リ、又藩政ニ於テ見ルベキモノハ大ニ敎育ヲ振興シタルノ一事ニ在リ。

世ノ論者或ハ舊時ノ外國條約ヲ斥シテ一概ニ讓歩屈辱ノ甚シキモノナリトシ、延イテ當時ノ爲政者ヲ難ズルアリ、是レ事實ヲ究メザ

ルモノニシテ、臆說ニアラズンバ則チ誣言ナリ、最初ノ條約タル爾ク讓步屈辱的ノモノニアラズ⊗當時ノ日本ノ國狀ニアリテハ敢テ不當ト謂フベカラズ、然ルニ爾後讓步ニ讓步ヲ重ネテ終ニ屈辱不利ノ條約タラシメタルモノハ其實正弘ノ歿後、他ノ執政時代ニ蜂起シタル攘夷黨ノ所爲ナリト謂ハザルヲ得ズ、是レ事實ノ自證スル所、復タ毫末モ疑ヲ容ルヽノ餘地ナキナリ。

以上列擧セル正弘ノ勳功ハ單ニ幕府ノ當時ニ於ケル勳功タルニ止マラズ、其遺業ノ今日ニ効益ヲ及ボシタルモノ實ニ尠少ニアラズ、吾人焉ゾ此偉人ノ事蹟ヲ詳叙シテ之ヲ世ニ傳ヘザルベケンヤ。

⊗第十六章等ヲ看ヨ。

附録。 關係文書。

第一　政事。

第二　外事。

第三　雜事。

第一。政事。

〔甲〕下總中山村法華經寺裁判ノ件。

〔一〕僧侶等犯罪取調稟議書。　天保十二年七月三日。

〔阿部家文書〕當時ノ秘密文書ナリ。

第四章併看。

下總國中山村法華經寺地中智泉院持八幡別當守玄院日啓外一人女犯其外不屆取計致シ候由之一件吟味之儀ニ付御內慮伺書

追々申上置候下總國中山村法華經寺智泉院持八幡別當守玄院日啓右智泉院日尚女犯其外不屆之取計致シ候由之一件夫々呼出一ト通吟味仕候處右兩人女犯之儀ハ兼テ御渡被成候風聞書之通日啓ハ右智泉院家來關留平次郎母妙榮日尚ハ同國船橋九日市町仙之助女房マス儀同所長兵衞方酌取奉公中及密通候段無相違旨申立右一條ハ事柄相分候得共大奧向ヘ相拘候廉ハ悉御隱密之儀ニテ日啓之外相辨不申趣ニ付右之心得ヲ以夫々相糺候處元來女中寺ヘ取入候濫觴之儀ハ同人儀牛込日蓮宗佛性寺ニ役僧致居候砌同寺檀家中野越前守下宿ニテ大奧老女相勤候伊佐野儀厚歸依有之同人隱居本性院ト相成候後ハ尚更格別懇意ニ相交智泉院住職後右手寄ヲ以テ老女瀧山野村瀨山御客應答花澤表使岩井瀧澤島田御伽坊主

廣大院―大將軍德川家齊（法諡文恭院十一代）ノ妻（薩藩主島津重豪ノ次女）。

榮嘉廣大院樣老女花崎御客應答染岡波江其餘文恭院樣御中﨟ミヨ儀ハ右本性院花澤等之世話筋ニテ是又格別ニ歸依有之文化ノ初頃ヨリ文恭院樣廣大院樣並御方々樣ヘモ內々護符等差上來右躰引立吳候者モ有之殊智泉院ハ中山派祈禱法傳所之儀ニモ有之候間不容易儀ニハ候共新規御祈禱處ニモ被仰付候樣致度存居候內前書本性院並花崎波江等ハ追々病死致シ候間右內願之次第花澤染岡ミヨ等ヘ厚賴込置候後智泉院ハ法華經寺之地中故御祈禱所ニハ難被仰付趣ニテ去ル辰年九月中御祈禱所名目之儀ハ法華經寺ヘ御法用取扱向ハ萬端智泉院ヘ被仰付御方々樣御守殿御住居モ都テ同樣之振合ニ有之取分文恭院樣廣大院樣ニハ格別御歸依之趣ニテ御容躰等被爲在候節ハ勿論平日トモ御附之老女等ヨリ朝夕之樣ニ御祈禱之儀申參右樣之次第故追々女中之內信仰ノ者相增別紙名前書之通月々護符守札等差遣其外兩丸老女始御客應答御中﨟御錠口御中年寄表使御右筆御伽坊主御使番等ハ年始並暑寒見舞會式歲暮等定式贈物ヲモ致來候ニ付夫々申越次第加持祈念等致遣候儀ニテ右ハ當時一般ノ義ニ付別紙名前ノ內本性院外三十九人之他誰別段信仰トハ難申立尤中野石翁儀ハ前書佛性寺檀家ニテ同役僧中ヨリ懇意致シ素ヨリ宗門信仰ニモ有之候間是又月々護符等差遣來候處元來前書之手續故同人ヨリ前書ミヨヘ取入候儀ニハ無之佛性寺ニ有之候祖師之像ミヨヘ相送候儀モ決テ無之且德ケ岡八幡起立之儀相糺候處去ル文政之始ト覺文恭院樣御容躰被爲在候砌何ソ御障等ニテモ被爲在候哉內々寄セ御祈禱可申上旨前

田沼意次ハ遠州相良藩主、明和安永中專權ノ閣老ナリ。

孝恭院＝大將軍德川家治（十代、浚明院）ノ嗣子、早世。

書花澤ヨリ申參早速施行候處先年田沼主殿頭文恭院樣一ツ橋館ヨリ御本丸へ被爲入候節之儀並主殿頭自己之心願ニ依秋葉神明等へ嚴敷祈願致シ候儀有之其砌兩樣トモ成就之上ハ御城内へ一社建立之儀ヲ相誓候由右等之始末ハ巨細不分明ニ候得共文恭院樣ニハ御先代之御讓ヲ被爲繼主殿頭ニ於テハ心願成就不致ハ勿論却テ重キ御沙汰ニ相成終ニ存念不相果其儘ニ成行候間自ツカラ右秋葉神明等諸屬之念御城内ニ相止リ居候趣並右躰文恭院樣御運被爲開候ハ孝恭院樣御果報御揃被爲在候故之儀ニテ尊靈ニモ御羨敷被思召候由等寄ニ立候者ヨリ口走候間恐多キ儀トハ相心得候得共其段明白ニ花澤等へ申立候後右兩社之内西丸御庭内等へ御勸請並孝恭院樣御靈ヲ厚御祭被遊度思召之趣度々花澤等ヨリ爲申聞候得共夫々御祈禱等申上候上ハ別段一社御建立ニハ及申間敷哉併孝恭院樣御靈ヲ若宮八幡ト御勸請モ被遊候ハヾ猶更何之御障等モ不被爲在益御長久御繁昌之基ト申上候儀有之然ル處其後文政十亥年中俄ニ神躰彫刻之儀被仰付夫々御内沙汰ノ趣ヲ以テ二躰彫刻出來ノ上法華經ノ要文ヲ書寫致シ御腹籠ニ仕入大奧へ差上右經文之内卷首之題目ハ文恭院樣御直ニ御書寫被爲在夫々御拜等相濟御下ケニ成一躰ハ孝恭院樣御靈一躰ハ文恭院樣御同躰之積ヲ以八幡ニ奉勸請尤孝恭院樣御靈之分ハ秘物ニ致シ今一躰之方ハ御前立ニ致シ可置旨ニテ智泉院へ御假納ニ相成候處翌子年之儀ハ孝恭院樣五十四御忌ニ被爲當其砌右兩躰トモ境内へ安置可致旨被仰付内々御下金等モ有之候處智泉院ハ地狹ニ付右之趣法華經

天保九年戊戌。

寺へ內談之上同寺境內德ヶ岡明神之社地へ一社建立御安置相成祭日之儀ハ孝恭院御內實薨御之御日取ヲ以テ毎年二月二十二日ト相定メ朝暮御法樂等申上候儀ニ有之勿論右ハ御內々之儀ニ付奧向ヨリ尾張殿奧へ內談等モ有之候哉表向之儀ハ尾張殿ニテ勸請有之候積相心得可申旨先成瀨隼人正ヨリ內達方之神供料ヲモ被附置候處先大納言殿逝去後右神供料ハ斷ニ相成候儀ニテ且去ル戌年三月西丸炎燒後御用之筋有之候由ニテ同月廿三日佛性寺へ可相越旨御附老女野村ヨリ申參リ同所ニ於テ同人幷表使島田ニ面會及ヒ候節此上御火難等無之樣火防之爲メ新規御庭內へ秋葉ヲ御勸請之思召有之近々御燒失跡地所見分トシテ登城可被仰付間方位其外得ト相考諸事御爲ニ相成候樣厚可取計何レ表向之儀ハ別段可被仰出候間其旨相心得取扱可申旨內達有之候ニ付前書寄祈禱之節申上候次第モ有之旁一社御建立之思召立ト存込先年西丸御廣敷御建廣ヶ之節山里御庭內ニ有之候古木之唐楓御代拂ニ相成候處右伐倒候時刻ト竹千代君樣御病發同刻ニテ終ニ御逝去被遊候素ヨリ右躰之譯ニ寄候儀ハ無之候得共其頃奧向女中等種々之浮說申唱候由兼テ本性院ヨリ承リ候儀モ有之候ニ付秋葉之文字ハ右楓之字義ニモ相叶旁可然事之旨申答置候後同四月二日西丸御廣敷へ可罷出旨奉行所ニ於テ申渡有之同日登城致シ候處前書秋葉御勸請之儀野村達之趣ニテ御廣敷番之頭ヨリ申達有之候節秋葉ハ宗門ニ於テ勸請不致神號故文恭院已之御歲ニモ被爲在候間本地延命普賢菩薩之垂跡ト申意ニテ秋葉ヲ御勸請可申上旨申立即日御

取極ニ相成其度々御地鎮並御祈禱トシテ罷出右宮御出來後ハ毎月廿三日御法樂トシテ
登城致シ候義ニ有之御休息御庭内稻荷社之儀ハ古來ヨリ御有來之由ニテ炎上後場所御引
移ニ相成候哉ニ候得共右ハ小石川妙傳寺ニテ御法樂等申上曾テ不相携妙見宮之儀ハ是迄
更ニ及承候儀モ無之其餘右御燒失跡地御祈禱之節怪氣相立候趣發言及ヒ土中ヲ貳丈餘堀
下候次第並占考之趣ヲ以猶市中火氣有之御本丸炎上之程モ難計候ニ付專火之元御用心有
之可然旨内々野村等ヘ申立候儀ハ夫々無相違旨申之其餘之次第モ凡風聞書ト符合致シ右
ハ悉怪談奇語ニ有之此上察度申聞及吟味候ハヽ内實其身ノ欲情ヨリ年來深相巧寄リ祈禱
ニ事寄セ恐多儀ヲモ不憚爲申立女中等之歸依信仰ニ附込專御爲筋ヲ相唱品々不容易事共
トモ申觸誑惑爲致候事實ト相聞日啓不屆勿論之筋ニ有之元來右ニ携候女中等之儀モ其身
歸依之餘ヨリ右躰不容易儀ヲ如何トモ不心附却テ日啓ヲ稀成智識ト尊信致シ厚引立文恭
院樣ヘ申上風ト右ニ御泥被遊候次第ニ成行候段右之者共愚癡之至如何之心底ヲ以テ仕成
候儀ニ無之トハ乍申是又以之外成筋ニ有之先般被仰含候御趣意乍恐御尤至極奉存候ニ付
前書之廉々悉押穿吟味ノ上夫々急度被及御沙汰可然哉ニ候得共併日啓儀文恭院樣厚御歸
依之故ヲ以テ新規御法用所又ハ獨禮席ヲモ被仰付其後思召ヲ以八幡社領ヲモ御寄附守玄
院之寺號ヲ以一字別當ニ御取立被成下候次第等ハ都度々々被仰出モ有之普ク世上ニテモ
相辨罷在然ルヲ今般吟味之上是迄日啓申立候趣ハ悉不取留奇怪之儀ニテ人心ヲ迷候事之

由發輝ト治定致シ候テハ一旦右ヲ御取用被爲在候文恭院樣之御處置自ツカラ御過ニ相成候筋ニ相成甚以恐入不容易殊更右八幡起立之儀ハ別テ筋立兼候儀ニ有之如何ニモ御隱密之御取斗無之候テハ相濟申間敷哉尤別紙名前書之儀ハ日啓申口迄之儀ニテ素片言ニハ候得共兼テ取下置候留帳類又ハ文通等之趣ニテモ格別歸依之段ハ無相違相聞此上又者之分等呼出相糺候樣ニテハ矢張信仰之廉ヨリ奥向ヘ手ヲ懸候趣意ニ有之半途ニ見合候義モ容易ニ難成旁如今般一件ニ至候テハ强チ事實ヲ以吟味致シ候而已ヲ正道潔白之御處置トハ難申上實以不容易筋奉存候ニ付此上奥向ヘ相拘候廉ハ更ニ吟味不仕日啓並日尙不屆之次第ハ當前女犯一條ヲ以テ吟味詰夫々御仕置申付御取締方之儀ハ前書日啓申立候趣並別紙名前書歸依深淺之譯ヲ以夫々厚御勘辨被爲在候方可然哉左候ハヽ差當リ奥向ヲ始世上歸依之者共モ悉恐怖致シ擧テ當時之御盛德ヲ奉讃美不容易次第モ不顯シテ自ツカラ今般之御趣意ニ相叶奥向御取締之筋モ相立可申哉ト奉存候右ハ元來仰渡被成候風聞書之趣ニテモ一體之趣意不容易一件モ有之候處聊カ無斟酌可及吟味ト之御趣意ニ御座候得共心附候義ハ無服藏可申上旨之御沙汰モ有之候儀ニ付前書之趣申上候條厚御評議被成下候樣仕度奉存候依之別紙名前書一通相添此段御內慮相伺申候

丑七月三日　阿部伊勢守

名前書

大奥向女中之内守玄院日啓歸依之淺深厚薄同人相糺候趣左之通御座候

文化十三年子年七月二十四日病死之由　文恭院樣老女伊佐野事　本性院
去々亥六月中病死之由　野村
去子八月中病死之由　右同斷後廣大院樣附　瀧山
右同斷當時御本丸勤　瀨山
天保三辰年十月頃病死之由　文恭院樣御客應答　花澤
三拾ヶ年程以前病死之由　廣大院樣附老女　花崎
天保三辰年四月頃病死之由　御客應答　染岡
三拾ヶ年程以前病死之由　同　波江
三拾ヶ年程以前病死之由　文恭院樣表使　岩井
當四五月頃剃髮之由　同　瀧澤
右同斷當時御本丸勤　島田
御中臈　美代
當二月中御暇ニ相成候由御伽坊主　榮嘉

右格別之信仰ニテ朝夕御祈禱之儀都テ引受取計又ハ諸事之吉凶占考等ノ儀ヲモ申越近來守玄院身分等厚ク引立呉候旨申之候

文恭院樣御中臈　てう
同　るり
同　いと
同　八重

去子十二月中御暇ニ相成候由

御次頭　勝井
御右筆　とう
御伽坊主　長榮
廣大院樣附御中﨟頭　すま浦
御中﨟　鳥澤
御中﨟　杉岡
御右筆頭　山村
御本丸老女　濱岡
御客應答　志賀山
御右筆頭　濱田
峰壽院樣附老女　久米浦
松榮院樣附　染村
溶姫君樣附　染山

右イヅレモ信仰ニテ毎月護符守札等差遣其上テウ外三八ハ御方々樣御祈禱等之儀ニ付内々文通等ヲモ差越トウ濱田長榮ハ前書野村瀬山ヨリ申越候御祈禱等之儀ニモ相携其餘之モノ共ハ別段召仕女等差越或ハ外々エ差遣候月並護符等取次一ト通ヨリハ信仰ト相心得候旨申之候

當春下宿之由

廣大院樣附老女　花町
右大將樣附老女　浦尾
同　岩岡

峰壽院＝峰子、水戸藩主徳川齊脩ノ妻。
松榮院＝淺子、越前藩主松平齊承ノ妻。
溶姫＝加賀藩主前田齊泰ノ妻。
以上三女皆徳川家ノ女ナリ。
右大將＝大將軍嗣子家定。

御客應答　　　　園　岡

右夫々御祈禱之儀重々引受取扱別テ花町ハ深相携候哉ニ候得共月並護符守札等定式ニ差遣候哉モ無之其身信仰之淺深等者聢ト難申立旨申之候

右美代召仕　ひわ
右勝井召仕　くに
右志賀山召仕　でん
右染村召仕　りと
元中ノ口番谷津會助後家　れん
麴町三丁目萬屋直右衞門娘　まち

右銘々懇意ニテレンマチハ部屋方へ立入用向等聞込ヒワ外三人モ同様祈禱等之儀ニ付中山表へモ罷越又者守玄院出府ノ節者旅宿等へ節々罷越面會致候者ノ由申之候

右之外兩丸並御守殿御住居向等女中ノ内毎月護符守札等差遣候分當時凡八拾人余ノ外御附ノ老女始御客應答御中﨟御錠口御中年寄表使御右筆御伽主使番等臨時加持祈禱ヲモ致遣候得共別段强テ信仰トハ難申立且御役名並病死等年月ノ儀ハ荒增前書之通相心得居候旨申之候

丑七月

〔一一〕僧侶等處刑案稟議。　天保十二年七月二十七日。

〔阿部家文書〕阿部伊勢守手控。

下總國中山守玄院日啓外壹人一件之儀ニ付申上候書付

下總國中山守玄院日啓外壹人一件吟味之儀ニ付御內慮相伺八幡幷秋葉等御勸請ニ相成候次第ハ專ラ文恭院樣ノ御處置ニ相拘候儀ニ付此節取拂等被仰付候儀ハ御心苦敷被思召候得共左候迚其儘被差置候而者自然日啓年來之邪念ヨリ奇怪異說ヲ申唱奉欺公儀候不屆之次第發輝ト無之且ハ文恭院樣御過之筋永後世之口碑ニモ相殘候儀ニ付一向今般吟味之上一時ニ被改候方却而御相當之御所置ニモ可有之哉ノ旨被仰聞乍恐御尤之御儀奉畏猶得ト勘辨仕候處秋葉ハ素ヨリ御庭內御內々之儀ニ付何樣相成候トモ强テ仔細ハ無之間敷哉ニ候得共八幡之儀ハ表向夫々被仰出モ有之勿論孝恭院樣御靈有之儀ハ世上悉相辨候儀ニモ無之候處今般日啓吟味之上奉欺公儀候次第發輝ト相成候而ハ自然八幡起立之儀モ顯露ニ相分リ右躰不筋立儀ニ候上ハ一旦被下置候御朱印之儀モ孰レ其儘ニハ相成申間敷存候而者全文恭院樣御不德ヲ普世上被令知候筋ニ而深恐入候事共ニ有之日啓不屆ヲ押穿候者則文恭院樣御所置之正否ヲ吟味之上明白ニイタシ候ニ相當リ乍恐御當代之御所置ニ寄御德義ニモ相拘リ可申哉且御朱印之儀モ今般守玄院而已之儀者瑣細之事ニモ可申候得共元來無此上重大之儀實ニ天下之勸懲得失ニ相預リ絕而間違等ハ有之間敷筋ニ付容易ニ其境吟味等可被仰付譯ニ無之候間此節守玄院御朱印御取上等ニモ相成候而者不容易御判物ヲ

容易ニ被下置候筋ニモ相當リ此上萬一彼是之議論モ發シ候而ハ彌以恐入候ニ有之旁日啓奉欺公儀候惡事之次第吟味不被仰付餘事之不屆ヲ以重科ニ被處候方差當リ文恭院樣御不德之筋モ不相顯御孝道モ相立候而オノツカラ御改正ノ御趣意行屆後世ニ到候而者猶更當時之御德義ヲ可奉感戴旁以御十全之御所置歟ト奉存候得共元來八幡起立之儀假令世上ニ而不相濟候而モ事實如何之段者素ヨリ之儀ニ付彌取拂可被仰付ニ付而者御趣意ニ候ハヽ今般日啓等吟味之儀者兼而申上候通女犯之廉ヲ以夫々御仕置等被仰付一件落着イタシ候後別段思召ヲ以取拂社領沒收被仰付且神體ノ儀者內實多恐御品モ入有之候事故御取上其時宜次第兩山等之內エ御納ニ相成候而モ可然左候ヘハ自然文恭院樣之御過モ顯露ニ不相成素ヨリ吟味ノ上取拂被仰付候ト申譯ニハ無之候間御德義ノ上ニオキテ彼是之議論モ有御座間敷右之通ニ候上ハ此度密々取調被仰含候雜司ケ谷感應寺廢寺之儀モ趣意者同樣ニ有之且又右等之御沙汰ニ基キ尙合考仕候所右之外ニモ去ル戊年中末姬君樣依御願松平安藝守エ被下置候武州穩田村熊野權現社地之儀モ內實日啓幷當閏正月中病死イタシ候智泉院先住觀理院日量等發起之趣ニ相聞既ニ右觀理院之寺號ヲ以一宇別當所之名目ニ相成居是以新規之儀其儘被差置可然筋ニ無之區々ニ相成候而ハ却テ如何ニ付是又同時ニ何ト歟御沙汰之品有之元々エ復古イタシ候方ニモ可有御座哉右ハ再應之御沙汰モ有之候儀遮而申上候段ハ恐入候得共吳々八幡之儀者當時吟味ニ相成居候事故右吟味ノ廉ヨリ取拂被仰

付候旨申ニ至リ候而者名義ニオキテ御當代ノ御德義ニ相拘リ可申哉ト深ク心配恐入候素ヨリ八幡起立等不筋立儀ニ付取拂ト御決定ノ上ハ前書之通ニモ相成候方可然哉一己之存寄ニ候得共一圖ニ御爲ト存込拂心底不顧憚申上候儀ニ御座候右之趣ヲ以而夫〳〵御差圖モ被成下候義ニ候ハヾ日啓外壹人女犯義ハ早々吟味法御仕置相伺前書八幡感應寺並穩田村熊野權現之儀モ被仰出方手續等巨細取調申上候樣可仕候依之最前差上候御內慮伺書外書付壹通相添猶又此段申上候

巳七月　阿部伊勢守

〔阿部家文書〕

〔三〕裁判言渡書。

下總國中山村日蓮宗法華經寺地中智泉院持八幡別當　守玄院日啓

其方儀智泉院住職中同國田尻村文藏後家リモ事尼妙榮ヲ境內へ止宿致密通之上度々及女犯次第御祈禱御法用取扱節ノ儀ニハ無之トモ淸僧殊一寺住職ノ身分有之間敷儀殊露顯ヲ恐レ一旦立退始末旁不屆ニ付遠島申付ル

右　智泉院日尙

其方儀淸僧殊御祈禱御法用手代リヲモ相勤身分下總國船橋九日市村旅籠屋長兵衞方へ罷

罷越同人下女マスヲ酒ノ相手ニ致シ密通ノ上度々及女犯段住職以前ノ儀ニ有之ナレ共右始末不屆ニ付晒ノ上觸頭へ引渡遣間寺法之通取計可受

同國田尻村百姓文藏後家りも事　　尼　妙　榮

其方儀中山村法華經寺地中智泉院持八幡別當守玄院日啓智泉院住職中ヨリ年來立入罷同人ヲ淸僧ト乍辨度々及密通殊舊惡露顯ヲ恐レ一旦立退始末不埒ニ付押込五十日申付ル

同國船橋九日市村百姓仙之助女房　　マス

其方儀村內旅籠屋長兵衞方酌取奉公中中山村法華經寺地中智泉院日尙儀右長兵衞方へ止宿ノ節酒ノ相手ニ罷出淸僧ト乍辨度々及密通始末不埒ニ付押込三十日申付ル

右　法華經寺　日　導

其方儀地中智泉院持八幡別當守玄院日啓儀右智泉院住職中同國田尻村文藏後家りも事尼妙榮ト及密通儀ハ不相辨共引續同人ヲ院內へ爲立入又ハ智泉院當住日尙儀船橋九日市村旅籠屋長兵衞方へ罷越同人下女マスト及密通ヲモ不存罷在候段不埒ニ付逼塞三十日申付ル

觸頭　谷中　妙法寺

右中山村法華經寺儀先達テ御祈禱所被仰付地中智泉院へ右御法用取扱被仰付處向後一切御祈禱ハ不被仰付間御祈禱並御法用所等ノ儀決テ相唱間敷且智泉院持八幡ノ儀ハ今般思

召有之ニ付取拂被仰付社領被召上間其旨相心得先達テ被下置御朱印一同早々可差上尤別當守玄院ニ附有之本尊又ハ什物類モ有之ナラハ法華經寺ヘ引渡遣ス間其旨可存

右評席ニ於テ調役侍坐申渡

〔乙〕海防ノ件。

〔一〕阿部閣老ヨリ筒井政憲ヘノ諮問。

嘉永二年五月四日。

〔趣原〕第二〇九七—一〇一九頁。筒井紀伊守、當時西丸留守居、第十一章併看。

近來異船度々本邦ノ海峽ヲ恣ニ颿去或ハ江戸海ヘモ渡來測量其外覘覦之躰モ有之一方ナラス心勞罷在候處昨年之儀ハ先々何レノ海岸ヘモ渡來無之然ル處當年松前津輕其外對島莊內等度々渡來ノ屆モ有之右ハ假令一二艘之漁船或ハ漂流往來ノ船ニ候共其事情難計事故其度々海岸領主之向ハ何レモ防禦人數嚴重ニ相備江戸表ヘモ度々數囘注進有之無據取計ニハ候得共實ニ莫大入用ニモ可有之又ハ異賊方ハ素ヨリ當時本邦ノ取扱手緩敷無之ヲ見侮居候事故此上猶々諸國ノ海岸ヘ乘近付申候ハ御國地之動靜ヲ相伺或ハ地理測量致シ候哉モ難計付テハ其最寄之領主地頭之混雜入費等差重リ元來諸藩疲弊ノ折柄此上甚及疲弊候

外無之疲弊彌增候得ハ守衛十分ナラス然ル時ハ若異心之異船數艘差向不慮ノ爭鬪之事有之節ハ如何樣ナル御國躰ニ拘リ候儀無之共難申且當時ノ姿ニテハ彼ハ一二艘ノ船ヲ以テ東西ニ颿廻リ此方ニテハ其船ノ往來ニ隨ヒ固メ人數ハ東西出張逸ヲ以テ勞ヲ待之儀ニ反シ甚以難澁之儀ニモ候間兼テ被申聞候土着ノ者農兵等ノ守衛ニ致シ一二艘ノ船ハ異心無之樣子ニ候ヘハ猶更之事假令異心有之不時鬪爭ノ事有之共右守衛ノ人數ヲ以一ト先防禦致シ其上ニテ二番三番手ノ儀ハ居所ヨリ繰出シ候樣相成候ヘハ異心有無ノ節共格別入費モ相減シ且本邦一躰御手厚ニモ相成候儀ハ至極可然存候乍去是モ當今創業之儀ニ候ヘハ一時混雜入費モ格別ニ可有之其用途公邊ヨリ御世話被成下候儀ニモ成兼候事ニテ諸藩疲弊ノ折柄ニモ有之且其土地之樣子領主々々ノ見込ニモ寄候儀ニ付差定候テハ難相達乍去心得ノ爲公邊ヨリ評議之趣相示シ置候儀ハ可然ト存候間先々觸面取調等申候猶又打返シ相考候ハ異船打拂復古之儀一昨年浦賀長崎ヘ渡來ノ異賊歸帆之後品々不敬ノ故ヲ以テ掛リ評議ノ節被申聞候趣モ無據場ヨリ其儘差置候事ニハ候得共如前件當年ノ處數艘打連是迄通船無之海邊ヘモ颿去或ハ洋中ヨリ大砲ヲ發シ殊ニ津輕ノ儀ハ內實ハ人數差向サル前疾ク上陸モ可致模樣ノ趣相聞品々是迄輕蔑ノ儀ノミニテ兼テ御示ニ相成居候全漂流ノ者ヘ御仁恤ノ御趣意相守候儀ニテ毛頭無之元來右打拂之儀御差止被仰出候儀ハ實ハ貴賤一般私ニ議論致居候事ニテ海岸領主ノ面々ハ言語文字モ不通ノ異船ヘ對シ通辯等ノ備モ無

之故其事情難探得又兼テ被仰出候御趣意モ有之且ハ素ヨリ猛烈ノ取扱モ致兼候塲合ヨリ實ハ半表ニ相成一致一決ノ處置難相成其上薪水等ヲ乞或ハ風間切等ニ事寄セ滯舟致シ候ヘハ尙又入費ノミ甚嵩其迷惑ノ趣モ有之實ニ尤ノ事情ニ相考候尤此儀ニ付テハ兼テ建議モ有之候通文化度ノ如ク碇ト致候亂妨有之候ト頃好キ機會モ候ハヾ右ヲ名トシテ直樣復古可被仰付候ハ勿論ニ候ヘ共猶時ノ勢ヲ以考候得ハ右亂妨ノ儀ハ明日ニモ難計候得共素ヨリ本邦ニ心ヲ存シ交易ヲヒラキ戰鬪ヲ後トシテ漸ク親近可致旨遠慮深キ貪慾ノ賊情殊ニ此已前モ亂妨ヨリ打拂モ被仰出候事ニ候ヘハ旁以再度ノ事右樣思慮薄キ處置ハ致間敷哉只々何レモ順從温和ノ體ニテ津々浦々渡來或ハ交易申懸又ハ漂流等ニ仕成シ食物薪水等乞求ノミニ候ヘハ矢張名トモスヘキ事無之故イツレ復古ト申候急度月當ト可致際限モ無之又異賊ノ方ニテハ一旦御仁惠ノ御觸示シモ有之嚴重打拂等之儀モ決テ無之儀ト心ヲ安ンシ且從來宿志ノ階梯ト心得候間此後異船ノミナラス漁船及諸蠻往來之舟等尙又繁々渡來可有之其節假令一二艘ノ漁船トイフ共夫々守衛ヲ設ケ候事故領主入費幾許ゾヤ年々歲々困窮相嵩候ノミ本邦ノ人民金銀彼ガ爲ニ空敷勞疲セシメ候儀何トモ不堪遺憾候如先評機會ヲ待候儀ハ御趣意モ相貫諸蠻共ヘ被對御信義モ相立兩全之良策共存候得共前文之通其機會目途モ無之且本邦ノ周廻盡ク手厚ト申儀ニモ不至候得ハ如何樣ノ亂妨可有之モ難計然ハ先手ノ負候ヲ待居候筋ニ相成此儘ニ年ヲ經レハ一年ツヽノ損害ト相成可申本邦之

〔起原〕中二一〇一—九頁。第十一章併看。

如斯損害困苦有之處ヘ豺狼ノ如キ夷狄ヘ信義ヲ立度ト存候一事ニテ日夜心ナラス其機會ヲ待居候モ詰ル所御仁惠之格別之御政事トモ不被存最早寅年ヨリ可也年間モ相立其上敢テ名トスヘキ條モ無之儀ニモ候ハヽ共實ニ復古致シ打拂ノ儀被仰出候方可然存候依之一昨年來ノ不敬不遜之一々申種ニ致シ打拂之儀暫時モ早ク被仰出候方可然尤諸州廻達ノ間モ有之事故假令ハ來春ヨリカ又ハ來夏ヨリ已前之通打拂被仰出候間早々諸州ヘ廻達致シ候樣當秋歸帆之加比丹ヘ申渡候方ニ可有之哉付テハ前件諸藩ヘ爲心得廻達ノ儀モ今少シ見合置打拂復古評議之上復古ノ儀ニ付テハ速ニ爭鬪之事可有之哉モ難計ニ付守衛別テ一際嚴重相心得士着ノ兵或ハ農兵等ノ思慮有之候樣達候テ近來警備ノ備追々打ハマリ其上一決之事故防禦方モ致シ能猶更諸藩之氣張可然哉ト存候此儀海防掛リ一統ノ存寄モ可承候得共御自分見込ノ處十分ニ承リ度候事

〔二〕筒井政憲ノ答議。　嘉永二年五月。

去ル四日海防守備ノ儀向後文政度被仰出候打拂之方ニ御復古可被爲在被思召候ニ付愚意ノ趣申上候樣被仰渡御下ケ御座候御書取再度打返熟覽仕候處實以遺猷御善策一々御尤至極ニテ御建論モ乍憚御盡被爲在候儀聊間然可仕儀モ無之感伏仕候何樣仰之通近來ハ異國船近海迄モ罷越候內昨年ハ沙汰モ無之處今年之儀ハ春已來度々通航其上船數モ多ク例ニ

達西北海ヲ通船仕中ニハ及應接候船モ有之候程之儀夫ニ付テハ沿海諸藩ニ於テハ人數手配江戸御屆ノ手數入費モ多ク相懸リ候儀之處異船之儀ハ寅年御改革已來手強キ取計無之ヲ見侮リ近海迄モ罷越何カニ事寄セ御國地之樣子ヲ探リ或ハ測量等致シ滯船又ハ風間切居其間陸地ノ警衞迄ニ人數モ差出候事ニテ日數相懸リ候得ハ猶更以テ莫大ニ入費相懸リ諸藩疲弊之基ニ有之果ハ守衞手當モ夫カ爲ニ不充分樣ニ成行候時節萬一異心ノ賊船渡來致シ候ハヾ如何樣ノ失誤有之間敷キモ難申左樣無之共一二艘ノ船ニテモ沿海東西ヲ颿廻リ候テ此方警衞ノ人數引足不申異船ノ往來ニ從ヒ人數ヲ移シ奔走ニ勞ル、上賴ミニ可致大筒等之輪迄中々以テ行屆申間敷一體攻守ノ勢ハ守ニ利多ク攻ルニ利寡キ譯ニ候得共彼ハ船ニテ自在ニ遷移致シ此方ハ陸ニテ奔走ニ勞シ候得ハ勞佚勢倒置致シ戰鬪ニ及ヒ候得ハ勝敗ノ機無覺束候間此弊ヲ救ヒ候ニハ土着ノ兵士差置候テ或ハ農兵ヲ用ヒ異船ノ遷移ヲ逐ヒ奔走不致樣相備ヘ候方可然尤颿通リ候迄ノ儀ニ御座候テハ更ニ貪着ニ不及萬一上陸等可致模樣カ或ハ大砲ヲ打懸ケ殺氣ヲ含候船ニ候共先有合ノ兵士民兵ヲ以テ打拂之手配大小銃玉藥ノ用意ダニ有之候得ハ一陣之備ニハ足リ可申儀ニ有之段御沙汰之趣至當ノ御策ト奉存候扨又御再考ノ趣モ寔ニ御尤至極之御論ニテ御沙汰ノ通一昨年評議ノ所ニテハ寅年御改革後未タ年數モ相立不申格別是ト申程ノ事立候儀モ無之處俄ニ御復古有之候テハ御國政時々相改リ御輕卒之樣ニモ相聞可申間何ソ難被捨置不敬不法之儀有之候節夫

ヲ御辭ニ御改之積リ被成置其所ニヨリ沿海ノ守衞モ相整可申トノ儀ニテ被差延候得共何樣今年ハ是迄通航無之西北海ノ方殊ニ船數多ク艦通リ或ハ大砲ヲ放シ或ハ薪水食物抔乞候儀畢竟ハ御仁恤之御趣意ニ乘シ度々船ヲ寄セ海岸ノ樣子海ノ淺深等相伺哉モ難計詰リ輕蔑ノ意モ可有之哉ニ候ヘハ打拂之儀御復古被仰出候方可然ト被思召候由夫ニ付テモ異船渡來ノ度々諸藩ノ入費不少迷惑ニ及ヒ果ハ可及疲弊其極ニ至リテハ領內不穩ナル事ニモ相成候ハヽ萬一異船渡來之節守衞防禦ノ手當不十分ニ可相成異情難計事ニテ表向ハ異心無之樣致シ內實ハ窺覦ノ心ヲ含ミ或ハ漂流ニ事寄セ或ハ薪水等乞候趣ニテ此方ヘ親近イタシ交易抔願候心願ニモ候ハヽイツ迄モ彼ヨリ戰爭抔ハ勿論不敬不法ノ儀モ致間敷候ヘハ左候時ハ更ニ可相咎事跡モ無之此姿ニテ相過候ハヽ一年延候ヘハ一年丈二年延候ヘハ二年丈損害相懸リ年ヲ積丈ケ損害多彌溢疲弊ニ成可申彼方ニテハ御國地ノ情實動靜ヲ探索致シ置候テ戰鬪ニモ相成候ハヽ兵書所謂彼ヲ知ル者ハ必勝ト有之ニ相當リ此方ハ用途不足ニ相成戰士ノ手當兵糧之積蓄軍器之修理等モ不行屆素ヨリ彼カ軍情ヲ不知疲困之事態ニテ桀鶩之異賊飽迄熟練之兵卒利便之火砲ヲ防候儀如何可有之哉ニ付此節諸藩敵愾之志ヲ懷キ戰士モ奮揚イタシ軍資可也可供時節打拂之儀被仰出候ハヽ士氣モ奮勵致シ可申又御復古之儀ヲ以テ夷賊ドモ憤ヲ發シ異心ヲ企來リ候トモ只今國士憤發候時ニ當リ防禦ノ力ヲ盡候テ後年及疲弊士氣衰弱之時トハ大ニ違ヒ可申譬ハ壯强之人ノ働作ト老衰之者

ノ起居ト違ヒ候様ナルモノニ候得ハ差當リ目當モ無之イツ迄モ彼方ノ不敬不法ヲ待候テ年ヲ積諸藩及困疲國士衰弱ニ至リ候ハヾ御良策トモ不被思召候間此節追々少々宛之不敬不法之事モ有之間夫ヲハ御辭ニ託セラレ復古之儀仰被出當秋歸帆之加比丹ヘ被仰通候方ニ被思召候由逸々御尤至極奉存候仰之通イツ迄モ無際限相待候内此方ハ年々諸藩及疲弊世上之人氣迄モ不穩節ニ至リ候テハ是又御大事ノ儀ニ有之歴代事跡ヲ以テ相考候得ハ元亀天正之頃唐土朝鮮抔和寇侵掠ト申事此年有之其和寇ト申候ハ此方ニテ名ノ知レタル程ノ者ニハ無之戰國ノ時節九州邊ノ土豪共溢レ者ヲ語ラヒテ海賊同樣ノ儀ニテ船ヲ仕出シ彼國ノ邊境ヲ侵掠イタシ金銀財寶米穀等ヲ掠取候迄ノ事ニ候得共後ニハ横行相成人數船數モ多ク度々罷越果ハ郡縣府城抔攻破リ燒屠ナドイタシ彼方ニテモ兎角敗續勝ニテ人數死亡モ多ク入費モ夥敷相掛リ候趣ニ有之右ハ彼方モ季世ト相成政令不正士民難澁之折柄故彼土人之者共ノ中ニ手引イタシ候者モ多ク此方ノ軍卒戰闘ニ及ヒ候得ハ彼方ノ士一揆共夫々引連レ打交リ亂妨良民或ハ官庫之財寶米穀婦女等ヲ掠候事ニ候ヘハ國用之疲弊ハ季世ノ習ニテ大事ナル事ニ候ヘハ諸藩不及疲弊内打拂之儀被仰出萬一夷賊憤ヲ發シ渡來及戰爭候共此方之軍資手當モ可也相屆兵士之鋭氣ノ挫ケザル内ニ候ハヾ守備防禦之働モ行屆可申候又夷賊共御果斷御英毅之上復古之御所置ニ畏懼イタシ此後謂レナク渡來不致候ヘハ諸藩之幸國朝之御祉福ニテ御威嚴相立御世話モ薄ク可相成儀重疊之事ト奉存候

扨夫ニ付愚見候處ニテハ右打拂之儀不被仰出已前此程モ申上候趣ヲ以テ先此方金融筋之儀被仰出武家在町ヨリ融通御附被遣世上一統御趣意ノ程難有奉存候樣被成置扨其次ニ近來追々異國船罷越交易願或ハ水薪等乞候儀有之其度程能ク御仁憐ノ御取扱有テ御返シニ相成候處今年ハ別テ諸所海岸近ク通リ候船モ多ク中ニモ水薪等乞不敬之樣子モ相聞右ハ全ク先達テ被仰出候御仁恤之御沙汰ニ乘シ何カニ事寄セ近海へ乘寄セ漂流ニ無之ニモ水薪其外乞候モ有之詰リ如何樣ノ勝手我儘之儀願候トモ嚴格ノ御取計無之トノ見込ヲ以テ仕成候儀此方ヲ輕蔑致シ候意味モ可有之乍去寅年之被仰出モ有之故先ハ御仁義ヲ以テ御憐恤之御取計有之候へ共其度々警衞守備之入費モ不少沿海諸藩ニ於テハ迷惑ナル儀ニテ遂ニテ國用疲弊ニモ可及事ニ候畢竟ハ異國船度々罷越候故ノ儀ニ候得共不遠文政八酉年之通打拂之儀可被仰出積此節專ラ評議イタス事ニ候間守衞之儀猶更以此節ヨリ無油斷嚴重ニ可被申付置候趣先年ノ通リ被仰出候ハヾ其節達之通無二念打拂萬一異船ヨリ發憤上陸等致シ候ハヾ粉骨ヲ盡シ討取逐退可申事ニテ右樣打拂之一途ニ相成候ハヾ猶更以テ俄ニ人數差向候樣ニテハ行屆申間敷事ニ付土地ノ模樣居所ノ遠近ニモ寄候事ニ候へ共遠方ノ場所柄ハ其土着ノ兵士差置候哉或ハ農兵抔ニモ致シ萬一之節都合宜敷樣致シ且入費モ平日ハ相成丈不相嵩之樣心懸何レモ冗費ヲ省キ實用ヲ專ラニ備置候樣可致尤領主々々ノ籌畫土地ノ模樣ニモ寄候事ニ候へハ必箇樣ノ事ニハ無之詰リ入費ヲ省キ平常無油

斷不慮之備相立急速間ニ合候樣兼々經營モ致シ置度事ニ候旨御觸被置其上ニテ蘭人ヘ被仰渡可然ト奉存候乍去當年之處ハ篤ト御覽成候ハヾ猶御申種ニ相成候儀モ可有之哉且來春ハ蘭人江戶拜禮期年ニ候ヘハ於此地先年加比丹「ヲロムホフ」ヘ本國之儀ニ付御勘定奉行宅ヘ呼寄候テ奉行ヨリ直相尋候儀モ有之候間右例ニ準シ拜禮之加比丹ヘ在府長崎奉行立合篤ト御趣意ノ處蘭人能呑込候樣爲申聞候ハヽ無據御趣意ニ出候譯御信義モ相立此後御國威モ不墜樣談方モ可有之哉ト奉存候右ハ御英斷之處少々遲速ノ違御座候得共愚見ニハ夷賊共不敬不法ト申候テモ此方證跡ハ有之候ヘ共彼方ニハ左程之事ニモ無之間遁辭モ可申述既ニ一昨年「フランス」船ヨリ長崎奉行ヘ申立候此方不法ノ及取扱候儀モ彼方ニテハ申候得共此方ニテハ更ニ的證モ無之事跡難相分候又一昨年「アメリカ」船浦賀ヘ渡來之節此方ニテ大不敬不法ノ暴擧有之候得共夫モ無事ニ相濟候ヘハ萬一此上ニテ聊之事跡ヲ以テ御話柄ト被成候ハヾ却テ穿草出蛇之弊ヲ生シ夫ハ可好事ニモ有之間敷哉依テ愚意ニハ先年蘭醫「シーボルト」持來高橋作左衞門和解イタシ候露西亞加比丹「クルーセンステルン」ノ著シ候奉行日本紀行之內ニ此方ヘ御迷惑可相懸ニハ御國地ノ沿海ヲ彼國ノ船一二艘モ差越颿廻リ折節大砲ノ一放二放モ致シ候ハヽ海ノ衞兵奔走ニ勞レ果ハ內亂ヲ可生抔申居候儀右紀行版本ニ相成有之候事ニ候間此度異國船共不敬不法之儀ハ多ク不被仰述シテ度々近海ヘ乘寄セ折々大砲抔打放候ハ右書中ニ認有之候趣意ヲ含ミ候事ニテ

可有之左スレバ窺覦之情有之テノ事歟事情ノ眞僞ハ難察候ヘ共是迄文政度之通リ眞僞ヲ不論打拂之一途ト定置候ヘハ奔命ニ勞シ候事モ又當時ノ通リ應接信義ヲ盡シ候共「ステルン」カ策ヲ以テ考候得バ信義親睦之內ニモ不慮ノ備ハ致事ニ候得ハ事兩端ニ相成於此方ハ迷惑ナル事ニ候間無據此度文政度打拂之所ニ復シ候事ニ有之尤實ニ難破船ニ無相違船具等破壞致候程ノ樣子ニモ候ハヽ夫迄モ打拂候事ニハ無之候得共薪水等乞候ニ事寄セ國地ノ樣子ヲ探索セラレ此方ニテハ親睦之意ヲ表シ候テ却テ策中ニ陷リ候モ無智ノ至ニ候ヘハ夫等ノ處ヲ以テ無據復古致シ候譯モ諭シ度事歟ト奉存候間左候得バ洋夷之方ニモ執辭柄彼是申候儀ハ先ハ有之間敷奉存候間如前文申上候儀ニ御座候御觸案之儀ハ御評決之上御沙汰次第取調相伺候樣可仕候依之御下ケノ御書取一通返上此段申上候以上

五月

〔禁令考〕卷一、五一九頁。第廿六章併看。此法制中疑ヲ容ルベキ條アリト雖モ本題ノ主旨ニ關セザルヲ以テ之ヲ論ゼズ。『四海鎭』原文ノ儘。

〔丙〕朝廷ト幕府ト關係ノ件。

〔一〕德川家康ノ名ヲ以テ定メタル公武法制十八箇條ノ第二條。

元和元年八月。

淳和奬學兩院別當職關東將軍ヱ被レ任候上ハ、三親王攝家ヲ始公家並諸侯ト雖モ悉致ニ支配一候國役一切可レ爲レ知政道奏聞ニ及ハス候四海鎭致シカタキトキハ其罪將軍ニ有ベシ

（末文ニ右十八ケ條勅命ヲ蒙リテ定ム、紫宸殿ニ懸ケラルベシトノ文意ヲ記シ、次ニ年月名印ヲ附スルコト左ノ如シ。）

元和元卯年八月　家康　在判

（二）外事ニ關スル往復文書。

（ア）外船近海ヘ出沒ニツキ朝廷ヨリ幕府ヘノ諭示。

弘化三年八月廿九日。

〔安政〕四〇六―七頁。〔十五代史〕卷十九、五四頁。第廿六章併看。

近來異國船時々相見候趣風聞内々被聞食候難然文道能修武事全整候御時節殊ニ海邊防禦等堅固之旨被聞食候間御安慮ニ候ヘ共近頃其風聞屢々彼是被爲掛叡慮候猶此上武門之面々洋蠻之事不侮小寇不畏大賊宜シク籌策有之神州之瑕瑾無之樣精々御指揮候テ彌可被安宸襟候此段宜有御沙汰事

（イ）外艦渡來ニツキ京都所司代脇坂安宅ヨリ傳奏ヘノ通牒。

嘉永六年六月九日江戸發信、十三日所司代通牒。

〔阿部家文書〕

脇坂淡路守（播州龍野城主）。第廿六章併看。

此度浦賀表ヘ北亞米利加船四艘渡來候右ハ深ク心配致シ候事ニモ至間敷候ヘ共近來度々近海ヘ異國船來寄候儀ニ付殊ニ寄テハ御國體ニ拘候儀之有間敷モ難計候間防禦筋之儀格別嚴重ニ被仰出武邊ノ御備等モ之有事ニ候ヘ共於當地猶更彼此沙汰モ可有之事ニ候間右ノ趣御兩卿ヘ御達置可申旨年寄共ヨリ申越候事

年寄＝閣老。

〔阿部家文書〕
第廿六章併看。
七社＝伊勢兩宮、石清水、加茂下上兩社、春日、平野、稻荷、松尾。
七箇寺＝仁和寺、東大寺、興福寺、延暦寺、園城寺、東寺、廣隆寺。
〔阿部家文書〕
第廿六章併看。

〔ウ〕同上傳奏ヨリ京都所司代ヘノ通牒。　嘉永六年六月十七日。

此度浦賀表ヘ北亞米利加船渡來候旨被達叡聞候處防禦之御備格別嚴重ニ被仰出候由ニ候得ハ別條ハ無之儀ト被思召候得共萬一御國體ニ拘リ候儀有之候テハ誠ニ不安被思食候間以叡慮七社七箇寺ヘ御祈禱被仰出候依テ爲御心得申入候事

〔エ〕露人渡來ニツキ閣老ヨリ京都所司代ヘノ令達。

安政元年十月廿三日。

當月豆州下田港ヘ魯西亞船碇泊致候ニ付早速爲應接役々差遣願意之次第論談爲及候處彼國ヨリ差越候書翰ニモ有之候日本魯西亞兩國之境界相定候儀與蝦夷地エトロフ迄日本所領之段承知仕從北蝦夷唐太全島日本領之旨申談度儀ニハ候得共唐太島之儀ハ當夏見分之者差遣委細取調候處全島蝦夷住居ノ儀ニハ無之北之方ニハ山丹種類スメレンクル夷等部類モ有之候旨境界難相分次第モ有之此上如何決斷モ可相成哉未相分儀ニハ候得共御國境相定候儀ハ不容易事ニ候間應接之趣一ト通リ申進候御都合次第傳奏衆ヘモ內分相通置候樣被存候

十二月二十三日

內藤紀伊守
久世大和守

〔近事鈔〕卷二・都筑駿河守・第二十六章併看・

〔安政〕七八―九頁。〔十五代史〕卷廿上一四七頁・第廿六章併看・

松平伊賀守
松平和泉守
牧野備前守
阿部伊勢守

脇坂淡路守殿

〔オ〕外國處置ニツキ阿部閣老ヨリ禁裏附都筑峯重ヘノ令達・

安政二年七月廿八日・

魯西亞英吉利亞米利加等御處置之品追々所司代へ申遣置候儀ニハ候得共書狀ニテハ難盡意味モ有之兼々御所向ニ於テ御心配被遊候趣ニ付其方ニハ先役之節取扱候品モ有之異國ノ事情ヲモ相辨居候事ニ候間上京之上所司代へ篤ト申達達叡聞可然事共ハ事實能々相分時勢無御據譯柄等關白殿へ直談有之樣致度時宜次第其方儀所司代同道ニテ罷出候ハヽ可然哉ト存候仍テ右三ヶ國へ差遣候條約書寫相渡候間持參致シ所司代へ申談御都合宜樣可被取計候事

〔カ〕朝廷條約締結ヲ已ムヲ得ズト認メタル事ニツキ京都所司代ヨリ閣老ニ報申・

安政二年九月廿日・

傳奏大納言三條實萬。
議奏大納言坊城俊明。

〔安政〕七九頁。
第廿六章併看。

駿河守京着之上其御地ヨリ持越候ロシヤ、エギリス、アメリカ之條約書寫持參ニ付委細演說之趣承之兼テ被仰下候義モ有之ニ付申談一昨十八日駿河守同道關白殿ヘ致伺候條約書寫拙者指出被仰下之趣及演說引續キ駿河守ヨリ御直話致シ相尋ラレ候箇條モ有之同人ヨリ逐一及御答候處委細被致承知是迄應接之次第並三國トノ條約無御據譯柄其外異國ノ事情等實事分明ニ相譯リ被致安心右之段可被及言上候間是等之趣ハ宜申上旨關白殿被申聞候且各樣ニモ彼是御配慮之段是亦宜申進旨被申聞候間此段申進候右之節傳奏衆議奏廣橋大納言萬里小路中納言被致侍坐候以上

九月廿日　　脇坂淡路守

阿部伊勢守樣
牧野備前守樣
久世大和守樣
內藤紀伊守樣

〔キ〕條約嘉納及ビ幕府ノ處置叡感ノ事ニツキ京都所司代ヨリ閣老ニ報申。　安政二年九月廿二日。

月並爲伺御機嫌今二十二日拙者參內致シ候處關白殿被　逢十八日三箇國ヘノ條約書寫持參演說之趣並都筑駿河守直話之次第等委細被及奏聞條約書寫モ被入叡覽候處段々之御

處置振具サニ聞食殊ノ外叡感被爲在先以御安心被遊候不容易事狀追々居合候段千萬御苦勞之御儀ト被思食候猶此上之御取扱振御國體ニ不拘樣御賴被思食右之趣宜申上旨被仰出候且又各樣ニモ不一通御心勞其外掛リノ面々モ骨折候義ト被思食候是等之趣各樣迄能々可申進旨御沙汰候旨今日關白殿被申聞候間此段申進候以上

九月二十二日　　脇坂淡路守

〔起原〕下二一九六頁。〔外交談〕一六頁。第廿六章併看。

〔ク〕外國條約嘉納ニツキ幕府ヨリ布令。　安政二年十二月廿七日。

魯西亞英吉利亞米利加國ヘノ條約寫入叡覽候處段々之御處置振殊之外叡感被爲在被遊御安心千萬御苦勞之御儀ト被思召御年寄衆ニモ不一通御心勞其外掛リ之面々ニモ骨折之儀ト御察被思召候旨關白殿被達候段傳奏衆被申聞趣所司代ヨリ申越候事

〔註〕『幕末外交談』ニハ此文書ヲ以テ嘉永六年十二月ニ繫ケ、『開國起原』ニハ安政元年ニ繫クレドモ、嘉永六年ニハ三國條約未ダ成ラズ、日米條約ノ成リタルハ安政元年三月三日、日英條約ハ同年八月廿三日、日露條約ハ同年十二月廿一日ニアリ、而シテ幕府ガ日露條約ヲ接受シタルハ同月廿四日ニアルコト本文第十八章ニ記スルガ如クナレバ、其廿七日ハ京都ヨリノ答報未ダ江戸ニ達スルノ時日ニアラズ、且ツ幕府ガ三國條約書寫ヲ始メテ京都ニ致シタルハ安政二年八九月ノ間ニアルコト本文第廿六章ニ記スル

ガ如ク、又條約ハ嘉納トナリタルハ前二項ノ文書ヲ以テ之ヲ徵證スベシ、旁此布達ノ文意ヨリ推シテ安政二年十二月ニアルコト疑ナキモノト斷定シタリ。

〔起原〕上三四四頁。

〔ケ〕米國領事駐剳ニツキ閣老ヨリ京都所司代ヘノ令達。

安政三年八月三十日。

亞米利加船下田箱舘ヘ入港御差許相成候ニ付テハ彼國官吏指置候儀條約ノ趣モ有之異船追々渡來ニ付テハ諸事取締筋之儀心得候者無之候テハ御國ノ御爲不相成彼國政府ニ於テモ深ク心配致シ追々申立候趣モ有之於此方ハ御國內ニ異人指置候儀元ヨリ不好筋ニ候得共尙致勘辨候ヘハ何樣之船渡來何樣之儀仕出シ可申哉モ難計右樣之節ニハ官吏指置候ヘハ如何樣ニモ取締方出來候儀ニ付此度下田港ヘ彼國官使指置キ候方ニ致治定滯留爲致候事ニ候右ニ付テハ邪敎傳染不致樣其外取締筋嚴重取計ラヒ家居モ可成丈取縮メ取建貸遣シ候積リ夫々申渡シ御目付岩瀨修理彼地ヘ被指遣下田奉行ヘ申談シ後來迄之御取締筋諸事爲取計候筈ニ候然ル處彼是浮說申唱候者モ有之自然致流轉候ハヽ於御所向御心配モ可被爲在儀ニ付當節ノ御處置振先不取敢申進候間傳奏衆ヘ爲心得被相達置候樣存候以上

八月晦日

內藤紀伊守　花押

久世大和守　花押

牧野備前守　花押

阿部伊勢守　花押
堀田備中守　花押

脇坂淡路守様

〔三〕米使渡來事件ニツキ傳奏三條實萬ト阿部正弘トノ對話筆記。

嘉永六年十一月廿七日。

廿七日登城(暇ノ日也)諸事如例了老中面會ノ時予向伊勢守云近來度々異國船渡來候殊ニハ當夏亞米利加國差出候書翰不容易儀深被惱宸襟候於當地不一方御配慮之儀ト被思召候右ニ付御沙汰之儀モ被爲在今度幸參向ニ付可申述旨關白殿被命候旨申述了ル一紙授之如左

近來度々異國般渡來有之殊ニハ去夏亞米利加國ヨリ差出候書翰之趣不容易事ト深被惱宸襟候處今般右御取計方之儀急度兩人へ被達置候旨脇坂淡路守ヨリ致承知即及言上當地不一方御配慮之御事ト被思召候誠ニ神州ノ一大事ニ候得ハ彌衆心堅固ニ國辱後禍無樣ニト被思召叡慮ヲモ幸此度實萬俊明兩人參向ニ付宜申述旨御沙汰ニ候仍此段申入候事

伊勢守披見了傳備前守次々傳覽

伊勢守被示即云右異國船一件上ニモ(將軍ノ事)段々御心配私共ニモ色々評議仕居候ト被申懸其後委曲精密ニ被申至極和談之氣味也其肝要意趣粗如左前後言辭等不能詳之

一容易ニ取計モ成難儀ハ常ニ御世話モ御座候得共何分當時十分之御手當モ相成居不申候

〔三條家實萬覺書〕第廿六章參看。

坊城俊明。

一時ノ儀ハ兎モ角モ可相成候得共一發スレハ何ク迄モ參ラネハナラヌ事故得ト整備出來ノ上ナラテハ難取計夫故彼是ト隙取御詮議ノ事ニ有之候

先平穩ニ爲取計其上彼ヨリ亂妨モ有之時ハ盡力候テ取計候積ノ事ト委敷被申候

一何分叡慮ヲモ被惱關白殿ニモ御心配被思召候ト存候上ニハ（將軍ノ事ヲ云フ）叡慮ヲ被安候樣ニ被遊候御趣意專ラノ御事私共ニモ一同其心得ニテ精々心配致居候由尤當地ニテノ御取計ハ叡慮ヲ被安候樣被遊候事コソ御當然ノ御事一同ニモ其心得ト申事繰返シ被申述了

一叡慮ニ箇樣被遊度ト申思召モ被爲在候ハヾ無御遠慮被仰出候樣左候ハヾ又其思召ニテ御取計モ可仕儀ト申候再應被申述若直御沙汰モ如何ニモ被爲在候ハヾ兩人ヨリ申越候樣ニト隨分懇切ニ被申也

語中ニ被申條無左右取計ハ如何樣トモ可相成候得共及異變何方ヘ亂妨候モ難計何分十分御備出來候上ナラデハ難成旨呉々被申述

一相授候書付ノ趣ハ猶可申上トノ返答也

〔四〕皇居造營ノ件。

〔ア〕工事督促ニツキ阿部閣老ヨリ御所御普請御用掛勘定奉行石河

政平勘定吟味役立田岩太郎ヘノ令達。　安政元年八月廿日。

禁裏御所向御普請之儀此度格別御急キノ事ニ候間先例ニ不相泥木寄等成丈致手繰何モ並支配向共上京之程合随分差急候樣被致來ル夏秋迄ニハ急度皆出來相成候樣諸事右之心得ヲ以取計可被申候事

（イ）金壹萬兩進献ニツキ阿部閣老ヨリ勘定奉行松平近直ヘノ令達。　安政元年十一月廿七日。

禁裏准后當時假皇居ニ御座被爲在萬端御不自由之御儀ト被思召候ニ付當時品々御入用御出方多之御時節ニハ候得共全ク思召ヲ以金壹萬兩被進候旨被仰出候御金出方之儀勘辨致シ可被取計候

（ウ）同上ニツキ所司代ヨリ傳奏ヘノ通牒。　安政元年十二月廿八日。

禁裏准后當時假皇居ニ御座被爲在何角御不自由之御事ト御配慮思召候ニ付御内々御手許ヨリ金壹萬兩被進之候宜被成御披露候以上

十二月二十八日　　脇坂淡路守

兩傳奏宛

（近事鈔）卷二。石河土佐守。第廿七章併看。

（近事鈔）卷二。第廿七章併看。

准后　藤原夙子（英照皇太后）。

（言渡）（禁中日記）。第廿七章併看。

〔エ〕同上ニツキ右大臣近衞忠煕ヨリ尾張藩主德川慶勝ヘノ書。安政二年春。

（上略）舊冬ハ大樹公格別之思召之旨ニテ一萬金御進献ニ相成候御手厚キ御事感入恐悦ニ候（下略）

〔阿部家文書〕。〔懷舊〕六二二頁。第廿七章併看。

〔オ〕墻塀取廣ゲニツキ德川慶勝ヨリ近衞忠煕ヘノ書。安政二年四月。

（上略）禁闕御造營モ追々御賑々鋪相成已ニ過日ハ石河土佐守上京之砌内意ヲ含候儀ト相見ヘ淡路守參內仕兼テノ義表向被仰立候樣御導キ申上候由左候ヘバ御十分之儀ニハ不參候共凸形之處ハ彌被行候儀トモ相見於小生ハ大慶不斜御事ニ御座候全ク大樹ノ忠志ヨリ出候事ノ由ニテ阿閣初モ是式之御事ハト存入候處ヨリ御成就ニ相成候儀ト被存申候（下略）

四月

〔島津家記〕。第廿七章併看。

淡路守＝所司代脇坂安宅。

凸形云々墻塀取廣ゲヲ謂フ。

大樹＝大將軍。

阿閣＝阿部閣老。

〔カ〕工事督促ニツキ阿部閣老ヨリ京都御普請御用掛石河政平等ヘノ令達。安政二年五月。

禁裏御造營追々御出來相成候御模樣ニ相聞ヘ何レモ出精之趣一段ノ事ニ候右ニ付當冬中

〔近事鈔〕卷三。第廿七章併看。

ニハ新内裏ヘ遷幸被遊度被思食候由御内々御沙汰モ有之候御事ニ候間猶此上一際精ヲ入當七八月迄ニハ急度御成功ニ相成候樣何レモ力ヲ盡シ可被取計候右之趣末々ノ者共ヘモ篤ト申渡御抄取相成候樣可被致候事

以下五通（新伊勢拾遺）。第廿七章併看。

（五）新年儀式省略ノ議。

（ア）阿部正弘ノ發議　安政元年十二月。

三奉行　林大學頭
海防掛　大小御目付
へ
伊勢守

一來春大名御旗本登城年頭御祝儀申上並兩山ヘ自拜罷出候節銘々着服並供連行裝之儀平生朔望之通ニ可相心得例年之通冠服裝束不相成旨被仰出度事

但此儀御先例モ無之奇僻之事ヲ被爲好候樣存候族モ可有之候得共夫ハ其者ノ心得淺キニテ少シモ御構不被遊方ニ可有御座當今京都御普請未御出來無之皇居假御住居ニテ御越年被遊候ニ付台慮深御氣ノ毒恐入被爲思召且又此度之地震諸國ヘ打連諸大名疲弊萬民ノ死亡愁苦厚御憐察被遊外夷渡來混雜中之儀旁吏ニ目出度新年ト不被爲思召御越年諸事御略式ニ付本文之通被仰出候儀ニ相觸申度事

登城兩山ヘ右之通ニ候得ハ老中若年寄宅ヘ年頭廻勤ニ不及旨モ相觸度事大名御旗本着

服右之通ニ候得ハ其家中之者共ハ銘々主人ニ準シ例年之通ニモ不及儀銘々主人之心得可有之事ト是又相觸置申度事

一來正月三日御謠初御廢式被仰出度事

但此儀ハ別テ世上人氣ノ向背ニ相掛可申候間早速決着相成候得ハ御三家初メ諸家ヨリ當日御盃臺献上之儀來年ハ夫ニ不及候旨早々相觸申度事

十二月

別紙ハ前項ニ載スル發議ヲ謂フ。

(イ) 阿部正弘ト德川齊昭トノ密議書翰。

其一。 正弘ノ協議書。

安政元年十二月廿三日。

今日モ御登營御苦勞奉存上候其後愈御喜元能恐悅存上候陳ハ過刻御相談申上候一條此程中ヨリ別紙之通認取三奉行初へ十分ニ評論承度趣申聞相下ケ申候處未不殘評議相揃不申品々衆論區々ニ御座候外之事ト違ヒ何分不容易御變革之御處置故同列中ニテモ品々論議モ有之甚心配仕候如何ナモノニ可有之哉何分差向候儀ニテ何卒思召無御伏藏早々御敎示奉願候何レノ道ニテモ上之御爲可然方ニ仕度ト實ニ痛心仕候右申上度如此ニ御座候以上

十二月二十三日

阿部伊勢守

其二。同意ヲ表スル齊昭ノ答書　安政元年十二月廿三日。

御書面別紙共披閲來春年頭御禮等御差略ノ儀出格之御決斷尊慮ヲ以右樣被仰出候得ハ實ハ却テ目出度奉ト難有御事ニ奉存候乍然右樣被遊候ニハ萬事聯屬致候樣被遊候儀肝要ト奉存候三奉行初ヨリ申上候趣ヲ以御折衷三家ヘモ早々御懸之方可然尤偏樣ノ儀衆論ヲ盡候內ニハ機ニ後レ候間ヨキ加減ニ御見キリハ勿論ト存候扨如此大御決斷ハ何ノ爲ニ被仰出候ト申儀大切ニ候間諸向ヘ御觸之御案文ハ何卒乍不及早ク拜見イタシ度候老眼燈下草々及御答候也

十二月二十三日夜即刻　水隱士

勢州殿

其三。正弘意見行ハレザルヲ報ズルノ書。　安政元年十二月廿七日。

內密用奉申上候（中略）陳ハ此間御內々御相談申上候來春年始御略式等之儀云々何分其筋評議區々其上同列初若年寄ニモ不同意ノ者共モ有之候ニ付段々延引モ仕候間評議區々ノ趣銘々見込ヲ以テ思召相伺此上ハ御決着次第ト申上置候處上ニモ深御勘考被遊候上何分見込モ區々ノ儀來春ハ是迄ノ通ト被仰出候間此程中ノ論ハ被行不申事ニ相成候間先日モ申上候儀故御內々御心得ニ申上置候（下略）

十二月二十七日　　阿部伊勢守

其四。齊昭ノ答書。　安政元年十二月廿七日

一書申進候來春御式御止之儀御六ヶ敷候ハヾ不得止候ヘ共サル代リ御事業ヲ以人心改リ候樣致度（下略）

十二月二十七日　　水隱士

勢州殿　初

〔近事鈔〕卷一。〔續々泰平〕。〔嘉永明治〕。〔十五代史〕卷廿上一〇四―五頁。〔起原〕下二一六四頁。〔海軍〕卷一、二〇葉。〔前記五四頁。第廿四章併看。

邪宗門制禁舊ノ如シ。

〔丁〕大船製造及ビ日本國旗ノ件。

〔一〕大船製造ノ禁令解除ニツキ諸藩及ヒ旗下ノ士ヘノ布令。

嘉永六年九月十五日。

荷船之外大船停止ノ御法令ニ候處方今ノ時勢大船必用ノ儀ニ付自今諸大名大船製造致候儀御免被成候間作事方並船數共委細相伺可受差圖旨被仰出候尤右樣御制度御變通被遊候モ畢竟御祖宗ノ御遺志御繼述ノ思召ヨリ被仰出候事ニ候間邪宗門御制禁等ノ儀ハ彌以如先規相守取締向別テ嚴重可被相心得候

今度御法令ニ大船製造可言上之旨被仰出候然ル處荷船ハ前々ヨリ御許有之事ニ付有來通製造之儀ハ是迄之通リ可相心得候尤荷船タリ共製造方其外有來ト相違致シ候ハヽ此度被仰出候通リ相心得可申事

（二）日本船旗創定ニツキ閣老ヨリ大目付目付ヘノ達。

安政元年七月十一日。

（「續々泰平」。「嘉永明治」、「海軍」卷四、二葉。「十五代史」卷廿上一三〇頁「續實紀」「前記」「近事鈔」ニハ七月九日ニ繫ク。）

（第廿五章併看。）

大船製造ニ付テハ異國船ニ不紛樣日本總船印ハ白地日之丸幟相用候樣被仰出候且又公儀御船之儀ハ白紺布交之吹貫帆中柱ニ相立帆之儀ハ白地中黑ニ被仰付候條諸家ニ於テモ白帆ハ相用ヒス遠方ニテモ見分リ候帆印銘々勝手次第ニ相用可申候尤帆印幷其家之船印ニテモ兼テ書出置候樣可被致候右大船之儀平常廻米其外運送ニ相用候儀勝手次第ニ候得共出來之上ハ乘込人數並海路乘筋運漕方等猶取調可被相伺候

右之趣可被相觸候

（三）船舶ノ事ニツキ德川齊昭ト阿部正弘トノ往復書翰。

（以下三通「阿部家文書」。）

（第廿四章併看。）

（ア）齊昭ノ書。　嘉永六年六月廿三日。

（「船名撰定ノ事」。）

（上略）船名之儀ニ付過日申進候處尙又御懸リモ御座候故如別紙申進候也

六月念三　　水隱士

堀田殿
阿部殿

穩當ノ佳名ハ追々御取用ニ相成差當リ是ト心附候佳名モ考付不申長風丸ナド可然ト存候故先ツ相認申候處尙御相談申候外ニ佳名心附モ御座候ハヾ御申聞ニ致度候

〔イ〕正弘ノ書　安政三年七月。

〔上略〕御引請ニテ御製造之大船報國丸ト相唱候儀差支之筋ハ無之候得共公儀之御船ニ付諸家始之聞取方ニヨリ候テハ不都合ニモ可有之候間一向ニ別段穩當之佳名御考モ有之候ハヾ今一二名御撰有之候樣仕度候

七月　阿部伊勢守

〔上略〕陳ハ御船名之儀ハ過日申上候ニ付御承知不被爲在以前被仰下候趣縷々崇仰拜承仕候旭日丸ト被仰出大ニ安心仕候〔下略〕

七月二十日　阿部伊勢守

〔新伊勢拾遺〕

第廿四章併看。

〔ウ〕造船及ビ和蘭ヘ船舶註文ニツキ正弘ノ書。　嘉永六年七月廿五日。

〔上略〕造船和解書等之儀ニ付云々委細ニ崇仰拜承仕候太郎左衞門ヘモ得ト申談候處此節同人儀江戸内海臺場幷御筒等出來之御用取調ニ相懸リ何分船迄ハ迚モ只今手廻リ兼暫御

江川太郎左衞門。

和蘭へ船艦註文

猶豫被仰下候樣願出候（中略）幸御家臣鱸半兵衞儀雛形モ拵同人萬端相心得居候故御用之趣ヲ以同人ヘ相達シ於御館一二艘大船造立候樣仕度尤御用之事故諸入用皆從公儀可被成下候間右ニテ御差支ハ有之間敷哉同人モ早速畏御請可仕哉誠極密心得ニ相伺候間否被仰下候樣仕度奉存候同列談シ合此段早々申上候以上

七月二十五日　伊勢守

先達テ長崎奉行ヘ談シ遣シ候阿蘭陀ノ大船蒸氣船等御取寄之儀七八艘十艘計ト申上置候處猶又相考候處何レニモ諸大名共大船御免シニ相成不申候テハ不叶御時節何程澤山大船阿蘭陀ヨリ持越候共御用計ニ無之諸家ニテモ御免ノ上ハ上ヨリ夫々ヘ取入候樣御世話御座候テモ可然歟左候得バ不用ニハ不相成且迚モ申遣候事ニ候ハヾ運送便利ノ爲メ國中ヘ相用サセ候ト申趣意ニテワザト澤山申遣是非々々右之數丈モ相揃相納メ日限阿蘭陀ヘ中談候方却テ御國威モ顯可申候哉抔共愚考致シ候長崎奉行ヘ軍艦蒸氣船共五六十艘取揃差出候樣カピタンヘ申達候樣巨細旅中ヘ直書ニテ申遣置候得共如何有之ヘク哉左候ヘハ其內此方ニテモ追々出來右に不拘彼方ヨリモ御取寄是ハ直ニ御用辨ニ相成諸家ニテモ直用ヒ相成便利ト存候乍序極內々申上候

〔工〕造船ノ事ニツキ齊昭ノ書。　嘉永六年七月廿六日。

〔新伊勢拾遺〕第廿四章併看。

扨ハ江川儀此節御臺場大筒鑄立ニテ造船ノ方迄ハ手廻リ兼候ニ付テハ微臣半兵衛へ被仰付大船一二御造作ニ可相成哉ノヨシ御懸(マヽ)之趣謹承致候處同人儀蘭書ノ上ニテハ承知モ致シ候半ガ是迄大船製造ハ勿論乘候事モ無之先ハ必定釣合宜敷出來候否何トモ申兼殊ニ於西洋モ大船造作ハ一箇年計モカヽリ入用モ一萬餘ト承リ及候事馴レ不申初テノ事ニテハ別テ出來モ遲々致シ御入用モ加之可申哉共存候(氷入ヨリ下ハ銅釘不用候ヘハ長保不申ヨシ)若々被仰付候ハヾ土佐漂民萬次郎相談ニテ一同ニ仕先ツバツテーラノ二ツモ拵候其上ニテ大船ヘカケ申度候御答迄早々也

七月念六　　　　　齊　昭

勢　州　殿

蘭人へ五六十艘被仰付候儀實に御盛之儀本朝永世ノ御爲ト有難事ニ奉存候　大艦有之候ヘハ新川堀割モ山切通シニモ不及事ニ奉存候

〔續々泰平〕嘉永六年十月。第廿三章併看。

〔戊〕武事奬勵ノ件。

〔一〕洋式砲術練習ノ事ニツキ閣老ヨリ大目付ヘノ令達。　嘉永六年十月四日。

武術修業之儀引立方等銘々存寄モ可有之候得共砲術之儀ハ異國防禦ノ要術ニ有之殊ニ諸流ノ内西洋打方之儀ハ近來開ケ候事ニ付未タ習熟イタシ候者モ少ク候處今般内海御警衛西洋法ニ寄御臺場御取建ニ相成候ハ其法術ヲモ手廣ニ可被成置御趣意ニ候間其心得ヲ以テ西洋打方習熟之者ヘ申談諸流同樣稽古相勵候樣厚ク可被申付候

〔陸軍〕卷十八、一一一三頁。
第廿三章併看。

〔二一〕講武場設立ノ事ニツキ阿部正弘ヨリ德川齊昭ニ示セル覺書。

安政元年十月頃。

覺

學問所之儀ハ寬政之度御再建有之文學御引立之御盛德相顯レ候處講武場ノ儀ハ今以都下ニ御取建無之御闕典ニ付場所之儀御普請奉行ヘ繪圖面爲取調候上海防掛大目付御目付ヘ評議爲仕候處別紙之通夫々勘辨イタシ申聞尤之次第ニ御座候間當節不慮ノ天災格外御出高多之御中ニハ候得共時勢何分其儘ニハ難被差置儀ニ付御勇決ヲ以講武場三箇所程御取建有之諸術稽古所等相應ニ御補理之上大御番頭兩番頭ノ内御人撰ニテ講武場總裁被仰付御目付ハ引請御預リニ被仰付番人其外共御目付支配向ニ申付御使番之内人數ヲ極日々出席爲仕御旗本御家人之内術業宜仕候者敎授頭ニ被仰付門弟ノ内差繼業宜者ハ敎授出役世話役等ニ被仰付候方ニ可有御座哉左候ハヾ場所之儀

鐵砲洲築地　堀田備中守中屋敷

筋違橋御門外　加賀原　北之方地續町家取拂東之方往來六七間圍込候積

四谷御門外　間之馬𪊧

右之通講武𪊧ニ被仰付武術稽古所鐵砲角𪊧御取建之上小隊之駈引等出來候程ニ御普請被仰付候方可然之事

一調練𪊧ノ儀ハ深川越中島後海手埋立之地所ヘ𪊧廣ニ御取建相成候樣仕度トノ趣是亦尤之儀ニ有之同所之儀ハ素々海岸寄洲ニテ御入用ニモ無之𪊧所ニ有之大小砲之調練其外船打稽古等ニハ最上之要地ニ付十分𪊧廣ニ御取建有之候方可然哉左候ハヾ別紙之通向々ヘ相達候樣可仕哉之事

一神田橋御門寄一橋御門外明地之儀モ是迄冬分ハ鳥飼付之御拵ニ相成夏分ハ諸人入込御差許之𪊧所ニ候得共鳥飼付相止候テモ御放鷹等强テ御差支モ有之間敷哉御目付申聞候通𪊧廣ニハ無之候ヘ共一橋御門外ヨリ神田橋御門寄之方明地一纒ニ圍込相成候得ハ諸家並御旗本ノ面々騎戰調練習熟之𪊧所ニモ相成雉子橋寄方之明地之儀モ縱橫ニ馬𪊧ヲ取候得ハ多人數乘馬稽古モ出來致シ右之𪊧所ハ御城程近之儀ニモ御座候間タトヘ繁勤ノ向ニテモ登城之往返ニ立寄稽古モ相成至極都合モ宜候間向後調馬之𪊧所ニ被成下品ニ寄日割ヲ極向々ヘ拜借被仰付候テモ可然哉尤御城火除明地之儀ニ付聊之建物ハ不苦候得共廉立候

休息所等取建候儀ハ難相成外圍之儀モ御入用不相掛樣生垣等ニテ質素ニ出來候樣可仕哉之事

一右之外學問所別ニ一箇所御取建其外火消屋敷二箇所御減省等品々建白之趣モ有之候得共先差向候儀ニモ無御座候間猶追々篤ト取調申上候樣可仕候事

〔新伊勢拾遺〕

第廿三章併看。

〔己〕政事改革ノ件。

阿部正弘意見書。　安政元年六月。

○印取計方ニ寄リ御威光ヲ相減候儀ニ至リ可申間厚取調候事ト存候事

△印當時取調中凡觸案相出來申候事

□印寺社ノ分モ追々上金ノ內調有之且此節町人共上納金等取調ニ表向相懸リ候間右へ少々響合候間當時勘辨モノニ有之候事

×印評論モ盡シ有之取拂ニ無之相濟御臺場ノ出來方ニテ驛場モ圍ニ相成候趣

◎印如何可有之歟勘辨モノト存候

一御人選褒貶黜陟之事

○諸家常例獻上物幾年之內三分ノ二ヲ相減候事　但同列若年寄御側等へ常例進物

右同斷減少之事
○朔望二十八日御役人之外登城御免間席々ニテ割合登城之事　但年始五節句八朔是迄ノ通リ
一御旗本御家人勤向心願有之ニ付日々同列初御役家ヘ罷越候風習急度停止ノ事
△一諸大名御旗本年始之外御府內通行供連人數格別ニ相減候事
△一十萬石以上並老若且諸席四品已上之外御府內通行馬上ニテ可有之事　但年始ハ是迄通リニテ不苦候事
□一馬喰町御貸附御藏前藏宿立替金並兩山御三家方之內並熊野三山名目金武家ニテ借用有之分返濟方年延之事　但座頭貸金是又本文同斷之事
一御本丸大奧向婦人御人減ト被仰出可出來丈御減少之事
御廣敷向男子之分モ當時餘リ多人數故是又御人減之事
一御小姓御小納戶中奧御小姓抔三分ノ一ヲ御減少ニテ表方武官ヘ御編込之事
一非常ノ節町方人歩差出方之儀早々取調有之樣申渡之事
一御鷹匠御鳥見能役者之類人數御減之事　但御鷹匠御鳥見ハ明跡減切能役者ハ奧詰成丈ケ御減之事
一文武學校御府內ニテ二三箇所有之度且又操練塲モ同樣ニテ日限相定諸家ヘ御貸ニ

モ致度右土地取調之事
一御持弓組御先手御弓組其外諸組々必鐵砲稽古兼可申事
一濱御庭ニテ操練並右御場所海上ニテ水戰稽古有之度其取調可有之事
一浦賀奉行下田奉行往返ハ船ニテ致シ度事
一箱館奉行取調之事
一蝦夷之儀如何致シテ可然哉海防懸リ其外ヘ見込御尋之事
×品川驛御取拂方評議イソギ相定度候事
一五番六番之御臺場少シモ早ク出來候樣致度事　但應接之者異船江戶ヘ可罷出旨申ニハイツモ窮シ候異船之方ニテモ江戶ヘ行ト申セハ困ト存兎角夫ヲ以威シ候由ニ付江戶ヘ來候テモ不苦ト申樣江戶海ノ固メ早々相整置度候間右二箇條差急キ候
一異國船浦々ヘ相見候節其最寄諸家ヨリ銘々相屆候モ無益之費可有之間其最寄申合セ一箇所ヨリ屆候樣致度事　但薪水食料ヲ乞ヒ或ハ別ニ相替候事柄有之候向ハ夫々懸リ合候方ヨリ相屆可申事
一異船滯船之場所ヘ應接ニ罷出候者日々ノ事日記可致候間異船ヘ懸リ候事柄ハ表向屆面之外ニ日記ヲ差出候樣致度事

一公議局●

一在府ノ大名並御旗本ヲ組合セ異船江戸海ヘ乘入候節ハ箇樣ト水陸軍制ヲ定メ年番中附置度事
一隅田川之上戸田アタリ見合御圍米之土藏建置度事
一關八州ニ在所有之大名ヘ家中可成丈ケ妻子在所住居爲致候樣相觸度事
一江戸並近鄕之遊民取締方取調度事　但遊民之遣シ所無之候テハ騷動ヲ引出シ可申詰リ蝦夷ヘ遣シ新田爲開候歟取調致度事
一御旗本並陪臣馬乘方太平之風習花法ニ流レ候ヲ軍用有益之乘方ニ相改度事
一評定所ト申モノ有之如ク名目ハ何ト名付候共別ニ海防局ヲ一箇所取建候テ海防懸之面々月々十二度位日ヲ定メ寄合差向候儀無之候共種々討論研究致度事　但右定日之内退出ヨリ不意ニ同列若年寄等罷越候樣致度候
一杉田成卿箕作阮甫抔天文臺ヘ出役致シ候類ニ倣ヒ前文海防局ニ附屬候一局ヲ構ヘ當時諸藩ノ陪臣ニテ學論有之外國事情ニ通シ候儒者蘭學者兵家者砲術家等出役被仰付是モ月々十二度位罷出候テ海防懸リヨリ右之者打寄居候處ヘ色々評議ヲ下ケ議論爲詰候樣致シ度候事　但機密之儀ハ陪臣共ヘ不申聞候得共少々ツヽ彼ヨリ推察致シ候位之儀ハ懸念不致衆智ヲ集メ度事
一商人共持合居候米多クハ深川ニ有之歟之由風聞ニ候海近ニテ自然時節之爲不宜候

間場所爲替度モノニ候乍去公邊ノ米ニテハ無之全町人便利ニ任セ候樣致來候得ハ俄ニ無理ナル差圖ハ難致何卒此儀思ハ敷工夫付度事

一昨年モ相違置候通リ諸國御代官所金納候處モ成丈ケ米納籾納ニ致度事

一道中筋人馬繼立之儀先々ヨリ宿々助鄕難澁之處當節必死ト迷惑之由ニ候就中宿驛ヨリ遠方之村々ヨリ出候人足並ニ右人足代ニ出銀致候村々別テ困窮致シ自然農業モ難取續折々ハ相潰レ候村々モ有之哉之由夫ト引替候テ宿役人共風俗惡敷處ニ至リ候テハ遠方村々ヨリ人足代ニ出シ候金ヲ銘々飮食料ト致シ近邊ヘ別段ニ人夫ヲ申付又ハ商買荷物賃錢高キモノヲ宿人足ニ爲持御定賃錢武家荷ヲ多ク助鄕村夫ヘ爲持候類有之歟之由以之外ナル次第精々念入惡風ヲ改メ百姓共立行候樣致度事

◎二條大坂御番罷出候面々三年目ニ交代爲致候テモ可然歟是計ニテモ道中筋之痛モ餘程相減可申存候事

◎日光御門主正月四月九月一年ニ三度御往返被成候是モ何ト歟御減ハ無之歟

◎大井川安部川興津川酒匂川平日橋ヲ掛ケ置度大井川抔ハ別テ御要害迚古來人足渡シノ儀深キ御趣意モ被爲在候得共當今ニ於テハ時勢變化中々大井川ニ船無キヲ以テ渡恃ミニハ不相成東西通路之便利並往來ノ者失費少キヲ肝要ト被存候尤川渡ヲ以テ渡世致來候者共ハ船手抔ヘ取遣ヒ候テ大ニ御用立可申歟之事

〔芳蹟〕第廿二章併看。

一神社佛閣普請之節屋根ヲ銅葺ニ致シ候儀容易ニ御免無之様可致事
一武家百姓町人之中ヨリ剃髪出家ニ相成候儀願濟ニ無之テハ不相叶右願必公邊ヘ出候様手重ニ致度事　但當時寺社奉行所ヘ領中之者ハ主人々々ヨリ伺有之候事
一百姓農業ヲ廢シ商人ト相成候儀不容易事ニ享保度被仰出モ有之候筈被右仰出通又々相觸度事

〔註〕此意見書ハ安政元年六月五日ヲ以テ徳川　昭ニ近示シ、末ニ『前文心付の廉々差支候事之あるべくやとは存候へ共、先夫々取調見たきものと存候、存外役々には宜しき考も之あるべくやとも存候。同列共には一同談合、外に考も御座なく、去りながら未彌評議詰り候儀には御座なく候』ト附言セリ。

〔庚〕阿部正弘辭職ノ件。

〔一〕辭表。　安政元年四月十日。

然ハ小生儀今日ハ頭痛眩暈ニテ難儀仕推テモ登城難仕御座候間無據不參仕候宜敷御含置可被成下候御用多之處度々相引何共恐入存候然ハ私内願之趣先達テ先ツ及御内話書取モ懸御目候處段々御示教被下厚忝奉存再三愚考仕候得共先達テモ申述候通リニ御座候間此儘重キ御役儀相勤罷在候儀深ク奉恐入候ニ付亞米利加船下田退帆候ハヾ早々内願書可差

出存居候處右船彌平穩ニテ最早異變モ有之間敷只々日重候ノミニテ此上退帆ノ模樣モ難ト相分不申魯西亞船モ長崎ヘ又々渡來有之候處去月二十九日退帆ハ致候得共右樣東西ヘ追々渡來之儀誠ニ以不容易御時節總體之氣格別ニ御引立並諸事追々御改革無御座候テハ不相成御時勢ニ御座候然ル處別紙ニ申上候如ク不行屆之私儀此儘罷在候テハ第一諸向憤發之機無覺束海防ヲ始御取締向等手後ニ相成可申事ニ付各樣不一ト方御心配中相引候ハ甚以不本意至極ノ限ニテ重々心痛仕候ヘ共前文之次第ニ付不得止事一日モ早ク退職仕候方ト奉存候間今日ヨリ恐入登城不仕相愼罷在候何卒內願ノ通御聞濟相成候儀偏宜御執成奉願候御用多之御中種々ノ儀申上御心配ヲカケ呉々恐縮之至御座候得共何分難默止申上候間左樣御承知萬々宜御賴申候

四月十日　　阿部伊勢守

尙以先達テ懸御目候內願書之儀ハ其節申上候通リ二月二十六日相認置候書面ニ付其儘差出候儀ニ御座候間御含宜御申上可被下候

内願書

私儀不奉存寄重キ御役被仰付別段之勤功モ無之候處度々莫大之御恩賞被成下御先代樣ヨリ引續當上樣格別之奉蒙御寵遇候段冥加至極難有仕合奉存候然ル處近來異國船之儀ニ付

御先代樣―大將軍德川家慶。當上樣―同家定。

兩上樣古今未曾有之御心配被遊候儀出來仕重々奉恐入候尤時勢不得止事儀ニ御座候得共昨今俄ニ相知レ候事柄ニモ無之弘化元年和蘭陀使節船長崎ヘ渡來其頃ヨリ追々異船相見ヘ殊ニ一昨年秋咬𠺕吧都督ヨリ新加必丹差向候始末等勘考仕候得ハ此度異船渡來一條モ豫メ相知レ候事ニ御座候就テハ兼テ御武備相整海岸防禦筋行屆候樣取計可申處御備向未ダ御全備不相成諸向共武備相整不申無據應接方萬端穩便之御取扱ニ相成權宜之御處置トハ乍申追々御國法相崩レ御國辱ニ相成候段乍不及私儀結構被召仕各樣之御筆頭ニ罷在候得ハ全私不行屆之故ト重々奉恐入候此上精勤仕粉骨碎身御國恩ヲ可奉報ハ勿論之儀ニ御座候ヘドモ何分奉對上心中奉恐入候ハ不及申諸藩ヘ對シ面目ヲ失ヒ此儘相勤罷在候テハ公邊御處置ニ於テモ自然御手緩之樣ニ相見申候依之最早異船退帆モ致候事故今日ヨリ登城不仕恐入相愼罷在候間引續御役御免被成下候樣奉願度奉存候就テハ去々子年被成下候御加增一萬石其儘頂戴仕居候テハ心底不安奉存候間重々奉恐入候得共寸志迄ニ奉差上度是又奉願候尤御役御免被仰付候上身分相應ノ海防御用被仰付候ヘハ誠以難有仕合奉存候右樣ニモ相成候儀ニ御座候ヘハ責テハ是迄之御厚恩萬分之一モ奉報度心底ニ御座候間各樣御談之上不容易御時節柄ニ付內願之通早々御聞濟相成候樣偏ニ御執成奉願候以上

二月二十六日

〔阿部家文書〕第廿二章併看。

二老＝閣老第二位。

此間前ニ載スル內願書ヲ記ス。

閣老松平乗全。

（二）正弘辭職ノ事情ニツキ重臣齋藤貞兵衛覺書。

安政元年四月十一日、十二日

嘉永七年甲寅四月十日今日ヨリ海防之御儀ニ付御不行屆被思召恐入御引籠被遊候付守二老牧野備前守樣ヘ御添書ヲ以被差出候

一同日夕七ツ時過松平和泉守樣御家來鈴木權太夫ヨリ御用有之候間唯今罷出候樣和泉守樣被仰付候旨自分塲ヘ一名之紙面ヲ以申來候間（貞兵衛一名ニテ申來候ハ和泉守樣御客ニ被爲入候節奥ヘ出度々御目見仕候儀モ有之ニ付テ也）入御聞罷出候處權太夫早速和泉守樣ヘ可申上ト申聞相引候間控居候處無程御目見仕御人拂ニテ是ヘト御意御側ヘ罷出候處左ノ通リ極御內々御尋依テ左之通リ御答申上候

伊勢守樣今朝ヨリ御寸志書御差出御引被成候處其御模樣ハ如何御座候哉御出勤被成候御樣子ニハ無之哉貞兵衛儀ハ兼テ和泉守樣御懇命ヲ蒙リ候故別段ニ被思召無御腹藏御意被成候間御模樣能々申上候樣

一浦賀表アメリカ船應接方之儀ニ付何ゾ思召モ被爲在候御樣子ニ候哉浦賀應接トテモ世間種々ノ評モ有之候ヘ共中々以外向ニテ申候樣ナル儀ニハ參リ不申時勢無餘儀勘辨之應接モ有之是等ハ權道ノ御處置ニ有之候旨

一當時長崎魯西亞ヘ應接ノ筒井肥前守樣川路左衛門尉樣ト浦賀應接ノ井戸對馬守樣林大學頭樣ヲ始メノ御應接方ヲ彼是御批判有之御互ニ御和談之事ニ不參此處ハ伊勢守樣ニハ

正弘ノ叔母乘全ノ
父乘寛ニ嫁セリ。

深ク相心配被成候御同列樣ニモ御一同御同樣ニテ公邊御爲筋御大切之儀左樣之事無之樣ニト伊勢守樣ヨリ夫々ヘ御含メモ有之候旨

一右兩條ノ所ニ何ソ思召ニテモ有之事哉不外御近親之儀御樣子無腹臟御承知被成度旨
貞兵衞御答ニハ御認メ取御差出シ被成候通リノ御事ニテ浦賀應接方不宜抔ノ儀ニテ御心配被成御引之儀ニハ不奉伺候併營中御同列樣方御評論之節ハ右樣ノ御存意モ被爲在候哉御引被成候儀ハ既ニ御認メ取ニ御座候通之事ニテ新加比丹差越風說書之儀モ有之且昨年浦賀表アメリカ船渡來ヨリ御精魂ヲ御盡シ被成候御心得ニハ被成入候得共御行屆不被成當年之處ニ至リ應接等御手緩之事ニ相成候ハ畢竟御備モ御充實ニ不相成ヨリノ事ト恐入思召候計之事ニ相伺候旨申上候

一其方達一同之存込ハ如何候哉當今御引被成候方宜ト存上候哉得ト存意モ御承知被成度旨」
貞兵衞御答私共一同御引被遊儀ハ相好候事ニハ無之候ヘ共伊勢守樣御思召之御旨ヲ伺候ヘハ御引被遊候儀ハ無御餘儀御事ト存上候旨申上候

一此度禁裏炎上御勝手掛リ御一人ニテ御引被成候テハ御差支ノ儀段々有之夫ニテモ御引被成候方ニ存上候哉
貞兵衞御答此儀ハ御書取御差出被成候迄ハ一向ニ不奉存其後承リ候事ニテ重ネ々々御大變ト驚入候計ニ御座候テ夫等之場考合候儀ニハ及不申候段申上候

一承知之通リ禁裏炎上ヲ御承知被成並アメリカ船浦賀ヘ退帆候ヘ共未タ下田ヘ滯留致シ魯西亞迚モ渡來致間敷トモ不被申時節ニ候處只今御引被成候ニハ如何ニ思召且又右ニ付テハ御役々ノ內モ自然不穩事ニ相成彼是ノ虛說モ御實事之樣ニ可相成是迄段々御コラヘ被成御勤上只今御引被成候テハ公邊御爲トモ不被思召御誠忠トハ乍失敬不被思召

此處能々相考見候樣

此儀ハ別段御答モ不申上伺候計ニ候

一水府老公樣御引被遊候儀伊勢守樣思召ハ如何之御樣子ニ被爲在候哉其儘申上候樣

此儀ハ餘リ巨細ニ伺候事ハ無御座只水府樣只今御引被遊テハ不宜抔申儀ハ伺居候事之旨一ト通リニ御答致候

一水府御老公樣ニハ總テ御評議等ニ御困リ被成候段御口氣相伺候

一御備御充實ニ無之ハ伊勢守樣御一人之御儀ニハ無之御一同御評議ノ上事故御一人ノ御不行屆ト申譯ハ無之段

御答御意之趣ニハ候得共伊勢守樣ニハ乍御不行屆モ御筆頭之御場合萬端御引受御評議モ被成候御事ニ候ヘハ外御同列樣共御違ヒ被成別テ恐入思召候御樣子ニ相伺候旨申上候

一明日ニモ御出勤被遊候樣被成度旨

明日ニモ御出勤ト申事ニ相成間敷段々御含メ被遊候御趣ハ得ト可申上乍恐和泉守樣段
段御懇切ノ御趣意ハ今晚申上候事ニハ相成兼候間明日得ト申上候事ニ申上置
一右御用相濟罷歸委細ニ可申上候處藤田與一兵衞ヲ以テ差向ノ事ニモ無之候ヘハ明日申
上候樣被仰出候間不奉申上候事
四月十一日四ツ時御逢奉願和泉守樣御含メ被遊候御儀トクト申上御答左之通御含メ被遊候
ニ付其段和泉守樣ヘ罷出申上候筈
昨日ハ段々御懇切ニ被仰進御深意之段厚忝次第思召候乍去御認メ取御差出被成候通リ
ノ儀ニテ決テ御私情ヲ以御引被成候儀ニハ無之萬端御不行屆ニテ此儘御勤被成候テハ
公邊御政事御手緩之樣ニモ相成諸藩御指揮ニ應シ候共不被思召至テ御大切之御場合ト
御見込被成候付御引被成候事ニ御決心之旨右ニ付テハ段々被仰進候御趣意ハ呉々モ辱
次第被思召御敎ヲ御モドキ被成候儀ニハ無之此處御諒察被遊候樣
御勝手御掛リ之儀ハ御差向之事故何分早々御免御座候樣御取扱御賴被成候旨
右之通リ罷出申上候事ニ存候處猶又和泉守樣ヨリ鈴木權太夫名前ニテ左之通紙面來ル
御用向御座候間只今同勤同道兩人ニテ罷出候樣和泉守樣被仰付如斯御座候以上
四月十一日
右ニ付入御聽罷出候樣被仰付候間天源右衞門殿自分同道和泉守樣ヘ罷出候處御用人藤田

上聞ノ大將軍德川家定ニ稟申シタル事。

越前守ハ水野忠邦。

勝馬案内ニテ昨日御目見仕候御場所へ誘引勝馬ハ相引和泉守様御着座是へト御意故源右衞門殿自分一緒ニ御側へ出候處左ノ通リ御意

昨日御内々貞兵衞へ御含被遊候伊勢守様御出勤之儀今朝何等之御返事モ無之候間御出勤不被成御決心ト御考被成候付御同列様方御評議ニハ御差出被成候御趣意御尤ニハ候ヘ共伊勢守様御一人御不行屆ト申ニハ無之御同列様何事モ御相談之上ノ事且時勢無餘儀次第ニテ應接等モ御權宜之御處置ニ相成候事去ハ迚御同列様切之被仰進ニテハ迚モ御出勤之儀御承知モ有之間敷又達上聞候テモ如何之御沙汰ニ相成可申哉ト甚御心配被成候へ共得ト被仰合御書取ノ儘和泉守様ヨリ被達上聞候處御認メ御文中恐入御愼ト申儀如何之事ニ候哉何ソ仔細ニテモ有之事哉ト誠ニ御驚キ被遊候御様子ニテ御尋ニ付委細之譯猶和泉守様ヨリ被仰上候處夫ハ伊勢守一人之不行屆ト申スニハ無之時勢無餘儀次第ニ被思召御愼ニ不及事其上唯今相引候テハオレガ困ルカラ能々其趣ヲ爲申聞不快ニテモ押テ早々出勤イタシ候様御同列様被仰合候様ニト厚キ御沙汰ニ付早々御出勤被成候様取計可申上尤是ニテモ御承知不被成候ハヽ自然若年寄様上使ニテモ可被仰付左候テハ越前守様御時分御同様ニ相成御姿モ不宜ト和泉守様ニハ被思召候此處得ト申上候様

上意ニハ無之候得共只今異船一條且禁裏炎上ニ付テハ御引被成候節ハ自然局中不穩事

一席－重臣一座。

渡邊三太平（均）退隱後止水ト稱ス、著者ノ父。

公用人ハ正弘ノ退職ヲ希望ス。

ニモ可相成是等深ク御痛心被成候旨

一右之通リ御意之外ニ昨日貞兵衞ヘ申含メ候處如何之御答ニ候哉其處モ御承知被遊度旨

貞兵衞御答右樣之上意御座候上ハ其儀早速罷歸リ可申上事ニ付最早申上候ニモ不及事ニハ候ヘ共御尋被遊候付申上候昨日モ申上候通浦賀御應接方不宜ノ外ニ又如何被思召御引被遊候御儀ニハ更ニ不被爲入只御自身御不行屆ト恐入思召候計リニ御座候段御趣意一ト通リ申上直ニ罷歸リ候

一前條和泉守樣御含ノ趣御一席ヘ及御咄候處上意之趣ニテハ是非々々御出勤被遊候方ト評議詰之上御逢奉願源右衞門殿自分一緒ニ罷出申上尊慮奉伺候處無御據御儀御出勤御事ニ御决可被遊旨御意ニ付御次ヘ下リ御一同ヘ及御咄其旨內御用人公御用人兼勤渡邊三太平ヘ申談候處此儀內公用人打寄評議イタシ左ノ趣申出候

內公用人評議ニ上意ノ趣ハ御重キ儀ニ候間御出勤不被遊候ハヾ相成間敷乍去御趣意被仰述候御儀ニモ有之候處上意トハ乍申直ニ御出勤モ如何ニ付其內御改革ノ箇條モ相立トクト御上御腹ノ御据リ被爲在候テ御出勤ト申事ニ評議イタシ候旨

右ノ通三太平申達候ニ付段々推問致候處

何分御上御出勤被爲在候ヘハ只今ヨリ一際御任モ重ク御時節柄容易ノ思召ニテハ相成間敷且又御出勤ハ有之候テモ一向御改革御取行モ無之事ニ候ヘハ此儘御引被遊候方ニ

モ可有之旨

御上御据リヲ御案申上申聞ラレ候ニ付猶席ニテ評議イタシ和泉守様ヘ御答ノ趣意御大切ノ御塲合トクト勘辨被成御請モ被仰上度旨申上候事ニ御座候但退散曉八ッ時過

四月十二日我等昨記ニ有之候和泉守様ヘ御答振尊慮奉伺候處

内公用人評議ノ趣モ席評議ノ分モ不宜上意ノ趣モ有之候ヘハ此儘出勤致候歟又ハ此後若御年寄御使被遣候テモ御引ト申者歟ニ無之テハ不宜ト思召候旨

右ノ通ノ尊意ニ被爲在御動不被爲候間御次ヘ相引相談御出勤ノ方ト評決内公用人兼勤三太平呼申談候處最早時刻モ移リ候間此上ハイタシ方モ有之間敷呉々モ御出勤ノ上御改革御据リノ儀ヲ奉願上候旨申聞候

和泉守様ヘ御答上意之趣心魂ニ被徹恐入難有仕合ニ思召候此上ハ書面差出候儀ニハ御座候得共明日ヨリ出勤可仕乍去書面申上候儀且御改革筋之儀ハ猶御出勤之上御相談モ可被成此段御承知被下度

右之通御口上振入御聞源右衛門殿同道和泉守様ヘ罷出候處御目見被仰付候付前文御口上之振ヲ以申上候處御承知被遊御登城之上早速可被達上聞旨御答ニ候

一夕八ッ時過和泉守様ヨリ猶又御用有之候間只今早々罷出候様申來候間入御聞罷出候處七ッ半時過御逢被遊候旨申聞藤田勝馬案内ニテ源右衛門殿自分一緒ニ御側ヘ出候處御意左

之通

今朝被仰遣候明日ヨリ御出勤之旨御登城ニテ早速被達上聞候處先以御安心被遊候彌以明日ヨリ御出勤可被成旨精々申達候樣被仰出候旨猶上意之趣モ有之候ヘ共兩人ヘ御沙汰被遊兼候間御書付ニ被成候ニ付持歸リ差上候樣ニト御書付御渡ニ候

右之通ニ付奉畏候段御請申上直ニ引取候テ源右衞門殿自分御逢奉願和泉守樣御口上之趣申上且御書付モ差上候處御開封御覽之上猶段々御厚キ上意之趣誠以難有仕合ニ思召候旨御意有之候

〔阿部家文書〕。〔懷舊〕五〇八—九頁。

〔三〕正弘留任ニツキ德川齊昭ヘノ書。　安政元年四月十二日。

（上略）然ハ私儀御役御免内願ノ書取先達テ御內々申上候處以御書中段々御懇篤被仰下難有奉存候得共其後段々勘考モ致シ候處何分是迄不行屆ノ處奉恐入心中不安御座候付異船退帆候ヘハ早速同列ヘ可申出存居候處異船滯留數日相成候得共此節ハ下田港ヘ退キ平穩ニテ異狀モ無之ニ付使々ト登城仕候モ深ク奉恐入候間一昨日右書取同列ヘ差出申候右ニ付其旨早速尊所樣ヘ可申上候處先達テ中ヨリ實病胸痛ニテ難儀モ仕彼是取紛甚延引失敬ノ至ニハ候得共今日申上候然ル處出勤仕候樣昨日段々厚キ台命有之如何共致方無之違背難仕恐入難有奉畏候旨及御請候乍去此後ノ形勢如何可相成哉上意ニ甘ヘ出勤仕候テモ善

第廿七章併看。
〔續々泰平〕安政二年三月三日〔嘉永明治〕卷四、四葉。
安政二年三月三日幕府布令。

後ノ策中々不才ノ私不行屆益背君恩候儀恐懼之至候得共重キ上意難默止出勤不仕候テハ不相成場ニ相成彼是不都合之儀候得共不取敢此段申上置候謹言

四月十二日　阿部伊勢守

尙々申上候今般ハ京地御炎上誠以恐入候次第奉驚入候又々右ニ付テモ莫大ノ御入用兼々御承知被遊候御勝手御繰合ノ向實ニ心痛寢食ヲ不安奉存上候如何成御時節歟ト長歎息仕候計萬々御推察可被下候以上

〔辛〕寺鐘毀銷ノ件。

〔一〕太政官符ノ公布。　安政元年十二月廿三日。

太政官符

五畿七道諸國司

應以諸國寺院之梵鐘鑄造大砲小銃事

右正二位行權大納言藤原朝臣實萬宣奉勅夫外寇事情固所深被惱宸襟也況於緇素何有差異頃年墨夷再乘入相模海岸今秋魯夷渡來畿內近海國家急務只在海防因欲以諸國寺院之梵鐘鑄造大砲小銃置海國樞要之地備不虞速令諸國寺院各存時勢本寺之外除古來名器及

報時之鐘其他悉可鑄換火砲爲皇國擁護之器及邊海無事之時復又宜銷兵器以爲鯨鐘不可存異議者諸國宜承知依宣行之符到奉行（奉者判者人名略ス）

安政元年十二月二十三日

太政官符

神祇中務式部治部民部兵部刑部大藏宮內彈正左右京修理勘解由檢非違等官省臺職使左右近衛左右衞門左右兵衞左右馬兵庫等府寮

應以諸國寺院之梵鐘鑄造大砲小銃事

右正二位行權大納言藤原朝臣實萬宣奉

〔禁令考〕卷八、三三二一三三頁。〔續々泰平〕〔續實紀〕十五代史〕並ニ安政二年三月三日。

〔二〕閣老ヨリ諸藩等ヘノ布令。　安政二年三月三日。

海岸防禦ノ爲此度諸國寺院之梵鐘本寺之外古來之名器及當節時ノ鐘ニ相用候分相除其餘可鑄換大砲小銃之旨從京都被仰進候海防之儀專ラ御世話有之候折柄叡慮之趣深ク御感戴被遊候事ニ候間一同厚相心得海防筋之儀彌可相勵旨被仰出候尤右之趣諸寺院ヘハ寺社奉行ヨリ申渡候間被得其意取計方等委細之儀ハ追テ可相達候

同上。

〔三〕閣老ヨリ三奉行大目付ヘノ令達。　安政二年三月三日。

海岸防禦之爲此度諸國寺院梵鐘ヲ以可鑄換大砲小銃之旨被仰出候右ハ武備御充實之御趣

意ニ候間此外銅鐵ハ勿論錫鉛硝石等何レモ必備之品ニ付右等ニ無之候テ相濟候品ヲ右ノ類ニテ相製候儀自今不相成事ニ候且梵鐘ヲ以鑄換被仰出候程之儀ニ付銅鐵ヲ以新規ニ佛像等鑄造致シ候儀不相成候佛器之儀モ木製又ハ陶器ニテモ相濟候分ハ以來銅鐵類ヲ以テ製造之儀可爲無用候　右之通可被相觸候

〔島津文書〕

〔四〕勅命出デントスルニツキ右大臣近衛忠煕ヨリ尾藩主德川慶勝ヘノ密報ノ書。　安政二年二月七日。

（上略）密々其筋承候處從其御地諸寺院梵鐘大砲小銃等に鑄替之事國々樞要之場所据付之大砲水軍戰備之筒又は野戰之筒等反射爐取建銕銃製造可有之處當節夷船畿內近海邊ヘ渡來差向候場合實以時勢無據候間諸國寺院ニ有之候釣鐘類當節時ノ鐘ニ不相用分大砲ニ被鑄替度尤當節柄何卒外冦ヲ除度志ハ人々可有之候間穩ニ承伏可致筈ニ候ヘトモ時勢ヲ不存輩モ可有之哉ト再三評論之上大樹公ヘ御伺ニ相成候處彌御心配御熟慮之上時勢不被得止場合ニハ候ヘトモ叡慮ノ御沙汰ヲ以テ諸國寺院ノ釣鐘本山之外當節時之鐘ニ不用分大砲ニ鑄替候樣被成度トノ趣之事右ハ極內々關白ヘ申來リ關白被伺定表向以叡慮被仰出候事ニテ其御地ヨリ申來候儀ハ甚秘事ノ由（中略）在躰極密ニ御洩申候此義ハ實ニ誠ニ々々密々承合候事故御含ミ深ク希入候扨又舊冬ハ大樹公格別之思召之旨ニテ一萬金御進

大樹公―大將軍。

献ニ相成候御手厚キ御事感入恐悦ニ候（下略）

二月七日　　忠熈

尾張殿御下　極密拜答

〔新伊勢拾遺〕

同上。

〔五〕德川齊昭ト阿部正弘トノ往復書翰。

〔ア〕正弘ヨリ發令ヲ豫報スルノ書。　安政二年二月廿九日。

梵鐘云々ノ儀被仰下是又拜承仕候彌三月三日被仰出候事ニ可相成哉ト存候事　但右一件僧侶共承傳ヘ彼是申居候哉ニ相聞申候夫等ニ頓着ナク申出候事ニ御座候（節錄）

〔イ〕正弘斷行ノ決意ヲ告グルノ書。　安政二年三月十七日。

過日被仰下候梵鐘一件京地へ申遣候案御覽被成度趣拜承仕候既ニ其節入御覽候事ニ相成夫々取仕舞有之能々取調候處未タ御覽無之由御行違ニ相成恐入申候右ニ付被遣候控案二通御心得ニ奉差上候未返事ハ何共不申參事ニ御座候既ニ此節ハ梵鐘被仰出候後寺院共彼是難澁申居候哉ニ相聞種々ノ巷說喧敷本寺本山ハ表向承伏イタシ候樣ノ顔イタシ居講中共ニ彼是トサワカセ候趣向可惡事共ニテ當節ハ講中共所々ヘ寄合等イタシ種々ノ談判有之趣其筋ヨリ日々ノ樣風聞申出候最早評決ニ被仰出モ相濟候儀如何樣申出候共聊モ動申

儀ハ不相成同列共ニモ駐ト決著仕居候間乍憚御安心可被成下候乍去形勢ハ右之通甚歎息ノ事ニ御座候（節錄）

〔新伊勢拾遺〕

〔ウ〕齊昭一時中止ヲ勸告スルノ書。　安政二年六月三十日。

梵鐘一條モ迅雷一震小人面ヲ革候上ハ存外御主意貫キ可申只今ノ姿ニテハ政府サヘ二牢故自然僧徒ヘモ響キ益々混雜可致候間寺社奉行ヘ御差圖等モ一震後迄御見合之方ト右書類ハ先ツ御預リ申置候事（節錄）

〔六〕德川齊昭ト越前藩主松平慶永トノ往復書翰。

〔昨夢〕二八三—四頁。

〔ア〕齊昭ヨリ慶永ヘ反對黨ノ奸策ヲ報ズルノ密書。　安政二年十一月八日

水戸山寺ニ住居候法華坊主日華ト云者ハ梵鐘御引上ケノ儀ニテ諸宗ヲツヽキ立騷セ候テ畢竟ハ拙老阿部之扱不宜故カヽル騷動ニ相成候云々拙老初ヲ打拔可申ノ計策云々扨又本願寺掛所ヨリ京地本願寺ヘ文通致シ候ヲ內々拙老手ニ入候處是ハ叉次第相違ニテ梵鐘等引上ニ相成候ハ拙老胸中ヨリ出候事ニテ右ハ諸人ノウラミヲ天帝ヘカケサセ人望ヲ失セ置候テ拙老天下ヲ取候企ナリトノ事有之候

天帝トハ大將軍ヲ指スナラン歟。

前文拙老ヲ打落云々ノ書付並掛所ノ坊主云々ノ事モ極密先日阿ヘハ爲心得見セ候處是

ハ御内々御咄申候阿ヘモ御咄ハ御無用ニ候
右之通故カヽル折ニテモ専ラ武備ノ世話致候テハ不宜候故内々ニハ世話致シ候ヘ共表向ニハ音樂鷹抔致シ候テ夷船等ニハ餘リカマヒ不申樣見セ置申候何事ヲモ捨置候テ世話致シ候テサヘ不行屆ノ折カラ右樣ノ嫌疑ヲサケテ武備ノ方ハ内々ニテ世話致シ候事無已事ニ候乍去奸人奸僧ニ打落サレ候ヘハ内々ニテモ世話出來不申樣相成候ヘハ是又無已候箇樣ナルモ時カト相見ヘ申候咄ノ度々大息致シ候計ニ候　（節錄）

〔イ〕寺鐘毀銷中止ニツキ齊昭ヨリ慶永ヘノ密書。　安政三年七月九日。

梵鐘之事モ日本御警衞之爲之儀ニテ重キ叡慮ヨリ出候事モ出家ヨリ云々申候ヘハ立消ト相成候樣ニテハ迚モ天下ノ事ハ六ケ敷ト存候夫モ□□等ガ働候カト存候直ニ御火中云々　（節錄）

〔ウ〕同上ニツキ慶永ヨリ齊昭ヘノ書。　安政三年七月。

梵鐘之事モ立消ラシク恐入候事共ニ御座候何國モ同シク黄白先生ノ働次第トハ可歎之至ニ御座候　（節錄）

〔昨夢〕上三八四頁。
此時慶永福井ニ在リ。
□□ハ『黄白』ノ二字ナラン歟。
〔昨夢〕三八六頁。

〔新伊勢拾遺〕第廿二章併看。
二＝牧野忠雅。
三＝松平乘全。
四＝松平忠固。
尊慮＝大將軍ノ意。
煉藥ノ解下ノ齊昭自記ニ見ユ。

〔壬〕閣員進退ノ件。

〔一〕德川齊昭ト阿部正弘トノ往復書翰。

〔ア〕齊昭ヨリ閣員ノ黜斥勸告ノ書。　安政二年六月三十日。

（上略）過日極密御話有之候二三ハ勿論四迄云々表發ガ何ヨリノ御急務ト存候右ヲ表發之上ニテ米夷斷リハ勿論大御改正等モ被行可申候左モ無之平々無事ノ中ヨリ非常之論御懸ニテハ毎度反古紙タマリ候ノミト恐入候扨萬々一二三四云々一條表發御六ヶ敷位ニテハ乍憚貴兄モ御在職ニ相成間敷愚老ハ勿論勇退ノ心得ニ候間何分爲宗社御擔當乍恐尊慮ヲ御カタメノ上迅雷不及掩耳ノ御決斷相祈申候（下略）

大秡　六月晦日　水隱士

勢州殿

又啓本文二三四之一條貴兄御身ニ取リ候テハ嘸々御心配ト深察致シ候ヘ共カヽル御大事ノ墻ニ臨ミ聊モ黜陟無之候テ非常ノ改正被行候筈ハ決テ無之候ヘハ爲國家御一分ノ御迷惑ヲ御忍ヒ御決斷之方ト存候扨二三ハ碌々備員ノミ故御轉ニ可相成候ヘ共四ハ先々御用ニ立候由過日御內話ノ節モ愚意申述候處今程御決心ニ相成候哉愚老見込ハ二三ハ元ヨリ不足論候處四ハ俗論苟且御承知之通ニ有之畢竟御同席ニ右樣ノ人罷在役中ニ煉藥等暗ニ

和シ居候故當正月元日ヨリ云々ノ議抔モ立消ニ相成候事ト存候改正ヲ不好モノヘ改正ヲ被命候ハ迚モ出來ヌ相談ト存候第一此節下田三箇條ノ事御建議ニテモ四ハ必御同意申間敷左スレハ四ハ廟堂俗論之根元ニ候間萬一二三ノミ御動シ四ガ二番席ニ相成貴兄ノ權ヲ分チ候樣相成候ハヽ必牛角兩派ノ勢ヲナシ溜初俗論家ハ向ニ可相成左候ヘハ天下ノ事不可奈何臍ヲカミ候テモ間ニ合申間敷候仍テハ二三四一同表發ハ今日ノ上策右ガ御六ケ敷候ハヽ二ハ古老ノ廉ニテ先ツ御居置三四ハ是非御決斷有之度何共差越候ヘ共台慮御伺モ却テ四ヲ專ト被成同人御轉無之候テハ廟堂一致不致隨テ天下ノ人心二牛ニ相成御爲不相成廉ヲ以テ御伺三ハ碌々殊ニ北地ノ事抔ニ付評議差支候廉ニテ可然哉是等之事御如才ハ有之間敷候ヘ共一片ノ老婆心無默止縷々申述候人才無之テ事ヲ爲シ候儀ハ迚モ出來不申處參政モ遠本ノ外寥々無人其遠本モ不和ノ由是等モ追々兩板ノ類御人撰遠本ヲ調和爲致度前文煉藥モ行々御休藥ニテ可然右樣之御勢ニ候ハヽ愚老抔乍微力少々ノ裨補モ可有之左モ無之テハ實ニ恐入候ノミ故兼々內願之通海防御用御免ノ義御周旋相祈候也

又曰過日御內話ノ櫻ハ愚眼ニテハ大任擔當ノ人トハ不存且一體ノ御居リモ不宜又佞佛家ハ以ノ外ト存候尤當時ハ御人別過ニ相成居候故二三四ノ缺ヘ一人被命候ノミニテ御間ニ合可申歟如何

（齊昭手控中右ノ書翰ニ附記スルコト左ノ如シ）

此假字ハ齊昭ガ祕密書類ニ用井ル暗號トシテ新ニ作リタルモノナリ萬葉假名ノ一角ヲ取リタルモノナレドモ多クハ普通ノ片假名ニ類ス、之ヲ神發假名ト謂ヘリ、新伊勢物語等之ヲ以テ註記スル所アリ、解スルコト易カラズ。今試ト並ニ記スル隱語ヲ譯解スレバ左ノ如シ。

(一)牧野備前・
(二)松平和泉・
(三)松平伊賀・
(四)堀田備中・

二ハ　フトヒアゲテ(一)　三ハ　フマザタシタマル(二)
四ハ　シマヤタシタボ(三)　櫻ハ　ユマヤアマロコ(四)
佐佛ハ　フラボサタヨソ(五)　煉藥ハ　ユテナコヤテザ(六)
遠ハ　ヌテジヨヤザフ(七)　本ハ　ユテザヌマロヨ(八)
兩板ハ　タヤネシツユヨ(九)　タヤネシタキ(一〇)

(五)間部下總。(六)本郷丹後。(七)遠藤但馬。(八)本多越中。(九)板倉周防。(一〇)板倉伊豫。

〔阿部家文書〕〔懷舊〕六六九—七一頁。第二十二章、第二十九章併看。齊昭ノ密書缺クト雖モ前(辛六ア號)ニ載スル齊昭ノ書ト同樣ナラント察セラル。

(イ) 齊昭ト正弘トニ對スル陰謀ニツキ正弘ノ書。　安政二年十一月五日。

昨夜ハ態々御密書被成下謹テ拜讀仕候極密々被仰下候御一封ノ御書付慥ニ落手密々得ト拜見久世ヘモ内々拜見致候樣廻シ可申候偖々可恐事共ニ有之候能々相心得居候可申候此間久世ヘモ御逢被仰下今日モ被仰込候處御斷申上候ニ付定テ嫌疑モ可有之事ト御推察一體同人ヘ御談シニテ小生ヘ相廻リ候樣段々厚御配慮之儀眞以難有奉存候當節同列共内々何モ意味合ハ無之候得共再勤ノ者モ有之久世並小生迚モ一人ニテ御逢被仰下候ト何トナク罷出惡キ模樣モ有之候ニ付久世モ殊ノ外心配其代リニ小生ト被仰下候テモ是又同斷折角被仰下候處御斷リ申上候段不本意ニ御座候ヘ共無餘儀事情御推察ノ通ニ御座候間不惡思召可被下候右故從是モ鳥渡其段御内々可申上ト存居候處ヘ御密書被成下別テ難有奉存候以後萬一御内々ノ御用向モ御座候ハヽ矢張御書中ニテ宅ヘ被仰下候樣奉願候尤一同御逢ノ節ニテ無差支儀ハ勿論相伺可申候得共別段之儀ハ前文ノ通奉願候何トナク其御藩中ニテモ貴所樣ト小生トハ別段御懇意以前ノ手續モ有之奸物ニテハニクミ被居候事ト兼テ

〔昨夢〕上二七六頁。第廿三章併看。

堀備＝堀田備中守。

老公＝德川齊昭。

阿＝阿部。

牧＝牧野。

井等之內＝井伊等ノ內。

覺悟ハ仕居候ヘ共何モ是迄不正ノ御推擧申上候覺更ニ無之候間安心仕居候ヘ共猶無油斷心付ケ可申御藩中ニテサヘ右ノ通故矢張外々ニテモ彼是ト申候樣子次ニハ久世事ハ小生間柄其上貴所樣御推擧ノ事ニモ小生同意ニテ取計候意味モ有之候間世上ノ風聞ハ兎角奸物ニハ久世小生共目ヲ被付困苦仕候事ニ御座候御書ハ外々ヘハ漏泄ハ不仕久世ヘハ心得ニ相廻シ可申其上返上仕候間左樣思召可被下候右昨夜ノ御請旁申上候以上

十一月五日 內密申上　　阿部伊勢守

尙々登城前相認亂筆御推覽被遊早々御火中奉願候以上

〔二〕堀田正睦入閣ニツキ薩藩主島津齊彬ヨリ松平慶永ヘノ書。

安政二年十月廿六日。

堀備之義云々是亦不思議ニ御座候此儀ハ老公御承知之上ト存候處案外至極ニ御座候閣中之樣子內々承候得ハ堀田出候テ萬事心配薄相成ト申向有之哉ニ承リ申候堀田撰擧之儀一向不相分候得共矢張阿ト牧トノ所存ニ而無之哉ト存候溜詰ヨリ井等之內閣中之義色々申候故其爲撰擧ニテハ無之哉ト存候猶又御賢慮伺度奉存候追々命令モ下リ漸々善ニ可相成光景ニハ有之難有事ニハ候得共小事枝葉之事多キ樣ニ奉存候非常之災害到來故非常之御處置有之而天下一新有之度事ト奉存候　（節錄）

〔昨夢〕上二七七―八頁。第廿三章併看。

〔三〕同上ニツキ柳河藩主立花鑑寛ヨリ松平慶永ヘノ書。

安政二年十一月五日。

（上略）然ハ堀田氏再勤之一件彼是聞糺候處荒增相分申候右ハ元來阿閣不好儀ハ相違無御座候由然處當今不一通御用多有之處何事ニモ阿閣一人ヘ打懸取扱ニ相成候ニ付阿閣モ不被任心底此後迚モ如何樣ノ可有變動トモ難計候得共事之一二悉皆一人ヘ懸リ甚痛心被致候旨且外々ニテハ上席出來兼候間堀田氏ヘ再出取計ニ相成候趣ニ御座候乍去萬事矢張阿閣ヨリ出候由承リ申候先看板之積共ニヤト奉存候探索之儘極密申上候御他言堅御斷申上候（下略）

十一月五日

第三十章併看。

〔島津家文書〕此時黒田ハ福岡ニ、伊達ハ江戸ニ在リ。

薩藩小姓組木村仲之丞、後村松根ト改ム。

〔癸〕島津家内訌ノ件。

〔一〕黒田齊溥ヨリ伊達宗城ヘノ書。

其一。　嘉永三年五月朔日。

平安極々秘用御直披　（上略）然者薩州表之一件荒々先達申上候得共其後居リ合不申又々先達ヨリ切腹申付相ニ成候由然處木村仲之丞ト申者密ニ罷越候ニ付相糺候處相違モ無之

薩藩主島津大隅守齊興。

辰ノ口＝正弘。

薩州神職井上出雲守、後藤井良節ト改ム。嘉永三年木村仲之丞ト共ニ福岡ニ奔ル。

仲＝仲之丞。

薩藩家老島津將曹

誠忠之者ニ付深クカクシ置申候右之子細ハ秘書ニ而委敷御分リ之事故致省略候大隅不明不及是非候右昨年ヨリ之一件事長ク候間一冊ニ仕立差上申候右之内ニハ唐物拔荷其外他方へ相響不宜事多ク貴君ヱモ難申上候得共實情不相分候間打明少モ不殘申上候辰ノ口ヱ右之秘書被入御內覽可被下候尤辰ノ口ヱモ何分入御覽兼候事多ク候得共、打明申上候間、何卒右書面ハ御見流シニ奉願候右ヨリ事起唐物拔荷等之儀表向御沙汰ニモ及候而ハ誠以奉恐入候此際サヘ御見通ニ候ハヾ以來ハ嚴重ニ仕拔荷無之樣屹度爲仕可申候間右ハ重疊御含被仰上可被下候。

一何分難澁之譯合ハ井上木村之所置に御座候井上事ハ足配等相分リ居ニ付秘書ニ有之候通仲ニ打破申談候末無據辰ノ口ヱ一往伺候ト申處ニ相成申候尤輕々敷辰ノ口之事申出候事ニハ決而無之可相成丈不申候而爲濟候心得ノ處何分六ケ敷候間無據仲ヱ申聞候儀ニ御座候（中略）

右ニ付此節封之物辰ノ口ニ小子留守居ヨリ如例差出申候、井上木村事兩通認申候、尤一ト通リニ認委細ヲ貴君ヱ極秘申上置候間貴君ヨリ內々御聞可被下旨、且又貴君迄萬事被仰聞候樣ニト認申候此儀ハ辰ノ口ニモ御內々ナガラ御差圖ハ御六ケ敷可有之乍憚奉存候（中略）將曹平杯後日自身之上危候間是非ト存候ハヽ表向辰ノ口ヱ願出候ハヾ、殊之外辰ノ口ニモ御面倒之御事奉存候左樣相成候ハヽ小子モ是非共カクシ置候主意可申立夫ヨリ御

糺モ候ハヾ理非ハ明白可仕候得共大隅彌以不相濟樣成行候而モ氣之毒不好事ニ御坐候是又上策共不存候、又ハ封之物御受取之儘有無之御返答無之候ハヾ其内定而薩州ヨリ催促可仕、其答ハ差出候處御落手之儘ニ而イマダ何共模樣一向不相分候老中之事ニ付催促致兼候（中略）猶得ト御賢慮被下候向、辰ノ口エ御内話呉々モ奉願候、不容易事柄日夜心痛仕候、

一體此節ノ儀（中略）何分小子ヨリ大隅エ一應之異見モ不仕、辰ノ口エ申上候段、丹顏之仕合御座候、薩州ニモ家柄之大身之者共居リナガラ、一言半句口ヲ開候者無之誠恥入候次第、不及是非候御貴君思召モ赤面之仕合御座候（下略）

五月朔日　松　美濃守

伊　遠江守樣

〔島津家文書〕

其二。　嘉永三年七月四日。

平安極々秘密用御直披。　（上略）一辰ノ口返答難被及差圖ト申候事於小子無此上仕合厚難有奉存候右之御主意ヲ以得ト熟慮仕候而取計可申候追而委細可申上候得共幸便ニ付不取敢厚御禮奉申上候辰ノ口ニモ厚ク御心配被下候儀千萬難有仕合奉存候御序不取敢御禮宜敷奉願候辰ノ口傳言難有奉存候猶又宜敷奉願候

一貴君阿閣御應對無殘所御儀感服仕候（中略）表向公邊御沙汰可願小子存念ニハ毛頭無之至而六ヶ敷近親共可申合之處、遠路其際モ隙取最早近々一決斷之場合ニ付、得ト重役共ニモ内談仕候而後來薩國無事靜謐之所ヲ取計可申存申候（下略）

初秋四日　　福岡

宇和島賢公

阿閣＝阿部閣老。

〔齊彬記〕三三—七頁。

芝＝島津齊彬（薩邸芝新堀ニアリ）。

修理大夫＝島津齊彬。

〔一二〕阿部正弘ト伊達宗城トノ對話ニツキ伊達ノ自記。嘉永三年八月。

一八月二十四日芝ヨリ内談之書面阿閣ヘ遣置候ニ付相認候一封之留

追々秋冷相加候處愈御清榮奉賀候然ハ如別帳修理大夫ヨリ密談申越候處不容易重大之義ニ付唐突愚考ニモ難及當惑仕候間極密ニテ御相談申上候末可及返答ト奉存候右ニ付明朝拜趨仕度尤少々長談可相成ニ付誰モ不罷出御清暇之朝ニ仕度御都合次第日頃可被仰下奉希候參上迄ニ御賢考被下置度奉願候　　同日

一右之通申遣候處明日ハ早朝ヨリ勤有之ニ付斷之由申來ル明後逢候由　　一同二十五日留守居呼ニ參候處明朝他人多ク參候間明後二十七日可逢旨申來ル　　一同二十七日罷出及密話候應對畧留

小子ヨリ　　過日呈覽仕候修理大夫ヨリ内談一條同人心配之次第ハ委曲書面上ニテ

大隅守－島津齊興（齊彬ノ父）。

相分居候通ニテ實ニ如何計リ心痛當惑致候半段々書面ノ趣相察候而ハ如何ニモ念入候義且驚入候取計ニ御座候右ニ付愚考仕候處實不容易事柄ニ而當否如何トモ難及返答當惑仕候一體大隅守處置通常ノ通リ取計候テ彼是モナク修理ニハ遵順沈默仕事當然ニ御座候得共重大之事柄ヲカヨフノ處置仕候得バ權變ヲ以及内奏候方蔭ナガラ大隅不行屆ヲアガナヒ且忠孝之筋ニモ可相當カト相考候得共及内奏候時ニ相成修理懸念萬々一何等御沙汰筋御座候而ハ不孝ノ名ヲオヒ又大隅身分ニカヽリテノミナラズ却而内輪混亂ヲ引起シ中山之處置モ不行屆内患彌増候計ニテ外患ノ手當ニモ差障可申ト相考候間右樣ノ御都合ニ候ハヾ乍不本意沈默仕候外ハ無御座候得共ソノ所ハ貴所樣ニ而御含置被成下及内奏候トモ當節ノ處ハ決而爲何御沙汰不成下候ハヾ最前申上通内々申上置候方第一ハ上ヘノ御覺悟ニモ可被爲成先祖ニ相對候而モ本意ノ事忠孝ノ筋ニ可相當哉トモ存候得共御沙汰之處修理同情極々懸念ニ付篤ト尊慮相伺度格別御懇篤被成下候ニ付御ハカリ申上候間修理心痛當惑之塲合深ク御憐察ノ上御密示被成下度候

阿閣答　委細御尤ノ御儀修理心痛之趣誠實書面ニアフレ當惑ノ段尤ノ事ニ存申候扨々今ニハジメヌ不埒之處置右樣之儀ニテハ片時モ御安心御委任ハ難被成儀ト存驚入候事不容易次第候處一體大隅守ヨリハ委細承知ノ上ニテ其身昇進ノ筋ニ響合候而ハ不宜ト申處ヨリ取カクシ候事哉

調所笑左衛門●

島津將曹●

小子ヨリ　左樣被思召候者御尤ニ可存實ニ一言片句モ申上樣ハ無御座候ソレ故修理ニモ心痛之至存候儀ニ御座候琉球薩藩之浮沈此時ニ御座候尤大隅守此儀ハ委敷ハ不致承知儀ト存ジ候其譯ハ笑左衛門ニテモ大隅心配不致樣ニト申心イキハカクシアザムキ候故大間違相成候儀ニテ右之惡習ヲウケ此度モ矢張大隅ヘハ委敷ハ將曹ヨリ不申聞御屆申上候位ニ申聞候儀ト相察申候大隅守ニテ事情承知仕候ハヾサヨフナ不都合ニハ不相至儀ニ可有之偏信故一路ノ外通シ不申ソレ故ダマサレ居候半畢竟ハ將曹輩ノ不屆ト奉存候何ト修理ヘハ返答可仕哉

阿答　サヨウサ一體ヲ申セバ極々不埒之儀ニ付嚴重表向被及御沙汰當然ニ候得共段々是迄モ内輪ノ次第モ致承知且修理書立モ貴樣ノ御内話ニテハ此頃ニ當リ被仰出候トモ混亂ノミニ可相成大家之不靜謐ハ公邊ニテモ不被成御好儀ナニサマ事實致承知居候方考ニモ可相成御沙汰筋之儀ハ當時無之樣相含可申候間及内奏樣御返答可被成尤何ゾ外ニテ及見聞候儀有之不得止儀ニ候ハヾ其時ハ致方無之乍然左樣ノ時トテモ修理疑念ヲウケラレ候樣ノ心痛ハ無之樣可取計呉々無心配候間内奏可然尤手前ヱ修理ヨリ直ニ被差越候而ハ乍内々モ何等トモ不申而ハ不相成候故貴樣迄相廻シ爲御見被下度奉存候

小子ヨリ　右樣ニモ御含被下置候ハヾ實ニ無此上難有仕合御蔭ニテ忠孝兩全モ可仕早速及返答事實ノ書付呈覽申上候半何ニモ御沙汰筋無御座候樣奉願候サゾ／＼修理ニ

黒田美濃守．

モ難有安心申上候半ト存候モシ御不審モ御座候得者又罷出申上候

阿閣ヨリ　參リ次第內々御封可被下候扨大隅モ最早隱居セネバ成ラヌ事ト存候

小子ヨリ　早速上ゲ候半大隅隱居之義ハ折角先日モ御噂ノ趣モ御座候間當今美濃

姑近親中ニモ申合候樣子ニ御座候段々御懇情御敎示被成下重々難有奉存候

一同二十九日事實書面密封ニ而遣置候事　　但吳々可被致仰乞候得共御沙汰筋無之樣

相賴遣候事

第九章・第十章併看。

〔起原〕中二〇八四頁。〔慫舊錄〕五四頁。〔齊彬記〕一七頁。

〔起原〕中二〇八五頁。〔慫舊錄〕五五頁。〔齊彬記〕一八頁。

第一。外事。

〔甲〕琉球關係ノ件。

〔一〕薩藩主島津齊興嗣子齊彬ヲシテ歸藩セシムルニツキ阿部閣老ヨリノ令達。

弘化三年閏五月廿七日。

琉球國ヘ異國船渡來之儀ニ付不取敢家老共之內國許ヘ差下重テノ模樣ニ寄其方ニモ御暇可被相願トノ趣意被申聞候得共今般之儀ハ不容易次第ニテ事柄ニ寄候テハ御國體ニモ拘リ可申程之儀ニ付其方儀御暇可被相願筈ニ候得共彼地ノ模樣次第於當地伺其外共取計候品モ可有之候間嫡子修理大夫御暇被相願早速國許ヘ相越諸事之取計方幷取締向等機變ニ應シ不失御國威樣寬猛之塲程合能熟慮指麾有之候方ト存候事

〔二〕島津齊興、齊彬ヘ琉球關係事件委任ニツキ大將軍德川家慶ノ諭命。

弘化三年六月朔日。

琉球國ヘ異國船渡來之處彼地之儀ハ素ヨリ其方一手之進退ニ委任之事故此度之儀モ存寄一杯取計尤國體ヲ不失寬猛之處置勘辨之上何レニモ後患無之樣及熟慮取締向等機變ニ應

〔[illegible]ト〕五六頁。〔起原〕中二〇八五頁。

（島津家文書）

下曾根ハ幕府ノ吏員ナリ。

林健。

筒井政憲。

ジ取計可申事

〔三〕琉球へ渡來ノ佛國處置ニツキ阿部閣老ヨリ島津齊彬へノ令達　弘化三年六月五日。

琉球國へ佛蘭西人共罷越候節難題申掛候儀ニ付取扱方心配被致候段尤之儀ニ候へ共交易等之儀ハ從公邊難被及御沙汰筋ニ候乍併琉球國之儀ハ其方領分トハ乍申國地同樣ニハ難取扱段ハ無餘儀相聞既ニ此度之一條モ其方存寄一杯ニ可取計御被仰出モ有之儀ニ付寬猛之處置其時宜ニ應ジ後患無之樣思慮之上取計可被申候事

〔四〕琉球貿易默許ニツキ薩藩半田嘉藤次ヨリ藩老調所笑左衛門へノ通報。　弘化三年六月九日。

下曾根金三郎殿　右者御入來致面會候處琉球國へ佛蘭西國船來着ニ付御取扱筋御老中阿部伊勢守樣へ御同意書御差上相成候由ニ候處右御趣意至極御尤ノ譯柄ニテ早速林大學頭殿筒井紀伊守殿へ右御書付御下ケニ相成評議ノ旨御達ニ付被取調候處抑モ琉球國之儀ハ往古ヨリ此御方樣御領分ニテ御手切リ御取計有之候處此度佛國ヨリ追々難題申立候内一箇條ニテモ承引於無之ハ迚モ致歸帆間敷一體琉球國ハ清國ノ封爵ヲ受ケ舊式等取行候國柄ニ候得共自然皇帝ノ命ヲ受候上ニテ商法取組ベク旨無體ニ申募リ候得バ否難申譯柄ハ當然之事ニ候就テハ琉球國之儀ハ兼テ唐國通商御免被仰付置候上之儀ニ候得バ右へ被準琉球國

〔齊彬記〕四五—六頁。

手限ヲ以佛國ト通商取組相成候迚御差支ハ有之間敷候併右一條ハ何分不容易譯柄ニ付三奉行ヘモ評議被仰付候方ト申趣ヲ以林家被申談書面被致進達候處三奉行之内ニハ佛國ト此方樣通商取組相成候ハヾ別テ御利益ノ事候左候時ハ長崎表公邊御商法差障候抔ト申張リ候向モ有之候得共萬一琉球國ト佛國及戰爭候時ハ現在御國體ニモ相拘候儀不心付評議故右之調ハ阿部樣ニモ更ニ御取用無之御樣子ト相伺候併シ表立テ公邊ヨリ佛國商法御免トハ被仰出間敷候得共前條之御趣意ヲ以定テ阿部樣ヨリ御內諭モ可有之候間最早無御掛念琉球國手限佛國ト商法御取組被成候テモ宜キ由右之通佛國ト通商御取組之上ハイギリス國抔ヨリモ同斷之儀申立候儀申掛候ハ案中ト被察候得共琉球國ハ小國故產物少ク手廣ニ商法難相成ヲ以テ佛國ヘ託シ置キ佛國ヘイギリス國抔ヘ厚ク爲申諭候樣御取計有之候方宜敷由右御一條筒井殿ニハ御取扱之御方故極密タリトモ難被相洩儀ハ勿論之事候得共兼々金三郎殿ニハ此御方樣格別被奉蒙御懇命候ニ付私限リニ右之趣極機密ニ可致內話旨昨日態々紀伊守殿宅ヘ金三郎殿被相招極內話之由承屆候間御懇切之段厚ク挨拶申述置候此段申上置候以上

弘化三年丙午六月五日　　牛田嘉藤次

笑左衞門樣

〔五〕琉球在留英人處分ニツキ伊達宗城ト阿部閣老トノ對話。　嘉永四年三月。

伊達侯曰　（上略）前述之通中山ヨリ唐國エ懸合候事ニ候得共如何トモ致方無之彌右之賴候候遣儀ハカドリ不申ト見込候ハヾ薩摩守ヨリ御密話申上候所存之通處置仕候而モ不苦ヤ右等之處置小子ヨリモ伺呉候樣相賴候間伺申上候

阿部侯答　折角此度薩摩守代ニ相成直ニ唐人ヲ以云々英人エ爲懸合候モ十分ニモ無之樣存候間今一應厚唐國エ賴遣其上何分埒明キ不申候得バ薩摩守所存之通被取計宜敷候

伊達侯曰　左樣候得者歸國後中山エ申遣ヨフ々々ニ唐國エ爲懸合候得ドモ何分ハカドリ不申英人罷歸候模樣見留付兼候間出立前御密話申上相伺候通リカヨフ々々處置仕候而モ宜敷哉ト尙亦相伺越候上ニテ取計可仕哉

阿部侯曰　右ハ伺越相成候而モ表立指圖ハ相成兼候事ニテ兼而御委任モ有之儀且此間御暇之節被相達候通リ何レ之道被遊御安心候樣取計方肝要ニテ候得者唐國エ爲懸合候得共ハカドリ兼候ハヾ時宜次第內密薩摩守相話候所存之通リ重々念入琉人ヲ以在留英人エ爲懸合候而不苦尤不伺臨機之取計有之候トモ聊後日薩摩守不念ニハ不相成事ニ而萬端厚被致熟慮後患無之樣精々念入被取計取締等ハ彌嚴重ニ被相心得候樣明年參府迄ニ落着付候ハヾ別而手柄之儀ト存候

〔新伊勢〕卷二上所載。〔起原〕中二〇三四—四四頁。〔海軍〕卷一、八—一一五葉。〔外交部〕一二九一—五頁ニ別譯文（澁川六藏和解）ヲ載ス。和蘭原文ハ *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 第三十四冊第四部一〇四—九頁ニ見ユ。

第八章併看。

ガラーヘンハーガ＝海牙。

密議廳ハ Raad van State 即チ樞密院ナリ。

〔乙〕和蘭ヨリ日本ヘノ警告及ビ對外策ニ關スル件。

〔一〕和蘭國王日本大將軍ニ開國ヲ勸告スルノ書。

弘化元年七月使船齎來。

和蘭國書翰幷獻上物目錄和解

鍵箱之上書和解

此印封スル箱ニハ和蘭國王ヨリ日本國帝（征夷大將軍ヲサシ奉ルナリ）ニ呈スル書翰ノ箱ノ鍵ヲ納ム此書翰ノ事ヲ司ルベキ命ヲ受クル貴官ノミ開封シ給フベシ

暦數千八百四十四年二月十五日（天保十四年癸卯十二月廿七日）

瓦刺汾法瓦ノ部（和蘭國）ニ於テ記ス

和蘭國王密議廳主事名花押

鍵箱之封印和解（文字讀ミ得ベカラズ）

書翰外箱上書和解

日本國帝殿下　　和蘭國王

和蘭國王書翰和解

和蘭國ベイデ、ガラチイ、ゴッヅ、コヲニング（天祐王ノ義蓋シ稱號ナリ）兼ヲラニイ、ナッサウ（共ニ地名）ノ「プリンス」（爵名）リュキセムビュルグ（地名）ノ「ゴロヲト、ヘルトゲ」（爵名）ウイルレム（名）第二世誠意ヲ以テ

咬𠺕吧（カッパ）＝爪哇（ジャワ）・

書ヲ吾盟契隆治ノ所在帝都江戸ナル名德顯聞大威望大日本政府ニ贈ル冀クハ此書盟契ノ健康無恙福安ノ時ニ及ビ誤リナク其手ニ達センコトヲ

二百有餘年前大府ノ宗祖名德馳揚ノ權現家康公ヨリ信牌ヲ賜リ和蘭人ニ其商船ヲ以テ日本ニ來ルコトノ免許アリ是ニヨリテ我和蘭人今猶懇篤ヲ以テ日本ニ納レラレ優待ヲ蒙ルノミナラズ加比丹ニハ定時ヲ以テ自ラ大府ニ拜禮スルノ榮ヲ惠マル我和蘭人然ク親惠ヲ蒙ルコト綿々絕ヘザルヨリ余日本ニ對スルノ愛情甚ダ深シ故ニ貴國帝土ノ安寧貴國人民ノ幸福ヲ進ムル所ノ諸事ハ務メテ爲サンコトヲ冀フナリ

和蘭日本兩國ノ主今日マデ未タ嘗テ書牘ヲ往復セズ蓋シ書牘ヲ要スルコトナケレバナリ其故ハ交易ノ事及ビ尋常ノ風說ハ我和蘭ノ臣咬𠺕吧及亞細亞洲中和蘭所領ノ諸島ヲ管領スル所ノ總督ヨリ年々之ヲ告グルヲ以テナリ

然レドモ今日ニ至リテ余默止スルコトヲ得ズ其故ハ爰ニ一大緊要ノ事アリテ告ケザルコトヲ得ザレバナリ此事ハ和蘭人日本ニ於テ交易ノ事ニ拘ニアラズ即チ貴國政事ノ緊要ノ事ニ關リテ國王ヨリ直チニ國王ニ告グルニ足ルノ一大事タリ余日本ノ後來ヲ憂フルコト深シ冀ハ余ノ好商議ヲ以テ未來ノ禍ヲ防ガンコトヲ近年英吉利ノ女王帝國支那ト劇戰セシコトハ我國ノ船ヨリ年々長崎ニ出セル風說ニテ已ニ政府ノ明知ヲ經タルナルベシ英武ノ支那帝久ク無益ノ防戰ヲ爲シテ後遂ニ歐羅巴兵術ノ强大ナルニ屈シ其和議ヲ行フニ及

勉勤ニ工業・

ヒテ大ニ支那古昔ヨリノ政法ヲ改メ且ツ其五處ノ港ヲ開キテ歐羅巴人交易ノ地トナセリ
今ヲ去ルコト三十年前歐羅巴荒敗ノ亂治リテヨリ諸國ノ民治平ノ業ヲ營ミ諸州ノ國王古賢ノ言ヲ遵奉シ其士民ノ爲ニ通商ノ諸道ヲ開キ隨テ諸民蕃息セリ又器械ノ學分拆ノ術ニ於テ發明多キニヨリ手作ノ業漸ク必用ナラザルニ至リ交易及ビ勉勤何レノ地ニ於テモ其增息甚タ速ナリ然レドモ是ニ關カラズ諸國ニ於テ生計ノ財貨不足セリ
英吉利ハ其士人ニ富有知能深慮ノ者多シト雖モ生計ノ資ニ匱乏セシ者多カリキ是ニ於テ彼國人其交易ノ新途ヲ求メテ休マズ其求ムルノ切ナルニ至リテハ或ハ異邦ノ民ト爭闘ニ及ブコトアリ此時ニ至リテハ英吉利ノ政官事ノ急ナルニヨリテ唯務メテ己ノ屬下ヲ補翼保護スルノ外他計ナキナリ英吉利商人ト廣東ニアリシ支那ノ官人ト爭闘ノ起リシモ其始メ又是ノ如シ此爭闘ヨリシテ兵亂ヲ生ジ其亂遂ニ支那ノ一大災厄トナレリ其故ハ此一亂ニテ支那人死スル者數千人諸處ノ府城掠奪蹂躪セラレテ數百萬ノ寶貨ヲ購焚料（燒打チセラルベキヲ購フ爲ニ出ス金銀ヲ云フ）敗軍ヨリトシテ英吉利ニ奪ハレタレバナリ
當今ノ時右ノ如キ災厄將ニ日本ニ及バントス若シ些シノ不虞アラバ即チ禍胎ヲ萠發スベシ今ヨリハ諸般ノ船日本近海ニ游走スルモノ增スナルベシ然レバ其船ノ人等ト貴國諸州ノ人民ト極メテ爭闘ヲ生ジ易カルベシ是等ノ爭闘ヨリ兵亂ヲ興スベキ事ハ我深ク憂所ナリ

貴國ノ明智應ニ此厄災ヲ防クノ良策アルベシ是レ余ノ希望スル所ナリ千八百四十二年天保十三年壬寅八月十三日長崎奉行ヨリ和蘭甲比丹ニ示サレタル諭書ニ異國ノ船温和ノ遇待ノ叶アリコレ以テ政府ノ能知洞察ヲ知ルニ足ル然レドモ此命旨以テ厄災ヲ防グニ足ルベキカ右ノ諭書中ニ說ク所ハ唯難風ニ遇ヒ或ハ匱乏シテ日本海岸ニ漂着スル所ノ船ノミ若シ此他ノ事ニテ敵對ノ意ナク日本海岸ニ近ヨル所ノ船ハ如何ノ待遇ヲ蒙ルベキヤ右等ノ船モシ温和ナラズ粗暴ニ抵拒セラル、時ハ即チ爭鬪ヲ生ズヘシ爭鬪即チ兵亂ヲ誘發シ兵亂即チ荒敗ヲ致サル、コトナリ

日本ノ爲ニ此禍災ヲ除ガンコトハ是余ノ最望ム所ナリ此心蓋シ二百餘年來我和蘭人日本ニ於テ優待ヲ蒙ムルニ報ズル所ナリ古賢云安ニ居テ危ヲ思ヒ治ニシテ亂ヲ忘レズ

余熟々時世ノ移換スルヲ考フルニ坤輿生民ノ通交隆盛ヲ爲スコト甚速ナリ蓋シ爰ニ拒グベカラザルノ勢アリテ坤輿ノ民ヲ互ニ相引キ相集ム近頃蒸氣船ノ發明アリテヨリ遐遠漸ク邇近トナレリ此諸民互ニ相近クノ時ニ在テ孤立シテ交ヲサラント欲スル者ハ遂ニ仇ヲ諸國ノ民ニ結ブニ至ルベシ名德顯聞ノ貴國祖宗法ヲ立テ異國ノ民ト通好ヲ狹限スルハ通商ハ唐土和蘭ノ二國ニ限ヲ云ナリ余ガ知ル所ナリ然レドモ「ラヲ、ツエヲ」按スルニ老子ナルヘシノ言ニ聖人上ニ處レバ和ヲ保ツト謂ヘリ若シ夫レ宗祖ノ法ヲ嚴守シテ和交爲スベカラズトイフモ聖賢ハ其法ヲ寛ニセンコトヲ欲セリ

余ノ誠意ヲ以テ大府ニ勸ムル所亦斯ノ如シ希クハ異國ノ人ニ對スルノ法ヲ寛ニシ幸福ノ日本ヲシテ兵亂ノ爲ニ荒敗セシムルコト勿レ余ノ此議ヲ大府ニ勸ムルハ一片ノ誠心ニシテ少シモ私利ノ心ヲ挾ニアラズ

夫レ和好ヲ保ツニハ唯親信ノ交ニヨルベシ親信ノ交ハ唯交易ニ因テ生スベシコレ日本政府ノ賢明洞知スル所ナリ

大君若シ此貴國ノ大事ニ就テ猶其詳ヲ知ラント欲セバ宸翰ノ回書ヲ賜ハルノ後余將ニ余ノ親信スル所ノ者一人ヲ日本ニ送ントス然ル時ハ余ノ此書牘中大畧ヲ擧ゲタル事ノ詳明ヲ盡スコトヲ得ベシ

余隔遠ノ日本ノ幸福和好ヲ願フ內ニ悲惻ニ堪ヘズ其故ハ此ヲ慈父ニ議セント欲スレバ哀哉慈父和蘭王ウイルレム第一世二十八年視政ノ後今ヲ距コト四年前館舍ヲ捐ツ大府幸ニ憐恤ヲ垂レヨ

余今一軍艦ヲ以テ此書牘ヲ贈ル希クハ大府ノ回報ヲ得ンコトヲ右ノ艦中余ノ肖像アリコレ余ノ誠實戀愛ノ心ヲ表センガ爲ニ大府ニ獻ズル所ナリ此他尙一二ノ禮物アリ記シテ副紙ニ在リ並ニ菲微ノ品タリト雖モ皆和蘭國人ノ學藝巧術及勉勤ニ因テ產出スル所ノ物ナリ

貴國從來我和蘭人ヲ惠恤スルコト鮮カラズ余深ク是ヲ謝ス猶且將來ニ望ム所ナリ

上帝大府ノ顯明宗祖ヲ祐ケテ其治業ヲ永久ナラシム其大府ニ於ケル又此ノ如ク幸福ヲシテ永久ナラシメン是余ガ祈ル所ナリ洪福安寧和樂大日本永ク是ヲ得ヨ

視政第四年千八百四十四年二月十五日（天保十四年癸卯十二月二十七日）ス、ガラアヘンハアガ（地名）王宮ニ書ス

ツイルレム

ミニステルハンコロニイン（官名）

ハナアド（人名）（但草體ニテ讀ガタシ）

植民大臣「バウド」(Baud)ナリ。

和蘭國王ヨリ日本帝ヘ禮物目錄

一和蘭王肖像　一枚
名畫師「ハンデル、ヒユルスト」（人名）ノ寫ス所金縁ニテ像大サ眞ノ如シ

一玻瓈燭臺　一對
各「ガルセル、ラムプ」（不詳）五箇ヲ備ヘ又蠟燭ヲモ點スヘシ球及ヒ燈玻瓈若干添

一玻瓈大花瓶　一
剪綵花環添

一馬銃　一對箱入
六筒ノ者

一カラビン筒　一
二筒ノ者箱入

一歐羅巴地圖　一
歐羅巴諸州ノ圖ヲ集ル者

一新刻東印度和蘭所領大地圖　一

一「シユリナーメ」（人名）ノ記行　大本　一冊

〔新伊勢〕卷二上。〔起原〕二〇五九—六一頁。〔海軍〕一六—八葉。〔世界ニ於ケル日本人〕第二版三二頁。

一東印度和蘭所領ノ窮理史　大本　三冊
一東印度草木圖說　大本　二冊
一咬𠺕吧草木圖說　大本　三冊
一日本草木圖說　大紙四折本　一冊
一日本禽獸圖說　同　四冊
一地理總說附天學說　四折本　二冊
一數理地球總論　同　一冊
一天學基礎　八折本　二冊
一天學書　八折本　五冊
一「テカラーフ」人名天學書　同　一冊

一「ハンアーダムス」人名天學書　同　一冊
一總世界之風土記　同　一冊
一萬象記錄　同　一冊
一同　同　一冊
一土星環論　同　一冊
一「エレンゲ」彗星論　同　一冊
一天學教諭書　同　一冊
一「ハルレイ」彗星論　同　一冊
一天象記　同　一冊
一彗星記　同　一冊

〔二〕日本ヨリ和蘭ヘノ答。

〔ア〕閣老ヨリ和蘭ノ通信ヲ謝絶スルノ書

弘化二年六月朔日。

去歲七月貴國使价船齎國王書翰到我肥前長崎港崎尹伊澤美作守受而達之江戶府我主親讀之

貴國王以二百年來通商之故有遙察吾國之利病見忠告條件其言極爲懇欵且別見惠珍品若干

種我主良用感荷理宜布報然今有不能然者我祖創業之際海外諸邦通信貿易固無一定及後議定通信之國通商之國通信限朝鮮琉球通商限貴國與支那外此則一切不許新爲交通貴國於我從來有通商無通信信與商又各別也今欲爲之布報則違碍祖法故俾臣等達此意於公等禀之於國王事似不恭然祖法之嚴如此所以不得已請諒之至見惠禮物亦在所可辭然而厚意所寓遐方遠致倘或返納益涉不恭因今領受薄晋土宜數種以表報謝具錄別幅勿却幸甚抑祖法一定嗣孫不可不恪遵後來往復請見停或其不然雖至再三不能受幸勿爲訝至於公等書翰亦準此不爲報也但貴國通商則遵舊約勿替亦是愼守祖法耳幸禀之於國王雖則云爾至於國王忠厚誠意則我主亦深感銘不敢疎外也因今俾臣等具陳言不盡意千萬諒察不備

阿蘭陀國政府諸公閣下

日本國老中

阿部伊勢守正弘判
牧野備前守忠雅判
青山下野守忠良判
戸田山城守忠温判
同拜

弘化二年乙巳六月朔日

別副

貼金畫屛風　一雙
描金書架　一座

此書翰ハ儒員林韑（大學頭）、古賀小太郎（侗庵）、佐藤捨藏（一齋）ノ起草ニ係ル（續々泰平」弘化二年七月六日）。第八章併看。

〔新伊勢〕卷二上。〔起原〕中二〇五八—九頁。〔十五代史〕卷十九、四四—五頁。

撒金硯紙匣　一副
撒金文臺硯匣　一副
撒金提合榼　一具
華紋綸子　二十端
華紋紗綾　二十端

彩龜綾　二十端
彩綾　二十端
彩紬　二十端
整

〔イ〕通信謝絶ニツキ在長崎和蘭「カピタン」(商舘長)ヘノ諭書。

弘化二年六月。

我國往昔ヨリ海外ニ通問スル諸國少カラザリシニ四海泰平ニ治リ法則稍備リ朝鮮琉球ノ外ハ信ヲ通ズル事ナシ其國支那ハ年久シク通商スルト雖モ信ヲ通ズルニハアラズ然ルニ去秋其國王ヨリ書翰サシ越ト雖モ厚意ニメデ、夫カ爲ニ答レバ則信ヲ通ズルノ事ニシテ祖宗ノ嚴禁ヲ侵ス是我ガ私ニアラズ故ニ返翰ノ沙汰ニ及ガタシ然リト雖モ多年通商ノ好ミヲ忘レズ至誠ノ致ス處祝着之ニ過ズ其懇志ノ程聊カ會釋ニ及バザレバ禮節ヲ失ヒ且誠意ニ戻ル依テ其重役ヘ書ヲ送ツテ其厚キヲ謝ス又品々贈越スト雖モ返翰ニ及バレザル上ハ請納メ難シ然レドモ厚意ノ默止シ難キ故ニ其意ニ任テ納メ留ム就テハ是ヨリモ會釋トシテ國產ノ品々送リ遣也然ハ後來必ズ書翰サシ越事ナカレ若シ其事アリトモ封ヲ開カズ

シテ返シ遣スベシ正ニ禮ヲ失フニ似タリト雖モ何ゾ一時ノ故ヲ以祖宗歴世ノ法ヲ變ズベケンヤ爰ヲ以テ他日再ヒ言ヲ費スコトナカレ此度書簡相贈リ候トテ其返報モ固ク無用タルベシ此旨能々心得本國ヘ申傳フベシ

〔三〕德川齊昭ト阿部正弘トノ往復書翰。

〔ア〕和蘭國王ノ書翰送示ニツキ正弘ノ答書。

弘化三年二月十四日。

（上略）被仰下候一昨年夷狄使船之願書幷御返答此度献上物之品書御承知被成度由右ニ付御心配縷々被仰下候趣奉拜承候其段奉入御聽相伺候處右書面ハ其節取扱候者共之外容易ニ他見難被仰付品ニ候得共御三家方御直覽之儀ハ別段之御事ニモ候ニ付右寫入御覽候樣被仰出候間則和蘭國ヨリ之書翰横文字和解品書幷返翰甲比丹ヘ諭書寫一冊奉指上候間左樣思召可被下候且北地防禦御手當之儀ニ付思召込候趣被仰下是亦奉拜承候舊年ヨリ拜見之御書冊トモ得ト合考之上追テ從是可奉申上候（下略）

二月十四日　　伊勢守

〔新伊勢〕卷二上。往書ノ旨趣ハ答書ヲ以テ知ルベキガ故ニ之ヲ略ス。

〔イ〕和蘭ヘノ返翰ヲ非難スル齊昭ノ書。

弘化三年二月十八日。

（上略）扨夷狄之事ニ就テハ弱齡ヨリ懸念仕寢食ヲモ忘却天下之御爲ト計奉存上候故此度虜情詳悉ニ記得仕候段何拜領仕候ヨリハ肝銘難有仕合不堪感佩奉存候尙又御秘冊數回

〔新伊勢〕卷二上。

和蘭モ油斷ナラズ。

誦讀仕候處紅夷モ頗ル利口中々弓斷ハ相成不申諺ニ所謂御爲ゴカシ入ザル世話トヤラ申モノニ御座候少シモ私ノ利心無之ト申候得共顯ニ不貪陰ニ浸潤貪彼是ノ謀畧一穴ノ狐三穴ノ兎ト洞察無疑書中ニ含蓄致候事ト存候速ニ此方ニテ利ヲ得不申候共彼ガ口入之通相成候ハヾ外ニテ何程カ利ヲ得可申哉皇朝ハ一小國ニテモ人民衆多且忠信義勇剛僻之性情ニ候得バ無理ニ襲來戰爭ニテハ利運スル事不能ト存ジ交易ヨリ通信抔ト事ヨセ淸邊ノ敗失抔ヲ說キ威シ甜辭ヲ振ヒ漸々ニ撫込候手段如見肺肝ト奉存候必從前ヨリ風聞書抔ニハ何トカ申上候半夫ヲ官吏遠察モ無之打拂モ御止ニ相成候得バ此方ノ動靜推察致候故使船モ指越候半若左樣ノ事モ候ハヾ最初風聞書指出候節尤至極ニ被爲思召候故此上何レノ海岸モ手厚ク備ヘ打拂可申付トノ御盛意ニテ備手厚ク致シ打拂候樣ニト天下ヘ御觸ニ相成リ其段カピタンヘ御達ニ相成候ハヾ必使船ハ來リ申間敷被察候何ニ致テモ打拂ノ御止メハ遺憾不少候此後淸夷蘭狄タリ共崎陽ノ外ヘハ一切寄セ付不申ガ第一ノ御良策ニ御座候萬一夫ニテモ戰鬪出來申候モ難量候得共其害ハ薄ク可有之通信ヲ許候上ノ戰鬪ハ大害ニ可相成候使船ノ書翰ニモ淸夷共防禦スル事ノ起リ云々ト有之候得共是ハ日本ト違土地ノ形勢モ異リ追々交易通信モ致シ互ニ事情ニ通ジ候上ノ事ト被察候此上手ヲカヘ品ヲ換ヘ船ヲ近ク寄セ候共交易ハ一切御免無之ガ宜敷候夷虜皇國ヲ窺窬致候事今ニ始ヌ事代々申傳ヘ心長ク終ニハ幷呑致巧黠ノ狄心誰モ存居リ候事申迄モ無之ガ又此方ニテモ彼ヘ應ジ

〔新伊勢〕卷二上。

和蘭書翰ノ書キ方巧妙ナル事。

候御策畧ハ御代々樣御旨意ニテ夷船一切御近付無之ガ宜シク其中次第モ御座候ハヾ幸ト淸蘭タリトモ交易御禁ジ可然奉存候（自註略）扨使節ノ書翰內實ハ兎モ角モ紙上ハ誠實忠義ノ中立ニ候得バ何樣可然申論御返シニ相成候ハ不戰而屈人之兵ノ深味トモ可申可然儀善ノ善タル所以ト奉存候（中略）扨使節書翰ニ和蘭日本兩國ノ主ト己ガ方ヲ先書致シ候ハ可惡事ニテ又彼ヨリハ何等敬文モ無之處御連署之下同拜ハ禮文ニハ可有之候得共於拙老ハ夷狄ヘ拜ヲ致候心底ハ毛頭無之右之御回答ハ誰草案致候哉漢文ハ淸夷ノ眞似ナリ和文ニ致度候故カピタンヘノ御諭書ノ方却テ宜敷被存候夷狄共如何樣ニ拜禮致候哉拙老儀ハ未切支丹ノ拜禮ハ學ビ不申又拜シ候心モ無之候御一笑々々々呵々丙丁

〔ウ〕同上。　弘化三年二月廿九日。

（上略）蘭夷ノ認候書翰和解之通ニテモ餘程深慮相見ヘ申候處是ハ定テ本朝ヘ差越候故彼方有志之者衆評ノ上ト見ヘ申候處御回答之儀ハ極密々ニテ願不申ハ掛リ御役人ノ外ハ三親藩サヘ拜見不相成儀ニテ被遣候故何レニモ不行屆カニモ見ヘ申候本文ヘハ既往不咎云云認候ヘ共又再考候ヘハ此度計ノ事ニモ有之間敷御懇意之事故內々御咄置申候方ト存ジ以後御含之爲申進候尤拙老了簡違ニモ可有之其處ハ何分御汲分可被成候

一蘭夷書翰ニ　此他ノ事ニテ敵對之意ナク日本海岸ニ近ヨル所ノ船ハ如何之待遇ヲ蒙

ルベキヤ云々此御答ハ御回答之中ニ見ヘ不申候ヘバ又々此カド如何ト申來リ候テモ無已樣ニ被存候（自註略）

一御答ニ　通信ハ限朝鮮琉球通商ハ限貴國與支那云々朝鮮琉球ト淸夷蘭狄トヲ對ニ致候得バ於文章ハ宜敷候半ガ於實事ハ朝鮮ハ淸夷ノ屬國琉球ハ本朝之屬國ニテ薩州ト緣組候位之儀ニ候ヘバ朝鮮ト一ツ物ニハ有之間敷候處右樣認候テハ此先萬々一蘭夷等琉球ヘ上陸致シ候節存分此方ヨリ差込兼可申候（自註略）

一御回答ニ　但貴國通商ハ則遵舊約勿替亦是守祖法耳云々信牌迄モ被下置上ハ本文之通リニハ可有之候得共先ヨリ間モナキニ求テ此先共益交易ヲ御止被遊難キ極ヲ遣シ候ト申モノニ可有之哉ニ被存候（下略）

（エ）外船擊攘ノ容易ニ行ハレ難キ事及ビ軍艦製造ノ急務ニツキ正弘ノ書。　弘化三年七月八日。

（上略）異船ノ儀琉球浦賀等ヘ渡來誠ニ大患此事ニ御座候（中略）萬端御心配蒙仰候條々具ニ奏達尊聽候處（中略）是迄同列中內評ノ趣モ密々申上置候樣トノ御沙汰ニ付則左ニ奏申上候尤委密ノ儀は難認儀モ御座候間大意奏申上候

一異船打拂之儀文政八年之觸出シニ改復無二念打拂候樣觸出シ不相成候テハ實ニ日本永世之御爲不宜彼是ト事ヲ設ケ仕寄ヲ附本邦之動靜ヲ伺候度每ニ國力ヲ費シ終ニハ交易ニ

〔新伊勢〕卷二上。第十一章併看。

弘化三年閏五月米艦浦賀ニ來リ通商ヲ求メ、拒絕セラレテ退去ス（本文第十一章參看）。

尊聽トハ大將軍家慶ニ稟申スルヲ謂フ。

事寄追々蠶食イタシ候歟又ハ度々渡來内々此方之越度ヲ伺ヒ夫ヘ附込爭端ヲ開キ戰爭企候歟何レ兩端之内ニ陷候儀ヲ相待居候事カト推察罷在候間早速觸直シ有之度儀ニハ候得共一旦觸出シ候儀ヲ事故ナク打拂ニ相復シ候テハ自ラ鬪爭ヲムカヘ候塲モ有之勿論昨年來諸方海岸ヘ異船來測量抔致シ候儀モ有之且此度琉球浦賀等ヘ軍艦差向ケ品々不穩振廻モ有之儀ニ付右ヲ申種ニ致シ候得バ觸直シ候謂更ニ無之ト申ニハ無御座候得共當節海岸御備向未タ全嚴重トモ難申旣ニ此度浦賀之儀モ無事ニ出帆仕候間無故相濟申候得共若亂妨之儀共有之節ハ中々打留可申見居モ無之程ノ事情ニ相聞ヘ右樣之處ヘ此方ヨリ打拂之儀觸出シ渠ヨリ及異議候節ハ必勝之利甚無覺束左候得ハ日本之恥辱實ニ無此上儀ニ候間先ツ浦賀表ヲ始諸國海岸御備向今一際嚴重ニ被仰出夫々手厚ニ御整御國內充實致シ候上取計候方ト奉存候得共右ヲ相待觸出シ候テハ中々早急ノ取計ニハ難相成ニ付先ツ浦賀表ヲ始メ近海之御備向一際行屆彼ノ軍艦ニ對シ可也戰爭ニモ可被及程ニ警衞モ相整候上ニテ觸直シ候方ト此義專評議中ニ御座候尤其內少々ニテモ渠ヨリ亂妨狼藉ノ致方等モ有之候ハヾ御備向充實ヲ不相待其越度ヲ申種ニ即時觸直シ可申心得ニ罷在候何分早々御備向一際嚴重ニ相成候テ彼ガ術中ニ陷リ不申內觸直シ有之候樣致度勘考罷在候

一軍艦之儀以前ヨリ段々御建白之趣拜見仕御尤之儀ト同意奉存候素ヨリ日本之荷船等ニテハ中々異船ヘ對シ戰爭ハ勿論荒浪之節ハ漕出シ候義サヘ難相成此後萬一浦賀沖抔ヘ異

御當地－江戸。

大隅守－薩藩主島津大隅守齊興。

軍艦製造ノ急要。

船滯留罷在候節ハ廻船運送之通路ヲ絶候得バ御當地ハ忽兵粮ニ差支可申左候迚堅牢之船無之候テハ打退ケ候義難相成島々へ手ヲ出シ候テモ防禦相成不申既ニ今般琉球國へ渡來之佛蘭西船ヨリ交易等之義申出候得共右交易之儀ハ日本ヨリ決テ御免ハ難被遊事ニ御座候且琉球國之儀ハ大隅守一手進退ニ御委任之事故此度之儀モ存寄一杯ニ取計尤御國體ヲ不失寛猛之所置勘辨之上何レニモ後患無之樣熟慮ニ及ビ取締向等機變ニ應ジ取計可申旨大隅守へ御直ニ被仰含候儀ニ御座候乍併琉球國之儀ハ南海之一小島ニテ場所ニ寄大砲被打掛候得バ表裏被打貫候程之事ニテ國人ハ誠ニ柔弱武器ハ勿論兵糧等モ甚手薄ニ相聞へ加之軍艦等モ無之事故當節之姿ニテハ防戰等必勝之利ハ無覺束事情ニモ候間御國體ヲ不失事穩ニ取計候筈之趣ニ相聞へ申候右模樣故第一軍船製造無之候テハ實ニ永久守衞存分ニ戰爭ハ相成間敷ト奉存候依之兩岸之内浦賀長崎松前薩州等へハ堅牢之船製造御免ニ相成公儀御船モ製造被仰付夫ヨリ樣子ニ寄外々へモ製造被仰出可然ト致評議當時取調中ニ御座候

一浦賀表へ渡來之異國人へ被下物之儀御議論ノ趣御尤之儀ト奉存候此度渡來之船ハ素ヨリ漂流トモ違ヒ渠ヨリ事ヲ設渡來致シ候儀故被下物等可有之筋合ニハ毛頭無御座候處食料薪水等願出候ニ付可被下哉之趣奉行ヨリ伺申越候ニ付强テ奉願候上ハ薪水ハ差遣可申食料之處ハ容易ニ與へ候儀ニハ有之間敷乍併自然及餓死候程ニテ達テ願出候ハヾ奉行心

得ニテ聊食料相與ヘ可申旨及差圖候處異船ヨリ歸路食料ニ差支及飢餓故ヲ以强テ願出候ニ付不得止事奉行手限ニテ相渡候趣ニ御座候尤船中貯高ヲモ不見留差遣候段ハ手拔之義ト奉存候且品數幷員數等モ相增差遣候趣ニ付奉行歸府之上委密承リ候得バ守衛向モ前段之次第ニテ其場事情無謂取計ニモ相聞不申依之被下物品書附幷願書和解諭書請書和解寫指上申候御覽之上御返却可被下候此段御請旁奉申上候以上

七月八日　阿部伊勢守

〔新伊勢〕卷二上。

〔オ〕海防及ビ高野長英ノ事ニツキ正弘ノ答書。　弘化三年七月廿七日。

（上略）思召之條々蒙仰候趣逐一奉拜見候打拂之儀幷軍艦製造之儀琉球松前等之御高論且御密旨之趣共何レモ得ト合考評議仕候上是ヨリ可奉申上候將又御三家方軍艦御製造之趣幷途船御用ヒ之儀等ハ追テ評決ノ上可奉申上候

一六月初旬長崎ヘ渡來ノ異人ヨリ差出候願書被成御一覽度旨蒙仰奉拜承候其段達御聽候處入御覽候樣被仰出候間即書類一冊爲御見合奉差上候

一一昨年琉球ヘ兩夷人差置當年右之者ヲ尋參リ候ニ付御明考之趣御尤至極奉存候仰之通既ニ蝦夷地ヘモ今般夷人漂着ニ付早々致歸帆候樣手眞似ヲ以相諭候ヘドモ不致出帆由ニ付彼地ニ片時モ難差置依之早速長崎ヘ相廻シ候樣志摩守ヘ差圖及置候事ニ御座候

一大筒御製作當時御指控置被成候處此節柄如以前製造被仰付苦カル間敷哉之段蒙御尋候趣是亦奉拜承候右ハ聊不苦候儀ニ御座候間中將殿ヨリ表立御屆御座候樣奉存候

一高野長英事召捕ニ相成候哉ノ旨段々御心配御尋之趣奉拜承候精々遠國迄ヘモ夫々申達相尋候ヘ共差押不申甚以心配罷在候

一琉球國ヘ佛蘭西船渡來之儀ニ付過日モ申上置候處（中略）一先ヅ歸帆ハイタシ候ヘ共又々一人殘シ置候次第向後之處不啻心配罷在候　（下略）

七月廿七日

中將＝水戸藩主德川慶篤。

蘭學者高野長英外。事ヲ言フノ罪ヲ以テ、天保十年閣老水野忠邦ノ命ヲ以テ渡邊華山ト同ク獄ニ下サル。弘化二年獄舍火アリ、高野潜匿シテ歸獄セズ。其後嘉永三年ニ至リ捕吏ノ追究スル所トナリ自殺ス。

〔新伊勢〕卷四上。

〔カ〕外船渡來ノ爲ニ多費ヲ憂フル正弘ノ書。　嘉永元年五月廿八日。

（上略）當年ハ度々所々之來舶諸藩之入費モ不少畢竟彼ガ爲ニ本邦之人財漸々介勞弊ニ付實ニ遺憾之至ニ御座候打拂復古之義等精々心配罷在致評義居候義ニ御座候　（下略）

五月廿八日

〔新伊勢〕卷二下。

〔四〕外寇ニ關シ德川齊昭ト姉小路トノ往復書翰。

〔ア〕大將軍ノ聽ニ達セン爲ニ齊昭ヨリ姉小路ニ送リタル書。　弘化三年八月朔日。

姉小路ノ事ハ第六章ニ見ユ。

（上略）一昨年來追々異國船の沙汰も御座候所少しは奥向にても御聞及も候半が右等之義に付候ては下官事三十年前より必ケ樣相成可申と心付居候へどゝ部屋住の義にて申上候

手づるもなく其まゝに打過候所はからずも水戸家相續被仰付候事故家督之砌より御爲筋と存候義は存切恐れをもかへり見不申追々上へも申上又老中へも時々申聞候處御承知之通りの下官故申上振も不行屆にも可有之候故是迄御取用も無之剩へケ樣隱居までに相成候上は最早何事御座候とも申上間敷とあきらめ候て宜しき事に候へ共又考直し候へば如何樣被仰付候とも命有之上は御爲に不宜義不申上候ては三家の甲斐無之此上又々如何樣被仰付候とも身はさらに厭不申候故申上候方と存直し又々隱居後もやはり如以前伊勢守等へ存分申遣候所此節に相成先年より追々下官申上候ありさまに相成候故下官申上候所のと御聞受に相成候內々伊勢守より御書附共時々拜見も被仰付又下官了簡振も承り候て評決致候樣にと迄厚蒙仰難有次第と奉存候十ヶ年前人の心付不申節より心を用申上候程の事に候得ば此節は尙更夜中もふせられ不申心配（中略）此度の義は中々一寸の事と被存候ては大きなる相違事により候へば天下大亂の本と成候故乍恐上にても何分御配慮被遊候て御役々へもよく〳〵御下知被爲在度御事に奉存候琉球蝦夷を奪れ夷狄共出城をかまゐ申候上は南北より日本は挾打に致され尙又浦賀銚子下官國許那珂港邊へ異船共かけ居候へば江戸への廻し米入候事不相成候所江戸は數百萬人の人にて一月も廻し米とゞこほり候へば餓死多相成江戸中にても騷き立候やう相成は必定其所へ異國人共攻入候へば何の手もなく奪れ申候事只今より鏡に寫し見候如くにて夫をふせぎ候には此方にも彼方

へ對し候よりも一段手厚き船にこしらへ異船を打拂候へば客船は萬里の海を渡り來候者にて何かに指支有之候へば此方の勝候は必定故十ヶ年以前よりも追々申上此節も時々伊勢守へ申遣伊勢守も何分尤と存如才なく評議致候よふには候へ共今以何等被仰出も無之心配いたし候來年には琉球如何にも危く察被申候其上は蝦夷松前危く松前蝦夷地の義に付候ても十ヶ年以前より申上置候事も御座候處是も今に御決に相成不申又海軍艦の義も未無御沙汰候處彼是御評議長き內には御舟を初大名共も舟出來候間なく琉球も蝦夷も取られ其上は日本丸に奪れ候樣相成可申候おまえ抔にては日本は大國と被存候半が只一ッの小島にて（是は世界の圖御手元に無之候はゞ本屋より御取寄御覽候得は直に御分りに相成可申候）夷狄共は所々の大國を奪手に付け不申は日本斗位に候へば夷狄共の目より見候へば實に一ッの小島同樣に候へ共昔より日本は神國にて武勇にて是まで押拔候故是迄奪れも不致候所夷狄にて尊申候天主教は世界一王に相成候心にて天地の間にあらん國は皆自分の家來に致し候主意の處追々存候やう相成只今手に付不申は日本計に候へば如何にも御危く日本開闢以來何れの國へも付不申日本德川の天下にて萬々一御奪れ被遊候ては天照皇大神宮御初へ御對し被遊候て不被爲濟は勿論左までには及不申候とも此太平の天下を御亂し被遊候ては東照宮へ御對し被遊候て如何とも御申譯は無之候神功皇后は女帝にてあらせられ候へ共此方より渡海し賜ひて朝鮮を奪賜ふ程の御義に被爲在候德川の天下にて此地に居ながら夷狄を防ぎ兼奪れ

候ては何とも可申樣無之候故心付候義は伊勢守へも筆に及び候たけは申遣候へ共尙又上よりも御勵せ被遊候てヶ樣なくては不相成と見拔候事はすみやかに決斷致し候やう被仰付度奉存候外々の義と違ひ此度程の御大變は無之候只今に相成漸々目のさめ候人も有之又今に相成候てもまだ目のさめ不申人も有之やう見え申候皆に實に危き時に御座候下官抔考候ては此まゝ捨置候へば來年よりは餘程の事に相成可申と心配いたし參候兼々出火と筆はいつの何時と申事も無之候故兼ての用心が大切に御座候御本丸御燒とても御本丸は決して燒候事は無之藏も同樣と其宵までは存候て燒候抔とは夢にも存間敷候處夫れ出火と申候へば其節に目がさめても中々消し候だんには無之一時に灰と相成候大火に相成候上は了簡もふんべつも間に合不申尤出火は追て御普請被遊候へば相濟如本にも相成候へ共一度此天下を夷狄へ御渡し被遊候へば二度御取かへしは決て不相成其時は如何被思召候ても致方なく候一時に崩立申候へば琉球を夷狄に奪れ候へてもはや覺悟を定候外無之候故只今の中すみやかに御評議御下知被爲在候やう仕度候琉球蝦夷下官の目には十ヶ年前より危く被存候是を先へ取れ申候へば日本はとても永く持こたへは相成兼候下官の事故例の通存分無遠慮質の處申候へば乍恐東照宮にて亂候世を千辛萬苦被遊候てかく迄太平に被遊候へば只今にてこそ德川の天下に候へ共二三百年前は所々へ移り來候天下にて古書にも有之候通り天下は天下の人の天下にて德川計にかぎり候天下に無之候へば天

下の爲に不相成候ても其まゝ被指置候て御決斷なくなかなかに被遊候へば夷狄の騷計には無之內々にも外樣大名初きゝ申間敷候へば只今の內天下の御爲にヶ樣なくては不相成と御見拔之義は船製にても何にても早く被仰出候ては大名初と共に力を合せ此天下を御守り被遊候やう奉願候琉球蝦夷抔の義は一日をあらそひ申候程に危く夜もふせり不申下官は御案し申上候扨又琉球蝦夷未奪れ不申先よりはや御膝元の浦賀へ下組にはしごをかけ初候上は琉球蝦夷を奪れ候上は實に御危く奉存候乍恐下官十ヶ年前より申上候通りを御用被遊候へばヶ樣の事には一切相成不申とくりかへしくりかへし殘念に候得共今と相成候ては其義を申もせんなき事故今は今の處にて奪れ不申やう外に考候より外無之候扨又東照宮御祖父清康君一夕の御夢に左の御手に是の字を御握被遊候と見賜ひ卜者を召て吉凶御問被遊候へば實に貴瑞の御夢也是の文字を分て見る時は日ノ人なり日ノ下ノ一人となりて天下を掌握しふべし若其身にあらずんば必御子孫に有べしと申上る清康君大に悅びましまし賜ふ其後又申上けるに天下を握り賜ひてより五代迄は握り賜えと六代目よりは段々と握り賜ふ御手開きて御十代後は不殘開き賜ふ理なれば此處御大切なりと申上候よし兎角和漢ともに二三百年太平つゞき候へばいつもヶ樣致し候者と人々武備に怠り候故何れの國亂候も二三百年前後の處にて誰もかれも太平太平めで度めで度と計申て武を勵し候者を却てきつかひ怠り候人計に相成候節他國より攻込れ候者に御座候故只今の

内武備有者を御引立御旗本初も御勵し猶又伊勢守等へも時々御下知被遊候て海軍船等日本海岸有之國々早々出來候やう被遊今より前文是の字を御握り初被遊候やう仕度候是は譬に候へ共公家花を見るといふ題にて人の歌よみ申候に

のどけしな〳〵とてはるのうた　御思案のうちにはなや散らん

と申如く事のなき節はゆるゆる評議も宜く候へ共前文之義抔只今と相成候ては小田原評議にのみ時日を送り候へば間に合不申御思案の中に花の散候如く船も出來上り不申内に琉球も蝦夷も取れ申候半故前にも認候通り是はなくては不相成と存候義はすみやかに御決しに相成御達に出候やう仕度候琉球蝦夷奪れ申候へば前にも申候通り一統覺悟を定候外無之候德川の天下は失ひ候をも無已候故誰大名にても天下を取候へばよろしくと申候ても夫も不相成せめては町人百姓にても日本人にてさへ有之候へばよろしくと存候ても夫も不相成と如申せつなき事に成行不殘に夷狄へ渡し候やう相成可申候是は諸國を奪ひ人を入かへ候が天主教の致す處にて御座候目の見え不申人は此太平に如何して亂が起る物だ日本は神國故如何して夷狄に取らるゝ物だと平氣に成て居候者多候へ共神國の事故神にも守り候半が日本は昔より武勇を勵し候國に候へば是迄奪れ不申事にて候へばたとへ神々に守てるにも致せ神を賴まず人力にて守り候やう無之ては相成不申候東照宮にても弘安四年異國より攻來り候事をうはさ被遊候にも追ての事有之ても神風は賴に不相成

よしの尊慮御尤至極に有之候へば兎角武備さゝのひ一切まけ不申候仕方無之候ては危き事に奉存候伊勢守初も如才なき樣子には候へ共尙又上よりも時々御下知被遊候やう奉願候古昔よりヶ樣の義は三家共も必被爲召候て御相談御座候所尾州も中將も御承知の通り候得ば當紀州は如何の人か不存候へ共當紀州幷三卿共時々被爲召御相談も被遊尙又伊勢守等御役人は勿論の義度々被爲召候て人々の了簡をも御聞被遊兎角して德川の天下を永世に御持張被遊候は勿論國中亂に及不申やう只今より御工夫被遊候やうくれ〴〵奉願候御事に御座候めで度かしく

八月朔

尙々（中略）御序の節御內々よく〳〵御申上にて伊勢守初は勿論三家三卿えも御相談被遊又外樣大名たりとも格別右等の事に常々心を用候人々は御內々伊勢守等よりなり共了簡御尋被遊候て此上德川の天下を末永く御持張今を初と又々是の字を御握初被遊候やう仕度御內々申上〳〵（中略）

ヶ樣の義奧へ御咄申品には無之候へ共時々伊勢守へも申遣候處兎角評議にのみ手間取れ候樣にも存候故御內々御咄申候故其御心にて極內々御申上に致度候御火中

姉小路殿　　齊昭

參

（イ）齊昭ノ意見ヲ大將軍ノ聞ニ達シタルニツキ姉小路ヨリ齊昭ヘノ答書。　弘化三年八月六日。

此程は御書戴難有拜見申上參候（中略）左樣に御座候へは仰下され度との御事にて段々御書取の御趣一つ〳〵拜見申上私風ぜい何のわき前不申風聞うけ給候らへばたゞ〳〵恐居候のみの御事御書取之御趣一つ〳〵御尤樣御事哉と存上〳〵しかし御聽に入候御程合も計難く心配致又ヶ樣に御爲との御事を私切にしまひ候も相濟申さずと色々とかむがへ今日御しづかにも御座候故御書の御まゝ一つ〳〵申上候處段々の御書取の御趣御尤にも思召候との御事にて御承知被遊候今朝御表へも御書付出御覽有らせられ御尤に思召候御事にて早くうちはらひの御事御調も仰付られ御書面出來のうへ其御所樣へも御覽にも入候樣御沙汰もあらせられ候まゝ此段も御心得に申上候樣との御事にあらせられ候奥へ仰上られ候御事表へ御沙汰あらせられ候ても伊勢初存寄もいかゞ哉と思召候まゝ奥へ仰上られ候御事は御表へ御沙汰有らせられず何事も御承知樣にて御心付せられ候御事はおひ〳〵御沙汰も被遊候との御事何もよろ敷申上候やうとの御事に有らせられ候申上候樣子の處もいかゞ哉と心配致候處右之御樣子にて仰上られ候御かひもあらせられ候私に置候て難有く候色々風聞うけ給候て恐居候のみに御座候中々御書取の御請は一つ〳〵申上かね御免願候又ヶ樣の御書取奥に御座候ても心配に御座候まゝ返上候かた宜敷と御沙汰

第十一章併看。

〔起原〕上五五—八頁。

咬𠺕吧（カラッパ）＝爪哇（ジャワ）。

もあらせられ候はゝ返上申上候又御請御あげ遊候はゝ御覧に入候樣との御事ゆへ其思召にて御書取願上候右へ申上候御沙汰の打拂との申事は私共にはいつかう心得申さぬ御事御沙汰の御通り認入候其御所樣には御承知樣の御事よろしく願上候（下略）

御請御用　　　姉小路

八月六日夕刻

〔註〕（此他往復書翰數通アリ、其中未ダ何等ノ防備ニ着手セザルヲ難ズルモノアリ）。

〔丙〕爪哇總督通報ノ件。

〔一〕米國ヨリ日本へ軍艦派遣ニツキ爪哇總督通信（蘭文譯）。

嘉永五年五月八日附。

御內密

暦數千八百五十二年第六月二十五日（嘉永五年壬子五月八日）於咬𠺕吧

大尊君長崎御奉行へ

阿蘭陀國王歐羅巴洲中專ラ風聞有之候事承リ候ニ北アメリカ共和政治司ヨリ軍艦日本ニ差越商賣相遂度所存有之候由ニ候

北アメリカ州共和政治事ハ歐羅巴州中强勇ノ國ト其勢威異候儀無御座候右申上候軍船ハ許多ニテ其船或ハ蒸氣仕掛或ハ尋常帆前之船ニ候右樣ノ仕組ニ候得共殺罰ノ始末ニ及バズ柔順ノ願振不仕事哉何トモ難申上候

一右樣之次第ニ有之阿蘭陀國王相考候ニ日本往々ノ御煩御用心專一ノ御事ト奉存候

一數百年來日本ヨリ奉蒙候御寵遇之儀阿蘭陀國王兼々忘却難仕奉存候儀ニ御座候既曆數千八百四十四年（弘化元辰年）當國王前代日本ノ君ニ申上候モ幸福ノ日本御患ヲ御除ノ爲外國人ノ事ニ就テ御趣意御緩宥ニ相成候樣トノ事ニ候此度當國王モ此儀ヲ省考仕先年ノ前見差當リ此節之御煩不遠可有之哉ト懸念仕何分難默止申上候義ニ御座候右ニ付テハ日本之御官府篤ト御用心御危患御防ノ御趣向專要ノ御事ニ奉存候

一阿蘭陀領印度都督ニ阿蘭陀國王ヨリ申付書面相仕立新カピタンノ者ヲ以差出候是究テ此次第日本攝政ノ御聽ニ達候事ト奉存候

一右之次第申上候儀ニ有之候得共國王ノ志意十分盡シ難ク申上是迄永ク奉蒙御寵遇奉感荷候處ヨリ一ノ方便考出候儀有之勿論此儀ニ付御威勢强キ日本國家ニテ被立置候御法度ニ聊不響御安全御策之儀ニ御座候

一右一件ニ付是迄阿蘭陀領印度大裁斷所評定役相勤罷在至極實貞政治向ニ事馴罷在候ドンクルキユルシユス儀カピタン職ニ申付候此新カピタン儀阿蘭陀國王ヨリノ命令ヲ受ケ自然日本御官府向御用之儀御座候ハヽ前條申上候御策ノ方便奉申上阿蘭陀國王ヨリ申含候趣意申上何卒御辨利ニ相成候樣奉希候儀ニ御座候

一日本官府向ニテ阿蘭陀國王ノ志意御聽被下候事相協候儀ニ候ハヾ御身柄御忠勤ノ御方御掛出來其御方ニ右一件阿蘭陀國王ヨリ申付候新カピタン御應對申上此御大切之一件取扱相勤サセ申度奉希候

一阿蘭陀國王右一件ニ付申立候儀聊自己ノ利ヲ貪リ候樣ノ儀ニ無之全ク實意ヲ盡シ申上度儀ニ有之候自然此度モ此已前ノ通此實意難通樣ノ事ニ成行候時ハ阿蘭陀國王誠ニ以深ク歎息仕候儀ト奉存候右樣厚ク奉申上候ハ至極大切ノ儀難默止所ヨリ如斯御座候

一世上ノ記說往昔ヨリノ說ニモ天ノ然ラシムル所ハ地上遠隔ノ所トイヘトモ此所ノ足ラサル所ノ物餘タル所ノ禮互ニ習ヒ或ハ索メ雙方ノ辨利ヲ旨トスルトナリ雖然日本ノ御國ハ御威勢盛ニシテ聊是等ノ說ニ御泥ミ被爲成候樣ノ儀ハ有之間敷候得共諸方ノ國々ヨリ湊ヘ來リ强テ望ヲ達セントスル時ニ至テ御國ノミ世界ノ列ヲ御離レ他ニ御關係ナク首尾能御防ハ可出來候得共甚以御煩シキ事哉ニ奉存候

一右樣ノ始末ニ至ル時ハ窮テ兵器ノ沙汰ニ及ヒ永々血戰ノ患不免シテハ相鎮リ申間敷奉

存候自然右樣御混雜之事トモ相起リ候樣ノ事萬一有之候時ハ右混雜ノ爲阿蘭陀人迄モ日本ニ罷出候儀暫時ノ間タリトモ難協樣之場合ニ趣候樣之儀ニ成行候樣之事ニモ至リ候テハ實以歎敷次第奉存候

〔起原〕上六二一六頁。〔十五代史〕卷十九、八三一六頁。〔雨夜〕卷二。

〔二〕在長崎和蘭商館長ヨリ長崎奉行ニ提出セル通商條件案（譯文）。

嘉永五年九月。

恭敬大尊君長崎奉行 牧志摩守樣
大澤豐後守樣 阿蘭陀カピタン謹テ申立候

一咬𠺕吧都督職之者筆記差出方之儀カピタン職私儀命令ヲ受ケ則右書面江府御伺之上御請取相成候隨テ咬𠺕吧都督職ヨリ私儀ニ申聞候ハ左之通ニ御座候

第一阿蘭陀國王存付ノ方便日本御國法ニ相背不申御安全ノ計策日本御官府向ニテ御取用ニモ相成候ハヽ、可申上候樣ノ命ヲ受ケ候ハ當時專ラ外國人共御本國罷出儀漸々增長仕候

第二右一件ニ付御官府向ヨリ被蒙仰候御方へ可申立心得ニ有之候處阿蘭陀國王趣意ニテ右方便日本御安全ノ爲メ至極御大切ノ儀ニ御座候得ハ可相叶丈ケ急速ニ申立度儀ニ御座候然ル處右筆記ノ書面持越候テ最早三ヶ月ニモ相成尚此末右一件ノ御掛リ出來候迄餘程ノ時日經候哉モ難計左候時ハ阿蘭陀國王本意ヲ失ヒ候樣成行申候就テハ私儀相考候ニ近日牧志摩守樣御事御發駕ニ相成可申候間阿蘭陀國ノ趣意申立候右一件之方便江府表へ被

仰立候儀相協可申哉ニ奉存候左候得ハ節格之存意空敷相成申間敷奉存候右方便ト申ハ御爲筋ノ儀ニテ「カピタン」職ノ者ヨリ申立候樣阿蘭陀國王申付候右一件ノ原因ハ北アメリカ洲共和政治司日本國ト交易ノ志願是非途度樣子ニ有之此存意相止不申樣相見申候隨テハ交易ノ儀御許容ニ相成尤舊來之御定ニ格別不相觸且外國人共モ心得違不仕双方意味違無之樣之御趣向至極御良策ト奉存候將又太平海邊之通船鯨漁等年々增長仕候得ハ洋中危難之患兎角ニ有之右ニ付船修覆並食用之品辨方等之儀日本之地ニテ不仕候テハ不相協樣之儀航海ヲ專ラト仕候國々ノ者トモ必要之儀ニ御座候ニ付左之趣意申上候

第一　北アメリカ洲共和政治司ヨリ多分願事仕候儀可有之右願全ク御取用不被爲成候樣ニ無之確執出來不申樣ノタメ聊計ノ事ニテモ御免許御座候方可然奉存候尙阿蘭陀人外タリトモ食用薪水並船修覆等ノタメ入用之品ハ御與ヘ病人養生之御手當被爲成候樣御沙汰ニ相成候方可然奉存候

第二　日本國ニ往古ヨリ敵對不仕國々之者モシ通商御願候ハヽ長崎港ニ渡海御免被爲成左ノ箇條御立被成可然奉存候

第一通商之儀ハ長崎港ニ限候事

第二通商御免之國ハ其國ノ重役同所ニ相詰候事

第三通商御免之國人ノ住館同所ヘ御手當ニ相成候事

附此三箇條相立候得ハ日本之内

外場所へ罷出候患有之間敷候

第四外國人トノ交易之儀ハ江戸京大坂堺長崎五箇所ノ商人限リ候事　附此箇條之儀ハ日本御國法ニテ外國人ト私ノ交易御停止之趣阿蘭陀國王傳承罷在候依之此趣向ニ候得ハ御國法ニ相背候儀有之間敷奉存候

第五御法御立交易之趣向御定長崎港ニ御番所御立之事　附此箇條ハ船々出入荷物之積卸ノ御改方ニ付御規定相立可申奉存候

第六交易取引之儀ハ双方長崎會所或ハ大坂會所ノ手形ニテ相辨候事　附此箇條ハ日本之御法ニテ金銀外國ニ御渡停止之由且又外國之金銀日本ニテ通用不仕候由依之右趣向ニ仕候得ハ御國法ニ背間敷奉存候

第七諸品物運上等之御規定程能御立之事　附此箇條ハ外國人トモ運上差出候様相成且過分之荷物持渡不申様之防ニ可相成尤運上格別相増候得ハ苦情申立候様可相成依之程能ト申上候儀ニ御座候

第八交易之儀ニ付外國人取〆出來候節ハ長崎御奉行所ト外國重役ト取扱ニ相成候之事

第九御法ヲ犯候外人ハ其國ノ支配ニテ仕置可致事

第十日本御官府向ニテ石炭圍場所外國人へ御差圖之事　附此箇條ハ北アメリカ洲西方之諸洲アシヤ洲東方之諸洲並唐國トノ蒸氣船渡海就中北アメリカ洲共和政治辨利ノタ

メ既ニ是迄相立候場所モ有之就テハ右樣之振合ニ石炭圍場所相定候之儀必用之事ニ御座候

一阿蘭陀國王ノ志意ハ北アメリカ洲共和政治司ヨリノ願前條ノ振合ニ御答被爲成候ハヽ御安全之御策ト奉存候

右之趣謹テ奉申上候

カピタン　ドンクルキユルシユス

〔起原〕上五一―三頁。

〔三〕文書領收ニツキ阿部閣老ヨリ長崎奉行ヘノ令達。嘉永五年七月二十八日。

阿蘭陀新カピタン持越候咬𠺕吧都督之者筆記致シ候書付之儀一旦御國禁ノ趣ヲ以難受取旨申諭候上ハ當地ヘ伺ノ上受取候モ不都合候得共筆記ト有之上ハ縱令ヒ長崎奉行宛ニ候トモ書翰トハ譯モ違ヒ可申哉ニ付弘化度申諭之趣ニ相障候儀モ有之間敷候間右之心得ヲ以此上書翰ニテハ無之全ク筆記ニテ答書等望候筋モ無之哉ノ旨篤ト相尋彌筆記ニ候ハヽ別段風說書モ同樣之心得ヲ以其方共手地ニテ受取一覽致シ候儀ハ不苦候左候ハヽ右書付ハ御役所ヘ通詞共呼寄隱密ニ和解爲致當地ヘ差越候樣可被致候尤右ニ付答書等差遣候筋ニハ無之候得共御爲筋ノ儀厚キ心入ヲ以遠路差越候段深切之趣ハ時宜次第其方共心得ヲ以古カピタン歸帆之節ナリトモ懇ニ申含遣候樣可被取計候若又書翰ノ由ニ候ハヽ弘化度相達置候趣モ有之御國法故不得止事難受取旨實意ニ申諭深切之段ハ能々申含遣候積可被

第十二章併看。

心得候尤右之通相達候ニ付一旦申諭候御國法故難受取トノ趣意更ニ不相立樣成行候ハ不都合ノ事ニ候間最初申諭候趣意ニモ不相障樣厚ク勘辨致シ失體之儀無之樣精々入念可被取計候事

〔丁〕米國艦隊渡來ノ件。

〔一〕浦賀奉行戶田氏榮ヨリ幕府ヘノ通報。

〔通航檔〕。〔新伊勢〕卷五。

〔ア〕外船望見ノ報。　嘉永六年六月三日。

今三日未上刻相模國城ヶ島沖合ニ異國船四艘相見候趣三崎詰ノ者申出候ニ付早速爲見屆組之者出張爲仕御固四家ヘ爲心得相達候處只今千駄崎邊迄迅速ニ駛込候依之此段先御屆申上候以上

丑六月三日　戶田伊豆守

同上。

〔イ〕米國軍艦乘入リノ報。　嘉永六年六月三日。

先刻御屆申上候異國船相糺候處アメリカ合衆國政府仕出之軍艦ニテ二艘ハ大砲二十挺餘二艘ハ惣體鐵張ノ蒸氣船ニテ一艘ハ大砲三四十挺バッテーラ七八艘是又鐵張ノ樣子ニ相

見受一艘ハ大砲十二挺据進退自在ニテ艫艣不相用迅速ニ出沒仕應接之者寄セ附不申漸ク申諭一人乘組相諭候處國王之書翰護送イタシ奉行へ直ニ相渡可申旨申聞組ノ者談等ハ引受不申既ニ江戸表へモ其段相通置候旨申之泰然自若ト罷在猶同樣之軍艦數艘渡來イタシ候段申聞一切船近邊へ近寄候事相斷申候猶御國法相諭可申候得共不容易軍艦ニテ此上之變化難計只今應接中ニハ有之候得共先此段早々申上候以上

丑六月三日　戸田伊豆守

〔新伊勢〕卷五。〔幕末外國〕一。

〔二〕國書交付ヲ迫ラル、ニツキ浦賀奉行戸田氏榮ヨリ閣老へノ伺。

嘉永六年六月四日。

昨日御屆申上候アメリカ船四艘島ケ崎沖へ滯船仕尤蒸氣仕掛ケ等ニテ別ニ深意御座候哉外二艘碇入不申漂罷在候追々組之者遣シ御國法爲申諭縱令國王之書翰ニテモ通信無之國ニ候へハ書翰請取難申且浦賀之儀ハ外國應接ノ地ニ無之候間長崎表へ相廻候樣種々理解仕候處西洋諸國ト相違共和政治ノ國法ハ嚴格ニモ有之御國法ノ儀ハ厚ク相分リ其段ハ尤承知仕候得共國元出帆之節ヨリ何樣於當地申諭候共長崎へハ相廻リ申間敷江戸表へ相越候樣被申付候事故此儘歸帆仕候テハ使命ヲ過候大罪ヲ受候事故此所承知致シ呉候樣落涙仕候迄之存切ニテ申聞候故國王之書翰受取之儀ハ國命ニ相背候事故國都へ伺無之候テハ挨

挨致兼候段申聞候處左候ハヽ相待候故右之通取計吳候樣申聞候間右書翰請取候テ可然哉此段奉伺候尤往返一兩日ニテ相決候樣申聞候故何程取急キ候共國都ノ評議モ有之候事故三四日餘ハ相懸リ可申旨申聞置候處其段承知仕候尤兵粮薪水等ハ用意有之差支不申段モ申聞候右書翰此上當地ニテ不請取候節ハ存寄次第ニ取計候旨ヲモ申聞候間此儘御差戾之御差圖ニ相成候ハヽ即刻異變罷成可申哉ト心配仕候間得ト御勘辨被爲在取計方早々被仰出候樣仕度候扨又此度軍船數艘事々敷渡來之儀ハ使命ヲ重ンジ御當國ヲ尊敬仕候諸邦之先格ニテ不審可仕儀ニハ無之旨申聞候都テ渡來船中是迄ニ無之嚴格ニテ外船々へ寄付不申船大將乘組ノ船へ組之者一人通詞一人之外呼入不申日本語ニモ通候者乘組有之哉不容易樣子柄故早々御下知無御座候テハ通船差支且觸手限之御差圖ニ相成候テハ都テ御固方御手薄ニ付浦賀表モ御警衛取調中故御外聞ニ相成候儀ハ相違無御座候先此段早々奉伺候

以上

六月四日　　戸田伊豆守

此他米艦渡來ニ關スル報告ノ類ハ甚ダ多ク、之ヲ全載スルヲ得ザレバ〔幕末外國〕ニ讓リ、茲ニ之ヲ略ス。

〔通航一覽續輯〕〔近事紀略〕卷二〔起原上〕八五－九頁。英文ハ Perry's Expedition 第一冊二五六－七頁ニ載ス。

（三）米國大統領通交貿易ヲ要求スルノ書（蘭文譯）。　嘉永五年十月二日附。

北亞墨利加合衆國ノ伯理璽天德(プレジデント)「ミルラルド　ヒルモオレ」人名書ヲ日本國帝殿下ニ呈ス

予今水師提督「マツテウ、セ、ペルリ」人名ヲ以テ書ヲ殿下ニ呈ス此者ハ即合衆國ノ海軍第

原文『陛下』ニ相當スベキ語アリテ『殿下』ニ相當スベキ語ヲ用ヰズ。
Mathew C. Perry.
此譯文ヲ英文本書ニ照セバ多少ノ誤謬アリ。

一等ノ將ニシテ今次殿下ノ領地ニ航到セル一隊軍艦ノ總督ナリ

予已ニ水師提督「ペルリ」ニ命ジテ予ガ殿下ニ對シ且貴國ノ政廷ニ對シ極メテ懇切ノ情ヲ含ムコトヲ告明セシメ又且今次「ペルリ」ヲ日本ニ遣スハ他ノ旨趣アルニ非ス唯我合衆國ト日本トハ宜ク互ニ親睦シ且交易スヘキ處ナルヲ告ゲ知ラシメント欲スルニアルノミ合衆國ノ基律及ビ諸律ハ固ヨリ其各個人民ニ禁戒ヲ下シ他邦ノ民ノ敎法政治ヲ妨クルコトヲ得サラシム予特ニ水師提督「ペルリ」ニ命シテ是等ノ事ヲ嚴禁セシム是貴國ノ安穩ヲ妨ケザランコトヲ欲シテ也

北亞墨利加合衆國ハ大西洋ヨリ大東洋ニ達スルノ國ニシテ就中其「オレゴン」州及ヒ角里(カリ)伏爾尼亞(フヲルニヤ)ノ地ハ正ニ貴國ト相對ス我蒸氣船角里伏爾尼亞ヲ發スレハ十八日ヲ經テ貴國ニ達スルコトヲ得ル也

我角里伏爾尼亞ノ大州ハ每歲凡金六千萬ドルラル銀若干水銀若干寶石若干種及其他諸種貴重ノ物件ヲ產ス日本モ亦豐富肥沃ノ國ニシテ幾多貴重ノ物品ヲ出ス貴國ノ民モ亦諸般ノ技藝ニ長セリ予ガ志二國ノ民ヲシテ交易ヲ行ハシメント欲ス是ヲ以テ日本ノ利益トナシ亦兼テ合衆國ノ利益トナサンコトヲ欲シテナリ

貴國從來ノ制度支那人及ヒ和蘭人ヲ除クノ外ハ外邦ト交易スルヿヲ禁スルハ固ヨリ予ガ知ル所ナリ然レトモ世界中時勢ノ變換ニ隨ヒ改革ノ新政行ハルヽノ時ニ當テハ其時ニ隨

ヒテ新律ヲ定ムルヲ智ト稱スヘシ蓋貴國舊制ノ法律初メテ世上ニ開ヘシノ時ハ今ヨリ之ヲ見レハ既ニ甚古リタリ此時代ニ當テ亞墨利加洲始メテ見出サレ或ハコレヲ新世界ト名ツケ歐羅巴人コレニ住棲セリ此頃ニ在テハ亞墨利加ハ人民稀少ニシテ其民皆貧陋ナリシカ當今ハ民口大ニ蕃息シ交易亦甚弘博トナレリ故ニ殿下若シ舊律ヲ改革シ兩國ノ交易ヲ允准スルニ於テハ兩國ノ利益極メテ大ナルコト疑ナシ然レトモ殿下若シ外邦ノ交易ヲ禁停セル古來ノ定律ヲ全ク廢棄スルヲ欲セサルトキハ五年或ハ十年ヲ限リテ允准シ以テ其利害ヲ察シ若シ果シテ貴國ニ利ナキニ於テハ再ヒ舊律ヲ回復シテ可ナリ凡ソ合衆國他邦ト盟約ヲ行フニハ常ニ數年ヲ限リテ約定ス而シテ其事便宜ナルヲ知ルトキハ再ヒ其盟約ヲ尋クコトヽス

予更ニ水師提督ニ命シテ一件ノ事ヲ殿下ニ告明セシム合衆國ノ舶毎歲角里伏爾尼亞ヨリ支那ニ航スルモノ甚多シ又鯨獵ノ爲メ合衆國人日本海岸ニ近ツクモノ少カラス而シテ若シ颶風アルトキハ貴國ノ近海ニシテ往々破船ニ逢フ事アリ若シ是等ノ難ニ遇フニ方テハ貴國ニ於テ其難民ヲ撫卹シ其財物ヲ保護シ以テ本國ヨリ一舶ヲ送リ難民ヲ救ヒ取ルヲ待タン事是予ガ切ニ請フ所ナリ

予又水師提督「ペルリ」ニ命シテ次件ヲ殿下ニ告ケシム日本ニ石炭甚多ク又食料多キヿハ予ガ曾テ聞知レル所也我國用フル所ノ蒸氣船ハ其大洋ヲ航スルニ方テ石炭ヲ費スヿ甚多

國務長官 Edward Everett.

シ而シテ其石炭ヲ亞墨利加ヨリ搬運セントスレバ其不便知ルヘシ是ヲ以テ予願ハ我國ノ蒸氣船及ヒ其他ノ諸船石炭食料及水ヲ得ンガ爲ニ日本ニ入ルコトヲ許サレンコトヲ請フ若其償ハ價銀ヲ以テスルモ或ハ貴國ノ民人好ム處ノ物件ヲ以テスルモ可ナリ請フ殿下貴國ノ南地ニ於テ一地ヲ選ヒ以テ我船ノ入港ヲ許サンコトヲ是予ガ深ク願フ所ナリ

右ノ故ヲ以テ予今水師提督「ペルリ」ニ命ジ一隊ノ軍艦ヲ以テ貴國有名ノ大府江戸ニ到ラシム和親交易石炭食料及ヒ合衆國難民ノ撫恤ハ即其件々ナリ

予更ニ水師提督「ペルリ」ニ命ジテ殿下ニ菲微ノ土物ヲ献ゼシム願クハコレヲ容レンコトヲ其物固ヨリ甚貴カラズト雖モ亦以テ合衆國中諸物製造局ノ概ヲ見ルニ足ルベシ且予ガ正實敬愛ノ微衷ヲ表スルニ足ランカ

伏シテ祈ル皇天殿下ノ爲ニ祥ヲ垂レンコトヲ爾書シ畢リテ爰ニ合衆國ノ大印章ヲ印シ且自ラ名姓ヲ署ス時ニ千八百五十二年第十一月十三日（我嘉永五年壬子十月二日）予政務ノ本所亞墨利加「ワシントン」府ニ於テス

ミルラルド　ヒルモオレ　親筆

伯理璽天德ノ命ヲ受ケテ

外國事務宰相エドワルド　エヘレット　親筆

（四）米國大統領ヨリ使節ニ與ヘタル委任狀（蘭文譯）。　嘉永五年十月二日附。

北亞墨利加合衆國ノ伯理璽天德（プレシデント）「ミルラルド　ヒルモオレ」書ヲ日本國帝殿下ニ呈ス

合衆國水師提督「マッテウ　セ　ペルリ」ハ其人ト爲リ誠實周密才能アルヲ鑒識シ拔擢シテ全權ノ任ニ膺ラシメ合衆國ノ使節トシテ貴國ノ同等權要ノ位ニ在ル官人一員若クハ數員ニ遇ヒ語言ヲ交ヘ且一次若クハ數次ノ會同ヲ爲シテ兩國ノ親睦交易航海及ビ其他兩國ノ人民ニ切要ナル諸件ノ和約ヲ結ヒテコレヲ書記シ更ニ名姓ヲ親書セシム是皆合衆國參政合議シテ更ニ伯理璽天德ノ允准ヲ經シ所ナリ爰ニ云ヘル所ノ事件ヲ證スルタメ合衆國ノ印信ヲ印シテコ、ニ附ス

千八百五十二年即北亞墨利加合衆國建國以來七十七年第十一月十三日　嘉永五年壬子十月二日　ワシントン府ニ於テ

ミルラルド　ヒルモオレ　親筆

伯理璽天德ノ命ヲ奉シテ

外國事務宰相エドワルド　エヘレット　親筆

〔通航續〕。英文ハ*Perry's Expedition*第一册二五九—六〇頁ニ載ス。此委任狀嘉永六年六月九日提示。

是皆云々ノ一句ハ當ニ「是レ合衆國議會ノ議定ヲ經テ大統領ノ批准ヲ受クベキモノトス」トノ意ニ譯スベキナリ。

（五）米使「ペリ」來意ヲ告グルノ書。　嘉永六年六月二日附。

日本國帝ニ上ツル書

〔通航續〕。*Perry's Expedition* 第一册二五八頁。

英文本書ハ英、蘭、支那各語ノ文ヲ共ニ遞呈ストノ文意ニテ、飜譯シ云々ノ語ナシ。

外臣ペルリハ東印度支那日本海ニ備ヘタル北亞墨利加合衆國ノ兵勢ヲ統帥セル者ナルガ今度本國ヨリ命ゼラレテ好意ヲ以テ此國ニ差撥シ便宜ニ應ジテ事ヲ行フベキ大權ヲ假シテ日本ノ政廷ト事ヲ謀ラシム其事體ハ我合衆國伯理璽天德ノ書牘中ニ詳ニ記載ス右書牘及ヒ外臣「ペルリ」ニ欽差全權ノ任ヲ寄托セル書ハ共ニ英吉利和蘭支那ノ文ニ飜譯シ併セテ之ヲ呈ス

伯理璽天德ヨリ上レル本書及ヒ欽差ノ本書ハ共ニ日本國帝殿下ノ高貴ナル爵位ニ應ジテ調度セリ外臣當サニ親自繳納スベシ願クハ殿下預メ交收ノ日期ヲトシテ告示センコトヲ

某更ニ殿下ニ上告スヘキ命ヲ受ク伯理璽天德ハ日本ニ對シ友愛ノ意思ヲ抱ケルニ合衆國ノ土人彼是ノ緣故ニテ貴國ノ地方ニ來リ或ハ船難ニ遇フテ此地方ニ漂到セルトキハ貴國是ニ待遇讎敵ノゴトクナルハ實ニ驚駭痛心スル所ナリ是蓋往年貴國ニテ亞墨利加船モリソン　ラゴダ　ラウレンセ（共ニ船號）ニ遇スルノ處置ニ就テ云フナリ

亞墨利加人ハ猶基利斯督宗諸國（西洋諸國ヲ云フナリ）ノ習俗ノ如ク其國ノ海岸ニ漂到セルモノハ何ノ地ノ人タルヲ論ゼス愛シ容レ且ツ拯救撫恤ヲ以テ仁慈ノ所爲トセリ是ヲ以テ貴國ノ人民合衆國ノ領地ニ漂到スル者皆コレヲ撫恤セリ凡貴國ノ海岸ニテ難船セル者又ハ逆風狂浪ニ遇フテ貴國ノ港内ニ入ル者ハ貴國ノ政廷仁慈ヲ以テコレヲ處措セントノ明證ヲ得ンコト是合衆國政府ノ切ニ貴國政府ニ望ム處ナリ

又某ニ命ジテ貴國ニ告ゲシム合衆國ハ歐羅巴諸國ノ中何レノ國トモ合縱スルコトナシ又其政律ニテハ國內各人隨意ノ教法ヲ奉ズルヲ許ス況ヤ他國人ノ宗旨教法ニ至リテハ固ヨリコレヲ是非スルコトナシ

亞墨利加人ハ日本ト歐羅巴トノ間ニ在ル大國ニ住ス此大國ハ歐羅巴人初テ日本ヲ見出セシ頃發明セル國ニシテ其初ハ此大國ノ內最歐羅巴ニ近キ地方ニ歐羅巴ヨリ家ヲ徙シテ來レル者ノミ居住セシニ人民速ニ繁庶シテ全國ニ及ヒ竟ニ南太平海ニ達シ今ハ國內ニ幾多ノ大都府アリテ其府ヨリ蒸氣船ニ乘シテ發程スルトキハ十八日若クハ二十日ニシテ日本ニ到ルベシ然レバ我國ノ交易速ニ貴國ニ繁盛シ我國ノ船舶日本海中ニ粟散スルニ至ルコト遠キニアラザルベシ

合衆國ト日本トハ追日次第ニ相近ヅキ相交ルニ至ルヲ免カレザルガ故ニ伯理璽天德殊ニ日本國帝殿下ト好ヲ結ヒ交ヲ修メンコトヲ欲ス然レトモ貴國ニテ亞米利加人ニ待遇スルコト寇讎ヲ視ルガ如クスルノ風習ヲ禁止スルニ非ザレバ其交信豈能久シカランヤ外國ト交ヲ絕チコレヲ仇視スル貴國ノ法制ハ其始メ法度ヲ立ツル時ニ在テハ智慮アル處置ト云フベシト雖モ目今ハ兩國ノ相交ルコト昔ニ比スレバ至テ易ク且ツ速ナルニ至リタレバ此舊制ヲ固守セント欲スルモ是無智ノ謀ニシテ目今決シテ行フベカラザル所ナリ

外臣某以上ノ說ヲ陳ジ專ラ願クハ日本ノ朝廷ニテ兩國ノ民爭鬪ヲ致スヲ防グノ策ヲ以テ

必要トシ正實友愛ノ誠情ニ答フルニ好意ヲ以テセンコトヲ

日本ヘ存問センガ爲ノ大軍艦數隻未ダ此海ニ到着セズ某等徒ラニコレヲ待ツノミ某今聊カ其友愛ノ情ヲ表センガ爲ニ四小船ヲ以テ貴國ニ到レリ明春當サニ事體ニ應ジテ尙數船ヲ增加シ再ビ航シ來ルベシ

然ト雖モ日本國帝殿下ノ政廷願クハ某ガ再ビ來ルヲ待ズ伯理璽天德ガ書中ニ載セタル公平好和ノ策ヲ採用アランコトヲ但シ其書中ノ本旨ハ近日便宜ヲ得ルヲ待テ某當サニ自詳悉スベシ

日本國帝殿下ニ對シ深ク崇敬シタテマツリ誠心ニ殿下ノ康寧福全萬壽無疆ヲ祈ル

東印度支那日本海ニ在ル合衆國海軍ノ統帥

マツテウ　セ　ペルリ　親筆

千八百五十三年七月七日（我六月二日）日本ノ近海ニテ合衆國ノ蒸氣「フレガツト」船「シユスケハンナ」中ニ於テス

Susquehanna.〔通航續〕*Perry's Expedition* 第一册二五九頁ニ此文ヲ載セ、七月十四日附（六月九日）トス。

〔六〕米使「ペリ」明年春來リテ報答ヲ求メントスルヲ告グルノ書

（蘭文譯）。　嘉永六年六月八日。

予日本ノ政堂ヘ差出セル一書ハ甚タ重ク且大切ナル問題ヲ載セタルモノニテコレヲ評決

センタメ多少ノ時日ヲ要スベキ者ナルヨシヲ領承セリ
予此事ヲ熟考シ明年早春予復江戸海口ニ來リテ右呈書ノ報答ヲ請ハントス其時ハ諸事親シキ所法ニテ且雙方ノ人民互ニ安全ヲ保ツベキ款待ヲ受ケンコトヲ希フ所ナリ
東印度支那海及ヒ日本海ニ現存セル合衆國ノ全部海軍ノ總督「マツテウ　セ　ペルリ」合衆國蒸氣「フレガツト」船「シユスケハンナ」號船上ニ在リテ千八百五十三年七月十三日（我嘉永六年六月八日）江戸海口浦賀港ニ於テ謹白

〔幕末外國〕二六九—七〇頁。日附ヲ記セズ、前項ノ書ト同時ニ送付シタルモノナランカ。按ズルニ此書ハ *Perry's Expedition* 等ニモ見エズ、其他本邦普通ノ圖書ニ記スル所ナシ、當時嚴秘ノ書類タリシコト以テ知ルベシ。

（七）白旗交付ニ付米使「ペリ」ノ書。　嘉永六年六月。

先年以來各國ヨリ通商之願有之候所國法ヲ以違背ニ及ブ元ヨリ天理ニソムクノ至罪莫大ナリ然ハ蘭船ヨリ申達候通リ諸方ノ通商是非ニ希ニ非ズ不承知ニ候ハヾ干戈ヲ以天理ニ背クノ罪ヲ糺シ候ニ付其方モ國法ヲ立テ防戰イタスベシ左候ハヾ防戰ノ時ニ臨ミ必勝ハ我等ニ有之其方敵對成兼可申若其節ニ至リ和睦ヲ乞度ハ此度贈リ置候所ノ白旗ヲ押立ベシ然ハ此方ノ炮ヲ止メ艦ヲ退ケテ和睦イタスベシ

町奉行書類ニハ初ニ「亞美利加極内密書寫」ト題ス、高麗環雜記ニハ「北亞墨利加ヨリ差越候書翰九通之内此一通ハ諸大名御旗本ニ至ル迄披見御免無之書面和解」ト題シ、末ニ「右ハ御小姓久留氏日記ニ有之候ヲ極密寫取候事」ト附記ス。「嘉永癸丑浦賀一件」ニモ白旗二流ト共ニ同様ノ書翰ヲ贈リ來リシコトヲ載ス。

〔通航續〕。〔起原〕下二一二七頁。兩書文字小異アリ、今前者ニ從フ。

〔新伊勢〕卷五。別紙ハ〔一〕ニ載スル浦賀奉行屆書ヲ謂フ。

〔八〕米國書翰領收ニツキ浦賀奉行ヨリ「ペリ」ヘノ書。

嘉永六年六月九日。

御諭書

國王之書翰及ビ政府之副書共受取リヌ國都ニ捧ベキモノナリ此所ハ外國ト應接ノ地ニ非ズ長崎ニ赴ベキ由幾度諭トイヘドモ使命ヲ辱シメ一分難立旨存キリ申立ルノ趣使節ニ於テハ止ヲ得ザル事ナレドモ我國法モ又破リ難ク此度ハ使節ノ苦勞ヲ察シ曲テ書翰ヲ受取ルトイヘドモ應接ノ地ニアラザレバ應答ノ事ニ及バズ此趣會得イタシ使命ヲ全クシ速ニ歸帆有ルベキモノナリ

嘉永六丑年六月九日

〔九〕德川齊昭ト阿部正弘トノ往復書翰。

〔ア〕正弘ヨリ齊昭ノ意見ヲ問フノ書。

嘉永六年六月五日。

（上畧）陳ハ一昨三日未上刻浦賀表ヘ異國船渡來別紙之通屆書且通辯之儀申出候右ハ不容易儀乍不及同列共初夫々懸リノ面々其外共厚評議モ有之候得共兼々御尊所樣ニハ異船ノ儀ニ付御憂苦不少品々御建白モ有之儀此一擧必御良考モ可有之ト奉存候間爲國家小生ヨリ御相談申上候何事モ上ノ御英斷ニ有之儀ニハ御座候ヘ共集議之趣ハ不洩樣達御聽其上ノ

御果斷奉願上候儀ニ御座候尤差急候儀ニ付明日登城頃迄ニハ思召之處被仰下候樣仕度奉存候依之別紙相添此段申上候以上

六月五日　阿部伊勢守

尚々別紙ハ明朝一緒ニ御返却ニ仕度奉存候扨此度ノ異船萬々一内海へ乘入候儀モ有之候節内海御固モ肝要ノ儀ニ付左ノ者共へ先極密内意申示置候事ニ御座候得共卒爾ニ出張ハ不爲仕事ニ御座候

松平越前守　松平阿波守　松平讃岐守　細川越中守

松平大膳大夫　酒井雅樂頭　立花左近將監

右等ニ御座候今御含迄ニ申上候以上

以下八通（新伊勢）卷五。

（イ）右ニツキ齊昭ヨリ正弘ヘノ答書。

其一。　嘉永六年六月五日。

（上畧）扨ハ兼テ沙汰モ有之候異船去ル三日渡來右ニ付御別紙御添兼々異船ノ儀ニ付テハ拙老憂苦不少追々建白モ致候ニ付テハ良考有之候ハヾ早々御屆可申上由被仰越何モ承知致候得共拙老憂苦致シ建白致候事共御取用ニ不相成候ヘバ今更如何トモ可致樣無之只々當惑致候計恐入申候乍然夫ハ夫今更申候テモ詮ナキ事故今ハ今ニテ何トカ被成候外有之

間敷拙老ニテ　今ト相成候テハ打拂ヒテヨキト計ハ申兼候打拂候ハヾ幸ト戰爭ニ及ビ可申タトヘ御勝利ニ相成候テ浦賀ヲバ引拂トモ伊豆ノ島々八丈島等勝手ニ取可申其上ハ日本廻リノ島々勝手ニ奪候ハ鏡ニカケ候樣ニ被存候サレバトテ彼カ書翰ヲ御受取ニ相成候ハヾ十ガ十難題計ニテ御濟セニテ宜敷事ハ一ツモ有之間敷此書翰ハ喧嘩ノ種ヲ認候カ又ハ日本ヲ手ニ入候ハシゴノ儀譬ヘハ通信交易土地ヲ借ル〻類認候事ト存候通信交易又不毛ノ土地タリ共苟安姑息ノ思召ニテ御濟セニ相成候ハヾ打拂ヨリモ益後憂ト相成リ又長ク異船騷有之候得バ自然內地ヨリモ事起リ候浦賀ニ三四ケ月モ居候ハヾ夫計ニテモ兼テ申候如ク江戸中騷ギ立可申何レニモ御大切ノ事ニ至リ恐入申候兎角衆評ノ上御決斷之外有之間敷御別紙返上此段急ギ申進候也

六月五日夜即刻　　齊昭

勢州殿御報

其二。　嘉永六年六月六日。

昨夜深更貴答認候定テ今朝ハ御一覽ト存候處利害得失中々書面ニテ盡シ候儀ニ無之實ニ無此上御大切ニ候ヘバ登城イタシ貴兄ヨリ衆評モ承リ度又乍不及愚存モ有之儀ハ御咄シ申度候最初ニ御不策有之候ヘバ御仕直ハ六ケ敷樣ニモ存候御大切ノ事故御沙汰次第今日

ニモ明日ニモ登城イタシ愚存御咄シ可申哉此段御聞申候也

六月六日　　齊昭

勢州殿

二白昨夜ノ御書中ニ越前初夫々云々御達之儀承リ申候右ハ御手厚程宜シキ事ニ候乍勿論四家之儀ハ在邑ニテモ罷出候樣御達ニ相成候事ト存候不一

（ウ）正弘ヨリ齊昭ヘノ書。

其一。　水戸藩邸訪談ニツキ。　嘉永六年六月七日。

急伺申上

昨日ハ御城ヘ御文通拜見仕候（中略）陳ハ今日退出致候後即刻供揃申付其御館ヘ私儀罷出萬々申上度趣且御相談申上度趣共有之候ニ付後刻參殿仕候間左樣御思召可被成候必御構等不被爲在樣奉願候只今取急申上候以上

六月七日　　阿部伊勢守

尙々委細罷出申上候間尊館ヘ參上ノ儀ノミ急ギ御案內申上度如此御座候右故御城ヨリ申上候事御座候以上

四家－彥根、會津、川越、忍。

其二。防備ニツキ。 嘉永六年六月九日。

(上略)扨ハ先夜縷々御相談申上候通リ穏カニ參リ候ヘバ無此上候處萬々一昨日達ノ通ノ趣ニ至候節ハ迚モ筒不足ニ付縷々被仰下候趣逐一拜承仕候思召之通今般穩ニ相濟見込通リ出帆候共跡々ノ御備ニモ宜候間兎ニ角是迄御丹精有之候大銃百挺内外内川廻シニ被成小梅御屋敷ヘ御入レ置又御人數不足ノ分ハ御國許ニテ御人ヲ御選ミ置萬々一事六ケ敷節ハ直ニ御呼寄セ罷成候方至極御手厚ノ儀ニテ可然存候間早々左樣御取計置御座候樣仕度存候此儀ハ同列共ヘモ申談不申候得共昨日達面之趣モ御座候事故非常御備之儀可然儀御尤ト乍憚存上候間不取敢御請申上候台慮ニテ防禦筋ニ委任云々是又至極御尤之儀存上候此儀ハ能々同列共ヘモ談合委細可申上候間左樣御承知可被成下候以上

六月九日　阿部伊勢守

猶以申上候過日ハ急ニ罷出暑氣時分悉々拜顏仕不相替御懇情ニ御敎示不淺難有其節ハ御着領ノ御具足頂戴被仰付御懇ノ御事其外彼是ト御世話被成下厚難有奉存候委細ノ條々具ニ達御聽殊ノ外被遊御滿足私頂戴之品モ相伺候處頂戴仕候樣御沙汰モ御座候ニ付難有頂戴仕候事ニ御座候右御禮等早速以自書可申上ト存居候得共誠ニ御用多何分其間合無之存外延引恐入候今日退出モ少々早ク御座候ニ付御書モ退出後御城付侍參致候ニ付鳥渡御請旁申上候以上

〔エ〕齊昭ヨリ正弘ヘノ書。　嘉永六年六月九日。

御繁多中御報翰忝存候餘リ大礮ハ臺揚物ニテ運送不便ニ候ヘバ先ヅ左ノ位モ當分指登セ可申候

五寸徑玉筒　十一二計　四寸徑玉筒　二計

一貫目玉筒　八十餘　百目玉筒　百計

先ツ此節國許ハ異船ノ沙汰モ無之タトヒ參リ候テモ可成間ニ合候位ハ有之候ヘハ彌江戸靜謐ニ相成迄ハ御當地ヘ差置可申候尤右ハ否覺ニテ認候儀故百目ノ百挺位ハ右ノ外出シ候テモ當分國許無差支候ヘハ出シ候カモ不相分候故是亦申進置候

六月九日夜認　齊　昭

勢　州　殿參

〔オ〕防備ニツキ正弘ヨリ齊昭ヘノ書。　嘉永六年六月十三日。

內密申上　（中略）扨異船四艘昨朝浦賀出帆相濟申候右ニ付此後渡來迄ノ御備急務ノ處積年御苦心ノ明謀奇策無御腹臟被仰下度尤急務ノ次第御箇條書ニ被成呑込能樣ニ御認被成下度奉願候先ヅハ出帆ノ儀申上乍序高慮之程伺度如此御座候猶追々御相談モ可申上候

以上

阿部伊勢守

六月十三日

尙々井戸石見等今日浦賀出立明日ハ書翰持歸府ノ積ニ御座候歸府ノ上ハ追テ書翰寫モ早速差上候樣可仕候今日モ營中種々議論懸リ孰レモ格別ノ氣張ニテ大悦仕候以上

〔カ〕右ニツキ齊昭ヨリ正弘ヘノ答書。　嘉永六年六月十三日。

(上略)扨ハ夷艦四艘共無滯出帆御同樣爲天下奉恐悅存候乍然此上又々可參ハ勿論ニ候ヘバ積年苦心モ致シ候儀故拙策モ有之候ハヾ内密申上候樣ニトノ儀畏候得共迚モ御取用ニ相成候儀ハ有之間敷候ヘ共愚者ノ一得ト申モ有之候ヘバ何レ存付候箇條ハ認候テ其内指上候樣可仕依不取敢御答申進候也

六月十三日夜認　齊昭

勢州殿

眼氣不宜燈下ノ亂筆御推覽希候

尙々井戸歸府之上ハ書翰モ拜見可被仰付ヨシ何レ右ヲ拜見之上ニテ愚考可仕ト存候先日申進候樣ナル難題カト被察申候不一

追テ申候夷艦出帆之節御返答何ニハ來年可參ト申候哉又今年中可參ト申候哉彼ガ申事當ニハ不相成候ヘ共願書拜見之節此儀モ一寸伺申度候

第十二章併看。

〔阿部家文書〕

〔キ〕川路等水戸藩邸ヘ訪談ニツキ正弘ヨリ齊昭ヘノ書。　嘉永六年六月十四日。

內密申上　今日退出ヨリ川路左衛門尉筒井肥前守兩人尊館ヘ罷出候樣申合置候間左樣御承知可被成下候右之段急々申上度如是御座候草々以上

六月十四日　阿部伊勢守

何々差懸リ差出シ御不都合之儀モ可被爲在哉ト存候ヘ共何分品々心配ノ事共有之候間小生罷出候代リニ兩人差出申候兩人存意モ得ト御尋高慮ノ程モ無御腹臟被仰示可被成下候以上

〔註〕齊昭ト川路筒井二人トノ對話ハ下ノ〔一〇〕ニ記ス。

〔ク〕正弘訪談ニツキ齊昭ヘノ書。　嘉永六年六月二十九日。

〔上略〕陳バ極密罷出申上度儀有之被仰付候事共モ有之候ヘドモ此節小石川御館ニ被爲入候哉ノ由相伺候ニ付何分小石川ヘ罷出候テハ彼是差支候ニ付駒込ノ御館ヘ罷出度存候ヘ共御都合如何可被爲在哉可相成ハ一日御差支無之日駒込ヘ御歸館ニテ其日罷出御人拂ニテ御內談申上度儀有之候御都合ノ處相伺候彌罷出候儀ニ候ヘバ此節柄ニハ候ヘドモ兩三日ノ內彌何日ト被仰越候樣致度左候ヘバ御用向繰合罷出候事ニ御座候此段爲渡奉伺度如此御座候草々謹言

六月二十九日

〔註〕此書ニ對シ同日齊昭ヨリ來談ヲ請フ旨ヲ答ヘタリ第二十八章ニ詳ナリ。

〔一〇〕松平慶永ト阿部正弘トノ往復書翰。

〔ア〕德川齊昭トノ協議ヲ勸ムル慶永ノ書。　嘉永六年六月七日。

（上略）今度異船渡來誠ニ不容易儀ニテ乍恐實ニ天下ノ御安危ニモ關リ候御儀晝夜不安寢食罷在候（中略）兼々御承知ノ如ク駒込ニハ非常ノ御方故密ニ御呼寄御承リニテモ御出被成候テモ御相談御尤ニ奉存候（下略）

〔イ〕右ニツキ正弘ノ答書。　嘉永六年六月九日。

（上略）陳バ今般異船渡來誠ニ不容易ニ儀御同然實ニ晝夜不安寢食候右ニ付縷々御心付ノ儀極密被仰下御尤ニ存候既ニ此程中ヨリ右等之儀モ愚考致シ七日退出後七時過ヨリ駒込ヘ罷越緩々得拜顏得ト御同人御存慮ヲモ伺小生愚考ヲモ種々御相談申上夜八時過辰ノ口ヘ歸宅仕候ト留守中ヘ御細翰參リ居リ曉七ツ半時過披見仕候處小生考ト符合仕實ニ大慶存候今般ノ儀ハ天下御爲萬緒無伏藏御相談申居候事故乍憚御安心可被下候（下略）

〔ウ〕慶永米艦ノ進退ヲ問フノ書。　嘉永六年六月十二日。

〔昨夢〕上八―九頁。

時ニ齊昭本郷駒込邸ニ在リ。

〔昨夢〕上二三―四頁。

〔昨夢〕上二六―七頁。

（上略）然バ渡來異國船一條去ル九日書翰御受取御返答之儀ハ來春カ長崎表ヘ罷越可相伺御諭告承諾早速可及退帆之處一兩日碇泊相願御聞濟之由然ル處却テ本牧邊迄モ乘入且神奈川沖ニテハ小舟測量等モ致候趣略致傳聞候御約定ノ儀異變ノ姿ニテ此後モ如何動靜可致哉殊ニ蒸氣大船等ハ迅速自在ニ出沒之由昨今ノ模樣等如何御座候哉何分難量次第實ニ御大事ト不安御案事申上候御憂勞ノ程致推察候如前書退帆之上來春等長崎表ヘ渡來迄ハ先靜寧ニテ出沒不仕御掛合ニ御座候哉外ニ御異議モ有之哉御內密致承知度候不依何時出馬モ可致儀且ハ手前人數モ不取敢差出置候得共尙又此頃中國許ヘ申越候譯モ有之旁御內定竊ニ相伺候此節不一方御配慮御多務中甚申兼候得共御畧答爲御知被下候樣希申候要用ノミ早々不宣

六月十二日

〔昨夢〕上二七—八頁。

〔エ〕右ニツキ正弘ノ答書。　嘉永六年六月十二日。

（上略）書翰受取相成候上返答長崎表ニテ來年可相達候趣浦賀奉行ヨリ申諭候手筈ニ兼テ申達有之處未浦賀奉行井戸石見守歸府無之ニ付承諾應接等ノ掛引委敷相分リ兼申候此方ニテハタトヘ此度長崎ヘ參候事ニ表向致承知候共必長崎ヘハ來年參リ申間敷矢張浦賀ヘ罷越可申哉ト今日ヨリ覺悟可然存候事

書翰受取後是迄ノ掛場ヨリ却テ內ヘ入夏島沖ヘ四艘共滯船右ノ內蒸氣二艘ハ右之邊致測量候由條リ輕蔑ノ所行切齒ノ事故直ニ打拂ト迄覺悟モ決候處彼方ニテモ異心無之趣精々申立候ニ付書翰受取迄ノ手續共寬猛相違ノ事ニ相成候ニ付段々爲及應接彌承伏之上昨十一日浦賀沖ヘ四艘共退帆イタシ多分今朝ハ浦賀沖ヲ無故障歸帆致可申旨昨夜浦賀奉行ヨリ申參候事（中略）

此度出帆ノ上ハ何時又々可參哉ハ異船ノ情態難分候ヘ共多分來年可能越哉ト存候事　但シ當年萬一參リ候ハヾ亞米利加ヲ聞付英吉利參リ候半ネバ宜ト存候尤此儀ハ更ニ風聞モ無之候ヘ共其邊迄モ致掛念居只今ヨリ彼是覺悟罷在候事ニ候（中略）

是等之儀御近親別段ノ事故極密申上候間貴所樣御心得ニ被成候樣致シ度存候（下略）

〔新伊勢〕卷五。前ノ（九）キ號參看。

〔一一〕川路聖謨筒井政憲二人ニ答フル德川齊昭ノ意見（齊昭自記）。

嘉永六年六月十四日。

六月十四日八郎麿甲冑ニテ杉馬場ニテ乘馬スルヲ見物シ居ル所ヘ七ツ半頃ニ相成リ御勘定奉行川路左衞門尉御留守居筒井肥前守兩人參上致候由馬場マデ申來ル

右ニ付上下（カミシモ）ニ相成リ大奧マデ兩人ヲ呼ビ咄承リ候處御役人共ノ論モ區々ニテ不一定候得共詰ル所ハ公邊初諸大名備向手薄ク且二百餘年ノ太平ニテ武衰ヘ「アメリカ」ハ萬國ニ勝レ

タル强國ニテ蘭人抔モ恐居候程ノ儀ナマジイ打拂候テ負候ヘバ御國體ヲ汚シ不容易候ヘバ蘭人ヘ被遣候品ヲ半分ワケテ交易御濟セ可然哉云々申ニ付夫ハ何レノ地ニテ御濟セ被成候哉ト問候ヘバマダ何レノ地トモ其所ハ御評議無之云々申故交易御濟セニ相成候ヘバ其尾ニ付テ又持込候ハ無疑且蘭人ヘ被遣候品モ昔ヨリ見候ヘハ半銅抔ハ御減ニ相成候哉ニモ承リ候ヘハ又其半ヲ「アメリカ」ヘ被遣候ハヾ蘭人方ニテモ差支「アメリカ」モ初ニハ夫ニテ承知致候モ知不申候得共遠國ヨリ態〻來リ交易致候ニ引合不申候ヘバ又何ノカノト申タトヘ長崎ニテ交易濟候テモ出入ヲ拵御當地マデ來ル樣相成リ終ニハ戰爭ニ及候事情ヲ存候上戰爭ニ相成候ヘハ今ヨリモ六ケ敷何ニ致シ候テモ祖宗ノ御嚴禁故交易御濟セハ不宜候趣相答ル所川路筒井曰ク御備ヘサヘ御手厚ク候ヘバ心丈夫ニ候ヘ共如何ニモ御手薄故俗ニ申ブラカスト云如ク五年モ十年モ願書ヲ濟セルトモナク斷ルトモナク致シ其中此方手當此度コソ嚴重ニ致シ其上ニテ御斷ニ相成可然追々理不盡ニ内海ヘ乘入測量等致シ候儀不敬ニ付云々尙又此上共右樣ノ事致シ候ハヾ夫モ申草ニ致可然哉云々トノ事答ニ依左樣存候通リ五年モ十年モブラカス事無相違出來候ハヾ御內地ノ騷モナク人ヘモ疵付不申其內御手當モ嚴重ニ相成候ハヾ其儀ハ可然乍去拙者ハ左樣ブラカサレ候所何共安心不致由申聞候ヘバ先モ願有之右願書御取受相成御談判中ノ事故格別ノ事ハ致申間敷見込ノ由申聞候其他色々談合モ致候ヘ共詰ル所我等答ハ當節御手薄ニ付御備御手厚ニ相成迄ブラカシ候儀シカト御見留有之出來候儀ニ候ハヾ其儀存意無之異船來リ候ヘ

ハ大騷致シ歸リ候ヘバ御備向忘レ候事サヘ無之候ハヾブラカスモ時ニ取テノ御計策ニ候ヘバ無已候ヘ共少々タリ共交易御濟セノ儀ハ祖宗ノ御嚴禁故拙者ヘ御相談ニテハ宜敷トハ不申上由申ス

一相談相濟後兩人ヘ菓子薄茶一寸吸物遣シ又我等拙作ノ拵付（常々帶候品）大小遣ス（川路ヘ大 筒井ヘ小）刀ノ鍔ヘハ自詠金象眼（立田川錦ニマカフ紅葉ハモチラズハイカテ人ノ見ルベキ）脇差ノ鍔ハ西行ノ道ノヘニ淸水流ル丶柳カゲノ歌是又自筆ナリツバハ角ツバ

〔十五代史〕卷十九、九六頁。〔三十年史〕七九—八頁。〔昨夢〕上三三頁。第十三章併看。

〔陸軍〕卷十六、一

〔一二二〕米國ニ對スル策ニツキ幕府ヨリ有司及ヒ諸侯ヘノ諮問。

嘉永六年六月廿六廿七日、七月朔日。

今度浦賀表ヘ渡來ノ「アメリカ」船ヨリ差出候書翰ノ和解寫二冊相達候通商之儀ハ是迄ノ御仕來モ有之御許容ノ可否ハ不容易事ニテ實ニ國家ノ御一大事ニ候間右書翰ノ趣意得ト遂熟覽一體ノ利害得失後來ノ所迄モ厚ク思慮ヲ被盡假令忌諱ニ觸候事ニテモ不苦候間銘銘心底ヲ不殘見込之趣十分ニ可被申聞候事

此度「アメリカ」船持來ノ書翰於浦賀表請取候儀ハ全ク一時ノ權道ニ有之候間右ニ不拘存寄ノ趣ハ可被申聞候事

〔一二三〕海防愚存

十條五事。嘉永六年七月十日德川齊昭ヨリ阿部正弘ニ贈示ス。

一一三頁。〔安政〕九一一二五頁、嘉永明治〕卷二、一三一七葉。〔三十年史〕八六一九八頁。第十三章併看。

一和戰之二字御決着廟算一定始終御動キ無之儀之急務ト存候事

本文和戰之利害戰ヲ主ト致候ヘバ天下之士氣引立假令一旦敗ヲ取テモ遂ニハ夷賊ヲ逐退ケ和ヲ主ト致候ヘハ當座ハ平穩ニ服シ候テモ天下ノ人氣大ニ緩ミ後ニハ滅亡ニ至リ候儀漢土歷史ノ上ニ明證有之古今識者ノ確論有之候ヘバ委細ハ不及申候得共今試ニ其大畧ヲ論候ニ和スベカラザル筋合十箇條有之候

扨神國ノ幅員廣大ナラズ候得共外夷ニハ畢竟往古神功皇后三韓御征伐中古弘安之蒙古御退治近古文祿之朝鮮征伐慶長寛永之切支丹御禁絕等其御明斷御威武海外ニ振居候故ニ有之候然ルニ此度渡來之アメリカ夷御制禁ヲ心得ナガラ浦賀ヘ乘入リ和睦合圖ノ白旗差出シ推テ願書ヲ奉剩ヘ內海ヘ乘入空砲打鳴ラシ我儘ニ測量マデ致シ其驕傲無禮之始末言語同斷ニテ實ニ開闢以來ノ國恥トモ可申候城下之盟ハ國ノ耻ト承候處右之通御制禁ヲ犯シ大城程近ノ內海ヘ乘入我ヲ刼シ我ヲ要シ候夷賊御退治無之ノミナラズ萬一願之趣御聞濟ニ相成候樣ニテハ乍憚御國體ニ於テ相濟申間敷是決シテ不可和之一箇條ニ候

切支丹宗ノ儀ハ御當家御法度ノ第一ニ相成居國々末々迄高札建置候處夫ニテサヘ御仕置ニ相成邪敎之毒夢々御油斷不相成候況アメリカヲ新ニ御近付ニ相成候ハヾ何程御制禁有之テモ自然右宗門再起之勢必然之儀乍憚祖宗之神靈ニ被爲對御申譯無之是決テ不可和之二箇條ニ候

我金銀銅鐵等有用ノ品ヲ以テ彼ガ羅紗硝子等無用之物ニ換候義大害有之小益無之候和蘭之交易サヘ御停止ニテモ可然時勢ニ候却テ和蘭ノ外ニ又々無用之交易御開濟ニ相成候ハヾ神國之大患此上有間敷是決テ不可和之三箇條ニ候

ヲロシヤ、アングリヤ等先年ヨリ交易ヲ望候得共御許容無之候處アメリカ夷ヘ御許容被遊萬一ヲロシヤ等ヨリ願出候ハヾ何ヲ以テ御斷可被遊候哉是決テ不可和之四箇條ニ候

夷國人ハ外ニ惡心無之交易サヘ御許容有之候得ハ何等之次第無之旨世話ニ唱候得共初ハ交易ヲ以緣ヲ求メ遂ニ邪敎ヲ弘メ又ハ種々ノ難題申掛候儀彼等ノ國風ニ有之遠クハ寛永以前邪宗門ノ患近クハ淸朝鴉片烟之亂前車之覆轍ニ候是決テ不可和之五箇條ニ候

萬國之形勢往古ト相違シ候處我神國ノミ鎖國之趣意ヲ守リ大海ニ孤立致シ候儀始終無覺束候間矢張外國ヘ往來致シ廣ク交易ノ道ヲ通シ候方可然トノ說蘭學者流抔竊ニ相唱候哉ニ候得共神國ノ民心固結武備充足中古已前ノ國勢ニモ回復致候ハヾ外國迄モ押渡リ恩威ヲ弘メ候事モ相成可申候得共當時太平遊惰ノ風俗外國ヨリ僅ニ數艘ノ戰艦渡來候テサヘ人心恐怖致候テ彼ニ要セラレテ交易相始メ候樣ニテハ外國ヘ渡リ遠略ヲ施シ候事ナド眞ニ席上ノ空論ニ候是決テ不可和之六箇條ニ候

彥根若松等ヘ守衛被仰付既ニ此度ナドハ會津家來共炎天ヲ犯シ七八十里之遠路日夜兼

行馳付候由其外内海警衛被命候大名速ニ人數繰合シ候向モ相聞奇特之事ニ候處夷賊内海ヘ乘入我儘ニ測量等致候テモ打拂之儀不相成諸國之士民空敷奔命ニノミ疲レ候樣ニテハ人々懈怠可有之是決テ不可和之七箇條ニ候

長崎海防黑田鍋島ヘ被仰付候儀淸國和蘭ヘ御手當ノミニハ無之都テ外夷ノ御手當ニ可有之處浦賀近邊ニテ外夷ノ願書御請取ニ相成候樣ニテハ間道ノ往來ヲ御許右兩家無用之御固所番ニ被仰付置候姿ニ相當リ兩家ノ氣受如何ニ可有之哉是決シテ不和之八箇條ニ候

此度夷賊之振舞眼前一見イタシ候者匹夫ニテモ心外ニ存ジカク迄無禮之夷賊御打拂モ不被遊候テハ御臺場御備ハ何ノ御入用ニ可有之哉ト內々相歎キ候者モ有之由實地ニテ夷賊驕傲之振舞ヲ見テハイカサマ右樣被存候筈小民ナガラモ流石御國恩ニ沐浴致居候故ト實ハ賴母敷事ニ候無智之匹夫サヘ右樣相歎キ候ニ打拂之儀御決定ニ不相成餘リ寬宥仁柔ノ御處置ノミニテハ下々ニハ御懷合ハ不分候故奸民共御威光ヲ不恐異心ヲ生ジ候モ難計是決テ不可和之九箇條ニ候

夷賊打拂之儀ハ祖宗之御明論殊ニ文政之度重テ被仰出候儀ニ候得バ御懷合ハ素ヨリ戰ノ方ニ御決定相成候テモ何ヲ申セ太平打續キ武備御備立兼候故容易ニ夷賊ノ氣ヲ激シ候ハヾ其禍難測其節ニ至リ不得止和議御取結相成候樣ニテハ益御威光ヲ損候故先々當

節ハ枉テ御忍夷賊ノ氣ヲ御ナヤシ被差置其內專ラ武備御世話被爲在追テ御手當御全備ノ上愈御舊法之通嚴重可被仰出ト申モ尤之論ニハ候ヘ共當時宴安姑息之人情朝暮御勵シ被成候テサヘ必死之人氣ニ相成兼候況ヤ上ヨリ武事ヲ御示シ不被爲候ハヾ幾年ヲ歷候テモ諸家之武備相整候儀何共無覺束既ニ寬政蝦夷地騷動御武備御世話御座候得共御行屆ニ不相成又去寅年打拂御猶豫被仰出畢竟先外夷ノ氣ヲ御寬メ其內武備御調之御趣意ト相見候得共十二箇年ノ間諸家ノ武備格別ニ行屆候トモ不被存此度夷賊渡來ニァ一統狼狽イタシ夷船滯留中少々本氣ニ相成候者モ有之候得共出帆ニ付平日之通心得候樣被仰出候得ハ一統又々無事ニ安シ俄ニ相集候武器モ直樣散失可致風情譬ヘバ樣ノ下ニ火ノ廻リ居候ニモ不心付火防ノ手當ヲ忘レ居候モ同樣ノ姿ニテ實ニ淺間敷十風ニ候サレバ廟堂ニテモ聊モ和議ノ御含有之候ヘバ日々御觸ニ相成候テモ人氣引立不申從テ臺場其外之手當モ皆文具ニテ軍用ニ適シ申間敷今日ニモ愈御打拂之方ニ御決着被成候得ハ天下ノ士氣十倍致シ武備ハ令セズシテ相整候儀影響ヨリモ早ク可有之左候テコソ征夷ノ御大任ニモ被爲叶諸國一統武家ノ名目ニモ相當可致候是決テ不可和之十箇條ニテ尤以肝要ノ急務ニ候

扨和戰之利害右ニテ粗相盡シ候得共之ヲ知ルハ易ク之ヲ行フハ難ク衰弱ノ世ハ兎角和議ニ泥ミ防戰ヲ好ミ不申戰ヲ主トシ候者ハ事ヲ好ミ亂ヲ樂ミ候樣譏言致シ甚シキニ至

テハ戰ヲ主トシ候者ヲ罰シ候テ敵方ヘ申分ケ致シ和議ヲ取結ビ遂ニ滅亡ヲ招キ候類笑止千萬ニ候神國勇武之俗一旦廟儀御一決之上ハ右樣臆病　小人ハ有之間敷候得共忠言逆耳良藥苦口姑息苟且ハ人情ノ溺レ易キモノ故兼テ御用心有之一旦御決定ノ上ハ始終御動無之儀海防之策第一義ト存候

一廟議戰ノ一字ニ御決定相成候上ハ國持始メ津々浦々ニマデモ大號令被仰出武家ハ勿論百姓町人迄覺悟相極メ神國惣體之心力一致爲致候儀可爲肝要事

本文號令之儀ハ其筋ニテ取調候ハヾ如才有之間敷候ヘ共多端ニ相成候テハ御趣意貫キ不申候間簡易明白愚夫愚婦迄モ憤激ニ不堪人々必死之覺悟ニ相成候樣御仕向有之度候奢侈遊惰ヲ禁ジ質素儉約ヲ勸候事當節ノ急務勿論ニ候得共萬一交易御許シ人氣相緩候テハ日々儉約等ノ御觸有之候迚モ自然奢侈ニ赴キ可申打拂之儀御議定相成候ヘバ一統ノ人氣締リ右質素儉約ハ勿論萬事古之武士風ニ立歸リ乍憚享保以來之御美事ニテ御中興此上有間敷奉存候事

八日ニモ御咄申候如ク太平打續候ヘバ當世之體ニテ戰ハ難ク和ハ易ク候ヘ共戰ニ御決定ニ相成天下一統戰ヲ覺悟致候上ニテ和ニ相成候ヘバ夫程之事ハナク和ヲ主ニ致シ萬々一戰ニ相成候節ハ當時之有樣ニテハ如何共被遊樣無之候ヘハ去八日御話申候ハ海防掛計リノ極密ニ被成公邊ニ於テモ此度ハ實ニ御打拂之思召ニテ號令有之度臍ノ下ニ和

ノ事有之候テハ又自然ト他ヘモ洩レ聞ヘ候故拙策御用ニ相成候ハヾ和ノ一字ハ封シテ海防掛リノミノ預リニ致シ度事ニ候右故本文ニモ和ノ事ハ一切不認候

一槍劔手詰ノ勝負ハ神國ノ所長ニ候間御旗本御家人ハ勿論諸家一統試合實用ノ槍劔悉ク練磨致候樣有之度事

本文槍劍之儀神國之長技タル事不及申近來試合之槍劔ニ至テハ其妙極リ候然ニ蘭學者風之説被行外夷船艦銃礮之堅利ナルニ恐レ所詮外夷ニハ勝事不能樣ニノミ思フ者ナキニシモ非ズ是其一ヲ知テ其二ヲ知ラズト云フベシ戰艦銃礮ハ手詰ノ勝負ニ便ナラズ假令彼夷人一旦ハ邊海ノ地ヲ侵ストイフ共上陸セサレハ其慾ヲ逞フスル事ヲ得ス我壯勇ノ士卒ヲ選ミ槍劔ノ隊ヲ備ヘ機ニ臨ミ變ニ應ジ我長技ヲ以テ彼ガ短ナル所ヲ制シ横合ヨリ突テ出或ハ敵ノ後ヨリ切テ廻リ電光石火ノ如ク血戰セバ彼夷賊ヲ鏖ニセンコト掌ノ中ニアルベシサレバ神國ノ武士タランモノ第一ニ槍劔ノ二技練磨セズンバ有ベカラズ然ルニ諸家ニハ今以舊弊ヲ守リ或ハ花法ヲ守リ試合ヲ專ラニス或ハ試合モ亦新弊ヲ生ジ勝負ノ分合ノミヲ爭ヒ竹劍ニテ成難キ業ヲ講スル族モ有之候是等ハ精々御世話有之候テ諸家一統實用之槍劍ヲ講シ道具ノ輕重長短等眞劔ニ基キ製作アラマホシキ事

本文假令ハ彼カ艦ニ乘入リ對談致候樣ニ款待シ船將ヲ突殺シ又上板之上ニ居テ打寄出ル所ヲ太刀長刀等ニテ切殺シ帆縄ヲ打拂等ナサンニ左右前後ニ何程之火銃ヲ備ヘ置候

共其内ニ向テ打事ハ不叶上板之上ニ居ル人ハ内ヨリ不見ハ砲ニテ打事モ不相成僅カノ人數ニテ大艦中ノ人ハ退治スベシ

一當秋出帆ノ蘭人ヘ命シ軍艦蒸氣船並船大工按針役等總テ用前丈ケ取揃尙又大小銃砲近來新工夫之品モ有之候ハヾ是又取揃國許ヘ罷歸リ次第不時ニ積立獻上仕候樣御沙汰有之度事

本文之儀外國ヨリ獻上爲致候ハ御外見如何ト申說モ起リ可申候ヘ共外國ノ所長ヲ取テ御用被成候ハヾ却テ神國ノ廣大ナル所ニ有之既ニ五經博士ヲ始メ種々ノ職人共追々三韓ヨリ獻上爲致候儀古史ニ的例有之聊苦シカラザル儀ト存候一體夷狄ハ新工夫ニ長ジ扨右細工ヲ見取候テ製造致候事ハ神國ノ長所ニ有之候間蒸氣船ナドモ追々彼ニ勝リ候製造モ出來可申第一委細ニ其製ヲ明メ居候ヘバ彼ヲ打破候心得ニモ相成一擧兩得共可申候偖和蘭ノ交易一廉ノ御益ト承及候處軍艦等持渡候テハ御酬モ不容易其年之御益無之却テ莫大之御損ニ可相成ト有司ノ過憂モ可有之候得共蘭船ノ御益平年之通相納候テモ別ニ軍艦等御製被成候ヘバ莫大ノ御入用ニ可有之候間和蘭交易之利ヲ御軍艦ニ御廻シ被成候御見透ニテ御損失ト云次第ハ有之間敷歟偖公邊御始メ大名ヘモ分限ニ應ジ員數ヲ限リ大艦願濟ニ相成西國大名等海路ニテ浦賀ヘ參勤シ候ハヾ莫大ノ失費ヲ省キ候ノミナラズ右軍艦羽田本牧邊内海ヘ掛置非常ノ節ハ直ニ防戰ニ相用候ハヾ此度ノ如ク

夷賊容易ニ乘込候樣ノ事モ有之間敷公邊ニ於テモ京大坂遠國勤往來ヲ始メ御米ノ運漕等右大船ヲ御用被成候ハヾ永世ノ御益ト存候海防之要務戰艦大砲ヲ主トシ候事近來誰モ能申候得共此方ノ職人ヘ申付無益ノ年月ヲ費候ヨリ獻上ヲ申付候方簡便ニテ實用ニ適シ可申存候偖和蘭ヨリ獻上ニ相成候上ニテ船材等取集メ候テハ御手後レニ相成候間此節ヨリ公邊ニ於テモ御用意大名ニモ心掛サセ候ヘバ手繰宜可有之材木ノ大小長短銅鐵之多少等ハ當時入津致居候蘭人ヘ爲御聞被成候ハヾ大概ハ相分可申候

一銃礮之技近來追々相開ケ候得共外夷之精妙ニ難及候間公邊御始諸家ニテモ精々研究致シ可成丈ケ銃數ヲ增シ火藥彈丸等存分ニ備置度事

本文銃礮ハ攻守第一之利器ニテ彼專ラ是ヲ以我ヲ刧ス時ハ我又是ヲ以彼ニ應ゼズンバ有ベカラズ鳥銃ト違ヒ大熕ハ未タ盛ニ不行內ニ太平ニ相成候故貫目以上ノ大砲ニ乏敷其上傳來之器ハ車架銃耳等全備セザルモノ多ク從テ發砲ノ術モ實用ニ不適者多ク候間諸家皆實用ノ器ヲ製シ實用之技ヲ講ジ一發鏖賊之妙ヲ心掛鳥銃モ皆雷粉燧火ヲ用候樣ニ有之度候近來銅材次第ニ減少致候處假令寺々ノ鐘ヲ潰シ候迄ニハ至リ不申候共責テ火鉢燭臺等無用之銅器ハ潰シ右品々銅ニテ製シ候儀以來御禁制ニ相成猶又蘭人ヘ御渡之銅モ御差略被成候ハヾ銅材格別之不足有之間敷候抑槍劍ト違ヒ銃砲ノミ有之候テ玉藥無之候テハ其詮無之候間佃島之揚火ハ勿論總テ花火之類一圓ニ御禁制猶又諸國ヘ被

爲命焔硝ヲ存分ニ製造有之度七年之病ニ三年ノ艾ヲ求ル如ク一日後レ候ヘバ一日之不手當ニ相成候間何分速ニ御沙汰アラマホシク候

一御料私領海岸要害之場所ヘ屯戍ヲ設ケ漁師等相交士兵相備度事

本文海岸之場所何レノ地モ油斷不相成候處異船渡來ノ時ニ城下等ヨリ人數出候テハ機會ニ後レ平日人數差出置候テハ入費續兼自然ニ手當粗略イタシ候樣ニ成行候間土地ノ漁師等ヲ組分ケ致シ外ニ人ヲ選ミ小頭差引樣之者ヲ立鄕士等身分ヲ持候者ヲ隊長トシ折ヲ見合セ簡便ニ調練致シ萬一ノ節ハ軍功ニヨリカク〳〵ノ恩賞可有之旨平常厚ク申含置候ハヾ筋骨丈夫殊ニ海上鍛練ノ者共故アツパレノ働キ致シ候者モ可有之城下陣屋等ヨリ人數差出迄ノ一ト支ニ可相成候尤要害ノ濱々ヘハ右ノ外城下遊卒等ノ内ヨリ人ヲ選ミ屯戍ヲ設ケ平日ハ文武ノ修行等モ爲致事アル時ハ右士兵ヲ指揮シテ大砲並槍劔等ニテ夷賊退治致候仕方モ可有之併右之屯戍制度士兵組立ヲ始或ハ格式ヲ與ヘ或ハ双刀ヲ許シ或ハ扶持ヲ與ヘ或ハ夫役ヲ免シ候類其國風家風土俗ニ據リ一概ニ論ジ難シトイヘドモ詰ル處ハ實用ヲ主トシ永續ノ手當アラマホシク候

九日晩景認　水戸

福山殿　御許へ

右海防愚存ノ後ニ書セル正弘ノ文。

〔阿部家文書〕

貴くしたしきやんごとなききはにかゝる忠誠仁智の人おはしましてかく正論讜議をたてまつらせ給ふもかしこしや東照しますみおやのみたまさきはえてわが神日本の國を守り玉ふならずや乃ち書名をみおやのみたまとなづく

正弘

〔一四〕國庫窮乏ニツキ川路聖謨ヨリ藤田誠之進ヘノ書。 嘉永六年七月。

（上略）然者過日ハ老君様御登城被爲在候テ扨々難有御事ニ御座候右ハ私輩ハ勿論之儀阿閣老ニ於テモ殊之外ナル難有ガリニテ老君様之御登城ニテ一安心ト申候テイカ計リカ心強奉存候様子ニ御座候右ニ付テハ別而河内守私打寄候テコレニテハ世上ノ人氣モ靜ニ相成候義ト大悦仕トリ〳〵申候義ニ御座候乍恐御苦勞被遊候ハ萬々ニ可被爲在候得共御登城ニ付テハ先達而以來阿閣老ヨリ被申上候御勝手御入費之事ナド秘中ノ秘ニ御内慮等被相伺候事ト奉存候右ハ申上候迄モ無之思召ヲ以テ御登城之事被仰進海防之事萬端御内話有之扨海防ト申候得ハ富國強兵勿論之義ニ付御勝手向内密ノ事ヲモ打明御咄不被申上候テハ内外御分リモ被成兼候故御物語被及候事哉ト推察仕候間右等之事外々へ漏泄仕候次第ハ無之事故極々之秘密之事ト被思召候様奉存候定テ阿閣老ヨリモ無如才被申上候事トハ奉存候得共別段御懇篤之御沙汰共段々被成下候事ニ付不顧恐御内々申上候扨又右之書面類御覽被遊候ハヾコレハト御驚モ被遊一體之事情モ直ニ御承知可被遊候右之御勝手之

〔川路文書〕
齊昭嘉永六年七月三日、登城シテ政事ニ參與スベキノ命ヲ受ケ、爾後隔日登城ス。
第十二章併看。

樣子ニテハ外國ト戰爭イタシ縱令御勝利計ニテモ一年トモチコラヘ候義ハ出來申間敷ト奉存候間薪ニ臥膽ヲ甞上下一致イタシ候テ十年ノ末ニハ是非御國力ヲ復古イタシ御武威相立攘夷狄尊王室候ト申候征夷府之御職掌明ニ相立候樣仕度モノト每度私輩迄エモ阿閣老嚴敷垂誡有之候儀ニ御座候右之譯故此節ハ迚モ被成方無之次第外ヨリ御覽被遊候トハ違ヒ奥フカク內論之趣ヲ御承知被遊候テハ容易ニ戰爭等ハ難相成今般墨夷之事穩ニ御取計可被成トノ御趣意實ニ無御餘義御間然被遊候義ハ不被爲在候義折ニフレ御示シ被成下候ハヾ老君樣ノ御沙汰ハ世人如龜著仕候事故天下之人氣モゲニモト靜ニ相成御取締モ相立可申哉コレハ老君樣ニ於テ若哉乍恐御迷惑ノ御事歟ハ不奉存候得共人氣ヲ服候義公邊之御爲第一ニ御座候間何卒右之御含被爲在候樣奉存候（下略）

〔昨夢〕上五五—六頁。第十三章併看。

（一五）和戰ニツキ德川齊昭ヨリ松平慶永ヘノ書。　嘉永六年八月十一日。

（上略）和ヲ唱ヘ候人ト戰ヲ唱ヘ候人ト區々ニテ指支申候得共拙老ハ內戰ニ外和ニ致シ候方ト存候內サヘ戰ニ覺悟致シ置候ヘバ外ハ和ヲ以ナヤシ夫ニテ先ヨリ兵端ヲ開候トモ差支ハ無之若承知ニ而歸帆候得者尙々之事ト存候何レニモ處々ヨリ雨ノ如ク封書出晝夜見候ヘドモ中々兩眼引足リ不申候乍略儀兩度ノ御答一度ニ申進候御海恕可給候也

八月十一日夜即刻

『御引移』ト八家定大將軍トナリテ西城ヨリ本城ニ移居スルヲ謂フ（嘉永六年十月）。

〔禁令考〕卷八、三二八―九頁。〔續々泰平〕及ビ〔實紀〕嘉永六年十一月朔日。〔起原〕下 二一六五―六頁。〔安政〕三〇―一頁。〔十五代史〕卷廿上一〇八頁。〔三十年史〕一五七―八頁。第十三章併看。

二白　オロシヤ　イギリス　フランス　アメリカ　ヲ敵ニ取リ申候御時節實ニ天下ノ安危此時ト恐入申候廿年前ヨリ追々申上候通リニ相成候ヘバケ樣之事ハ有之間敷萬々一有之候而モ格別ニ被成候方モヨロシク候處今大病人受取候樣ニテ匕ヲ投候外無之候貴兄ニテ拙老之代リ御勤被下度拙老今ニナリ何良策モ無之日夜心配計リニ候御免願候ヨリ外良策ハ有之間敷ト實ニ恐入申候御引移リモ近々ト奉存候得者其上ニ而ハ何卒御免ニ仕度事ニ候以上

〔一一六〕軍備ニツキ閣老ヨリ諸藩等ヘノ布令。　嘉永六年十一月朔日。

亞墨利加合衆國ヨリ差出候書翰之儀ニ付夫々建議致候趣各逐熟覽衆議參考之上達御聞候處諸說異同ハ有之候得共詰リ和戰之二字ニ歸着致シ候然ル處面々建議被致候通リ當時近海ヲ始メ防禦筋等御全備ニ不相成候ニ付渠申立候書翰之通彌來年致渡來候共御聞屆ノ有無ハ不申聞可成丈此方ヨリ平穩ニ爲取計可申候得共彼ヨリ及亂妨候儀有之間敷トモ難申其節ニ至リ不覺悟有之候テハ御國辱ニモ相成候儀ニ付防禦筋實用之御備精々心懸面々忠憤ヲ忍ヒ義勇ヲ蓄ヘ彼ノ動靜ヲ熟察致シ萬一彼ヨリ兵端ヲ相開キ候ハヾ一同奮發毫髮モ御國體ヲ不汚候樣上下擧テ心力ヲ盡シ忠勤可相勵トノ上意ニ候　右之通被仰出候間可被其意候

〔起原〕下二一六六七頁。第十三章併看。

〔一一七〕防戰ノ機會ニツキ閣老ヨリ評定所一座海防掛大目付目付ヘノ令達。

嘉永六年十二月九日。

來春亞墨利加船渡來ノ儀ニ付先達テ被仰出候上意ノ趣モ有之右ニ付彼カ擧動亂妨ト差定候機會甚大切之事ニ候右ハ渡來之節如常例浦賀沖ニテ乘留萬端遂應接可申ハ勿論ニハ候得共品ニ寄強テ內海ヘ乘入間敷共難申其節當夏之通要所乘越候儀ハ無據形勢ニ候共右方ヨリ內手ハ決テ乘入申間敷並小船ニテ海面ヲ乘廻シ或ハ猥ニ上陸致間敷此儀不相用時ハ國禁ニテ難捨置旨聢ト申諭ノ廉々大概ハ取極置若違背之所業有之候ハヾ可打拂機會ト可相心得段兼テ浦賀御固之四家並御警衛之家々ニモ相達シ置候ハテハ其節ニ臨ミ彼ガ擧動亂妨之見極モ付兼自然何事モ機會ヲ失ヒ諸事此方後手ニ相成藩屏之衛士銳氣ヲ折キ可申ニ付右等ノ處篤ト勘辨致シ異船差留場其外共厚ク致評議可被申聞候事

〔嘉永明治〕卷三、一二章、〔二十五代史〕卷廿上一二頁。第十三章併看。丑 嘉永六年。

〔一一八〕防備ニツキ諸藩及ビ旗下諸士ヘノ布令。

安政元年二月八日。

亞墨利加船渡來ニ付心得方ノ儀去丑十一月中重キ上意ノ趣被仰出有之候儀ニ付諸向共聊油斷ハ有之間敷候處此節數艘近海ヘ碇泊致候ニ付テハ此上應接ノ模樣ニ寄萬一彼ヨリ兵端ヲ開候儀無之トハ難申其節一同奮發致候ハ申迄モ無之事ニ候得共異船滯留中御備向ノ儀外見ノミニ拘リ夜中モ海岸ヘ提灯等多ク附置候向有之趣ニ相聞左候テハ却テ彼ノ的ニ

相成且ハ疲弊モ不少儀ニ付固人數差出候面々番小屋等ノ要所ハ格別其外ハ要害ノ土地見計山陰木陰等へ屯致シ可成丈外ヨリ不見樣ニ相心得行列ヲ正シ晝夜共時々海岸ヲ見廻リ可申且又宿驛人馬遣方ノ儀モ可成丈勘辨致シ相減候樣可致候尤銘々屋敷々々手勢用意致置候テモ右ニ准ジ外見ノ虛飾ハ一切相止メ士卒ノ鋭氣ヲ養ヒ候テ取鎭リ居大小ノ砲配リ方ノ儀ハ勿論槍劔手詰ノ勝負等實地ノ接戰第一ニ心懸候樣精々厚可申付候

但大艦ヲ始諸般ノ御備向相整候上ハ猶改テ被仰出候品モ有之儀ニ候得共方今差向候塲合ヲ以テ右之通被仰出候事ニ付面々必死ノ覺悟ヲ盡シ實用ノ工夫可致候尤彌彼ヨリ兵端ヲ開候節ニ至候ハヾ小船ヲ以神速ノ勝負ニ及候儀モ可有之事ニ候

右之通萬石以上以下不洩樣早々可被相觸候

親筆江川家所藏。寫(陸軍)卷十七、二—三頁。第十五章併看。德川齊昭二月二日以テ江川ニ書ヲ與ヘ、萬次郎ヲ信用スベカラザルヲ述ブ((陸軍)卷十七、四—五頁)。

(一九) 中濱萬次郎ヲ通辯トシテ用キル事ニツキ阿部正弘ヨリ江川英龍ヘノ書。

安政元年正月廿三日。

過刻ハ御來駕其節縷々萬次郎儀ニ付被申聞候趣御手前出船乘戾方申諭候ニハ通辨致シ候者無之テハ甚差支無據儀ニ付萬次郎儀ハ當時心底モ見屆更ニ懸念無之候ニ付御手前引受御不爲ノ儀ハ不被取計趣故只今ニモ出張何分不可計事付其通ニテモ可然ト存候得共尚篤ト相考候處御手前ノ塲ニテ萬事ノ引受受合被申候儀聊懸念イタシ候筋ハ無之萬次郎儀必

反間之儀ハ無之儀顯然イタシ居候得共異情更ニ難計船中へ乘込如何樣ノ儀ニ相成異人ヨリ萬次郎儀連行候テモ致シ方無之其上右ニ付テハ水府老公同列中ニモ深懸念致被居候人々モ有之候間格別差支モ無之候ハヾ今晚中萬一應接等出船モ有之儀ニ相成候ハヾ先萬次郎ハ見合候テハ如何有之歟左候ヘバ明日登城之上一應申談早々沙汰可致ト存候間左樣承知可給候何モ御爲筋ノ儀厚ク勘辨ノ上猶差支ノ儀モ有之候ハヾ明朝登城懸可被申聞候事

正月二十三日　　伊勢守

江川太郎左衞門へ

〔陸軍〕卷十七、三四頁。第十五章併看。

〔二一〇〕同上ニツキ江川英龍ヨリ阿部正弘ヘノ答書。　安政元年正月廿三日。

過刻參上仕候筋縷々萬次郎儀ニ付申上候趣出船乘戾方申諭候ニモ通辯仕候モノ無之テハ甚差支無據儀ニ付萬次郎儀ハ當時心底モ見屆更ニ懸念無之私引受御不爲ノ儀不取計趣故只今ニモ出張何分不可計事ニ付其通ニテモ可然哉思召候得共尙篤ト御勘考被遊候處私儀萬事引受御受合申上候上ハ聊御懸念ノ筋ハ不被爲在萬次郎儀モ反間之儀無之ハ顯然仕居候ヘ共異情更ニ難計船ニ乘込如何樣ノ義相成異人共萬次郎連行候テモ致方無之其上水戶老公御同列樣ニモ深御懸念被爲在候間格別差支モ無御座候ハヾ今晚中萬一應接等出船モ仕候儀ニ相成候ハヾ先萬次郎ハ見合候事ハ如何可有之歟左候得バ明日御登城之上一應被

仰談早々御沙汰可被成下間左樣可仕何モ御爲筋ノ儀厚勘辨之上猶差支ノ儀モ御座候ハヾ明朝御登城厚可申上旨御書取之趣承知奉畏候右御請奉申上候以上

正月二十三日　　江川　太郎左衛門

阿部　伊勢守殿

〔昨夢〕上一七〇―一二頁。第九章、第十章、第十五章併看。此時島津ハ江戸ニ慶永ハ福井ニ在リ。

〔二一〕琉球及ビ米國等ノ事ニツキ薩藩主島津齊彬ヨリ松平慶永ヘノ書。安政元年二月三日。

（上略）阿閣ヘ面會之儀者琉國之而ニテ是迄日本通信清朝ヘ對シ押隱相成候得共此節之場合ニテハ打捨置巽人自儘ニ被致候。者不相成候間此方ヨリ打明ケ是迄不申聞候得共琉國ハ屬國ニ相違無之譯申聞候方可然評議ニ候彌夫ニ而可然哉トノ事ニ御座候尤之事ニ候得共彼國所存モ御座候間篤ト申諭之上ニ致度申候處其通リニテ是ヨリ追々彼方ヘ可申遣ト存居候阿被申候ハ左樣ニ相成候ハヾ琉モ悅ビト被申候間中々左樣ニハ有間敷大方難澁可申立ト存候旨申置候左候而彌左樣ニ候ハヾ萬事下田之規則ニ習ヒ候樣御達御座候樣且又外ヘハ兎モ角モ小子ニハ琉球引合モ御座候間下田應接之次第取繕無之處不致承知候而者不都合眼前ニ御座候段申述候處至極尤ニ候間應接人歸着之上委細可申聞トノ事ニ御座候是ニテ事實可相分ト存申候來三月ヨリハ彌通商道取結之相談相違無之樣ニ被存申候左候而大船成就之上ハ此方ヨリモ出張商法ノ心得ニテハ無之哉ト被察申候追々樣子承リ可申上候

大船製造出交易ノ說。

呉々モ極秘ニ相願申候扨又閣中モ以後手當之義ハ餘程心配之樣ニ候得共御救助之沙汰ハ頓ト無之由外ニ手段ハ無之ト存申候兎角閣中始商之法可有利潤ト存込候口氣ニ御座候水老公御登城モ全ク世上ノ人口ヲ恐レ候譯ト存申候全體前日承リ候而御登營候而者輕々敷候間此節ハ無之方ト龍土ヘモ申遣シ同意ニ候得共申上候間モナク候處跡ニテ承リ候得者藤田ヘ松河内ヨリ是非ト申而夫故御勸メモ申上候哉ニ聞得候二十六日ニハ御斷ニ相成リ申候御登城之節モ何事モ不申上表通リ之御届等之書付入御覽候計之由ニ御座候（中略）畢奴應接モ此前ヨリ宜敷トノ事ニ候得共市中歩行且品物取入等ハ不相替我儘之樣子下田七里方箱舘五里方ハ無相違自由ニ歩行御聞濟來三月ヨリ品物交易始候トノ事ニ承リ申候水尾兩公如何程被仰候トモ迚モ可被行光景ニテハ無之候（下略）

二月三日

龍土ハ伊達宗城（宇和島藩邸ハ麻布龍土ニアリ）。藤田誠之進。松平河内守。

〔昨夢〕上一〇四―五頁。第十五章併看。福閣ハ福山閣老即チ正弘。

〔一二二〕米人ニ對スル政府ノ態度ニツキ藤田誠之進ヨリ中根靭負ヘノ書。

安政元年二月十二日。

（上略）御內話一條其ノ君侯今朝福閣ヘ御出御存分御申達被成候處至極御尤之筋ニ承諾被致今更通信通商等御許容被成候ハヾ外ハ魯夷內ハ列侯ヘ被對御信義ヲ御失被遊候段台慮モ有之儀故決而左樣ノ儀ニハ不相成候間彼ヨリ不法ノ擧動有之候ハヾ其時コソ過日ノ御

觸通リ御心得可然云々立派ノ御返答之由元ヨリ右樣ノ御懷トハ奉恐察候得共如何ニモ平穩々々ト世上一般申フラシ候間如何ナル平穩ニ成行可申哉ト御同意甚苦心仕候處御立場ガラノ御方ヘ立派ニ右樣御返答御座候ノミナラズ阿因兩侯迄ノ御傳達モ御座候上ハ實以爲國家恐悅無此上畢竟其ノ君侯格別ノ御精誠ニ被爲渡候故右樣慥ナル證據ヲ御聞被成候段每度奉感服候右ニ付御廟算尙更御確定之御一助ト御了簡被成御近緣之廉ヲ以熊本侯ヘ云々ノ御打合セニ相成候由逐一無殘處御儀ニ御座候（下略）

米人ノ所爲ニツキテノ風說●

二月十二日

二白福侯御答ノ立派ハ實ニ可善候得共一昨十日應接ノ風聞ハ扨々笑止千萬ニ御座候尤幕ノ內ノ事ハ外官ヘハ分リ不申候得共衆人ノ見ル處如何ニモ不堪切齒候定而御聞モ被成候半バツテイラ廿八隻斗ニテ乘込海岸ヨリ應接場迄一町斗ノ處彼異人共貳行ニ劍付銃ニテビツシリト固メ其中ヲペルリ夷等奏樂ニテ上陸此方ヨリ案內ニ出候者モ何トナク彼等ニ警固被致候姿ノヨシ扨又下官ドモ處々我儘ニ步行小倉ノ陣所等ヘ入弓鐵砲等ヲ圖ニ取其外婦人等追掛候ヨシ風聞處實ハ不詳候得共苦々敷事共ニ御座候腹中ニ戰ヲ含ミ顏色ヲ和ラゲ掛合候ハヾ彼モ自ラ承服可仕處腹中モ顏色モダマス斗ニカヽリ候而者マス〳〵ノラレ可申哉御覽後御投火可被下候

別啓一昨日應接之時墨夷中ニ此節死人出來候間海邊ヘ埋メ申度願出種々押合候得共遂

ニ彼カ願ノ通リ横濱某寺ヘ爲葬候筈ニ答候ヨシ最早御府内近海之地ヘ夷人ノ墳墓迄出來申候右ヲエンニ致シ如何樣ノ事ヲ巧ミ可申モ難計餘リ御手ユルキ樣奉存候是ハ其君侯ヘ御申上ノミ先御他言被下間敷候以上

又啓尾州殿ニハ中々正論ニ被有候毎度感服仕候其君侯ヨリ御一通被遣御月番之廉ニ而上田侯ヘ一書被遣上田侯ヨリ福侯同樣ノ御答出候ハヾ尚々確定可仕哉尾州ヘハ道路隔遠候得共當節ノ模樣ニテハ尾州往復位ノ日限ハ隨分御間ニ合ヒ可申歟ト奉存候故敝藩ヨリ誘ヒ候ハ容易候得トモ夫ニテハ却テ不宜樣愚考仕候分外ノ愚存御投火可被下候

靱負樣　拜復　誠之進

〔新伊勢拾遺〕

第十九章、第二十章併看。

米國ヘ使節派遣ノ議。

二二三　米國ヘ使節派遣ノ議ニツキ徳川齊昭ヨリ阿部正弘ヘノ書。

安政元年六年三十日。

（上略）扨ハ過日於營中内々御相談有之候米夷應接三箇條トモ御斷之儀彼不奉承伏候ハヾ本國ヘ御人可被遣儀御注文ノ通リニサヘ參リ候ヘバ先々折衝禦侮之御處置トモ可申何分御同意ニ御座候乍然國家ノ大患ヲ身ニ引受着實ニ考慮ヲ盡シ候人乍憚御乏シク候間只今ノ姿ニテハ何程貴兄ノミ着實ニ御建議有之候テモ御同列一致之儀何共無覺束タトヒ表向御

此書閣員ノ黜斥要求ノ書（壬一ア號ニ載ス）ノ一部ナリ、宜ク併セ看ルベシ。

Perry's Expedition. 第二冊二〇1頁。

譯文ハ第十六章ニ載ス。

阿部伊勢守ノ名字書キ方原文ノ儘。

同意申テモ三奉行應接掛リ等ヨリ彼是姑息ノ論起リ候ヘバ御同列ニテ暗ニ右ヘ和シ候モ難計ツマリ隙取居候内米夷渡來何事モ間ニ合不申自然苟且逡巡ノ御處置ニ落入可申哉ト過憂イタシ候（中略）外國ヘ被遣候御人撰等モ迅雷一震ノ上ハ破竹ノ勢ト存候也

〔二四〕米使「アダムス」條約交換ノ爲ニ來着シタルヲ阿部正弘ニ報ズルノ書。　安政元年十二月九日。

U. S. Ship Powhattan, *Simoda, January* 26,1855.

Your Excellency; I have the honor to acquaint you, for the information of his Majesty the Emperor of Japan, that I have arrived here from the United States of America, and with me a copy of the treaty made by Commodore Perry with the Empire of Japan, which has been approved by the Senate of the United States, and signed by the President. I am furnished with full Powers to exchange ratifications agreeably to the 12th article of the treaty, and am ready at any time to meet such high officer as shall be properly authorized for the same purpose by the Japanese government.

I have the honor to be, very respectfully, your obedient servant,

H. A. ADAMS,

Commander U. S. Navy.

His Excellency Abe Ise Nokami, *&c., &c., &c., Yedo.*

〔戊〕露國通交ノ件。

〔一〕兩國修好通商ヲ求ムル爲ニ露國宰相ヨリ日本執政ヘノ書（譯文）。

嘉永五年七月廿一日附。

魯西亞全國一統之主魯西亞帝「ニコラース」第一世（帝名）ノ「レイクスカンセリイル」（官名）此書牘ヲ大日本國ノ執政ニ呈ス

日本國方今ノ形勢ヲ熟察シ兩個ノ帝國相隣ルノ故ヲ思ヒ魯西亞帝方今一人ノ使臣ヲ撰ビ帝ノ存意ヲ全ク寄托シ是ヲ帝國日本ニ送ルヲ決セリ是ヲ以テ魯西亞帝ノ「アヂユタント、ゼ子ラール」（官名）兼魯西亞隊舶ノ水師提督「ヨアンム、ポウチヤチン」（人名）ヲ擧テ此重任ニ膺ラシム

〔起原〕上一六三—六頁。第十四章併看。「レイクスカンセリイル」ハ宰相。「アヂユタント、ゼネラール」ハ侍從武官長。

右使臣ヲ送レル本旨ハ日本帝國方今ノ事蹟形勢ヲ明白ニ申告シ且日本帝國ト其賢明ノ大君トノ時運ニ就テ魯西亞帝深ク憂慮スル所ノ事ヲ說明セシメ尙又兩帝國人民ノ利益ヲ旨トシ向後魯西亞國ト日本國トノ間爭隙怨讐ヲ生ゼザラシメ兩國ノ和睦安穩ヲ固定スルノ策ヲ献ゼシメントスルニアリ右ノ策ニ就テ魯西亞帝ノ志願トスル所ハ次ノ二件ナリ其一

ハ兩帝國ノ境界ヲ定ムルニアリ此件ハ兩國ニ注ゲル洋中ニ起ル所ノ諸事ニ就キ復更ニ遲延スルコトヲ得ズ是ヲ以テ魯西亞帝ノ意方今必正サニ此切要ノ一事ヲ始ムベキノ時ナリト謂ヘリ

然ラバ兩國ヨリ會同シテ貴國最北ノ極界ハ何レノ島ニ限ルトイフ事ヲ約定センコト是レ當今ノ要務ナルベシ但右境界ヲ定ムルハ又「カラフト」島(即薩哈連)ノ南陬ニ就テモ言フナリ夫魯西亞帝所領ノ地ハ其大サ世界萬國ニ冠タレバ更ニ地ヲ益シ境ヲ廣ムルハ實ニ要領トセザル所ナリ然レドモ魯西亞ノ臣民當然ノ利ハ帝亦之ヲ思ハザルヲ得ズ且兩國和平ノ關係ト兩國民ノ安穩ヲ保固センニハ兩國ノ境界ヲ確定スルヲ良法トナセバナリ

其第二件ハ魯西亞帝誠心ニ願欲スル所ニシテ即日本國ノ內何レノ港ナリトモ貴國ト約定シテ魯西亞臣民ノ往來ヲ許シ我國ノ產物ヲ以テ貴國ノ有餘ト交易セシメンコトヲ請フニアリ又我國ノ軍艦「カムサツカ」(地名)或ハ亞米利加中魯西亞領ニ往來スルノ途中日本ノ港內ニ入リテ食料及ヒ其他ノ須物ヲ求ムベキコトアルニ當テハ是亦允准ヲ得ンコトヲ願フナリ但シ右ノ志願中大日本國ノ爲ニ損失スル所アルコトナキハ日本ノ政府必ズ明察アルナルベシ且魯西亞ハ境ヲ貴國ニ接スルノ緣由アレバ右等和平ニシテ且兩國ニ利スルノ議ヲ容ルベキコト他ノ諸國ヨリモ當然ノ理更ニ多カルベシ

此諸件ヲ申告センガ爲ニ「アヂユタント　ゼネラール」(官名)兼水師提督「ポウチヤチン」(人名)ニ

命ジテ備ニ之貴國政府ニ證明セシム政府其言フ所ヲ聞カバ我求ル所ハ實ニ公明正直ノ事タルヲ知悉スルコトアラン

水師提督「ポウチャチン」人名全權ノ重任ニ膺リテ其領受セル規例ニ從ヒ今次ノ大事ヲ諸君等ト會議シ貴國政府ノ官員ト豫メ會合シテ諸事ヲ約定セシム此度大日本政府ニ使臣ヲ奉ズルノ本旨ハ全ク和親ノ意ニシテ第一方今ノ事情ニ就テ我政廷ノ意ヲ明白ニ申告シ次ニ境界ヲ確定スルコトノ必要ナル緣由ヲ告白シ更ニ兩個大帝國ノ福安ヲ保チ兩國ノ臣民遭遇ノ際ニ就テ互ニ永遠有益ノ基律ヲ定メント欲スルガ爲ナリ

使臣「アヂユタント ゼネラール」官名兼水師提督「ポウチャチン」人名ハ此ノ如キ切要ノ命ヲ受ケテ貴國ニ至ルモノナレバ諸君定メテ適當ノ禮遇ヲ以テ招迎セラルベキコト予復タ之ヲ疑フコトナシ英明聰慧ナル執政諸君我政府ノ意旨ヲ細カニ辨ジ我水師提督ノ申告ヲ檢査シテ兩國有益ノ事ヲ催督センガ爲メニ心力ヲ竭シ給ハンコト是又疑ヲ容レザル所ナリ

此書牘ハ帝ノ政府「サント、ペーテルビユルク」魯西亞帝都ノ名ニ於テ作ル所ナリ時ニ千八百五十二年即魯西亞全國一統ノ主魯西亞帝即位ノ二十七年第八月二十三日即我嘉永五年壬子七月廿一日ナリ

「レイクスカンセリイル」官名　「子ッセルロオデ」　親筆

（二一）露國書翰受取ニツキ阿部正弘以下閣老ヨリ德川齊昭ヘノ公書。　嘉永六年八月朔日。

「新伊勢拾遺」第十四章併看。

〔上略〕陳ハ去ル十八日長崎表ヘ魯西亞船四艘入津〔中略〕書翰請取ノ有無ハ三奉行初海防掛リ等ヘモ評議ヲカケ早々申出可申ト存候度々ノ異船扱々心配仕候浦賀表亞墨利加書翰受取ノ手續モ有之候間何レ御國法ノ趣ハ能々申渡其上ハ受取ニ不相成候テハ相成申間敷哉ニモ存候早々別紙書類差上申候御熱覽ノ上明日御差戻可被成下候御心付モ御座候ハヾ被仰下候樣奉願候〔下略〕

八月　朔日

阿部伊勢守　牧野備前守　松平和泉守
松平伊賀守　久世大和守

〔起原〕上一八七―八頁。第十四章併看。

〔三〕露國書翰受取ニツキ閣老ヨリ三奉行、大目付、目付、海防掛ヘノ令達。　嘉永六年八月三日。

其一

覺

此度魯西亞ヨリ持來リ候書翰ノ儀文化度彼國使節渡來ノ節申渡置候通御國法ニ於テ難請取筋ニハ候得共無餘儀申立之趣モ有之ニ付前文ノ趣能々申諭候上書翰請取差越可申候返答頃合承リ候ハヾ書翰中何等ノ儀相認有之哉披見無之候テハ可否ハ勿論挨拶頃合之儀モ難及沙汰筋ニ有之候得共强テ望候ハヾ此節柄御事多之折柄急々難及挨拶趣能々其方ヨリ

申諭答之儀ハ和蘭「カピタン」ヲ以可及通達候間出帆致シ候樣可申聞候御國法ヲ守リ其地へ渡來モ致候儀ニ付取扱振疎畧無之御國威ヲ不失樣處置有之着服之儀ハ平常之服着用ニテ可然候其外ノ儀ハ時宜次第ト可被心得候事但献上物持參致シ候ハヾ可成丈御斷リ强テ申立候上ハ其方共限リ先預リ置可申事

右之通長崎奉行へ相達候事

八月　三日

其二

覺

魯西亞使節持渡候書簡請取候上答之儀ニ付一昨三日相達候書面ノ内和蘭「カピタン」ヲ以テ可及通達間出帆候樣可申聞ト有之右ニテハ彼國書翰ヲモ不及披見内出帆相促候姿ニ相當リ事實不穩候間歸帆之儀ハ存念相尋歸帆可致趣ニ候ハヾ追テ和蘭「カヒタン」ヲ以可申遣旨申渡シ歸帆爲致又ハ江戶表ヨリノ沙汰承度旨申聞候ハヾ滯船爲致置取扱向等不都合無之樣隨分心附書簡之儀ハ支配向ノ者差添早々差越候樣可被致候事（但書略）

右之通長崎奉行へ相達候事

八月　五日

〔續々泰平〕嘉永六年。〔嘉永明治〕卷二、二〇葉。〔起原〕上二一二—四頁。〔外交部〕一〇〇四—五頁
第十四章併看。
布恬（帖）廷ハプーチャチン。
子也利羅德ハネッセルローデ。『也』ハ疑ラクハ『世』ノ誤寫ナラン。

〔四〕露國ノ要求決定延期ヲ求ムル爲ニ閣老連名露國宰相ヘノ答書。

嘉永六年十一月十五日。

伏接來札知貴國御前大臣布恬廷所銜命航來親遞而其書實係上宰相子也利羅德公見贈焉書中所陳逓云貴國大君主思我兩國邊疆之交錯欲加釐正備悉意旨又云貴國既據古來未有廣大之邦土無要別得新地持盈保滿之道良宜爾且我邦與貴國各土其土民其民無事相安原靡開釁之端乃今段使節之舉其出好意而不出惡意亦爲彰明較著不容疑者貴國既以好意來我邦何得不以好意相報耶第邊土之經界貴國以爲甚不明晰則諭飭邊幅細加查覈而差大吏與貴國官人會同商議以歸劃一然邊藩之查覈必按圖籍確有憑據愼重從事不許絲毫疎繆是固非今日所能辦也若夫貿易來往之事則祖宗遺法有勵禁歷世所遵奉弗失故曩昔貴國嘗有開市之請而我邦業已固辭意其顚末公等所克悉也但現今宇內形勢變遷貿易之風駸々日長誠不能取古例律今事頃者合衆國人亦來乞市日後列國之乞市者必接踵而至夫列國乞市之繁如此乃是我盡一國之力應承星羅基布之萬國其力之給不給未可知也且如我境內邦土之貢檢其多寡精粗亦豈旦夕可辨之事耶矧我君主新嗣位百度維新如斯等重大事項必奏之京師諭告之列侯群官協同商議議定而后從事顧勢不獲弗費三五年之時月雖差似延緩公等且從吾言恒懷以俟焉迨議論一定諸事整頓之後便當登時報聞也况我國之於貴國壤界相接宜加鄭重故遣重臣二員於長崎會晤布恬廷以盡其曲折而其他所宜布報者亦皆俾之面悉幸有以諒之不宣

大俄羅斯國上宰相子也利羅德公閤下

大日本國老中

阿部伊勢守正弘
牧野備前守忠雅
松平和泉守乘全
松平伊賀守忠優
久世大和守廣周
內藤紀伊守信親

嘉永六年癸丑十月十五日

（五）米露兩國へ返翰ニツキ阿部正弘ヨリ德川齊昭ヘノ書。

嘉永六年十二月六日。

（上略）「アメリカ」モ來春參リ候得ハ是非先達テ差出候書翰ノ答可承其節否之儀是非不申聞候テハ相成不申候ニ付先達テ中林學頭へ申達シ御儒者松崎滿太郎申談「アメリカ」ヘノ返翰大意差出シ候ニ付當時海防掛リへ相下ケ評議中ニ相成居申候ハヽ御相談可申上其上漢文ニ相直シ候趣ニ有之候箱其外ハ過日中不殘出來居申候間返翰極リ居候上ハ認等出來居候テ參リ候ハヽ、箇樣々々ノ手續ト少シモ間違無之樣兼テ取極メ置度ト存候魯西亞此後長崎へ參リ筒川初及應對返翰相渡候テモ萬々一承服不致是非江戸へ罷越度抔申候節彼ニ

松平忠優後ニ忠固（タヾヤス）ト改ム。

〔新伊勢拾遺〕第十四章併看。

筒＝筒井政憲。
川＝川路聖謨。

露國ヘノ返翰筆者小島五一ノ事ハ第十四章ニ見ユ。

〔新伊勢拾遺〕第十四章。

先ヲ被取答方等不都合ニ相成候テハ如何其上手切相成候ハヽ必定浦賀ヘ可相廻其節ハ江戸市中ヲ初夫々大混雜ニモ可相成其上應對ハ矢張當節ノ模樣ニテハ平穩ニ取計不申候テハ不相成甚心配ノ事何分彼カ意外ニ出此方ニテ先ヲ取候方可然哉抔ト愚考致シ段々趣意見込ノ趣認取評定所一座並海防掛リ林大學頭大小御目付ヘ存意相尋置候不日ニ申出可申ト存候先達テ御内咄有之候魯西亞アメリカ鐵張ノ船厚ミノ儀長崎並浦賀相糺候間御心得ニ差上申候（下略）

十二月六日　　阿部伊勢守

此程魯西亞ヘ遣候返翰相認候小生家來名前申上候樣被仰下拜承仕候小島五一ト申者ニ御座候以上

〔六〕樺太放棄ノ流言ニツキ阿部正弘ヨリ德川齊昭ヘノ答書。

安政元年十月十八日。

（上略）扨道路之説唐太云々被仰下委細拜承仕候事實右樣ノ儀ハ更ニ無之事ニテ筒川並今般實地見分致シ參リ候村垣與三郎等モ殊之外心配イタシ唐太ハ丸テ此方ノモノニ致シ度ト苦心イタシ居既ニ昨日出立之節モ吳々申含メ遣シ外御勘定奉行初モ一同是非ト見込居申候然ル處御勘定所抔ニテハ唐太ヲ丸デ捨候ト申監察等ニテハ不同意抔ト申事ヲ誰申出

候哉小生モ承込實ハ歎息仕居候近世々上之模樣兎角司農府ニテハ箇樣監察ニテハ箇樣ト當テ推量イタシ事實ハ私共初乍恐貴所樣抔モ御承知被爲在候處兎角何事ニ不依右樣之風聞巷說有之司農府モ何レモ右巷說ヲ承リ込切齒イタシ居候得共一々觸步行候事ニモ參リ不申長歎息致シ居候趣時々承居候右等浮說甚不宜儀ニテ世上之人心ヲ疑惑イタシ候次第共等ノ儀實ニ私共大心痛仕居候事實之事ヲ心得不申向ハ諸役人抔ノ內ニモ如何ト疑惑イタシ候輩モ有之候甚如何之儀ニ御座候段々御心配被仰下候趣一々御尤ニ存候世間之風俗右樣拵事ヲ申觸シ人心ヲ爲惑候段不埒之者共ニ御座候猶心懸ケ探索可仕候間左樣御承知可被成下候餘ハ拜眉之節萬々可申上候登城前早々謹言

十月十八日卽御請　阿部伊勢守

猶々呉々油斷ナラヌ世間ノ人氣甚可恐事ニ御座候（下略）

〔七〕露使下田以外ノ港ヲ開カンコトヲ望ムニヨリ阿部正弘ヨリ閣僚ヘノ諮詢書。　安政元年十一月九日。

〔起原〕上二八一頁。

第十八章併看。

川路左衛門尉。

昨日御同覽仕候左衛門尉去ル五日出書面之趣魯夷下田港ヲ嫌ヒ他之湊ヘ相移リ度申出候儀無據事ニ付其意ニ任セ可申見込尤其可移之地ハ駿州清水遠州掛塚ナト可有之處何レモ御備向無之仍テ可成丈伊豆之國內ニ取定度積尤彼ヨリ翌六日晝時迄ニ返答可承ト申候ニ

付其通リニ可致模樣ニ相見申候右之趣ニ候ヘハ御互ニ評決此上之應接場下田ヲ移轉致間敷旨一昨七日申遣候儀ハ彼地ニテ魯夷ヘ返答後ニ相屆候間跡事ト相成間ニ合不申夫ヲ彼是評論仕候モ無益ニ御座候得共此儀昨夜モ色々ト勘考仕候ニ御互ヨリ申遣候儀ハ間ニ合不申段ハ無致方候得共此後之利害得失實ニ如何有之哉空論ニハ可有之共御互ニ後弊可畏ト存候儀ハ穿鑿仕置度就テハ左之通リニモ心付申候間爲念一應御相談仕候

一下田之外伊豆內ニテ湊ト可申場所ハ下田ヨリ五里南ニテ長津呂ト申處有之夫ヨリ西浦ヘ廻リ妻良並小浦ト申所有之又先キニ松崎ト申處有之下田ヨリ東浦之方ニテハ下田ヨリ五里ニテ稻取（下田ヘ續テ人家多ク凡五百軒モ有之由尤家來ノ噺ニ付當ニハ相成不申候）ト申處有之夫ヨリ富戸伊東宇佐美網代熱海ト申樣ノモノニ御座候由然ル處何レモ下田ニ比候得バ港內甚狹ク又ハ港ト申ベキ船掛リノ形勢ニモ無之由右ハ家來共ノ話ニテ更ニ夫ヲ當テニハ仕不申候得共兼テヨリ下田ハ伊豆國內ニ限ラズ諸國港湊之內ニテモ指折ノ佳港ト承罷在候然ル處魯夷狹隘之地ニ付他ヘ移リ度申候ハ此外ニ下田ニ勝ル大港有之ト心得候哉愚案ニテハ下田ヲ離レ他ヘ罷越候共下田ヲ狹ク存候位ニテハ更ニ氣ニ入候湊ハ有之間敷ト存申候海嘯ヲ氣遣候テノ儀ニ候ハヾ是ハ何方ニテ何時如何程ノ大海嘯有之モ難計此等之處肥前左衞門抔ノ考ハ如何樣ニテ有之哉ト存申候

一駿州清水港遠州掛塚ノ地形如何可有之哉伊豆ノ如キ山國ニモ無之其湯手廣ノ處ハ下田

ニ百倍ノ佳港可有之共畢竟ハ其國丈ノ港ニテ下田ノ如ク諸國ヨリ江戸往來ノ船懸リ場所ニ無之港內ノ形勢モ中々下田ノ如クニハ參リ申間敷被察候第一ニ箇樣ナル東海道筋ノ近傍ニ開港致候テハ異人ノ混雜諸大名往還之間ニ打交リ以ノ外不取締ノ儀ト存申候左衞門書中ニ淸水掛塚ハ御備向無之ト申候得共縱ヒ御備向可有之トモ異人引受可申場所ニ有之間敷異人引受候地ハ矢張下田ノ如ク偏僻之場所ニテ縱ヒ其邊ノ者ハ異人ヘ馴染可申共日本國中諸方之者一向懸構無之候間大ニ始末宜敷候然ル處日本國第一ノ人通リ多キ東海道ノ中央ヘ開港致候ハ其後弊難計ト存候

一魯船他港ヘ移轉之儀相願候ハヾ此度ノ海嘯ニ付當分之內他ヘ罷出居始終ハ矢張下田ヘ開港相定可申トノ意ニ候ハヾマダシモ後來ノ取返モ出來候得共左ニハ無之下田ヲバ狹キトテ最初ヨリ嫌ヒ地震海嘯ニ付其意甚敷相成候ト相見エ申候此趣ニテハ再ビ下田ヘ立歸リ可申目當無之此後英佛其他ノ異船渡來ニテ魯夷ト同樣ノ港ニ成度申候得バ其意ニ任セ候外無之亞米利加ハ矢張下田ヲ舊約之通リ相守度申候ハヾ是又其通リニ任セ可申哉ニテ下田之外又一港異人之淵藪ヲ拵候事ニ相成申候是等モ後患如何可有之候哉

一下田此節ノ有樣嘸差向溺死人ノ取調飢民ノ救助等丈ニテモ大混雜目モ當ラレヌ次第ニテ中々異人應接取締處ニテハ有之間敷異人ハ何レノ道ニモ一ト先他ヘ轉候方ト皆々考ツキ可申理合トモ被存申候乍去後來取返シガタキノ弊有之ト見候上ハ如何ニモ凌方ヲ付ケ

露人兵庫開港ヲ望ム。

〔新伊勢拾遺〕第十八章併看。

德川齊昭ノ魯人鏖殺策。

度モノニ存申候

一魯夷兵庫ノ如キ海面茫然タル場所ヘ開港致度申出候ヲ相考候得バ港内船繫リノ善惡ニハ搆不申只々其所ノ繁昌地面ノ廣キ所ヲ相望候カトモ被思申候下田陸ノ地面ハ實ニ狹キ由ニ候間濱松抔申樣ノ湊縣ノ有無ニ不拘只々其地ノ繁華商賣ノ爲メ専ラ心掛ケ候ニ可有之カ是ニテモ伊豆國中ノ港縣ハ下田ニ勝リ候繁華ハ無之カ共被存候如何可有之哉

右之通色々ト勘考仕候ニ應接掛ノ者共ヘ前段申遣シ既ニ他港移轉之儀差許候上ハ無致方候ヘ共伊豆ノ内ナレハ大抵魯夷ノ氣ニ入候港ハ有之間敷共被察アレコレト評議未決ノ處候ハヾ又々下田ト談判元ヘ取戻シ候樣爲致候テハ如何可有之哉最早左樣ノ譯ニモ參リ申間敷歟愚案ニテハイカニモ異人ノ淵叢方々ニ出來且萬一東海道傍ニ開港候テハ猶又迷惑モノト存候ヨリ御互ニ今一應跡事ナガラモ御相談取調置度奉存候皆樣ノ御考御示教可被下候

十一月九日認　　伊勢守

〔八〕德川齊昭ノ露人鏖殺策ヲ不可ナリトスル阿部正弘ノ答書。　安政元年末。

（上略）此間中兩度御示教ヲ蒙リ候魯夷不殘一所ヘ引入置灰塵ニ可仕一件乍愚昧其後篤ト

都夷＝「トルコ」。

勘考候處何分愚案ニ御座候テハ不宜哉ト奉存候尤此間ノ御模樣ニテハ全一旦之御說ノミニテ其後思召替リ候御事哉共奉恐察候得共國家ノ御爲御互ニ色々ト研究仕候儀ニ御座候得ハ愚意存分書取ヲ以申上候間猶御指揮奉願上候彼船修覆出來迄ノ內ハ籠中之鳥同樣ニ御座候間如尊論隨分計策ヲ以處ニ被仕可申候得共此儀彼本國ヘ相知レ候ハヾ彼意恨骨髓ニ徹シ忽國ヲ傾テ復讐之兵ヲ差越可申外國々ニテモ此儀承及候ハヽ日本人鄙怯之致方ト我邦ヲ賤シメ候ハ不及申彼戎狄共利欲專務之內ニモ名義ヲ相唱既ニ先達テ英夷申出候モ魯夷都夷ノ戰爭一件魯夷不法ニ付英佛申合都夷ヘ加勢仕候ト申事ニ御座候旁推考仕候得ハ魯夷ヨリ我邦ヘ復讐之兵ヲ差向候ト申儀ニ相成候ハヾ外夷ノ人情只サヘ我ヲ偏固暴戾之國ト存込候趣ニ御座候得バ此度交易願ニ來ル使節天災ニ逢候ヲ不意ニ打殺候トハ言語同斷無道ノ國也其罪ヲ正スベシト猾虜共立派之名目ヲ借候テ元來涎ヲ垂罷在候富饒之日本國ヲ分取ニ可致底意ニテ魯夷ニ加勢諸戎押寄此塲ニ至リ候テハ和蘭モ無餘儀彼等ヘ與シ案內者ト相成候類難計奉存候箇樣成行申候テハ是迄御敎示モ蒙リ同列初其外共國家之御爲ト御互ニ種々打合仕辱ヲ忍ビ虫ヲ押ヘ可成丈ケ戰期ヲ延シ其內ニ御兵備相整候樣ト心配仕候儀水之泡ト相成半途ニテ土崩瓦解可仕夫モ此方ニテハ如何樣勘辨仕候テモ彼レ付上リ不及是非候テノ儀ニ御座候得ハ魯夷ニテモ英夷ニテモ諸夷押寄候共御國運ニテ無致方御事ニ御座候得共申サバ無益ノ殺生ヲ以テ神國之名ヲ汚シ諸夷ヲ相手ニ無謀ノ軍ヲ

兀老尹＝ゴローニン（露國「ヂヤナ」艦長海軍中佐）。

相初候樣ニ相成申候テハ如何哉ト奉存候尤モ此儀取行之上深ク秘置候ハヾ彼本國へ相知レ候筈無之ト御見込被爲在候樣ニモ相伺候得共纔一兩人ノ夷賊ヲ人不知ニ誅戮仕候類ト違ヒ五百人之夷ヲ一時ニ鏖ニ仕候ト申ハ非常ノ珍事ニテ愉快トモ不仁トモ取々六十餘州大評判仕候ハ眼前之儀ニ御座候間差向長崎在留ノ蘭人共承込其本國へ申通候ハ不及申明口ニモ我國之者異國へ漂流仕候ハヾ彼ヨリ撫恤ヲ受候恩ニ被繋父母ノ國ヲ忘レ有體ヲ漏泄仕候儀モ可有御座且右珍事取行ノ時節ニ折惡敷他之異船參リ合候ハヾ直樣其樣子嗅付可申追々渡來仕候異船モ魯船之樣子ヲ承糺是ハ怪敷儀ト存歸候儀モ可有御座但是等ヲバ差置專ラ魯夷ノミノ上ニテ申候テモ彼本國政府ハ申迄モ無御座魯船方々へ出掛居候分迚モ布恬廷消息如何々々ト懸念仕居候ニ相違無御座行當次第承合樣子分リ不申候上ハ其儘ニハ捨置申間敷何レ又々使船ニテモ差越布恬廷如何仕候哉ト相尋可申其節彼ハ去何月何日下田湊津浪之節外洋へ被押流候ヲ見受候儘其後行方不存候トカ又ハ船修覆中假小屋ニ滯留右之節自火ニテ燒死候ト歟返答仕候テ彼然ラバ其通之儀ト何之穿鑿モ不仕其儘引取再ビ何ノ儀モ無御座候ハヾ奇妙ニ御座候得共迚モ左樣ニハ參リ申間敷折角尋來候得バ津々浦々種々手ヲ盡シ相探候ニ相違無御座其節ニ及ビ兼テ嚴重口止メニ相成居候共億兆ノ愚民必口走候族可有御座縱ヒ口走不申程能取繕候共衆口一樣ニ相揃候モノニハ決テ無御座何レ是ハ怪敷儀ト彼心付可申候或ハ文化年中蝦夷クナシリ島ニテ兀老尹等ヲ被欺生捕ニ

逢候手懲モ御座候へバ（クナシリニテ兀老尹等ヲ捕ヘタルヲ不可ト申ニハ無御座候）彼疾ヨリ日本人詐術アリト疑念ヲ生ジ我邦湊へ來着仕候ヲ待不申洋中ニテ我船ノ者共ヲ拷問仕候ハヾ國家之御爲ト存決テ白狀不仕候者計ハ無御座忽露見可仕候左候得ハ迚モ始終臭キモノヘ蓋ト申類ニハ參リ不申必定大變之端ト相成我方へ曲名ヲ取候戰爭相始リ可申右ニテハ御國內之者迚モ御尤之御取計ト心服ハ仕間敷歟奉恐入候但欺詐之策ニテモ何ニテモ夷賊一時ニ鏖ニ致候ト申ハ大愉快之儀ニテ士氣ヲ可引立ト申塲モ御座候得共昨年六月始テ米夷船內海へ乘入候節ノ比ニテモ御座候ハヾ御國禁之地へ犯來候罪ヲ正シ御國法ヲ以打拂ト申名義ニ御座候間欺候テモ如何樣ニ仕候テモ誅戮之御趣意相立可申然シ夫迚モ後患ニハ被替不申故（海岸御備等モ未御手薄ニ付）無據穩便之御取扱ニ相成候位之儀ニ御座候間先々平穩之御處置ニ無御座候テハ筋立申間敷奉存候尤彼危難後大ニ應接致能樣子ニモ相聞申候幸之儀ニテモ有之應接掛リへ含メ遣候大節目之廉々ハ精々押强ク爲掛合候樣仕度其危難ヲ救遣候細目ノ廉々ハ國家御仁恤之塲ヲ以可成丈厚爲取扱恩威並施之儀ニ仕度奉存候愚昧之見込ニ御座候テハ何分箇樣ニ奉存候間前文ニ申上候通是モ乍憚國家之御爲御互ニ研究仕候儀ニ付此段奉申上候猶御敎示被下度偏ニ奉希上候

〔新伊勢拾遺〕第十八章併看。

〔九〕右ニツキ德川齊昭ヨリ阿部正弘ヘノ復書。　安政元年末。

（上略）過日ハ塵賊ノ一條縷々御長文畢竟年甲斐モナク危キ論ヲ發候故却テ壯年ノ御方ヘ御心配懸氣之毒イタシ候ツマリ愚老ノ愚衷サヘ御察シ候得バアナガチ塵賊ニモ不限大丈夫ニテ國威押張候手段モ可有之只々當節ノ如ク表向ハ御憐恤御信義抔申モ內實ハ怯懦恐怖ヨリ起リ跡ヒザリイタシ其禍一日々々ト深ク相成候ハ他日ノ大變其罪御同樣不可逃ト日夜寒心イタシ候委細ハ近日餘論相盡シ可申候也

〔類纂〕。〔起原〕中一一〇五―九頁。第十八章併看。

（一〇）日露條約。　安政元年十二月廿一日。

條約

日本國ト魯西亞國ト今ヨリ後懇切ニシテ無事ナラン事ヲ欲シテ條約ヲ定メンガ爲メ魯西亞「ケイヅル」ハ全權「アヂユダント、ゼ子ラール、フイースアドミラール、エフイミユス、プーチヤチン」ヲ差越シ日本大君ハ重臣筒井肥前守川路左衛門尉ニ任シテ左ノ條々ヲ定ム

ケイヅル＝皇帝。

第一條

今ヨリ後兩國末永ク眞實懇ニシテ各其所領ニ於テ互ニ保護シ人命ハ勿論什物ニ於テモ損害ナカルヘシ

第二條

今ヨリ後日本國ト魯西亞國トノ境「エトロフ」島ト「ウルツフ」島トノ間ニ在ルヘシ「エトロフ」全島ハ日本ニ屬シ「ウルツフ」全島夫ヨリ北ノ方「クリル」諸島ハ魯西亞ニ屬ス「カラフト」島ニ至リテハ日本國ト魯西亞國トノ間ニ於テ界ヲ分タス是迄仕來ノ通タルヘシ

第三條

日本政府魯西亞船ノ爲ニ箱館下田長崎ノ三港ヲ開ク今ヨリ後魯西亞船難破ノ修理ヲ加ヘ薪水食料缺乏之品ヲ給シ石炭アル地ニ於テハ又是ヲ渡シ金銀錢ヲ以テ報ヒ若金銀乏敷時ハ品物ニテ償フヘシ魯西亞ノ船難破ニアラザレハ此港ノ外決シテ日本他港ニ至ル事ナシ尤難破船ニ付諸費アラバ右三港ノ内ニテ是ヲ償フヘシ

第四條

難船漂民ハ兩國互ニ扶助ヲ加ヘ漂民ハ許シタル港ニ送ルヘシ尤滯在中是ヲ待事緩優ナリト雖モ國之正法ヲ守ルヘシ

第五條

魯西亞船下田箱舘ヘ渡來之時金銀品物ヲ以テ入用ノ品物ヲ辨スル事ヲ許ス

第六條

若止ム事ヲ得ザル事アル時ハ魯西亞政府ヨリ箱舘下田ノ内一港ニ官吏ヲ差置可シ

第七條

若評定ヲ待べキ事アラバ日本政府コレヲ熟考シ取計フ可シ

第八條

魯西亞人ノ日本國ニ在ル日本人ノ魯西亞國ニ在ル是ヲ待事緩優ニシテ禁錮スル事ナシ然レドモ若法ヲ犯ス者アラバ是ヲ取押ヘ置キ處スルニ各其本國ノ法度ヲ以テスベシ

第九條

兩國近隣ノ故ヲ以テ日本國ニテ向後他國ヘ許ス所ノ諸件ハ同時ニ魯西亞人ニモ差許スヘシ

右條約魯西亞「ケイヅル」ト日本大君ト又ハ別紙ニ記ス如ク取極メ今ヨリ九箇月ノ後ニ至リ都合次第下田ニ於テ取替スベシ是ニ由リテ兩國ノ全權互ニ名判致シ條約中ノ事件之ヲ守リ雙方聊違變アルコトナシ

安政元年十二月廿一日

筒井肥前守 花押

川路左衞門尉 花押

條約附錄

魯西亞全權「ゼ子ラール、アヂユタント、フイース、アドミラール、ヱフイミユス、プーチヤチント」日本國委任ノ重臣筒井肥前守川路左衞門尉相定ムル處ノ條約附錄

第三條

魯西亞人下田箱舘ニ於テ市中近邊自由ニ徘徊スルコトヲ許スト雖モ下田ハ犬走島ヨリ日本里數七里箱舘ニ於テハ同五里ヲ限リトス尤寺社市店見物且旅店取建迄ハ定ムル所ノ休息所ニ至ルト雖モ人家ニハ招待ナクシテ決シテ立入ル事ヲ許ザス長崎ニ於テハ追テ他國ノ爲ニ取極ル所ニ從フベシ且港コトニ埋葬所ヲ取極置可シ

第五條

日本ニテ役所ヲ定メ置品物渡方並魯西亞人持越シタル金銀貨幣品物モ其所ニ於テ取扱フ可シ魯西亞人市店ニテ擇ビタル品ハ商人賣直段ニ應ジ船中持渡之品ヲ以テ辨ズベシ尤役所ニ於テ日本役人取計可シ

第六條

魯西亞官吏ハ安政三年西暦千八百五十六年ヨリ定ムベシ尤官吏ハ家屋並地所等ハ日本政府ノ差圖ニ任セ家屋中自國ノ作法ニテ日ヲ送ルヘシ

第九條

何事ニ依ラズ外民ニ許ス所ハ魯西亞人ニモ談判ナクシテ一同差許スベシ

右附錄ノ事件條約本文同樣之ヲ守リテ遺失ナキ爲メ兩國ノ全權名判スルモノナリ

安政元年十二月廿一日

筒井肥前守花押

〔新伊勢拾遺〕
第十八章併看。
備前守＝牧野忠雅

川路左衛門尉　花押

別紙

先達テ日本國合衆國ト取極メタル條約ノ本書日本大君ノ取極ニアラザル時ハ魯西亞トノ
條約本書モ之ニ準ジテ兩國ノ執政ニテ取極ムベシ

安政元年十二月廿一日

筒井肥前守　花押
川路左衛門尉　花押

別紙

今般魯西亞ノタメニ開ク所ノ日本三港ノ内下田ハ即時ニ開キ箱館並長崎ハ日本重臣魯西
亞ノ全權條約書面取替之日ヨリ三箇月ノ後ニ至リ開クベシ

〔一一〕露國官吏駐劄ニツキ阿部正弘ヨリ徳川齊昭ヘノ書。

其一　安政二年正月十五日。

此程備前守ヨリ奉入御覽候此比筒井肥前守川路左衛門尉魯夷ト取替候條約書如何被思召
候哉外箇條ハ心付モ無之候得共右書中彼ヨリ官吏差置候ト申一儀漢文之方
第六欵　若有不得已之事故魯西亞政府置官吏應在箱館下田之二港之一

同附錄　魯西亞官吏應自（安政三年曆數千八百五十六年）其屋舍並地區等皆從日本政府定准魯西亞人居家以其國俗度生

横文字和解之方

第六箇條　若止事ヲ得ザル事アル時ハ魯西亞政府ヨリ箱館下田ノ內一港ニ官吏ヲ差置クベシ

同附錄　魯西亞官吏ハ（安政三年曆數千八百五十六年）ヨリ定ムベシ尤官吏ノ家屋並地所等ハ日本政府ノ差圖ニ任セ家屋中自國ノ作法ニテ日ヲ送ルベシ

右之通ナル文面ニ御座候テハ彼ヨリ明年ハ公然ト官吏差向來候ニ相違無御座墨夷條約ヨリ文面等一段ノ深入箇樣相成申居候テハ最早此方ヨリ此後一言之斷方モ無之歎息之至ト存候一體舊臘右之條約模樣モ承込候間本書ハ未一覽以前ニ候得共差急御相談仕候テ申遣候間合モ無之餘リ心配仕候間直樣承込之次第ヲ以左衛門尉方へ何分此一條ハ縱ヒ既ニ條約爲取替相濟居候共政府不承知之旨ヲ以是非取戾候樣河內守ヨリモ直書ニテ委細申遣候處左衛門尉已ニ應接相濟蓮臺寺村發足戶田村へ見廻リ罷越候途中へ右申遣候書相屆候由ニ御座候テ戶田村へ罷越候節直ニ私ヨリ申遣候旨可及談判哉トモ存申候得共墨夷滯船中ハ兩夷同腹申合候樣子有之應接六ヶ敷故改テ出替候テ談判可仕ト決着歸府仕候事ニ申越候同人歸府ノ上段々申聞候ニハ今般談判罷越候儀ハ此度ハ大勢被差遣候ニ及不申左衛門

村垣與三郎●

一人ニテモ參リ可申尤魯西亞人共當時戶田村ニテ船製造中故見廻リ旁罷越事ニイタシ右之談判ニ及可申見込申聞候得共同人一人ト申譯ニモ參リ申間敷乍去役々打揃罷越候ニモ及申間敷候間海防懸リ御目付ノ內人物相撰ミ一人是非可遣儀ト同列申合セ仕居申候尤罷越候程合ハ當時下田ニ通辨官ホシエツト罷越居不遠下田ヨリ同人モ戶田ヘ歸リ候趣故右ヲ早速戶田村ヨリ注進申越候積リ其上罷越候事ニイタシ可申候全體右官吏一件最初ヨリ肥前左衞門兩人共殊之外心配イタシ居是非共斷切候見込是ヲ斷切申候得ハ後日墨夷ノ官吏モ斷切レ可申左樣無之テハ國家之後患ト精々論判仕候由ニ御座候得共何分彼承伏不仕無據墨夷條約十八箇月云々ニ基キ箇樣取極候由ニ御座候乍去墨夷之方ハ漢文ニハ倘兩國政國均有不得已之事情云々ト御座候テ兩國均ト申三字後日此方ヨリ彼是ト口出シ相成候樣ニ相成居申候是モ肥前左衞門十分承知ニテ何故箇樣ニハ取極不申候哉全墨夷條約橫文字和解之方ニ專ラ拘泥仕候テ無據及此儀候モノト相見申候段々深入ニ相成候樣子等ハ今般應接掛リ差出申候筆記六冊即別冊差上候御熟覽可被下候且又墨夷條約蘭文和解之方ハ漢文ノ兩國均ト申字ニ符合不仕是ニテハ墨夷ヨリ存付次第ト申儀ニ相成候樣ニテ彼ヨリハ是ヲ差出シ此方ヨリハ漢文ヲ持出シ終ニ所謂水掛ニテ論定仕間敷歟ト兼々存居申候處墨夷條約和文ノ方ヲ彼レ橫文ニ譯シ申候テ此度箕作阮甫宇田川興齋ヘ和解爲仕候ヘバ箇樣相成候此程左衞門與三郎ヨリ別冊差出申候是又差上候御覽可被下候是ニテハ蘭文和解

各約書ヘ閣老連名ヲ記ス。

ノ方ト同樣ニテ兩國均ノ氣味無御座候乍然何分官吏爲差置候テハ他ノ事件ト違ヒ後患可畏荏苒ト交易ニ可相成且一夷ヘ差許候ヘバ二夷ヘモ三夷ヘモ同樣ノ儀ニ御座候テ夥多之夷人御國地ニ住居仕居候テハ何事モ情實盡ク外夷ヘ相漏可申其上邪宗門之儀モ可畏儀此儀ハ幾重ニモ取戻シ度存候乍去彼ニ在テハ必死ニ相望候箇條ニ付容易ニ承伏仕間敷當今ハ先平穩ニ相濟候テモ往々斷付候儀ニ付其事變ハ何分只今ヨリ覺悟仕不申候テハ不相成儀ニ御座候右諸事近々左衞門再ビ應接ニ差遣候筈ニ相成申候都テ前文廉々尊慮如何被思召候哉御垂敎可被下奉願候以上

正月十五日　阿部伊勢守

二白前文墨夷ノ儀云々相認候處今般同國條約本書爲取替去ル五日萬端相濟申候御印章御花押御名等モ不相認全同列連名ニテ附錄共相渡シ萬々相濟六日出帆相濟申候委細ノ儀ハ手續認取リ兼明日拜顏ニテ萬々可申上候扨テ今般魯西亞應接掛リニテ墨夷ハ十八箇月立候ト直ニ官吏ヲ下田ニ連參リ差置候ト申儀魯人申立候ニ付左候得者魯夷迚モ差置不申候テハ相濟不申候間止ム事ヲ得ザル時ハ魯夷モ爲差置安政三年ヨリト條約致シ置候段申聞候ニ付墨夷應接掛リ承リ決テ十八箇月相立直ニ下田ヘ官吏連越候ト申約束ハ不致申如何之次第ト殊之外痛心致シ幸今般使節代「アーダムス」參リ居候ニ付條約ノ箇條一々付キ合セ致官吏ノ儀モ下田奉行ヨリ「アーダムス」ヘ嚴敷談判致候處彼方ニ

テ今般申聞候處ニテモ十八箇月相立墨夷ニテモ何分止ム事ヲ得ザル差支ノ儀有之候得バ其譯柄ヲ日本ヘ相願御評議之上御答次第ニ致シ可申萬一差置候事ニ相成候共御聞濟之上ニ無之テハ直樣差置候儀等ハ決テ不仕趣呉々申立候由尤夷情ノ事故難計儀ニ候得共墨夷之方ハ事柄相分リ居先ヅ此方ノ心得方ト差テ違不申哉ニ相見候左スレハ何卒魯夷ヲ斷切候テ右ヲ以墨夷ヲモ先ヘ寄斷切致シ度事歟ト存申候厚御勘考可被成下候扨官吏之儀古賀謹一郎抔ハ實ニ差置候方永久之御爲官吏ヲ不被差置候テ何ヲ以テ取締方被成候哉後患ノ儀ハ官吏ヲ下田ヘ差置不差置ニ寄候儀ニハ有之間敷右ヲ彼是被仰聞候ハ一體外國之事情ニ御暗キ事ニテ未ダ御分リ不被成御研究無之故抔ト申確乎トシテ据リ居申候私抔ハ素ヨリ西洋ノ事情ニモ暗ク先見モナク只々僻論ニハ可有之候得共何分官吏之儀ハ鳥渡ハ宜敷樣ニテ先キ々々如何樣之大害可生哉ト實ニ苦慮仕候事ニ御座候如何被思召候哉宜御示敎可被下候尙明日拜顏萬々可申上候以上

安政二年二月四日。

〔新伊勢拾遺〕第十八章併看。

其二。

過日ハ御書被成下難有拜見仕候（中略）扨又川路左衛門尉書取ヘ御朱點御附中々其通ニハ參間敷被思召段々御細論ノ旨逐一敬服仕候如仰東照宮尊慮狐ヲバカシ候積ニテ却テ狐ニバカサレ候御譬喩氣味大ニ御座候事ト奉存候此度條約官吏差置一件取調候儀大難物ト御

鑑定手ヲ替候テノ論判可然ト思召付御別紙御示教被下乍失敬御熟考之程深奉感佩候乍不及私モ如仰約定ヲ變シ候儀朋友間ニテモ弱ミ御座候ヲ大膽不敵ノ布恬廷ヘ向ヒ是ヲ果シ候儀實ニ難物之至ト心配仕候但御示教之旨ヲ段々勘考仕候處手ヲ替テト乍申條約外ニ新規之箇條ノミ申出スニモ無御座矢張過日相濟候條約ノ儀ニ御座候テ止事ヲ得ザル時ハト申ヲ雙方ヨリ止事ヲ得ザル時ハト仕候處ハ前約ヲ變革仕候筋ハ拔不申日本政府ヨリ被差出候全權大臣ト一旦取極メ候事ヲ變ジ候處有之テハ條約ハ皆反古ニ可相成抔彼ヨリ可申出候處ハ矢張免レ申間敷其上ニ天主教云々三港之外打拂云々箇條相添論判仕候ハヾ彼疑惑ヲ生シ激怒ヲ發シ全權ノ約定ヲ被變候様ニテハ諸事手切ト申出破談ニ相成候モ難計夫モ此方ニ十分正理有之勘辨モ致遣候上ヲ被申募候テノ破談ニ御座候得バ宜敷候得共前約ヲ違變ト申ヲ名ニ仕候テノ破談ハ他國ヘノ聞ヘト申後來大ニ此方ヘ弱ミヲ取可申是迄之應接段々ト深ミニ入候儀ハ乍殘念致方無御座候一旦條約取極候上ハ何分此方ニ引ケ御座候テハ迚モ夫ヲ立派ニ取繕ヒハ出來仕間敷私考ニテハ官吏一件ハ不相成事ト兼テ政府ノ命有之候得共使節段々無據譯合被申候ニ付尤ト存候ヨリ差許シハ致シ候得共政府ヨリ許シ無之意ヲ兼テ乍存一應之伺モ無之自儘ニ差許候ハ不相濟ト左衛門政府ヨリ被叱一言之申開無之一旦條約致候ヲ改候ハ重々不屆ニ候得共何分左衛門尉モ進退維谷之場ニ候ト申振ニテ初ヨリ心情披出シ必死ニ及論判候外ハ有之間敷歟ト奉存候手品ヲ替ヘ御國體ヲ

以テ取掛リ思様ニ參リ申候得ハ宜候得共甚無覺束被存候夫ヨリハ正直ニ左衛門不調法ヲ打出シ候方彼モ人情アラバマダシモ前約取返シ可相成之近路ニハ有之間敷哉天主教云々ノ儀等御尤ノ尊説奉拜服候得共最初條約草稿相搆候節加入仕候得ハ宜敷御座候得共只今ト相成候テハ却テ彼ノ怒ヲ爲起候儀ニ相成肝心之取戻一條ニ相障リ申候テハ一モ取ラス二モ取ラスト申樣ニハ相成間敷歟ト愚念仕候尤箇樣新規ノ箇條ハ追テ折ヲ見テ爲取極候方ニハ仕度モノト奉存候右之趣如何可有御座歟被仰下候趣モ御座候間愚考ノ儘有體ニ申上候乍憚今御一考被下度奉願上候御用多取込乍例亂筆御仁免奉願上候以上

二月四日　　　阿部伊勢守

〔新伊勢拾遺〕

第十八章併看。

〔一二〕右ニツキ德川齊昭ノ復書。　　安政二年三月四日。

（上略）扨下田應接三箇條ノ愚存致御相談候處縷々御論判之趣再三熟覽イタシ候愚存ハカケ引ヲ本トシ貴論ハ至誠ヲ本ト被成ツマリ何レモ官吏ヲ相止度主意ニ候間官吏ノ事サヘ止候得ハ更ニ存寄無之候只々貴論ノ通リニ川路心情投出シ云々何共安心不致扨又布恬廷承伏イタシ候ハヽ其代リ彼ヨリモ何哉一二ノ難題ヲ出シ候モ安心不致候間御如才ハ有之間敷候得共三使ヘ篤ク御申含肝要ト存候天主ノ事モ今彼ヘ申候カ不宜候ハヽ此方ヘ計ハ嚴敷御觸ニ相成萬一心得違有之候ハヽ魯墨目前ニテ刑ニ行候方可然三港之外之事モ蘭夷

ヨリ諸夷ヘ通達之上御定メニ致度事ニ候

一只今和州ヨリ相廻リ候墨夷一條鳥渡寓目之處婦人載來候ヨシ可惡事ツマリ公事ヲコシラヘ官吏ヲ置候種ニイタシ候モ難計候是迄條約之內婦人ノ事ハ無之候間此度御定メ婦人ハ若キハ勿論老少ニ不拘此方ノ者ハ決テ彼船ニ近付不申彼船ヨリモ一切上陸ハ勿論此方船ヘ乘候儀決テ爲致間敷旨雙方取替シ申度候何モ前文川路等發足ト急草々也

二月初四即刻　晚景老筆御推覽被致度候　水　隱　士

勢　州　殿

和州＝久世大和守。

〔阿部家文書〕。〔懷舊〕六五五―八頁。

第十八章、第二十章併看。

〔一一三〕露國官吏駐劄等ノ事ニツキ阿部正弘ヨリ應接掛ヘノ書。

安政二年三月十一日。

去五日發書二通並魯夷ヘ被申入候書付案魯夷差出候橫文字和解都合六冊共令披見候河內守ヘ向ケ被差越候旨モ逐一令承知候扨强悍悍屈ノ布哇廷既ニ約條濟ノ應接ト申此節ノ模樣ハ別テ粗暴ニモ有之殊ニ右書狀被差立候頃合ハ過日戶田沖ヘ出去候亞米利加商船立戾リ下田ニテハ佛蘭西船渡來何角大混雜心配勞擾被致候段呉々深察入申候前文被差越候書付之內亞人下田ヘ上陸罷在候ニ付後日魯西亞人上陸止宿ノ弊例有之テハト夫ヲ差押置候爲メ布哇廷ヨリ書付ケ爲差出候儀爲國家大慶此事ニ候切支丹ヲ我邦人ヘ相勸不申樣我邦

人ヨリ學度申共敎申間敷一件並三港ノ正法一件被申入候通リニ漸ク使節書面差出候ヘ共
其差出方如何ニモ懸念ニ付此上ハ此方申通不承知ニ候ハヽ條約モ不用ト可心得ト可申達
歟自分共ヨリ彼國政府ヘ直ニ掛合可申歟ト被伺候段ハ全體此二ケ條モ大ニ被骨折尤之次
第ニ候得共被申聞候通リ條約書ニ國法ニ背候モノハ捕渡等ノ文モ有之難民三港ヘ渡來之
規則有之上ハ軍艦商船迚モ同樣其國法ヲ相守可申ハ必定之筋ニモ有之殊ニ此度條約爲取
替モ相濟候後ニモ各ヲ被差遣候ハ全官吏一件ヲ主ト致候儀ニ有之間前文二ケ條ハ先々十
分ニ無之共被差出候書付ニテ以來之證據ニ更ニ不相成ト申儀ニモ無之間其儘ニ致置此方ニ
テ嚴重御國內御取締付候方ト可被心得候扨又去月二十九日申遣候儀ニ付被申聞候趣
亞人上陸之儘ニテ亞米利加船出帆之儀使節ヘ申談候テモ亞人上陸ハ下田奉行伺濟之儀故布
恬廷ヘノミ可被申聞筋無之申張此上可申談辭柄モ無之トノ儀右亞人上陸縱ヒ下田奉行差
許候儀ニ有之共亞人心得違ニテノ事ニ有之共其應接方ヨリ上陸ノ根原ハ兎モ角モ上陸爲
致候儀吾國禁ニテ不相成儀ヲ申聞使節其譯合能々相辨居一旦ハ亞船雇入之儀ヲハ破談致
シ日本船拜借仕度ト迄申出候位ノ事然ルニ亦々最前ヘ戾リ亞船ヘ乘組出帆之趣ニ付不相
成段應接中自儘ニ國禁ヲ犯シ上陸罷在候モノハ其儘捨置出帆爲致候段ハ國禁ニ觸候ヲ乍
存此儀ニ及候ハ無理押付ノ所業ニ相違無之是ヲ辭柄ニ致シ江戶ヨリ官命筋樣ト魯夷ヘ絕
交手切申込候テモ可然被存且又官吏一件左衛門尉死生存亡ニ拘リ候迄ニ申詰候趣元ヨリ

左樣可有之筈兼テノ覺悟ニ候尤過日漸使節爲差出候書付ニテ亞米利加之條約ヨリ餘程都合ニモ可相成趣ニ見込候ヘトモ此程差出候書付ニテモ差置候以前人差越候迄ニテ官吏差置候事ハ彼方ニテハ決定イタシ候趣ニ相見其段申遣候處右ハ素ヨリ魯西亞ノ條約ニ付申サハ亞米利加抔申候ハ皆此方手內迄ノ蹈ヘニテ彼方ニオイテハ聊以他國ヘ相拘候筋無之候間右之處ニオイテハ聊以仔細モ有之間敷候（此答振種々相考候ヘトモ何分解兼候官吏差遣候儀ハ彼方ニテハ決定ニ相見候ト申答ニ亞米利加抔申候ハ皆此方手ノ內迄ノ蹈ヘニテト申處且聊仔細モ有之間敷ト有之儀解方又宜儀ニモ候哉何分分リ兼申候）實ニ仔細モ無之事ニ候ヘハ宜候ヘ共文言行違ニテハ不容易事故尚申遣候必竟官吏一件ハ條約濟ノ儀ニ付彼六箇敷申募候ハヽ死生之界ニテ彼ヲ動シ候外無之亞米利加船過日出帆致候儀ハ使節ノ我儘ニ相違無之其罪ニ乘テ絕交手切申込候ハヽ自然官吏一件モ存外平易ニ居合候モ難計ト見込候事故段々申遣候事ニ候ヘ共最早只今ト相成候テハ機會ニ後レ申出候事ニモ相成間敷官吏一條ハ此度被差遣候眼目ノ事故精々相盡シ候儀ハ勿論ニ候ヘ共尚乍重々幾重ニモ勘辨思慮ヲ巡ラシ爲國家御趣意相貫候樣精勤有之度存候事

三月十一日　伊勢守

川路左衛門尉殿
水野筑後守殿
岩瀬修理殿

〔一四〕同上ニツキ阿部正弘ヨリ德川齊昭ヘノ書。　安政二年三月十七日。

今般川路左衞門尉初三人魯西亞應接掛リノ者共一旦中歸リ仕申候右譯ハ兼々御承知被爲在候官吏一件是非々々書面等取置候樣厚申談應接ニ差遣シ候處先々一同致心配書面モ取リ候得共何分十分ニ無之候ニ付乍憚私ヨリ度々嚴敷直書ヲ以應接懸リヘモ申遣候處左衞門尉初ニモ格別骨折苦心仕候得共右差出候書面漸差出候事ニ付此上ハ如何樣申談候共最早申談方無之旨段々申聞候事ニ御座候左候ハヽ十分ニハ無之候得共先ツ書面差出シ此上官吏之儀ハ懸合無之テハ差置候事ニ不致旨故先ツ々々右書面ニテ差置候事ニ御座候切支丹之儀御國禁ニ付云々應接掛ヨリ改テ申達候處此程中紀伊守ヨリ差上候書面之通是又漸書面差出シ申候右ニ付應接掛リニモ夫々見込寬猛强弱有之乍去何レモ割レ候儀ニハ無之此書面ニテ差置可申哉又ハ魯西亞政府ヘ懸合ニイタシ可申論有之段々三奉行ヲ初海防掛リノ者共大目付御目付浦賀奉行箱館奉行等一同評論ヲ盡サセ同列共若年寄共ニモ一同再再論談仕候處只今魯西亞政府ヘ改テ懸合ハ不宜今般差出候書面モ十分ニハ無之候得共後日證據ニ不相成候ト申儀ニモ無之候間素ヨリ此方ヨリ申談出シ候事故先々書面モ差出候上ハ應接ハ其儘差置御國禁ノ段ハ重々申談此上御國內ノ御取締ハ彌嚴重ノ上ニモ嚴重ニイタシ萬一此上渡來之船右宗旨此方愚民等敎候儀等有之候ハヽ其節ハ右ヲ以一體ノ條約モ何モ不殘御斷相成候テモ可然哉ト同一評決仕候間御登城モ被爲在候ハヽ重々御相談

モ申上委細ノ儀モ可申上ト存候處御不快ニテ御不參左衞門尉初ニモ猶又出立差急候事故右之事ニ取計早々下田ヘ出立同所御取締向並右等之應接モ爲取扱候積尤此上罷越候テ聊ニテモ此方ノ後日都合宜儀ニ候ハヽ書面モ夫々爲直請取候事ニモ可相成歟是レハ何レ彼地ヘ罷越候上之儀ニテ只今ヨリ何共不被申上候事ニ御座候右荒增之廉々今日御登城不被爲在候儀故認取差上申候御用多亂筆別テ御讀分呉々奉願候蝦夷地ノ儀モ追々取調夫々不遠御伺等被仰出候事ニ御座候委細之儀ハ不遠可申上候何モ要用ノミ申上候燈下認誤字等多可有之萬々御仁免可被成下候以上

三月十七日夜　阿部伊勢守

第十八章併看。

〔己〕英國通交ノ件。

〔一〕英艦長崎ニ來リ英露交戰中ナルヲ以テ日本諸港ニ英國艦船ノ繫泊ヲ許サレンコトヲ請フノ書。　安政元年閏七月十五日。

〔起原〕下二一八二―四頁。原英文ヲ蘭文ニ譯シ、更ニ和文ニ復譯シタルモノ。

長崎之地長タル御奉行樣ヘ

一大「ブリタニヤ」ノ女王ノ趣意ニテ其一方ノ向ト共ニ衆議一致シテ彼ノ魯西亞國ヨリ歐

羅巴ヲ押領スルノ手段アルヲ以テ歐羅巴ノ爲メ防禦セント欲シテ魯西亞國ニ此度軍ヲ發出仕候事柄ニ付告知ノ書面寫差出申候此段御承知可被下候

一此軍ニ付テハ經久ノ次第有之相始候事ニ候

一數多ノ軍勢既ニ合戰ニ差出申候

一魯西亞國ノ船勢等ハ計策盡果不得止事其自己ノ港ニ引返シ潜居候

一魯西亞國ノ諸營數ケ所手ニ入レ或ハ荒廢セシメ將又魯西亞ノ內トルコニ境界セシ所ニ於テハ即「トルコ」ニ魯西亞ノ軍勢入込候ニ付伐退ケ候處散々ノ敗色ニテ退去ニ及ヒ候

一右之通之趣意ニ有之候間今般決談イタシ魯西亞ノ船々砦ハ勿論其退方ノ商館ニ至ル迄手ニ入レ候歟滅却イタシ候心得ニ候處魯西亞國ハ漸々其境界ヲ廣メ「サガリーン」地名及ヒ蝦夷ノ千島ニモ及ホシ頓テ日本ニ志アル事ハ明的顯然ノ事ニ候

一大「ブリタニヤ」女王ノ趣意ニテ海軍ノ大將トシテ私儀東方ノ海上ニ發軍之命有之即此手ノ船勢只今此地ニ罷出候右一件ノ爲メ外ニモ數多ノ船勢出掛ケ候儀ニ候得ハ究テ度度日本ノ諸港ニ參リ候儀可有之勿論是ハ魯西亞ノ軍船或ハ右魯西亞方ヨリ被奪候船モ有之候時ハ是ヲ防キ候爲ニ候勿論右等ノ爲メニ御當國ノ港ニ罷出候儀モ有之候事ニ付テハ大「ブリタニヤ」國ノミノ趣意ニモ無之同國一致ノ向一同ノ趣意ニ候此儀入御聞置候

一右樣之次第ニ御座候得ハ「ブリタニヤ」國奉行所ノ心得ニテハ親睦ノ旨ヲ主トシ何卒日

本帝國或ハ其從屬ノ高貴ノ方ニ對シテノ軍戰等ノ儀心ノ及フ丈相避候樣仕度志願ニ候先斯ノ如キ心得ニ有之候ニ付テハ無餘儀情合御汲分日本於御奉行所御勘考被下御當國港等ニ此度之一件一味之者罷出候儀御免許御座候樣所希候

一右之譯合ニ御座候間可然樣御含被是都合能相整萬端ノ御差圖被成下萬事差支無御座樣相成當長崎港ハ勿論日本國領之港及ヒ其他ノ場所ニ罷出候儀相叶候樣仕度心願ニ御座候

「ブリタニヤ」女王ノ船「ウインセストル」號船ニ於テ

暦數千八百五十四年第九月七日（安政元年寅閏七月十五日ニ當ル）

スコウトベイナクト（官名）　大將　ヤーメス　ステイルリンキ（人名）

右「エゲレス」語阿蘭語ニ飜譯仕候　カピタン　ドンクル　キユルシユス

ウホンチエスター(Winchester)。ナイト(Knight爵名ナリ)。海軍少將ジエームス　スターリング(Jam's Stirling)。

〔二〕日英條約。　安政元年八月廿三日。

最初ノ日英條約。〔近事鈔〕卷二。〔起原〕中一二〇六—七頁。

約文（和文本書）

此度大貌利太涅亞王國之軍船「ウインセストル」ノ總督「ヤーメス　ステイルリンギ」ニ相會シ長崎奉行水野筑後守御目付永井岩之亟大日本帝國政府之命ヲ請薪水食料等船中必用ノ品ヲ辨シ又ハ破船修理ノ爲メ肥前ノ長崎ト松前ノ箱館トノ兩港ニ貌利太涅亞國之船ヲ寄スルコトヲ差免ス

長崎ハ今ヨリ其用ヲ辨シ箱館ハ此港退帆ノ日ヨリ五十日ヲ經テ船ヲ寄スヘシ尤其地々々

ノ法度ニ從フヘシ

難風ニ逢船損セスシテ右兩港之外ヘ猥ニ渡來不相成事

此後渡來ノ船若日本ノ法度ヲ犯ス事アラハ右之兩港ニ來ルヲ禁ス船中乗組之者法ヲ犯サハ其船將屹度其罪ヲ糺サルヘシ

此度約スル兩港之外今ヨリ後外國ヘ差免ス事アラハ其國ト同樣貌利太涅亞船民ヲモ可取扱事

右之通決定之上ハ尙大日本國大君ト大貌利太涅亞女王ト承諾之旨委任貴臣ノ書面今ヨリ十二ケ月中長崎ニ於テ取替可申事

右之條件政府之命ニヨリテ定ムル上ハ此後渡來之船將カハルトモ此約ハカハル事ナシ

嘉永七甲寅年八月二十三日於長崎鎭府定之

水野筑後守花押

永井岩之丞花押

長崎奉行水野忠德（初甲子次郎）・目付永井尙志（玄蕃頭、主水正）・

〔近事鈔〕卷二・各國條約類纂等ニ此規定ノ英文ヨリ和譯シタルモノヲ載ス、今故ラニ當

（同條約英文蘭譯ノ和譯）

日本港內ニ貌利太泥亞ノ船々入帆免許ノ規定取極

東印度並其近海ニ於テ「ブリタニヤ」女王ノ船々總督「リツトルスコウトベイナクト」名官ヤ

時蘭文ヨリ復譯シタルモノノ茲ニ錄ス。

キメス　ステイルリンギ（人名）ト此一件取極ノ事ヲ日本國帝ヨリ命セラレ長崎御奉行水野筑後守御目付永井岩之丞ト之談決左ノ通ニ有之候

第一箇條

肥前長崎並松前箱館之兩港貎利太泥亞船ノ爲メニ開候ハ船修覆及薪水食料其外船中必用ノ品ハ何品ニ不限得ン爲ニ有之候事

第二箇條

右之趣意ニテ長崎ハ決談之日ヨリ開港箱館ハ總督此港ノ退帆ノ日ヨリ五十日ヲ經テ開港可有之候將又其地々々之法度可相守候事

第三箇條

難風ニ逢ヒ或ハ進退スル事能ハサル船々ノミ國帝政府ノ免許ナクシテ右前條ニ有之兩港ノ外ヘ入帆致候儀相叶候事

第四箇條

貎利太泥亞船日本之港ニ於テ日本之法度可相守候將又主役或ハ船將右法度ヲ犯シ候時ハ可被及閉港候末々ノ者法度ヲ犯シ候ハヽ其船將ヘ可被引渡候左候ハヽ其罪相糺可申候

第五箇條

今開有之候港並或ル外國船民ノ爲ニ此後被相開候日本ノ港ニ於テ貎利太泥亞船民事蘭人

唐人ノ御取扱之外最御懇恵ヲ蒙候國民同様御取扱有之候事

第六箇條

右之通決着可致候尙大貌利太泥亞女王ト日本國帝ト取極之旨之書面ハ談決ノ日ヨリ十二ケ月中ニ於長崎取替可申事

第七箇條

此取極決着致候上ハ日本渡來之將官此取極ヲ變申間敷事

爲證據暦數千八百五十四年第十月十四日（嘉永七年寅八月廿三日）於長崎調印置候

ヤーメス　スティルリンギ　人名印

〔註〕此條約安政二年八月廿九日（一八五五年十月九日）長崎ニ於テ本書交換ヲ了ス。

〔庚〕外人ト賣女トニ關スル件。

第十九章併看。

〔起原〕下二一七四頁。

海防掛ト阿部正弘トノ意見相違。　安政元年九月。

下田表異人休息所へ賣女差出候義ニ付再應評議仕申上候書付

海防掛

夷人休息所へ賣女差出候義ニ付御書取之趣得ト拜見仕候處右ハ私共ニ於テモ素好候筋ニハ無之候得共無餘儀塲合ト最前之通リ申上候處御書取之趣逸々恐伏奉感戴候事ノミニシテ別段可申上廉無之何卒所之奉行右之趣奉感戴御趣意貫キ候樣仕度奉存候間右御書取下田奉行へ拜見被仰付候方ト奉存候依之御下ヶ被成候御書取返上仕此段申上候以上

寅九月　伊勢守

〔起原〕下二一七四－九頁・

夷人休息所へ賣女差出候一件ニ付見込書

條約書附錄ニ徘徊ノ者休息所ハ追テ其爲旅店設クルマテ下田了仙寺柿崎玉泉寺二ヶ所ヲ定置ヘシト有之候上ハ追々休息所取建遣候ハ勿論之儀ニ候下田奉行見込市店宿屋等ニテ休息致候樣相成候テハ和人亞人ノ差別無之席坐ヲ同シ飲食ヲ倶ニシ終ニハ密賣買婦女混交之媒妁ト成行候テハ不容易トノ事是ハ申迄モ無之既ニ奉行書付最初ニ認有之通休息所定置不申テハ不取締ニ付相應之塲所見立候迄了仙寺玉泉寺ニ相定候上ハ改テ不取締之市店宿屋等へ相定候筈無之武濱船造塲ハ町家へ川筋隔リ取締宜敷長崎出島ニ比競可致塲所ニ付是ヘト申儀ハ至極尤ト存候此所ハ御臺塲築立度地勢ニモ候へ共夫是取合追々評議可被致候差向存ゝへ候ハ夷人休息所へ兩三軒茶亭取建道中筋食(マヽ)賣女同樣ノモノ相撰候テ茶菓酒肴ノ給仕爲致夷人遠洋風濤ノ難苦ヲ慰勞致隨分懇切取扱候ハヽ元ヨリ夷人迚モ人情ニ

於テ異リ候儀有之間敷寛大之御處置ニ感戴可致トノ事然ル處御勘定奉行初評議之趣ニテ
ハ奉行能在候場所ヘ隱賣女差置候姿ニテハ失體ニ有之候間表向之賣女之方可然ト申様之
見込ニ候賣女ヲ表ニ顯シ候ト顯シ不申トハ差置テ權宜ノ策トハ乍申右様ノ者夷人ノ翫物
ニ差出男女之交迄差許候ハ如何ニ候ハヽ哉成程夷人迚モ人情ニ相違ハ有之間敷寛大之御
處置ヲ感戴モ可致ナレ共寛大之御處置モ際限有之儀ニテ既ニ是迄之御處置二百年來ノ御
國法ニ不拘寛大之御取扱廉々有之彼人情アラハ己ニ感戴致居候廉モ可有之故ニ彼ノ動靜
全ク和親取結悅喜之體ニ相見ヘ居候猶此上必シモ男女之欲迄爲遂候迄ニ至不申共彼ニ事
缺候儀ニモ無之勿論表立最初ヨリ願立候事柄ニモ無之畢竟此方ヨリノ察シニ候而矢張是
迄之手續ニテ不相替緩優ニ取扱候ハヽ速ニ事破レ候儀モ有之間敷且右様婦女差出置候テ
夷人共ヘ市店ニテ飮食所望致申間敷申聞市中ノ者ヘモ其段心得候様急度申付候ハヽ和
人夷人ノ差別相立遊步ノ里數モ縮リ可申ハ必定トノ事ニ候得共是モ推察見越ニテ被請合不申
幾兩三町ノ茶店ヘ十八二十人婦女被置候迚數百人ノ夷人相手ニモ事足リ不申彼人々惑
溺致シ候風儀ニ相成候ハヽ何レ夷人ノ內重立候者ノミ日々耽樂ヲ極メ下賤ノ者ハ徒ラ
ニ茶亭ノ歡樂ヲ遙ニ見物致位ニテ銘々其情慾ヲ遂ケ不申候ハヽ眼前淫靡ノ情慾ヲ見受候
ヨリ我儘增長矢張市中之女子等ヘ目懸候風ニ可相成歟ト被察左候テハ和人夷人ノ差別ハ一
向ニ相立不申是迄迚モ了仙寺休息所ト相成候テモ先ツ重立候者來リ休息致シ大勢ノ夷人

ニテ方々ヘ散亂遊歩致候ハ一向ニ滅シ不申由ニ候得ハ中々市中飲食ノ防モ七里遊歩ノ縮ニモ不相成都テ注文通リニハ參リ申間敷候且又御勘定奉行初評議ニ賣色ヲモ委ネ彼ノ氣先ヲ折キ候方トノ事ニ候ヘ共少々ノ氣先ナラハ賣女ニテ折ケモ可申ナレ共大箇條ニ至リテハ決テ賣女モ用立申間敷殊ニ一時其節限リノ事ニ候得ハ少々面倒ナル儀ニテモ其節婦人ヲ以テ其心ヲ蕩カシ彼十分ノ望ヲ六七分ニテ爲濟候樣ノ事モ出來可申ナレ共毎々日々ノ儀ニテハ彼一旦婦人ニ性根ヲ被奪此方之注文通ニ相成候テモ跡ニテ是ハト後悔再度彼是可申出今日承諾ノ事ヲ明日違變酒ニ醉候モノ醉中之儀ハ醒候テハ間違ト相替候類ニテ節角苦辛致シ婦女差出候テモ翌日手戻リ候テハ何之詮モ無之且條約十一箇條目ニ兩國政府ニ於テ無據儀有之候模樣ニ寄合衆國官吏ノモノ下田ヘ差置キ候儀モ可有之トノ約定ヲ防キ候手立ニモ可相成歟尤彼强驍之性質ニテ一度申出候事ハ容易ニ翻リ不申旨ニ候得ハ見居ハ付兼候得共前ニモ申候通リ小事ハ如何樣トモ可相成歟ナレトモ商館取立官吏差置候樣之大箇條ハ交易ヲ願候抔ト同樣國王ヨリノ命ヲ以テ來リ候ヘハ一時婦人之遊ヨリ其心和キ存詰タル儀ヲ休メニ致ス樣ニハ迚モ參リ申間敷候就テハ箇樣ニ術計ヲ用ヒ候ヨリハ官吏差置候儀ハ何分承知難致ト穩和ニ斷付候外手段有之間敷假令是ニテ戰爭ヲ引出シ候モ無致方ト申位ニ迄斷詰夫ニテモ彼承知不致位ナラハ迚モ賣女ノ計策ニハ陷リ不申候右ノ模樣ト存候ヘハ賣女一件格別利益モ無之少々應接致能キ位迄之事ニ可有之詰リ御目

付評議書ニ有之通リ妓館ヲ設ケ候丈ケノ惡習ヲ相增候ノミニ候但御目付見込モ下田淫靡ノ風俗ニ付夷人耳目ニ慣候上ハ如何樣ノ儀出來モ難計ニ付奉行見込通ヲ以取計一方ニ片寄一體之土風改革致度趣意ニ相見候得共此改革不容易事ニテ迚モ賣女之一件ヨリ此取締ヲ付候ト申ハ六ケ敷被存候全體長崎出島ノ如ク賣女立入候テモ館外一歩モ夷人他出不致候ハヽ取締付候得共數百人ノ夷人七里四方遊步勝手次第ニ候得ハ五人十人休息所ノ賣女ヲ以テ華夷ノ差別相立候ハ及ヒ難キ事ニ候右之通無益之事ニ有之ノミナラス其後患賣女二十人差出候ハヽ彼不足ニテ三十人出シ呉ト申儀モ可有之三十人差出候ハヽ序ニ四十人五十人ト申樣ニ段々相募候ハヽ最初ハ寬大ノ御處置ト難有感戴致候夷人初ヲ忘レ我儘增長十日ニシテ退帆可致者モ廿日滯留候樣相成其他ノ國々モ日本之妓館珍敷ト傳聞比々ト渡來致候ハヽ支那印度地方ノ商船並近海鯨漁之船共皆々間合ニ下田ニ來リ保養致候風習トモ可相成其弊中々亞米利加人下田市中之婦女ト萬一之儀有之テハト申位之事ニハ無之大ナル害ト可成申候將又下田ニ妓館相始リ候テハ御國人氣忽相弛武備之整只サヘ隙取可申ニ別テ隙取可申下田港御固ヲ持候大名家々ノ人數抔モ自然ト遊冶之風習ヲ生シ却テ不取締ノ姿ニモ可相成ト存候尤先々諸事此儘ト申ニテハ無之精々如何樣ニモ互ニ骨折改革致度ハ勿論ニ候得共先差向賣女一件之見込申述候猶一覽熟考祈入候

〔起原〕下二二四四—五頁。〔續々泰平〕安政三年八月。〔嘉永明治〕卷五、一三—四葉。〔三十年史〕二三八—九頁。〔十五代史〕卷廿一、五九頁。第十九章併看。

〔辛〕外國通航貿易ヲ開キ富強ノ基本トナスノ件。

阿部正弘ヨリ諸有司ヘノ問議。　安政三年八月四日。

覺

和蘭蒸氣船將ヨリ申出候英吉利國ヨリ猶又交易取結相願可申哉之儀ニ付夫々評議致シ被申聞候趣モ有之候處右ハ不容易大議ニ付篤ト及評議候上ナラテハ何レ共難及差圖然ル處西洋諸州交易彌盛ニ相成候趣當節之模樣柄ニテハ往々之處甚以痛心懸念之事ニ候交易御許容ニ相成候節ハ魯西亞亞米利加英吉利佛蘭西四箇國ハ勿論其餘國々ヨリ舉テ願出可申其節彼ハ御許容是ハ難相成トノ議論モ相立申間敷右樣相成候上ハ一向ニ本邦ニテモ航海之嚴禁ヲ御變革被遊外國々ヘモ海船被差向交易互市ノ利益ヲ以テ富國強兵之基本ニ被成候方方今之時勢ニ協ヒ可然哉ニ候得共夫トテモ如何樣勉強出精習練致サセ候テモ此上五年七年ヲ經不申候テハ萬里之航海無覺束儀ニ可有之左候時ハ日本全國所產ノ日用諸品之際分ヲ以外國無限之求ニ應シ候儀殊更銅之儀ハ追々諸山相衰候哉ニ相聞當節御備向必要之品ニテ既ニ梵鐘鑄換之儀ヲモ被仰出候儀ニ付和蘭ヘ渡シ來候斤數省減致度程之折柄ニ有之西洋諸州本邦ト交易相望候モ定テ銅渡シ方願意主ニ可有之哉其外諸渡物等如何程之仕法ニ致シ候ハヽ差支無之御國力相續キ可申哉兎ニ角交易御差許之有無ニ不拘右大本之處取調置候方可然長崎下田箱館ハ別テ實地取計之事故得其意一同篤ト致評議可被申聞

候事

〔壬〕留學生爪哇派遣ノ件。

阿部正弘ヨリ海防掛ヘノ問議。　安政三年八月。

覺

蒸氣船運用其外爲傳習長崎表ヘ蘭人御呼寄追々傳習受候者被差遣候處同處ニテハ從來之仕來モ有之彼是事六ヶ敷究屈之儀ノミニ付手廣ニ修業モ難相成稽古人ニ於テモ日數相掛リ候內ニハ歸心難止塲合モ有之迚モ十分ニ修業行屆申間敷航海術等之儀ハ猶更之儀ニ候間一向ニ年少壯健之者相撰總督一同之者引纏咬嵧吧表ヘ被差遣候ハヽ罷越候者モ決心イタシ航海術ヲ始十分ニ修業出來可致後來ノ弊害ヲ懸念イタシ候テハ際限モ無之イツ迄モ居スクマリ相屈候儘伸候期ハ有之間敷最早彼是之議論ニ不拘傳習人咬嵧吧表ヘ被差遣方ニ可有之哉利害得失篤ト勘辨イタシ可被申聞候事

〔阿部家文書〕。〔懷舊〕七九五—六

第廿五章併看。

咬嵧吧（カラツパ）＝爪哇。

〔癸〕米國總領事「ハリス」出府請求ノ件。

閣老ヨリ「ハリス」ヘノ書。　安政四年正月。

貴國ヨリ日本之事務ニ關係セル重大ノ事件ヲ自分共ヘ直ニ可申立旨貴國大統領ヨリ命有之趣其外之件々ニテモ去年九月中之書翰並十二月ニ至リ猶申立之書面夫々熟覽セシム然ル處下田箱館開港以來兩國之諸件ヲ辨セン爲メ兩所ハ奉行差置委任セシムル上ハ假令重大之事ト雖モ申立候事共アラバ其地奉行ヘ申聞ラル丶ハ即自分共ヘ直ニ申立候モ同樣ナレハ隔意ナク奉行ヘ談話アルベシ此趣告知セシムルモノナリ

安政四年丁巳正月

堀田備中守花押
阿部伊勢守花押
牧野備前守花押
久世大和守花押
內藤紀伊守花押

〔起原〕上三五一—二頁。〔三十年史〕二三三頁。一八五七年二月廿五日「ハリス」カ此書ヲ接受シタルコト Townsend Harris 一一二頁ニ見ユ。此書ニ對スル「ハリス」ノ異議ハ〔起原〕上三五七—六二頁ニ見ユ。

第三十三章併看。

以下四通備後福山〔內藤文書〕。

御役柄＝閣老ノ職。

熙德院＝實祖父正倫。

第三。雜事。

〔甲〕福山藩政ニ關スル件。

〔一〕領內軍備ニツキ阿部正弘ヨリ在藩地重臣ヘノ親書。

〔ア〕軍事整理ニツキ。

弘化三年十一月二十八日。

（上略）其表靜謐城內外無別條文武共引立チ候方ニ而在町共不取締之義モ無之旨追々承知御役柄ニ對シ候テモ大喜不過之存候然ハ守城備立之義安永之度熙德院樣ヨリ先々角右衛門殿エ改テ被仰付士大將ヲ初諸士以下ニ迄心得方ハ勿論行軍陣取之圖其外夫馬貫目積リ等諸事無殘處委細取調有之殊ニ其比之人高ニ應シ且公儀軍役等モ大旨相當致居熙德院樣ニモ家之寶記（マヽ）ト御滿足被遊候旨御自分方ヘ御書下之趣モ有之旁家之軍法ト御治定被遊候思召ニハ可有御座候得共改テ御觸示シ不被成置星霜押移全ク徒法ト相成居既ニ一昨年頃迄ハ手元ニ秘藏有之年寄共初不存次第ニテ畢竟ハ自分心掛薄キ故之事ニ候追々承知モ有之通近來外寇ノ患モ時々有之追々被仰出候趣モ有之就夫其表援兵之備幷海岸之手當等近來用人共厚ク骨折追々軍備モ相整候樣申越深ク滿足候ヘ共前條一體之軍法觸示シ無之故却テ其手當ハ無之候今更致方モ無之實ハ根本ノ備サエ相立居候エハ援兵海岸手當等之枝葉

ハ如何樣トモ可相成儀ニ付此度右軍法改テ觸出シ候方可然存候乍去古今時勢之相違又人數增減モ可有之事ニテ其儘觸出シニモ參間敷哉因テ右ヲ土臺トイタシ尙當時ノ人高ニ應シ或ハ當今第一之利器砲術方ヲモ相增シ彼是損益仕組替ト相成治定之上東西用人以上ハ不及申其餘元メ役大目付等ハ右之書類盡ク爲心得右機密之向々何レモ相心得候上ニテ諸役向心得之條々ハ夫々密々申渡置永久不相崩候樣備立取極置度存候右ハ御自分家之義ハ代々心掛厚ク骨折候譯モ有之候間此度モ御自分ヘ申付候事ニ候因テ一同評議ノ上異存モ無之候ハ軍者ヘモ被遂評議早々仕組替ニ相成候樣致度候尤是迄援兵海岸手當等仕組之義モ用人共厚ク骨折罷在候義ニ付評議次第ニテ御自分ヨリ萬端差圖之上用人共ヘ被申談被取扱候テモ可然軍者ヘ示談等ノ便利モ可然哉ト遠察イタシ候早々衆議一決ノ上ハ否早速早便ヲ以被申越候樣致度候扨承知モ可有之候ヘ共昨年來別テ異賊輕蔑之振廻有之江戶近海ヘモ度々來舶甚心配之事ニ候付テハ公邊ニテモ諸事今一際嚴重御手當可被遊御模樣モ有之且當時ハ諸家規範共可被申程ニ備向モ行屆居不申候テハ不相成事故呉々出精世話賴入候且又此度人數操練之向モ相濟候上ハ手筈次第來春頃ヨリモ爲相始度殊ニ近頃人意モ一致ノ趣哉ニ付時ヲ不失候樣有之度依テ可成丈早々ニモ觸出シ度心組ニ候乍併永久之儀ニモ相成候事故匆卒ノ際ニモ難參候半歟萬端思慮可給候右操練相始候トテ一時ノ形容花美ノ風儀ハ素ヨリ不好事ニテ質素第一實地ニ永續之處心掛肝要之事ニ候右等推考之上厚

轉席｜弘化二年雁ノ間席ヨリ帝鑑席ニ陞轉ス。

ク評議有之候樣存候（下略）

十一月廿八日　　　　　　　正弘

内藤角右衞門殿

尙々（中略）扨其表家中文武共出精之者追々相增上下一致骨折候趣各ニモ聽聞一覽等繁繁有之畢竟ハ政府一致萬端行屆候故之義ト不一方大慶之至ニ候此上萬端無油斷引キ立テ賴入候本文ニモ申進候通此度援兵幷領海備向其外武器陣具粮米等ニ至迄無殘處具足イタシ候樣令承知每々用人共ニモ厚ク骨折出精候故之儀先以安心吳々モ滿足セシメ候此旨用人共ヘ序ニ宜敷申傳ヘ給度候扨自分儀不肖ニテ家督以來年數モ無之處追々昇進終ニ執政之列ニ被加殊ニ筆頭ニモ罷成御勝手掛幷海防ノ御用モ被命誠ニ恐怖之至ニ候其他一同ニモ嘸々日夜心配被吳候事ト存候御役成以來モ實ニ無比類奉蒙特恩殊ニ轉席迄モ蒙仰候段對祖先候テモ冥加ナル事ニ候ヘ共萬端不行屆而已ニテ何時失策可有之哉モ難計實ニ大任難堪苦心不啻候申迄モ無之候得共其地ニテモ何成トモ心付候義ハ一同ニモ聊モ無服臟匡救有之候樣賴入候（下略）

（イ）練兵及ビ軍令ニツキ。　弘化三年六月。

公邊海防之儀厚被仰出有之備向モ追々出來ニ付人馬操練幷器械之用方不相試候而ハ萬々

一之節指揮ニ應シ一致ノ働無覺束候間公邊エ伺濟之上操練之儀申渡候處一同厚ク心掛武器モ追々手厚ニ相成候旨一段ニ候萬一外寇有之何レニ人數差向候モ難計候間常ニ一己ヲ相勵用立候樣可心掛總テ軍事ハ人和第一ニ候間銘々厚ク相心得禁令軍法堅相守頭タル者ハ支配ノ者ヲ無偏頗誠實ニ取扱支配之者ハ奉行頭人ノ指圖ヲ相守相互之爲第一ニ可心掛義勿論ノ事ニ候兼テ操練ニテ備ノ強弱ニモ拘リ候間若犯法ノ者於有之者急度可申付候條其旨可相心得候尙諸役携軍令等之儀者追々可申渡候

六月　正弘

ウ、軍制改革完成ニツキ。　弘化四年七月九日。

(上略)偖先般ハ備向仕組替之義ニ付萬端其許ヘ委任イタシ候處早速夫々取調出來不日ニ相廻サレ則能々熟覽推考オヨヒ候處人數ニ應シ時勢ニ隨ヒ器械貫目積等ニ至迄諸事無殘處全備イタシ聊可否可申所モ無之實ニ當家永世ノ陣法確立イタシ第一凞德院樣段々之尊慮モ相立次ニ先々角右衞門殿丹誠モ顯レ候次第當時對御役邊旁以大慶不少安心之至ニ候殊ニ彼是多端ニ取調速ニ成功之段用人共軍者以下夫々出精之義ニモ候得共畢竟其許指揮行屆候故之義ト吳々感歎イタシ候事ニ候(下略)

七月九日　正弘(華押)

内藤角右衛門殿

〔エ〕會津藩軍制傳習ニツキ。　安政元年九月十三日。

操練移＝練兵法傳習。

家老下宮三郎右衛門。

當時府下高田ニ別邸ヲ有シ、屢〻武術練習ヲ行フ。

會津藩軍事奉行黑河内十大夫ノ事、第三十二章ニ見ユ。

(上略)當年ハ作物モ宜趣安堵イタシ候下々迄難澁ノ者無之樣致度存候陳者先達テ内々被申越候會津家軍政操練移幷文武引立方科目等之儀縷々被申越候趣委曲令承知候每々彼是厚相心得被申越候段令滿足候扨右ニ付種々勘考イタシ候へ共右軍政操練移等之義ハ其元ニモ委細承知之通會津家ニテ深ク相秘他家へ傳授ハ勿論操練業向一覽モ容易ニ聞届無之處只管懇望イタシ候付此度不計モ別格之譯ヲ以傳來ニ相成候處更ニ無其詮是迄之姿ニ差置候テハ先方へ對シ何共申譯無之次第ニ候右等ノ義ハ此度三郎右衛門義自分存意ヲ含メ近日在番差許歸鄉申付候心組ニ候間無程其地へ着可致候付委細之義得ト令承知軍政等之義早々取極メ候樣存候且又文武引立方科目之義モ爰元一席共ヨリ評議之趣何有之候處何レモ自分存意ニ符合候間其通ニ可申遣旨申聞置候(下略)

九月十三日

尚以申入候大橋廣五郎會津行之義モ可令承知候去ル八日ニハ高田屋敷ニテ甲冑操練有之萬端無滯相濟令滿足候自分ニモ甲冑着乘馬等ニテ指揮イタシ同日薄暮辰之口屋敷へ歸リ申候存外何レモ能相整實ニ滿足ノ事ニ候會津家來黑河内十大夫相招兵要錄講釋承

當時藩ニ於テ長沼澹齋所著「兵要録」ヲ刻ス。用人安藤織馬。

〔近事鈔〕卷一。

リ候事ニイタシ相始申候委細織馬歸鄕可承候同人事操練之事ニ就テハ萬事格別骨折會津ヘモ罷越實ニ一ト通リナラズ出精自分之趣意通リ會津家軍政モ傳授濟ニテ感心イタシ候歸鄕之上ハ能々申談福山操練自分存意之通リ爰許同樣ニ習練肝要之事ト存候其後追々操練相始候ヘ共諸流混淆之仕組故金鼓之制足並之順逆等可根據基礎無之ニ付兎角整兼候事ニ候就テ舊冬松平肥後守家法相傳致懇望候處別格ヲ以承引有之候義ハ其元承知之通リニ候其後追々織馬始軍者兩人共黒河內ト大夫方ヘ差遣相傳相濟高田屋敷ニ於テ右操練移等致修業既當月八日於同所甲冑操練相催候節自分ニモ甲冑着用乘馬ニテ致指揮候處進退應援之規則聊モ無差違形勢相調愉快至極ニ候此段推量可被致依テハ會津家法ニ準ヒ軍別並ニ操練共主用ノ條々改革致シ永世ノ家法彌手厚ニイタシ度存候ニ付此度三郎右衞門在番差許自分存意申含メ歸鄕申付候　（此追書節錄）

九月十三日　正弘

內藤角右衞門殿

〔二〕藩士ノ武術奬勵ニツキ親書。

〔ア〕外船渡來ニツキ。　嘉永六年十一月。

近來異國船度々近海ヘ渡來其狀態擧動不容易儀モ相見候ニ付、於公邊防禦警衛筋ノ儀夫々

被仰出モ有之、當時於自分ハ重キ御役儀相勤居、殊ニ海防掛之儀ニ候得ハ、家中末々迄別テ軍務ノ嗜手厚ニ無之テハ不相成候事ニ候處、一統相勵、武器用意追々相整候段令滿足候、然ルニ當夏異船浦賀表ヘ渡來、其節ノ擧動一同承知ノ通リニ候處、先以無事退船ハ致候得共、今般從公儀被仰出モ有之候通、猶再度渡來ノ節ハ如何樣ノ形勢ニ可相成モ難計、萬一彼ヨリ不法ノ狼藉相働候歟、來艦ノ模樣ニ寄候テハ、急速出張諸藩ノ指揮致候儀可有之、其節ニ至テハ家中ノ者共平生之覺悟有之儀別段申聞候ニモ不及候得共、上下一致ニ相成、昇平ノ御高恩ヲ奉報候ハ此時ト存込、孰レモ抛身命汚名ヲ末代ニ不殘樣彌以義勇ノ心取守候儀肝要ニ候、依テハ平生文武二途不振候テハ自然案外ノ不覺ヲ取候儀故、先達テ如申出、文武場取建引立方申付候儀ニ有之候條、一統格段致出精、馬前之忠功諸藩ヨリ拔群ニ有之度事ニ候、勿論働ノ甲乙ニ寄リ恩賞ノ沙汰ニ可及候、尤功名ハ顯候テモ、疵所等ニテ勤仕難致者有之候ニ於テハ恩賞申付候上、生涯扶持方差遣可申、或ハ討死ヲ遂候ニ於テハ、恩賞ハ子孫ニ充行、若子孫無之ハ養子申付、跡目無相違爲取候上、恩賞同前可申付候、將又供ニ召連候者共ニハ其節夫々手當差遣並、妻子扶持之儀モ兼テ申付置、相當ノ取扱可遣條、右等ニ無心置功勳ヲ建可申、扨又出張ノ節ハ人氣騷敷折柄ニ候得ハ、跡々之儀別テ大切ノ事ニ候間、留守ヘ差置候者共ヘモ右等之場合厚相心得居、其節銘々定置持場嚴重ニ相守、萬端別テ入念取締方致シ、火之元等迄モ厚心付可申ハ勿論之事ニ候、若心得違等閑之勤方致

候者於有之無用捨嚴重之可及沙汰候、此旨兼テ承知スヘキ者也。

（イ）軍制改革ニツキ。

書付　伊勢

松平肥後守家軍政之儀ハ積年丹誠ニテ拔群之出兼テ令承知公邊ニ而モ武備厚御取立之御時節別而急務之事ニ候間相傳之義懇望候處別段ヲ以承知有之右軍政之基本長沼澹齋之遺法幷操練之業向迄悉皆致相傳候依而ハ御代々樣御取立被置候御軍法ニ差加ヘ永世之家法ニ致候得ハ彌〻手厚ニ可相成令滿足候是迄軍政之義東西其筋役人共モ段々骨折取立且家中一同ニモ相勵罷在候義大慶ノ至ニ候猶又此度相傳之軍政ニ相改候條一同此段令承知右ヲ基本トシテ致練磨廣ク兵道ニ涉リ銘々役前手厚ニ相成候樣心掛可申事

〔三〕阿部正弘ヨリ其藩文武掛ヘノ親書。

（ア）文武奬勵ニツキテノ諭示。　安政三年二月二十七日。

近來外夷度々渡來、從公邊被仰出ノ趣モ有之、不容易御時節柄、聊油斷不相成義ニ付、家中ノ者共文武ノ業引立方、義精々申出、誠之館造營迄モ申付候處、爰元ニテモ最初彼是不折合ノ趣相聞候得共、昨年ヨリ內用人大目付エモ掛リ申付、師範々々エ引立候樣趣意爲相

親筆備後福山阿部神社所藏。

安政元年ノ末若クハ二年ノ初ニ諭示アリタルモノト認ム、前ニ載スル〔一二〕號ヲ參照スベシ。

〔教育〕卷十、二七七–八頁。

此時大目付島田虎太郎出府シ、文武掛ノ命ゼラル。

山岡治左衛門●

示候處、右ノ段何レモ厚令承知、眞實ニ門弟引立候事ニ氣合押移、文武共致勉强、若手ノ内ニハ一際上達ノ者モ相聞、令滿足候。在所表之義ハ未規則等申達ニ不相成、師範々々氣込、門弟ノ心得方、二年ニ相成、誠一ニ修行候樣ニハ承リ不申、今一段ノ引立ト存候、右引立方之義ハ先達爰元ヨリ爲相廻候規則ヲ以早々引立候樣厚趣意師範師範ヘ爲相示、且用人大目付共ヘ掛リ申付候ハヾ、此上之引立目當モ相立、急度引立可申事ト存候間、此段一席共ヘ能々申合、取行候樣致度候、左モ無之、是迄ノ姿ニテ文武共引立不申、致因循居候テハ、分テ隣國ヘ對シ候テモ面目ヲ失ヒ候事ニテ苦慮致候。尤治左衛門儀此度其地ヘ引越申付候、就テハ同人儀文武引立方ノ趣旨最初ヨリ委細令承知候間、同人共談合ノ上爰許ノ振合ヲ以取計候樣ニ致度存候事●

但文武引立ニ付、出精ノ厚薄ニ寄リ、是迄褒美遣候義至極可然事ニハ候得共、追々相廻リ候日記拔書ヲ以相考候得バ、自然常例ノ樣ニ相成實意引立候處如何可有之哉、入用モ餘程ノ事ニ相見、廉多手數而已ニ相成候テモ不可然ト存候、右ヲ以外ニ引立方ノ義有之間敷哉ト存候事●

一○師範手當方是迄別ニ無之候得共、誠之館造營ノ事以後、爰元ノ振合ニ相成、日々師範々々出席致候ハヾ少々宛モ褒美樣ノ物遣シ候ハヾ、師範ノ塲引立ニモ可相成哉ト存候事●

〔教育〕卷十、二七一八頁。此時正弘病篤シ、特ニ島田ヲ引見シテ面諭シ、此書ヲ授ク。

家老下宮三郎右衛門。

〔昨夢〕上三四五—六頁。

〔イ〕同上。　安政四年閏五月二十二日。

此度文武規則改革申出候ニ付、其方出府差許候、爰元誠之舘文武引立方ノ模樣ハ最早大凡承知ノ通ニ候、在所表ニテモ一同文武出精致シ候趣大慶イタシ候、乍去同所ハ多人數ノ義、其上勤仕モ閑暇ニ候得バ、若手ノ者ハ勿論、一同格別誠實ニ文武出精、一際勉勵研究有之度候、當時公邊ニテモ文武厚御世話有之、追々格別出精、中ニハ拔群ノ者モ出來、實ニ目ヲ驚シ候事共ニ候、右引立方ハ自分掛リニ有之候間、家中ノ者共文武別段ニ引立不申候テハ對公邊恐入候義、殊ニ當御役中ノ事故、近國ハ勿論、天下ノ龜鑑トモ相成候事故、兼々引立方心配イタシ、自分趣意ハ兼テ三郎右衛門初年寄共エモ申遣、承知ノ事故、此上掛リノ者共ハ勿論、一同格別世話イタシ、規則其外引立方、都テ爰元同樣ニ取扱候樣三郎右衛門初エモ申聞、掛リノ者厚申合、實意ニ致世話、一際引立チ候樣可取扱事。

〔四〕家政改革ノ爲ニ藩士中或ハ怨望ヲ懷クニツキ正弘ヨリ松平慶永ヘノ書。　安政三年三月三日。

（上略）當節御改正ノ御時節ニ付家政ノ儀モ夫々心配イタシ家臣ノ多勢ノ内ニハ自然無據不行屆ノモノモ有之候ニ付少々嚴正ニ申付候而中ニハ國住居申付候者モ有之候右ニ付テハ自然重役共抔ヲ怨望致シ更ニ跡形モ無之事抔申觸レ事ヲ拵外向ヨリノ振ニ致シ張訴捨

訴抔致シ候間更ニ取用ヒモ不致却テ訴狀之致方等嚴敷穿鑿致シ居候事ニ候ヘ共未啶ト不相分心配致居申候尤右等之面々疑惑ニテ捨訴張訴等致候趣意相違之事而已故實ハ不被行事ト存候間左候得ハ定テ貴所樣御家ハ別段之近親之事故如何樣張訴捨訴等萬一可有之哉モ難計左候得ハ自然ト小生方ヘ相廻リ候ト見込可致哉モ難計又ハ御重役共且秋田彈正抔如何樣之手續抔ニテ可申聞モ難計若々萬々一訴狀ハ勿論右樣ノ事モ有之候ハ、極內御直書ニテ小生方ヘ御廻シ可被下候尤モ貴所樣御留守ニモ相成候ハ、彈正暫御跡ヘ殘リ居可申間同人ヨリ印封ニイタシ小生方手許ヘ奥廻リ花井方迄差廻シニ相成候樣致度存候夫々評議ノ上小生モ得ト承リ取計候事故小生ヲ彼是申候儀ニ候ハ、素ヨリ不苦候ヘ共却而重臣ヲ疑惑致シ種々ト虛說ヲ申觸レ人心ヲ誑惑イタサセ候テハ實ニ以ノ外ト存候間不外御近親之事故內實之處御含ニ打明ケ申上置候跡ハ御火中可被成下候以上

三月四日

第二十八章併看。

〔新伊勢〕卷一。

〔乙〕阿部正弘ト德川齊昭トノ通信ノ件。

〔一〕晝夜眼鏡幷ニ星眼鏡ノ事ニツキ正弘ノ答書。

弘化二年七月十一日。

此眼鏡ハ長崎蘭人ヨリ買ヒ入レタルモノナラン。正弘殊ニ時計ヲ好ミ、多クノ此類ヲ集メ之ヲ一室ニ陳列シタリト云フ。

『角藥入』齊昭ノ書翰ニハ『角口藥入』トアリ。

〔新伊勢〕卷一。

源哀公＝水戶藩主德川齊脩。御守殿＝德川家慶女峯子、齊脩妻。齊昭妻吉子ハ家慶妻喬子ノ妹ナリ。

（上略）將又所持之晝夜眼鏡入貴覽候處段々御丁寧ニ御挨拶蒙仰被爲入御念候御儀奉存候

（中略）

猶以被仰下候御物星眼鏡幷角藥入御願之通御拜借相成難有思召候旨ノ處爾來一日モ快晴無之御品モ小損モ御座候得ハ長々御拜借モ被成御心配候故數日快晴モ無之候ハヾ一ト先可被成御返納思召之旨委細蒙仰候趣具ニ達御聽候處其內快晴モ可有御座候間無御配慮寛々御拜借得ト御覽御座候樣可申上旨被仰出候間右樣思召無御懸念被成御留置御覽相濟次第御返上ニテ可然奉存候此段モ申上候以上

巳七月十一日　阿部伊勢守

〔二〕齊昭述懷ノ書。　弘化二年七月十一日。

（上略）內密申進候拙老箇樣被仰付候身分ニテ自陳イタシ候樣何ントモ如何敷候得共拙老儀三十歲迄部屋住ニテ御承知之通耳聾公邊勤ハ六ケ敷事ト存候ヘハ他家養嗣ノ事モ好不申終身靜居可致ト存候處源哀事一子モ無之即世候得バ不圖モ襲封被仰付剩御守殿ノ御養ニ相成尙又憚多クモ御臺樣御令妹ヲ妻ト致シ御續柄ハ此上モナク近ク三藩ノ重キニ列シ三位ノ尊ヲ汚シ彼ト申是ト申御厚恩ニ沐浴イタシ候ヘハ晝夜トナク上ノ御爲ヲ厚存人心付候儀ハ無伏藏上書幷建白モ致候所何方ヨリ讒訴有之候哉叛心モ有之候樣之姿ニ相成扨

〔新伊勢〕卷一。

正弘ノ父正精ノ妻詮子ハ水戸ノ末家高松藩家ノ女ナリ。

恐縮至極不堪悲歎候就夫テモ貴兄御初近來之閣老ハ拙老之赤心御承知無之事ト存候ヘハ上書建白ノ手記內々懸御目申候是ニテ誠忠ハ御明判可有之哉ト存候尤退隱之義ハ一昨年前ヨリ望居候ヘ共豚兒モ幼年非常之節御用ニ相立申間敷ト被指留且御守殿ニテモ今暫時ト御留モ有之候故不得已顧望イタシ居候所退隱ハ素志ヲ遂ケ候次第難有事ニ候ヘ共赤心齟齬イタシ汚尊聽候段ハ失望如何トモ爲ヘキ樣無之肝膽塗地申候御亮恕可給候尙後職豚兒明鑒ニモ相成候間御付札ニテ御批評於有之ハ本望不過之候依兩冊子相附候御同列中ヘモ御一覽給候樣ニト存候追テハ御返シ被致度候也

七月十一日

〔三〕右ニ對シ正弘ノ復書。

弘化二年七月。

（上略）御內密蒙仰候御細書之趣委曲拜讀仕候抑尊所樣御相續以來深キ被爲御蒙重恩晝夜トナク厚ク御思召上ラレ御心付之義ハ御上書等モ被爲在候處何方ヨリ讒訴有之哉當時之御姿ト被爲成御誠意ニ齟齬御悲歎之由於私共モ御親戚之御塲合ト申上別テ恐入候事共ニ御座候就夫テハ當時同列共御心中之程不奉承知ト思召候付御上書等御手記御內々拜見被仰付候間同列ヘモ爲致拜見且心付之義モ候ハヽ可申上旨縷々蒙仰奉恐入候不取敢一ト通リ拜見仕候處イツレモ御至論ニテ聊間然可仕樣モ無御座候得共折角蒙仰候義ニ付篤ト

弘化元年齊昭退隱謹愼ヲ命ゼラル・上ニ大將軍家慶・

拜讀之上萬一心付之義モ候ハヽ尙相伺候義モ可有御座候因テ御兩冊共暫時拜借候左樣御含置可被下候扨昨年被仰出候御沙汰之趣重々御悲歎之由ハ奉恐察候得共御承知モ被爲在候通上ニハ萬端御賢明ニ被爲在容易ニ讒訴等御用被遊候義有御座間敷ハ勿論之義且右御沙汰之上ニオイテモ御叛心等之御趣入御聽候トハ聊以不被相伺候其後御愼格段御誠實之趣達御聽聞モ無之御宥恕之御沙汰モ被仰出上ニモ御喜色之御事ニ御座候只々讒訴御取用右樣被仰出候事ト被思召候テハ乍憚御尊敬之御場合ニオイテハ如何可有御座哉且又御密示之通リ御退隱後御國許之士民越訴其外不一ト方搖動仕今以平穩之場合ニハ至リ不申候由右搖動仕候モ素ヨリ尊所樣御心中ヲ存上候テノ義ニモ可有御座候ヘハ猶更御場合ニオイテハ篤ト御賢考被爲在縱令御政事筋御携無之共何トカ平穩ニ可相成御所置モ可被爲在哉ニ奉存候此上不相變搖動仕候ヘハ自然御館之御爲筋ニモ不可然候間只管御熟慮御座候樣奉存候尤上之思召ハ難奉計候ヘ共素ヨリ厚御續柄ト申永御不興ニ被爲入候義ニハ有御座間敷萬代不朽御親戚之御場合不外被思召候義ト實ニ申上候迄モ無御座候義ト奉存候此段ハ深御心配ニハ被爲及間敷哉ト奉存候此上御國許彌平穩ニ相成御尊敬之次第追々入御聽候ハヾ定テ御機嫌ニ可被思召ト恐察候此段御受旁愚存申上候不遜之義モ可有御座御海容可被成下候以上

月　日　　　　　　　　　　　　　阿部伊勢守

（追書略）

〔四〕書籍借覽ニツキ正弘ノ書。　弘化二年九月二十八日。

過日ハ御獻上之丙丁錄御草稿一冊拜見仰付寬々拜見仕難有仕合奉存候則返上仕候間御取收奉願候且又（中略）御抄錄御座候明訓一斑抄拜見被仰付拜讀仕御誠忠之程奉感伏候右御序文中之御趣意モ御座候得共折角之御抄錄私共限拜見仕置候モ殘念ニ御座候間私共塲合ニテ上ヱ奉入御覽置申候左樣思召可被下候且御輯錄盈筐錄之內家祖小傳之處是亦拜見被仰付御懇之御義難有仕合奉存候御評論之所御至當之義ト奉存候則御評論之趣認取二冊共是又返上仕候御取收奉願候（中略）

尙々弘道館碑本拜見モ可被仰付哉之趣蒙仰有難奉存候右者先頃外向ヨリ差越一ト通リ拜見ハ仕候得共御序モ御座候ハヽ、尙拜見被仰付被下候樣奉願上候以上

九月二十八日

阿部伊勢守

御請

〔新伊勢〕卷一。

家祖―阿部正勝。

〔五〕齊昭來談ヲ求ムルニツキ正弘ノ答書。　弘化三年七月十二日。

（上略）異船ノ事終夜御賢考御多端御筆紙ニ難被爲盡就夫源文殿御代ニハ越中伊豆守度々參上ノ儀モ御座候得共當時御退隱ノ御事ニ御座候ヘハ六ケ敷事ニハ被思召候得共伺ノ上

〔新伊勢拾遺〕。

此書月日アレドモ、年明ナラズ、文意ニ由リ弘化三年ニ係ルモノト推定ス。第十一章參看。

源文―水戸藩主德川治保。

越中＝閣老松平定信（白河樂翁）。伊豆＝閣老松平信明。尊慮＝大將軍ノ意。

不苦候ハヽ御勘定奉行同參天下萬世之御爲メ衆論被爲盡度段縷々御紙上之趣御尤ノ至ニハ存候得共右御推考之通當時ノ御場合ニテハ參上之儀如何可有之哉ニ評議仕猶尊慮ノ程奉伺候處先ッ差控候方ト被思召候乍去異船ノ儀ニ付テハ多年格別ニ御心勞被爲在是迄モ粗思召ノ處相伺居候儀ニハ御座候得共此度ノ一擧實ニ大切ノ儀ニ付御勘考ノ條々ヲモ相伺評決可仕旨被仰出候左樣御承知乍御多勞御書中ニテ委細蒙仰度奉希上候實ニ萬世ノ御爲メ乍不及無他苦心罷在候儀ニ御座候此段御請申上度如此御座候艸々以上

七月十二日　阿部伊勢守

〔新伊勢〕卷二下。此書ニ記スル事ハ第二十八章ニ見ユ。宰相＝水戶藩主德川慶篤。

〔六〕齊昭嗣子婚事ニツキ正弘以下閣老ヨリ齊昭ヘノ公書。　弘化三年十二月十日。

以剪紙致啓上候然者精姬君樣御事宰相殿ヘ御緣組之義被成御願度段先達テ大奧向ヘ被仰遣候由然ル處宰相殿御緣組之義者御年齡ト申イマタ御差急ノ譯ニモ無之且者精姬君樣トハ御年頃モ全御相當共難申旁御推考之上御斷被遊候思召ニ付其御旨大奧ヨリ御內沙汰之趣ヲ以申上候處御承リ置之趣ニテ御請モ聢ト不被仰上候由ニ付老女衆ヨリ度々御催促申上候處別段ニ御請不被仰上候由右者如何樣之御義ニ御座候哉御內沙汰ヲ以申上候義ヲ御請不被仰上ト申候義者有之間敷事歟ト被思召候其後何等之御沙汰モ無之尤精姬君樣御事

久留米藩主有馬賴成。

追々御年モ被爲長候ニ付此度有馬孝五郎エ御緣組可被遊旨御内定有之孝五郎家督以來段々御取扱向等モ有之不日ニ最早當人エ御内意被仰出候表面御運ヒニ相成居申候最前之御答イマタ被仰上モ無之哉ニ付爲念私共ヨリ申上置候樣被仰出候扨前文申上候通リ宰相殿ニモイマタ御緣組御差急ト申御年齡ニモ不被爲在候ニ付尊所樣思召次第ニテハ京地御筋目之姬宮方之内上之御世話歟又ハ御養女ニ被遊御緣組ハ被遊候テモ可然哉ト思召候間是等之處モ私共ヨリ申上置候樣被仰出候間此段奉申上候事

十二月十日

阿部伊勢守　牧野備前守

青山下野守　戶田山城守

〔新伊勢〕卷三上。

〔齊昭自記〕精宮御方は此方へ緣組したるを公邊御養女に御引上故有栖川の方にても人々不歸服之處又此度有馬孝五郎へは外々より緣談有之結納迄濟たるを御さし留にて精姬君御方を被遣候とて有馬にても先方にても大不歸服のよし

〔七〕賄賂ノ弊習ニツキ正弘ノ答書。

弘化四年七月十四日。

(上略)賄賂之義ニ付縷々蒙仰候趣御尤至極御同意ニ奉存候實ニ賄賂之弊和洋古今不少御役被仰付候以來別テ心掛罷在追々申談規矩相立テ候事共ニ御座候段々御敎示之趣ハ實ニ御懇之義厚拜謝仕候乍不敏精々心懸罷在候義ニ御座候(下略)

〔新伊勢〕卷四上。

慶喜一橋ニ移リタル後、嘉永元年五月二日始テ駒込邸ニ赴キ、齊昭ニ見ユ。

上ハ大將軍。

慶喜ノ樣子。

〔新伊勢〕卷四上。

此他齊昭ト其嫡子、近親及ビ家臣等トノ紛事ニ關スル書翰ノ往復數通アリ、今之ヲ略ス。

高橋多一郎ハ齊昭ノ寵臣ナリ、第二十八章ニ見ユ。

辰年ハ弘化元年。

七月十四日

（八）一橋慶喜ノ事ニツキ正弘ノ答書。　嘉永元年五月二十八日。

（上略）去ル二日一橋殿ヘ御逢御直話モ被爲在上御懇篤之御事共御承知難有被思召候由且縷々御懇切之御書中小子迄波及難有拜承仕候乍憚御容子モ御宜追々御賢明ニ御成長可被成ト奉恐悦候以上

（九）齊昭ノ所爲ニツキ正弘ノ忠告書。　嘉永元年八月二十九日。

（上略）扨貴國南郡之鄕士榊原啓介ナル者ヘ御書被遣候一條御不爲之趣ニ付今般三連枝並御家老共ヨリ上書仕候處右ニ付縷々巨細之御書中逐一拜承仕候（中略）高橋多一郎ヘノ御諭文ト三連枝其外ノ上書等段々照考仕候處右御文中前ニ奸吏暴政等ノ事有之末ニ有志ノフヘ候樣或ハ極密可談抔御認御座候故解シ方ニヨリ仰ノ通リ三連枝等ニテハ自然騷立ナド極密晴ニ御勸メノ儀ト存込候哉モ難計一體辰年巳後貴國ノ人氣今以不穩折柄ニ付三連枝ハ三連枝丈ノ心配仕居候處故只今右等ノ儀ニテ萬一騷立出願等出來候テハ御國中靜謐可致時節ハ無之ト一途ニ存込候故ニモ候半カ右ニテハ素々解シ方不宜存込違ノ儀ニハ御座候ヘ共是モ御爲ヲ存シ候場ヨリ申上候儀ニ候ヘハ其場ハ敢テ御咎可被成筋ニモ有之間

高橋多一郎●

歟哉夫ニ付猶退テ私一己ノ愚見ヲ申上候ヘハ騷立御勸メナド無之儀ハ此度連枝ヘノ御返事案ニテ顯然致居候ヘ共一通リ御諭文ノ表ノミニテモ先方解シ方ニ寄自然貴國動靜ノ一端ニ不相成トモ難被申其故ハ前顯ノ通リ既ニ先年騷立歎願等モ有之以後名ハ治平無事ニ相聞候ヘ共其實ハ今ニ穩ナラス各竊ニ黨派ヲ分ケ居候實ニ御大切ノ時ニ候然ルニ或奸吏暴政ノ世有志ノフヘ候樣抔鄕士共ヘ抔竊ニ御下知有之候テハ鄕中ノ者ハ自然心得違ヨリ或ハカタラヒ黨ヲ結ヒ如前年騷立出願等モ可致カ遂ニ一國ノ動擾ニモ及候儀必シモ有之間敷トモ不被存萬一右樣ノ儀出來候ヘハ所謂無望ノ禍御意外ノ御事御爲不可然候半カ勿論御諭ノ御趣意ニ於テハ假令鄕士等小民ニイタセ奸吏、奸僧ニ欺レス暴政ナトニ迷ハスシテ有志ニ義勇ノ民多ク有之度トノ思召ハ至極御尤ノ御事ニ候ヘ共又右等ノ弊モ可有之殊ニ當時暴政ノ時節ト假令被思召候共又御退隱御政事ニ不被爲係御身ニ候共御國政ハ一體ノ儀ニ候ヘハ奸吏暴政抔ト其上ノ非ヲ以却テ下ニ御諭御座候テハ下オノヅカラ其上ヲ輕蔑致シ其政ヲ誹謗イタシ何カ御國政兩端ニ御下知有之樣ニモ相聞於御政體モ如何ニ候半カ實以奸吏延蔓暴政ノ處置多ク始終ノ儀ニテ迚モ御靜謐ニハ不相成ト御見拔ノ事ニ候ヘハ實ニ御家御一大事ノ儀ニテ是等御取直シ被成候ニハ中々多一郎等ヘ御諭文有之候テ可及譯ニ無之ハ勿論ノ事因テハ假令當時ノ御據合ニテモ宰相殿初三連枝及御家老共被召呼其品ヲ以御熟評有之平穩ノ御處置如何程モ可有御座哉殊ニ先年御國元騷立中ニ連枝共取

扱ニ手餘リ候塲ヨリ相願候ニ付御愼中ニハ御座候得共御家ノ御爲ヲ被思召夫々御手筋ヲ以御處置モ被爲在候程ノ事ニ候得ハ猶更ノ儀如何程ニモ御議論被遂候テコソ御誠實ノ儀ト管見ニ於テハ被考申候呉々士民ノ義氣御振勵ノ思召ハ厚キ御事ニ候得共只其時ニヨリ御諭方ニモ寄リ候半カ實ニ僻見ノ至乍不遜御賢考迄ニ申上候猶可然御熟慮御座候樣希候

（下略）

八月廿九日　阿部伊勢守

〔新伊勢〕卷四下。

〔一〇〕大將軍水戸家來臨ニツキ齊昭ノ書。　嘉永二年七月十一日。

先達テハ奥向ヨリ當秋御立寄ノ節下官夫婦並庶子迄モ御目見被仰付候トノ御沙汰實以御懇ノ御儀久々ニテ奉拜尊容候難有仕合ニ奉存候尙又簾中抔ハ初テ御目通リヘ出候事ニテ一ツハ樂シミ一ハ心配日々日ヲ數ヘ奉待候事ニ御座候乍序御吹聽申候尙又御前御進退之節御程モ宜候ハヾ厚ク難有奉存候旨幾重ニモ御禮被申上候樣御賴申候只々花モ紅葉モナキ折御慰ニ相成候程ノ風景モ無之且ハ庭ノ手入モ不行屆此段ハ恐入候事ニ御座候呉々モ宜敷御賴申候也

七月十一日　齊昭

勢州殿　參

〔新伊勢〕卷四下、第二十八章併看。
辰年＝弘化元年。
午年＝弘化三年。
未年＝弘化四年。
刑部＝慶喜。
同申＝嘉永元年。
宰相＝水戸藩主徳川慶篤。
―原文ノ儘。
役人共＝水戸藩役人。

〔一一〕齊昭ヨリ正弘以下閣老ヘノ尋問書。

嘉永二年十一月十六日。

(前略)辰年正月ノ一條實以恐入候儀只々千愧萬悔愼ミ居候外無他事候處不存寄同年冬愼御宥免ニテ國中致安堵同午年ノ冬ニ三ノ家來共御宥免於愚老難有仕合同未年ノ秋不存寄刑部儀御恩澤ヲ蒙リ同申ノ六月御内意ニテ愚老宰相父子傍ニ雀躍仕リ當三月非常ニ連枝後見御免且恩命並七月中尙又無屹度御内意ノ趣殊ニ九月中乍御内々久々ニテ清光ヲ拜シ御懇ノ御意ヲ蒙リ其時々實ニ望外ノ御事共ニテ夢ノ覺候心地イタシ莫大ノ御恩澤奉感佩候ハ勿論諸兄御周旋ノ段實ニ不淺忝存候處役人共ノ見込ハ畢竟六ケ年ノ間役人共丸ク愚老ノ政事ヲ變シ取計宜キ故愚老モ追々右樣御恩澤ヲ蒙リ候事ト宰相ヘモ日夜申聞此上益愚老存意ヲ拒キ六ケ年取計ノ趣ヲ貫キ候方孝道ト心得候儀ハ相違モ無之乍憚公邊御見込ハ右樣計ニモ被爲在間敷是迄モ右之通リ篤ク御世話モ被成下候御儀故右行違モ居候事情御推察被有之迚モノ儀今一應御評議ノ上宜御沙汰ノ程偏ニ奉希候事(下略)

齊昭

十一月十六日

阿部伊勢守殿　牧野備前守殿　戸田山城守殿
松平和泉守殿　松平伊賀守殿

〔註〕其後閣老ヨリ何等ノ回答ナキヲ以テ、齊昭之ヲ促スコト三回、翌年十一月ニ至リテ閣議未決ノ報ヲ得タリ。

〔新伊勢〕卷五。

山城守ハ戸田忠温。

眞田幸貫ハ松平定信ノ次男ナリ。

（一二）齊昭松代藩主眞田幸貫(ユキツラ)ヲ閣員ニ推薦シタルニツキ正弘以下閣老ノ答書。　嘉永四年八月八日。

（上略）然ハ此度山城守急病之處全快之程モ六ケ敷歟ニ被爲及御聞候就夫眞田信濃守義先年病氣ニテ御役御免ニ相成候處兼々再勤被仰付可然人物ト被思召候旨御賢慮之條々具ニ被仰下敬承仕候依之私共打寄再三評議仕候處一體同人義ハ格別之御人撰ニテ帝鑑間席ヨリ御登用御座候御儀之處勤役中幷御役御免相願候節之情態等彼是不應尊慮次第モ有之候事故容易ニ再勤被仰付候義一同可然トモ不奉存候依テハ入御聽候モ如何可有御座哉トモ懸念仕候得共折角御爲筋ト被思召被仰下候事ニ付私共限御請申上候モ恐入候間委細御書中之趣具ニ奉入御聽候處上ニモ御思慮被遊候上御趣意モ御座候間再勤被仰付候思召ハ不被爲在候旨被仰出候此段無急度御答モ申上置候樣御沙汰ニ御座候（下略）

八月八日　阿部伊勢守　牧野備前守　松平和泉守　松平伊賀守

〔新伊勢〕卷五。

（一三）齊昭登城ニツキ感謝ノ書。　嘉永五年十一月二十三日。

（上略）今度登營難有仕合奉存候畢竟彼是御周旋故ト存候右答禮之證迄大日本史一部並鮮

魚進候也

十一月念三　　　　齊昭

勢州殿　参

二白（中略）於殿中一寸申談候異船之儀呉々モ交易又ハ土地抔願出候カ又ハ蘭夷奸謀ニ立入願候抔姑息ノ御料簡ニテ爲御濟相成候ハヾ後患無疑ト拙老ハ致憂慮候天下ノ爲故乍序又々申進候不盡

〔昨夢〕上三〇一頁。第十二章併看。

〔丙〕阿部正弘ト松平慶永トノ通信ノ件。

〔一〕德川齊昭ノ政務參與ヲ勸告セル慶永ノ書。　嘉永六年六月二十三日。

（別紙）密白將軍樣御不例尋常ノ御病氣ト被爲替行末御案シ申上候御樣子相伺嘸々貴所樣ニモ不容易御心配ト遙察小生モ乍恐御案シ申上候別テ先日來世上モ何カ動搖イタシ居候中ニ候ヘハ萬一不諱ノ御儀モ可被爲在哉ト深心配仕只候御快然奉祈念候外他事無御座候右ニ付存寄候義御座候ニ付御近親御懇意ニ任セ犯萬死有體ニ申上候右ハ今般之御病氣被爲及御大漸間敷モ難計平生トモ違ヒ外寇ノ取沙汰モ強ク追々傳承之趣ニテハ覬覦ノ夷情モ深重ニ被察候ヘハ方今ノ廷議乍恐皇國ノ榮辱盛衰ニ相拘リ可申御儀ニテ一大事至極ノ御

西城公　大將軍家慶嗣子家定。

時節ニ當リ右樣ノ御大變有之候テハ擧世ノ當惑無此上何ニトナク渙然可相成哉ニ致睛察候勿論西城公被爲在候ヘハ一統安心仕居候儀トハ乍申御初政ノ艱難實以奉恐察候右ニ付當時天下ノ矚目英明老練一ニ駒邸老君ニ止リ候事候ヘハ此時ニアタリ此人ヲシテ西城公ノ御羽翼ニ被充候ハヽ（ヤムコトナクンハ遜旨カ）列侯ハ不及申士民所嚮ヲ得猶更安堵可致候ハ必定ト奉存候右ハ忌諱ニ亙リ候事共ニテ恐懼不少候ヘトモ箇樣ニ無御座候テハ實以テ難相叶御時世ト存込候故天下之御爲難默止及建白候事ニ御座候僭踰不敬ノ儀ハ幾重ニモ御亮察御宥恕被下度候死罪頓首

六月廿三日

尙々本文ノ趣ハ啻ニ天下ノ御爲ノミナラス貴所樣ノ御爲ニ謀候テモカクアルヘキ御儀ト奉存候呉々モ不容易御時世難安寢食候以上

〔昨夢〕上三二頁。

第十二章併看。

〔一一〕右ニツキ正弘ノ答書。　嘉永六年六月二十三日。

陳ハ極密ニ被仰下候趣御尤至極ノ儀ニテ小生モ過日中ヨリ愚考仕居候事共モ有之誠ニ符合大悅ノ至存候乍不及彼是心配夫々能々申談取計方モ可有之哉ト存候今ニ不初儀御深切之儀且爲天下實ニ感悅仕候　（節錄）

〔三〕外事及ビ政法改革ニツキ正弘ノ答書。 安政元年三月四日。

（上略）陳者此程以靱負御內々御相談被仰下候御書面得ト熟覽仕候處一體之理合御尤至極之儀御同意奉存候乍去今般之異船取計方モ昨年來夫々評議モ相決居候儀ニ候得共實以於公邊モ無御餘義御次第ニ而乍御殘念當今ノ御處置ニ相成候事ニテ必右ニテ御安心ト被思召義ニハ無之儀故其段ハ左樣思召可被成下候御書面之內諸侯妻女ヲ國許ヘ差遣シ三四年程ニテ參勤ニ申儀至極之儀ハ候得共此儀ニ何分如何可有之歟愚存ニテ个樣ニハ難相成事哉ニ奉存候其餘ノ條々ハ何モ別段心付モ無之候間御認取モ御出來候ハヽ備前殿ヘ御越御差出シ可被成候何レニテモ小生愚考ニテハ亞米利加船ハ最早應接モ昨日ニテ萬端相整候趣ニテ近日出帆之由ニ候得共此御跡至而御大切之儀急度御取止無之而ハ人心怠惰ニ流レ如何トモ致方無之樣可相成不行屆之儀ニハ候得共國家之御爲品々心付候儀モ有之候得共何分一々不容易儀同列共初諸有司ニモ力ヲ合セ候モノ無之候而ハ全ク相整不申內忽相崩レ却而御不爲ニ相成甚心痛仕候不容易御時節人心モ種々異論有之不肖之小生抔實ニ憂悶罷在候萬々推察可被成下候早々謹言

三月四日

〔昨夢〕上四七一八頁。第二十二章併看。

備前、閣老牧野忠雅。

〔四〕蘭書取寄等ニツキ正弘ノ答書。 安政元年九月十六日。

〔昨夢〕上一八五一六頁。

此時慶永福井ニ在リ。

(上略)陳者縷々被仰下候蘭書之儀今般者小生用向之積ニ長崎へ申遣候間其内ニハ參リ可申候尤モ持渡リ有之分ハ可參候得トモ無之分ハ注文申付候事故當年ノ事ニハ參リ不申候間左樣御承知可被成候且又英船一條縷々被仰下委細承知仕至極御同意ノ儀最早萬々見込通取計モ相濟去月廿九日長崎表退帆イタシ候墨奴迄モ參リ不申相濟申候(下略)

九月十六日

〔昨夢〕上二〇五－六頁。

第十八章併看。

此時慶永福井ニ在リ。

當時正弘ガ徳川齊昭ノ露人鏖殺策ヲ排斥シタル(第十八章ニ見ユ)ニ反シ、此ノ如キ言ヲ爲セルモノハ、慶永ノ殊ニ攘夷家タリシヲ以テ故ラニ然リシナラン。

〔五〕露船難破ニツキ正弘ノ書。　安政元年十二月七日。

(上略)今般者諸國共未曾有之地震海嘯等驚歎之至ニ候右ニ付而モ内外ノ心痛萬々御推察被成下候(中略)下田へ罷越居候魯船モ殊ノ外之破船右ニ就テモ品々手數カヽリ迚モノ事異人共不殘覆沒致得者マダシモト存候却而内地之災ト相成歎息之事共ニ御座候嘸々遠境懸隔居候而者品々之浮説モ可致候得共今般之魯船ハ鳥ノ翼無之如ク大砲類モ不殘下田へ取上置候位シカシ此程モ難船ノ又難船有之益入潤強相成大破船ニ相成使節始海中へ縄ヲ付ケ四百人餘不殘胴中へ飛入漸ク海岸へ危ク漂着イタシ候海上モ度々荒レノ氣味ニ有之候此弱リヘ付入應接ハ十分ニ爲仕漂流之御仁恤者行屆候樣爲取計候積リニ有之候乍去品々之事ニ而手數而已相懸リ繁雜心痛萬々御察可被成下候日々寸暇モ無之次第併聊障リモ不仕益精勤罷在候(下略)

〔昨夢〕上二三八九頁.

十二月七日

〔六〕政務多端ニツキ不十分ノ答書ヲ謝スル正弘ノ書. 安政二年九月十一日.

（上略）蘭書幷鐵砲之儀モ致承知候廻リ次第相含早々差進可申候（中略）毎々不分リノ御答申進例之通亂毫甚御氣之毒ニ存上候得トモ登城中ハ勿論退出後持歸候書類山ノ如ク一覽迄ニモ數刻ヲ費シ其上種々不容易事共モ有之勘考モ盡シ不申候半而ハ不相成實ニ御目ニ懸ケ度位ニ御座候右故甚麁漏之御請之段ハ呉々御免シ可被成下候（下略）

九月十一日

〔昨夢〕上二八七―九頁.
第三十一章併看.

〔丁〕阿部正弘ト島津齊彬トノ通信ノ件.

〔一〕松平慶永ヲ說諭センコトヲ求ムル正弘ノ書. 安政二年十一月十日.

極密呈寸簡候（中略）兼々御懇意ニ付別段申入候外之儀ニ無之松平越前守儀此節柄甚心配ニテ品々存意認取小生ヘ相談故少々存意ノ趣申遣幸堀田備中守義ハ同人懇意ニ付同所ヘ差出候樣申遣置候間定テ同所ヘ差出候事ト存候右ニ付心配致シ候ハ同人存意此節柄萬緒心配申出シ候段ハ隨分尤之事ニ候得共中ニハ理屈計リニテ俗ニ申出來ナイ相談ト申事モ

多有之輩ハ同人家來之内右之儀ヲ主張イタシ同人ヘ相進メ候哉ト存シ申候同人モ御承知ノ通リ一ト向ノ仁物故一概ニ申立候樣ニ相成萬一不都合ノ事共出來候テハ如何ト心痛イタシ候右ニ付テハ定テ貴君ヘハ内々御相談モ可申哉ト存候間程能ク同人ノ不爲ニ不相成候樣御教諭奉希候尤小生ヨリ貴君ヘ御文通ハ誠之別格兼々不外御咄モ申候事故有ノ儘申達置候間此義ハ内々之事故厚御心得置可被成下候若々同列共ヘ萬一如何樣ノ不都合出來候而ハト近親之義深懸念致候間此義ハ貴君ヘ内々御賴申入置候不惡御汲分ケ可被成下候當時不容易御時節海防之義モ有之天災モ打續候事必戰ノ理屈ハ至極同意之譯ニハ候得共廣ク世界ノ有樣ヲ存候テハ差向金銀融通方等ヲ初人々一ト度安心之塲ニ赴キ不申候テハ何事モ出來不申此處モ肝心ト存候間苦心致居候事ニ御座候兎角學者理屈而已ニテハ困苦致シ申候何モ用事ノミ早々御覽後御火中可被成下候以上

十一月十日燈下認　　伊勢守

薩摩守樣　御覽後御丙丁可被成候 極內用

〔島津家文書〕

第三十一章併看●

〔二〕松平慶永ノ事及ヒ幕府ノ島津家特遇ノ事ニツキ正弘ノ書●

安政二年十二月二十四日●

内密申上候（中略）陳ハ越前書面一條段々御考ノ趣被仰下一ト通ナラス御熱慮被下厚忝存

備中＝閣老堀田正睦。

此時薩藩軍艦ヲ幕府ニ獻ズ（第二十四章參看）。

一位＝齊彬曾祖父重豪ノ女寔子十一代將軍家齊妻。

「昨夢」上三二〇—二頁。第十九章併看。

一兩年以前ノ理論。

上候猶小生再三相考候處何分最早差出候事故手續ト都合ニ相成候而者不宜候間貴君ノ御存意被仰遣今少シ勘考ノ上當世ノ時勢相當ノ處ニ取直シ申出シ候方却テ御忠節ニ可相成御同意ニ候ハヽ備中殿ヘ差出候書面一應下ケ相願得(トモ)取直シ差出シ候方可然ト被仰遣以後申出シ事候有之候節ハ當節ノ時勢相當ノ處ヲ勘辨申上候方爲可然ト被仰遣候方至極可然ト存候間宜御勘考可被成下候扨極內々申上候明日於御座間御懇ノ上意ノ上御差ノ大小貴君ヘ被成下候間御心組モ可有之ト不外事故內密申上候尤於扣所思召ニテ御菓子御煮染等可被成下哉ト存候間此段モ極內々申入置候是モ全ク一位樣厚御續モ有之事故重キ御品被成下候事ニ有之候（下略）

十一月廿四日　伊勢守

薩摩守樣　內用事

〔三〕頑迂ノ建議排斥ノ意ヲ示ス正弘ノ書。　安政二年十二月十九日。

內密被仰下候華翰拜讀仕候（中畧）越前守ヨリ申上候書面內密爲御見得ト一覽致シ候處同人申聞候處隨分尤之儀ニハ候得共迚モ參リ不申申サバ一兩年以前迄ハマダモ此理屈之處モ有之候得トモ富國ヲ先ニイタシ必戰ヲ後ニスルト申義ハ可恥儀ト申セハ申ス樣ノモノニ候得共時勢之變革武備之强弱國之貧富モ少シハ考慮モ無之候テハ只カラリキミニ相成

德川齊昭ト松平慶永

事實ハ參リ申間敷歟御同然ノ國ト江戸モノ、家來ニテモ海防ノ議論ニハ强弱有之國ニテ理屈ヲ申候ハ先ッ越前守申聞候如クノ說多ク江戸ニテ得ト異國ノ情態ヲ勘辨イタシ候モノ、說ハ又タ左樣計リニモ無之有志ノモノニテモ一昨年昨年ト當年段々勘考ニテ種々說ノ變シ候儀モ有之決シテ海防筋之儀外國之事情種々樣々ノ事朝夕取扱居候身分ニテハ中々當今容易ノ事ハ出來不申去レバトテ武備迄捨ルト申儀ニハ無之武備ハ益々强ニ致シ度候得共取扱方ハ時勢ヲ勘辨無之テハ眞ノ御爲トハ不被申樣被考申候乍併最早先日之書面ハ備中殿ヘモ出シ有之儀故只今此處アノ處ト引替候ニハ不及ト存候間左樣思召被仰遣當可被下候書面ニモ老公小生ハ一戰ト覺悟致シ居候間越前守ヶ樣建白致シ候ハヾ助ケトモ可相成哉ト申儀是ハ同人之存込ハ左モ可有之候ヘトモ中々右ヲ以テ評議之一助ト申譯ニモ參リ兼水老公抔ハ程能越前守ヘモ被仰置候事故同人モ實ニ左樣存込居候事ニ可有之歟貴所樣ヨリモ餘リ色々被仰遣候テモ却而御面倒ニ可相成候間此度ハ最早差出候事故御引直シニハ及不申以後ハ能々御勘考被仰上候方可然位ニ被仰遣置候方可然哉ニ存候間厚御熟慮宜樣被仰遣可被成下候同人別紙返上無伏藏申上候御覽後御火中可被成下候頓首

十二月十九日

江川家所藏。

正弘ガ哀悼ノ歌ハ第三十一章ニ見ユ。

〔戊〕江川英龍ニ關スル件。

江川英龍歿去ニツキ正弘哀悼ノ歌ヲ贈リシトキ之ニ添ヘタル松平近直ノ文。　安政二年正月。

河内守近直

江川英龍の大人は文讀む道に賢しよく、武き道には殊更の達者たり、あまつさへ、ことに國の事をもみつから學ひ得て、大砲の妙を極め、是の長となりて普く其術を及ぼし、實忠二つなきの弓取なり、過し嘉永六つの年夏の末、御備事の台命を蒙りて江府にとゞまり、品川の海に繩張して、御筒場の臺をもふけ、鐵玉の精密なるをいやまし研究ありて、數多の大砲を鑄造り、衆夷の心耳を驚かしめしは、上代にもためしなく類ひなしともいふべし。然るにいかなる時か、けふ睦月のなかはに遠行せられしは、中々に胸ふさかり、いふも出すへき言の葉もなく、只袖をぬらすのみの事なりき。かくて此よし時の執政福山の朝臣へ密に聞へあげしに、痛ませ給ふ事たとふるに物なし、去にても殘り多さに、責てはとて御筆をそめて御歌を給はり、ひそかに傳へて得させよと、ねもころに仰ありしかば、淸らけき手箱を作りて是を秘め、其理りを裏書につゞり、韮山のもとに贈りて靈位に備へ、いさをしの彌高きを仰き、威名を世々にとゞめよと云、あゝいたましい哉、今さらにかへら

ぬ繰言のくたくた敷くも、筆のすさみの足らさるは恥づるに絶たり、されどいさゝか眞心の程をも盡さんが爲なれは、夫是の拙きはひたすら見ゆるし給へかし。

于時安政二のとし乙卯の正月。

〔己〕阿部正弘病歿ニ關スル件。

（一）藥劑等ノ事ニツキ徳川齊昭ヨリ側用人安島彌次郎ヘノ書。

安政四年閏五月三日。

昨日中納言咄ニテ聞候ヘハ勢州モ實ニヤセ衰ヘ中納言ニテ二月引候以前見候トハ大ニ相違ニテ夜中ニモ候ハ、指向咄モイヤナ位繪ニカケル幽靈ノ如ク居立モ六ケ敷ヨシ故同人醫師ハ福岡緣故是ヨリモ承セ又清事ハ三澤別懇ノヨシ故此者ヲモ中納言ヨリ遣シ三澤ニ承セ候處三澤モ甚心配ノヨシ申聞候ヨシ常ニ夏ニ相成候ヘハ下痢致候ガクセノ由ニ候處萬々唯今ノ姿ノ處ニテ下痢來リ候ハ、大變ノヨシ申聞候ヨシ今朝我等心付ニ牛酪可然ト心付候只今清三澤ヨリ歸リテノ申聞ニハ牛酪モ今日ヨリ用候ヨシニテ我等今朝心付候處用候ト承リ候テハ先々安心致候藥ハ手醫伊澤磐安ノヨシ　養脾湯（證治準繩）即六君子（砂仁麥芽神曲山査）ノヨシ中納言咄ニテハ御城坊主抔ハ十五ノ新姿出來候故云々酒モ登城前ヨリ二升位ツ、

第三十四章併看。

〔水戸家文書〕

安島安次郎後帶刀。

中納言　水戸藩主德川慶篤。

遠州掛川藩主太田資功(スケカツ)。

用候ヨシ云々申候ヨシノ處御役モ勤候程ノ人左樣ノ事モ有之間敷ト我等申候處今淸ノ咄聞候ヘハ酒モ一切不用養生專一ニ致候トノ事ニ候ヘハ新妾トテモ命ニカヘテ云々致シ候事モ有之間敷沙汰ニハ妾モ數人有之抔ト承リ候ヘ共タトヘ三千ノ寵愛有之トモ交リノ數サヘ定メ置候ヘハ身ニ障リ可申筈モ無之全右等ハ人ノ惡口ト存候ヘ共衰ヘ候儀ハ無相違相聞エ申候畢竟ハ「アメリカ」ヲ初諸夷ノ儀ニ付候テハ色々存候樣ニモ不相成心配致候故ト存候我等ハ六味地黃ヘ廣東人參ト鹿茸入候藥抔ハ如何哉ト存候處內々三澤榮順ニ逢ハレ候ハヽ逢候テ聞可申候扨又萬々一下痢致候節ノ爲ニ白干浮龜ニテモ遣シ置申度常ニ汁ニ致シ用候モ可然存候又此節ハフクラニモ有之候ヘハ明後日ノ便ニ國ヘ申遣シ來リ候ハヽト何カ致シ遣シ申度候何レノ道フクラニト白干ト兩樣國ヘ可申遣候何ヲ申モ夷狄ハ迫リ居リ候ヘハ勢州ハ大切ノ人故三澤榮順ヲ呼候テヨクヽヽ承リ我等ヘ直ニ可申聞候尙又前文ウキヽノ事モ用候テヨキカ惡シキカモ內々聞可申候依此ダン申聞候也

閏五月初三　　彌次郎へ

別紙先達テ中太田攝津守ヨリモ生牛乳好故シバラク遣シ候ヘキ公邊ニテモ牛乳ハ有之候ヘトモ高直ノミナラス手數カヽリ候ヘハ若々生牛乳好申候方トノ事ニモ候ハヽ我等日々用候故三澤ニテ戴クフリニテ我等モ不存日々生牛乳遣シ候テハ如何是亦三澤ヘ內々カケ合可申候

〔川路文書〕

尙々時節柄故用候ナラハ登城前ニ用候テ猪口ニテ酒一盃モ不用候テハ呑付不申人ハ胸ニ障リ可申候

〔二〕正弘ノ病勢ニツキ德川齊昭ヨリ川路聖謨ヘノ書。　安政四年六月七日。

勢州之儀ニ付テハ上ヨリモ厚キ御沙汰モ有之ヨシ難有仕合ニ候老中ハ誰トテモ同斷ノ事ニ候ヘトモ勢州事ハ御燒失ヲ始メ品々難場ヲ押張勤候ヘハ勤功モ格別ノ人ニ候追々全快ニ相成候段畢竟ハ上ノ尊慮モ通リ候事ト存候何モ過日申落候故又々申進候也

六月七日　水隱士

川路殿

〔註〕此下ニ藥法ヲ記スレトモ今之ヲ略ス。

〔川路〕五一八頁。

〔三〕正弘危篤ニツキ水戶藩安島彌次郞ヨリ川路聖謨ヘノ答書。　安政四年六月十八日。

家中＝阿部家中。

（上略）然ニ福山侯俄ニ以而之外之御容體ニ御座候由手前方ニ於候而モ昨朝余程之御不出來ト相伺候處其後又々御指重ニモ相成候哉扨々浩嘆至極ニ奉存候右ニ付而老寡君ヘ內聽ニ入度趣家中之者ヨリモ願出候ニ付愚拙迄御託御座候而御取計ニ可相成旨御諭ニ相成則御壹封御遣憾ニ落掌仕リ昨夜早速手元ヘ指出候事ニ御座候尤愚拙事無據他行深更ニ歸宅仕

候所モハヤ引而後ニ相成候得共今朝ハ目覺直樣指出候樣側向ヘ申遣候間今朝疾ニ披見致候義ニ可有之左樣御承知可被成下候世子無之候由ニ候處養子心當ハ御座候由家中之者ヨリ申出候ニ付內々相含候樣可仕旨是又承知仕候此段乍延引御請迄草略申上候頓首

六月十八日　　彌次郎

左衞門尉樣奉復

〔四〕正弘ノ病狀ニツキ越前藩用人中根靱負(ユキエ)ノ記。　安政四年閏五月、六月。

閏五月朔日公御登營アッテ月次ノ御禮被申上候折御繰出シノ御席ニテ乍餘處御對顏アリシカ御歸殿ノ上御意有之シハ今日勢州ノ顏色ヲ瞻タリシニサラニ昔日ノ容貌ニ非ラズ病イト重モ氣ニ見ユ云々此夏ノ暑サニ堪フヘクモオモホヘス唯今彼人世ヲ早フセハ天下ノ勢モ如何ニ變リ行ナランカ公私ニツキ憂ハシキ事ノ限ニソアルト痛ク御歎息被爲在翌二日師質ヲ御使トシテ御病體ヲ委敷尋サセ給ヒヌ

閏五月三日ニハ表向爲御相對伊勢守殿ヘ被爲入タリキ此ハ御親敷筋ニハアラテ面正敷御對顏ナレハ此折ハタヽ定格一ト通ノ御應答ノミニテ何事モ近キ程ニ心長閑ニモノシ語ラセ給フヘクト申カハシ給ヒテ御歸リアリケレハ彼水老公云々抔ノ事ニハ及ハセ給ハサリシトゾコレゾ御終リノ御對面ニテ有ケル

〔昨夢〕上五〇一頁、五〇七—一〇頁。
中根師質、後雪江。
公=松平慶永。

蘭方醫藥ヲ用ヰザル理由ハ第三十四章ニ詳ナリ。

伊勢守殿ノ御病氣（痞癖ノ症）輕カラヌ筋ニ聞ヘシカハ公覺束ナク思召閏五月廿四日御匕醫師半井（ナカラ井）仲庵ヲ參ラセラレテ御病體ヲ診察セサセ給ヒシニ仲庵モ以ノ外ナル御病氣ニテ御藥ノ事モイタク事後ニタレハ癒サセ給フヘクモ伺ヒ侍ラネハ侍フ御醫師共ニカタラヒ見ルニ彼御方ニテハ漢法ノ醫流ヲノミ好ミ給ヒテ蘭家ノ説ハ用ヒ給ハヌ御事ナレハ是迄モ漢家者ノ説ニテ一ト渡リノ筋ニオモイトリテ御藥モ調シ來レルカ蘭家ヨリ見レハアラヌ筋ニモテ扱ヒ奉ルナレハ仲庵カオモフ旨ヲ彼方樣ノ御近臣ノ長ナル藤田與一兵衞ニ告ケタリケレハ御病ノ深キニハ痛ク驚キタル狀ナカラ蘭法ノ治療ハ用ユヘクモアラヌ面持ナリケル由ヲ罷歸リテ申上タリケレハ公殊ニ驚キ憂ヒ給ヒ當將軍家御代知シメシテ幾程モアラセ給ハス何事モ彼人ノ御後見マツリコチ給フナルニ萬一不諱ノ事アランニハ天下ノ形勢モ如何ニ遷リ變リ行ンモ計リ難カリ彼人ノ命ハ天下ノ命ナル者ヲトテ與一兵衞召シテ蘭家ノ御藥勸メマイラスヘキヨシナトヲモ仰付ラレ猶久世大和守殿ハ親キ御眷族ナル上ニ同シ御職ニモ座セハ此御方ヘモカレコレト仰入ラレ其外ニモ伊勢守殿ノシタシキ方々將事受給フヘキ限リニ御自ラモ人シテモカタラヒコシラヘ給ヒテ伊勢殿ヘ勸メ給ヒシカトトヤカクトイヒノカレ給ヒテ遂ニウケヒキ給ハサリケリ後ニ聞ケハ近年蘭法ノ醫流大ニヒラケ來ニケル折此侯迄モ信用シ給ヒナハ天下一般ニ蘭家ニモナリナン勢ヒナレハサテハ又其弊害アラン事ヲ深ク遠ク慮リ給ヒテ蘭家ノ長處ハ心得給ヒニケレ共余ハヨ

松平駿河守＝伊豫今治藩。

シアシニモヨラス天下ノ爲ニ蘭家ノ藥ハ服シ難シトノ給ヒケルトナンカクテ六月十七日辰ノ刻ナリキ伊勢守殿ノ御樣子昨日ヨリアシク見ヘ給フヨシナレハ師質ニマイリテ伺ヒ來ルヘキ旨仰アリケレハ直ニ辰ノ口ノ邸ヘ參リテ横川吉十郎竝老女花井等ヘウケ給ハルニ昨日ノ朝廁ニ行カセ給フ廊下ニテ不圖打倒レ給ヒシヨリ俄ニ樣子カハリ給ヒ御動氣御發熱御手足厥冷噫逆等ノ惡症一時ニ暴發シ御顏ノ樣ヲ初メ日比ニ似ス俄ニオトロヘ給ヒテ現シ心モ座セス御脈モ暫シハ絶エハテ給ヒシ計ナリケレハ内外ノ人々足ヲソラニ騷キ惑ヒテ御藥ナト種々奉リテヤウ〳〵人心ツキ給ヒテ此カタスコシツヽ宜シキ方ニ座スルヨシ御藥モ是迄ハ御手醫師ノ伊澤磐安奉リシカト今日ヨリ松平駿河守殿ノ醫師青木春岱ヘ御轉藥ニテタヽ今御藥合セ奉ルナリ春岱モ不圖カヽル事發リ給ヒニケレト漸々ニオサマリテ本ニ復ラセ給フヘキ御藥調シ奉ルナレハヤカテソ驗シ見ヘ侍ルヘケレナト申上タル由花井ハカタリヌ罷歸リテ其由申上タルハ巳刻過ル程ナリキサテ午ノ半比ニモアルヘシ伊勢守殿御樣子以ノ外ニワタラセ給フ由花井ヨリ申上タリシカハ急キ參ルヘキ旨師質ヘ仰アリケレハ直ニ參リタリシニ花井申聞ケルハ先ニ師質參リタリシ折春岱カ奉リシ御藥煎シモノシテ御側ニモテ參リタリシニ御息遣ヒナニトナク替ラセ給フヤウナリケレハ御醫師共モイソキ參リテ診ヒ奉ルニ御ウケコタヘノ御言葉モナクテヤカテ事キレサセ給ヒシハ午過ル比ナリキト泣々語リヌ

〔阿部家文書〕

渡邊總兵衛(壯)後
大助。

久世大和守。
内藤紀伊守。

〔五〕正弘病歿及ビ葬送ニツキ公用人渡邊總兵衛ヨリ在藩地重臣ヘノ詳報。　安政四年七月二十六日。

殿樣當三月頃ヨリ折々御血色不宜樣ニ奉見上候得共聊カ御不快等ノ御樣子モ不被爲在至テ御元氣モ宜敷四月二十日ニハ水元羽村ヘ御遠乘被遊御歸座後モ格別御草臥ノ御樣子モ不被爲入既ニ私儀ハ羽村ヘ御先番罷出被爲入候節羽村御陣屋ヘ罷出御側向ト一同ニ御給仕等モ仕大和守樣紀伊守樣御同座ニテ御酒少々御持參ニテ御一同樣被召上肴ハ玉川ノ鮎鹽燒ニテ被召上特ニ御好ニ付鮎大小十二尾程被召上格別新鮮好味ノ旨御沙汰モ有之夫ヨリ鮎獵御覽益御機嫌宜敷御座候乍去御血色イツモ御遠馬抔被遊候得ハ赤ク御成リ被遊候御性質ニ被爲入候處其儀無之別テ御靑キ樣ニ奉見上候間如何被遊候モノ歟ト御先番御近習共咄合候處御近習モ此程御樣子不宜御藥等モ召上リ居候趣ノ咄ニ御座候併右樣ノ御樣子ニ奉見上候間差テ御案事申上候ト申程ニモ不奉存候ヘ共何分御遠馬ニテ右樣ノ御血色ト申ハ如何ノモノ歟ト同役共咄合御納戸纏ヘモ内話仕候處奥ニテモ心付居候扨々困リ候事ト度々一同申合セ居候得共先ツ御不快ト申事モ無之故爲差御事ニモ被爲在間敷ト奉存居候内五月八日御風邪御寒熱被遊御不參其頃モ御血色ハ矢張御同樣御風邪ノ方ハ至テ御輕ク於御前御酒抔度々御慰ニ被下中々御元氣被爲入其外御庭抔ニテ調練御差圖モ被遊追

司農＝勘定奉行。

此『バツテーラ』ハ嘉永ニ米使「ペリ」渡來ノ時贈リタルモノナリ。第三十五章山岡八十郎ノ諫死ノ條參看。

上樣＝大將軍。

御席＝重臣。

々御快同十八日御出勤被遊候處御用向御取扱事兎角ニ御太儀ニ被爲仕候旨御歸座ノ上御意モ御座候尤御歸座直ニ御召替御寐間御牀ノ上ヘ御寢被遊候テ萬事御用向御聞被遊候ハ連日ノ事ニ御座候後ニハ最早快候ヘ共氣儘ノ方保養ニ成リ候旨醫師共申ニ付此通致シ居候決テ不快不宜ト申ニハ無之間案事申間敷ト度々御意モ有之御見舞等度々申上候儀ハ甚タ御嫌ヒ被遊御容體宜事申上候ヘハ御喜悅ト申樣ナル御容子ニテ御座候間一同竊ニ何分此節ノ御樣子如何ノモノ歟ト密談ハ仕候得共容易ニ口外モ仕兼御醫師ハ落付居候故夫程ニモ無之哉トモ存罷在候

五月二十八日ハ御退出ヨリ高田御屋敷ヘ被爲入此節イツト違ヒ御途中御乘馬餘程御面倒ノ御樣子地道ヲ重ニ被爲召候高田ニテモ調練等モ不被遊御覽而已ニ御座候

閏五月朔日ニハ先頃ヨリ司農監察ヨリ御勸メ御同列樣ヨリモ御勸メニテ一旦御退出夫ヨリ辰ノ口ヨリ大バツテーラニテ越中島埋立場御見置夫ヨリ永代兩國模寄モ御乘廻シ被遊候ハヾ大ニ御鬱散ニ可相成トノ御事ニテ御退出ノ處折々雨降出シ其內追々強ク雨止ミモ無之九半頃御右筆樣モ被爲入折柄御出雨天ニテハト申ニテ御延引ニ相成御殘念ノ御樣子ニ被爲入夕刻ヨリ一統ヘ御酒等被下此節ハ大ニ御元氣モ宜敷御酒モ少々ハ被召上候頃日御同列樣ヨリモ御氣ヲ被轉候樣ニト品々御勸メ上樣ニモ彼是ト御世話モ有之御囃子被遊候事ニ相成御奥御祝ノ間ヘ喜多六平太始召寄被仰付御席始拜見モ被仰付候御好等有之入

備前守ハ閣老牧野忠雅・側用取次本郷泰固・

夜相濟翌朝大ニ御慰ニ被爲成別テ鼓ノ音抔ハ宜敷ト御意モ御座候
同八日ニハ奥向乘馬御覽被遊御馬見所ヘ始終御着座御覽被遊候一鞍被爲召候ハヾ却テ御コナレニモ可宜抔申上候者モ有之候處御意ニハ胸少シ不宜吐ノ氣味有之候間先ツ用心可致ト御意被遊候同夜中少々御吐キ被遊候由
九日曉ヨリ御腹痛御水瀉全ク御時候中リノ御容體ニテ御目覺後御不參ノ旨被仰出候尤是ハ至テ御輕ク候ヘ共一體ノ御不快ノ處故甚タ御案シ申候處此御不快ハ追々御快被爲成候ヘ共一體ノ御容體兎角御同篇ニ付同十三日ヨリ時候相障疝積ト申御病銘ニテ御不參ニ相成御病銘相替リ申候扨此御引二三日過上樣深ク御心配被遊トクト御療養ヲ可被爲盡必御押御出勤ニテハ不宜トノ厚キ尊意被仰出候段御月番備前守樣ヨリ以御直書被仰進別段本郷丹後樣ヨリモ以御直書右ノ趣猶又被仰進候御儀モ有之殿樣ニモ難有事ト被思召此節ヨリ緩々御引込御養生可被遊ト御決着被遊候御樣子ニ奉見上却テ御樣子此間ヨリハ御宜敷樣ニ奉見上候其後御役方ノ内一人罷出候樣備前守樣ヨリ申來太田三藏罷出候處備前樣御逢有之御引中ニハ候ヘ共乘馬御覽其外御庭抔ニテ御慰ミ等無御心配可被成旨御沙汰ノ旨御懇ノ御沙汰有之候是ヨリ御慰ミ一圖ノ思召ニ被爲成尤御平臥ト申ニモ無之御表御奥中奥ヘモ御歩行被遊夕刻ハ定例奥公用向等被爲召碁將棊又ハ揚弓ナトノ類銘々ニ爲致御覽被遊候テ御慰ミ被遊候扨伊澤磐安森養竹見込モトクト相糺候ニ數年ノ御心配御腹中ニ

閣老堀田正睦●

疊リ御右ノ方ヘ御コリ出來御血色モ不宜御大病ニハ被爲在候ヘ共御案シ申候ト申事ハ無之譬テ申候ヘハ木ノ枯カヽリタルニ肥シヲ十分ニ仕候ヘハ忽チ枯レ候間先ツ水ヲ以テ助ケ其上ニテ肥シヲ致シ候ト申モノニテ一體ノ御心配御疲レ御脾胃ヲ御傷ヒ被遊候故俄ニ御藥効ハ不相見ト申程ノ事ニテ御病症ハ御脾胃虚ト可申トノ話ニ御座候山田昌榮ヘモ拜診被仰付岡良允樣ヘモ御拜診被仰付候 頁允樣拜診ハ何分御氣詰リニ被思召候由 此外御醫師共モ誰彼ト集評仕候ヘ共是ト申御方等モ無之其上餘リ餘人ヘ拜診被仰付候ハヽ深ク御迷惑ニ被思召候御樣子ニテ被爲入御不快モ格別ニハ不被思召御樣子乍去イツ迄全快不致哉抔トノ御意ハ御座候由御納戸纏咄ニ御座候是ヨリ先ツ御平ラノ御樣子ニテ其內ニハ御脈抔ハ少シハ御宜キ方ノ由ニ伺候事モ有之候間追々ハ御宜敷方ニ可被爲趣事歟抔トモ奉存其後淸川玄道ヘモ拜診被仰付候 是モ老衰十分ニモ無之又別ニ考ヘモ有之此御藥磐安調合差上候 堀田樣深ク御案事御手醫師ヲ一人被遣拜診仕罷歸候樣御含ニテ被遣 此者近年淸川弟子ノ由業モ相應ノ由前以被仰入候事 六月六日ニ拜診被仰付同人見込ニモ御藥ハ外ニ致方モ有之間敷何分御大病ニ被爲入御コリヲ取不申テハ難相成歟猶トクト考候上心付候儀モ候ハヽバ可申上旨ニテ罷歸申候水府老公ニモ深ク御案事ニテ御藥法抔御直書ニテ被仰進磐安ヘモ御尋ノ上右御藥法ヲ御兼用ニ御用ヒ被遊候 此御藥法ハ補劑ニテ何レ先ヘ寄候ヘハ差上候ヘ共只今ハ專ラ御食ヲスヽメ候御療治故右藥法ニテハ少シ御胸ヘ障リ御食御スヽミ有之間敷哉トノ懸念ニテ磐安不差上由ノ處折角老公御心付故召上候旨御沙汰ニテ被召上候尤三四服計モ被召上候歟 同七日ヨリ岡良允樣ヘ御轉藥相成申候 此儀ハ種々議論モ有之候 此節御同人樣ニモ餘程ノ御大・ニ候旨

閣老久世廣周。
松河内＝松平近直。
大殿＝正寧。
賢之助＝正教。
播磨守＝白河藩主阿部正耆。
小田原藩大久保加賀守。
謙公＝父正精。

被仰聞候へ共夫程大シタルトモ不被仰御樣子ノ由同十日夜茄子サシミ被召上御吐キ有之少々御容體被爲在十一十二十三十四共 十四日ノ雷氣ニハ少々御感シノ御樣子ナリ 先ツ御平ラ 但五月二十七日頃ヨリ勲長ノ者被召候テ御慰ハ御面倒ノ由ニテ御止メ被遊候却テ御氣御揉ミ不爲遊方可然ト從是不罷出候 十五日朝御大便ノ御通シヨリ其後夜分ハ餘程御疲レノ御樣子十六日ハ御動悸モ出入夜御吃逆モ被爲在以ノ外ノ御容體ニ被爲成此朝ヨリノ御容體被爲替候ハ實ニ御急變トモ可申程ノ御容體ノ由御醫師共モ申良允樣ニモ御極症ニ被爲入恐入候旨被仰候十七日朝モ御同樣前夜堀田樣へハ内々申上久世樣へモ申上候由松河内樣御勸メニテ此日青木春岱被召呼拜診被仰付 四ッ半時前ニ候少々ハ見込有之趣ニテ御藥調合候ニ付可差上ト御枕元へ差上置候へ共終ニ不被召上候ヨシ 四ッ時過大殿樣賢之助樣播磨守樣ニモ被爲入何レモ御對面有之御相應ノ御挨拶有之候由 是ハ九ッ時前ノ御事ノ由 九ッ半時少シ前御近侍ヨリ罷出候樣申越候間一統御寢間へ 昨朝ヨリ奥締リニテ表御寢間ニ被爲入候 罷出御目見仕候御呼吸御切迫無程御危篤ニ被爲及候

同十八日夜四時過御沐浴被爲濟御目見被仰付候御在世ニ不被爲替恐入候　御直垂被爲召 蒲色 御烏帽子被爲召御末廣ヲ被爲持曲彔ニ御カヽリ御着座被遊候　但御着服大久保樣其外ノ御先例也 謙公モ御同樣ナリ

二十一日ハ御上使鹽谷中務少輔樣 御小納戸頭取 ヲ以テ左ノ御品御拜領被遊候　鮮鯛　一折 白木臺居

御塗重　一組五 上ノ二重御煮染 下ノ三重御蒸菓子　但黑塗ナリ御重共ニ御拜領ノ事是迄右樣ノ御例ハ無之全ク以思召御拜領ノ事　御臺樣ヨリモ左ノ通御拜領被遊候是ハ御月番樣ヨリ以手紙御

書類ノ始末●

案詞＝秘書役●

公用人渡邊三太平、武田小藤太ハ藩主閣老ノ職ヲ去ルトキハ直ニ留守居役ヲ置ク、此役ハ藩ト幕府トニ關係スル事務ヲ辨理スルモノナリ。

頂戴　　御塗重　一組五 上ノ二重御煮染 下ノ三重御蒸菓子　其外定例之御拜領物ハ鮮干鱈御手紙ヲ以味噌漬鯛御小納戸頭取田澤兵庫頭樣御上使ヲ以御香奠ハ本莊安藝守樣ヲ以御拜領被遊候

堀田久世兩公樣ニモ厚ク御世話被進殊ニ久世樣ニハ御月番ユヘ別テ伺事其外御內意ヲ得候ニモ都合宜存外ノ御運ヒニ相成御急養子ノ御手續ニ不相成丈ケ餘程御都合モ宜久世樣ニハ御使者ニ罷出候節伺事等類役ヲ以伺候ヘハ直ニ御逢被成下段々御懇ノ事ニ御座候御書類モ大和守樣御心配被成被仰付候趣モ有之平生御寢間ニ有之御用箱御狀箱ハ不殘久世樣ヘ差上御見分ケ被下候樣申上候差上殘リ御簞笥ノ內ハ先頃火中被仰付殘リハ皆々御案詞ヘ封シ被仰付候由ニテ誠ニ奇麗ニ片付居申候間其儘火中ノ積公用ニ有之秘物ハ後々ヘ散失仕候テハ不宜候間悉皆火中ノ積御心付被下候後藤慶長金ハ備中守樣ヘ先達テ差上申候御引送ニ可成品ハ取調先ツ公用殘リハ無之事ト奉存大ニ安心仕候 渡邊三太平武田小藤太殿樣萬一ノ儀被爲在候節ハ御留守居可被仰付御內意有之其調ヘニ懸リ太田三藏私公用仕廻ヒノ方ト手ヲ分ケ候故甚タ紛冗御察シ可被下候　此度ノ儀ニテ松平河內守樣川路左衞門尉樣兩町尹原彌十郎樣抔ニハ格別ノ御世話ニテ其外樣御役人樣ノ向御悔等被爲入候テモ實々御追慕ノ御樣子見上候處御實情歟ト奉存候其外世上ノ風聞モ御在世中ハ彼是ト申族モ今ハ御惜ミ申上候樣ノ風聞ト相聞責メテハ御事ト奉存候牧野樣類役抔ハ平日ハ夫程トモ不存候處此度ノ厚意ハ是迄ト違ヒ深切感服仕候備前守樣ニモ御同年ノ御役成ニテ別テ御力落シノ由事實ト相聞ヘ申候御留守居ノ手數ハ御改革以前ト强テ替リモ無之哉無益ノ事共此御

大先生＝同席各藩留守居役ノ最舊者。一郡山藩柳澤。二松代藩眞田。三飯山藩本多。四小田原藩大久保。

御上＝繼嗣正敎。

時節不相當ノ事而已ニテ馬鹿々々敷御座候御發表以前ニ筆頭ノ御留守居被召呼御賴ニ相成御酒御肴等被下候御振合大先生ハ久城（クシロ）準輔二ハ津田轉（ウタヽ）三ハ寺田勘兵衛四ハ高田六左衛門抔ト申ニテ別テ世話宜敷致シ呉少シモ六ヶ敷事ハ無之樣子是等ハ御餘光ト難有御事ニ御座候

二十八日昨夜亥中刻ト申御發喪ニ相成申候處頃日兎角ニ催風雨心配仕居候

扨七月三日ハ御出棺御治定ニテ私儀ハ西福寺へ出役幷長勤院（法林寺本堂差合ニ付御賴）ヨリ西福寺本堂迄ヘノ御行列御供モ相勤候七ッ時過ニ相成雨强ク風モ出私儀西福寺ヘ罷越候節ハ餘程ノ風雨ニ相成申候淺草御門邊ニテ追々雨止西福寺參着ノ頃ハ雨止ミ天氣模樣ニ相成申候御出棺ハ今曉丑上刻御供揃寅上刻御出棺ト申ニハ候ヘトモ夜明ケ切候テノ御出棺ニ御座候（大體御先例提灯御用ノフリ合ニ相見ヘ申候）御行列ハ少シモ色御用ヒ無之御在世中ノ通リニテ御先挾箱以下虎皮葵御紋御牽馬モ爲御牽被遊御家格通リノ御供夫ニ騎馬御供ニ御座候呉服橋淺草兩御門ニテモ御名呼上ケ御在世ノ通リ制シ聲モカヽリ聊カ御替リ無之由ニ御座候御上ニモ御先ヘ被爲入西福寺本堂迄御行列ヘ御先格ノ通御立被遊候（此儀御乘出シ以前ハ六ヶ敷候處御右筆組頭樣ヘモ段々相賴宜事ニ相成申候）六ッ半時過御棺上リノ注進西福寺ヘ申來引續淺草御門ノ注進申來長勤院ヘ御着棺辰上刻（御駕籠腰網代ニテ大ナル轅左右下ヨリ細引ヲ通シ釣リ居候テ漸ク肩ヲ入レカツキ候位棒抔ノ太サ格外ノモノニ御座候）長勤院ニテ御上ハ棺ヘ奉納御向相濟巳下刻御葬式ノ御供建ニ相立本堂ヘ御着棺（此節少々雨降リ申候）御法事有之無御滯相濟午下刻頃御葬穴ヘ被爲入御棺槨未上

刻御納リ相濟未下刻過御假家迄モ不殘相濟御拜自拜迄モ凡相濟候事ニ御座候私共歸宅ハ夕七半時頃ニ相成申候御葬穴ヘ被爲入候以前ヨリ天氣宜敷追々快晴ニ相成大ニ御都合御宜御座候御初七日御當日御法事出役ニモ罷出候處諸家樣ヨリ御代香御香奠夥敷事ニ御座候（節錄）

七月二十六日

〔五〕米國總領事「ハリス」ガ正弘ノ逝去ヲ悼ムノ文。　一八五七年（安政四年）

Townsend Harris's Journal. Monday, July 27, 1857.

I am sorry to hear of the death of Abé Isé no Kami at Yedo. He was the second member of the Council of State, and very influential.

He was always been represented to me as a man of great intelligence, and one that fully understood the power of the United States and other Western nations; and above all, was convinced that the time had arrived when Japan must abandon her exclusive policy, or be plunged into miseries of war. He is a great loss to the liberal party of Japan.

此文ノ譯ハ第二十章ニ載ス。

Griffis, *Townsend Harris*, p. 165.

附錄終。

索引。

アイウエオ順ニ依リ、ンヲムニ收ム。外國語ノ長音符ーハ字順ニ算セズ。
頁數ニ（　）ヲ加フルハ年譜ニシテ、「　」ヲ附スルハ標註ナリ。

ア

イ

イ

イ　エ

エ

シ

ス

セ

テ

ト

ト

ホ

ラ

リ

ロ

阿部正弘事蹟 索引終。

明治四十三年十月一日印刷
同　年十月四日發行

著者兼發行者　渡邊修二郎
東京小石川區關口町二百六

印刷者　東京印刷株式會社
東京日本橋區兜町二

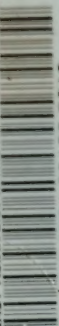
特別製本（上等用紙脊皮）全二冊　定價七圓
普通製本（中等用紙總布）全一冊　定價六圓

渡邊修二郎著書略目

訂補再版世界ニ於ケル日本人

外交通商史談

內政外敎衝突史

韓淸問題東邦關係

LORD ABÉ MASAHIRO,

SENIOR MINISTER OF JAPAN

WHEN THE COUNTRY WAS OPENED TO FOREIGN INTERCOURSE.

SHOZIRO WATANABE.